古今小説名著集號外發行の社告

分店は商業の繁昌より開き支線は鐵道の延長より起る本集の進行は駸々乎として止まず頗る看客諸彦の御満足を希圖せしより竟に諸彦をして却て待遠だとの御歎聲を發せしむるに至る嗚嗟本集の月日に其繁昌を極むる推して知るべきなり今日の勢本集は定期外に其分店支線を設けて諸彦の厚眷に報答せざるべからざるの時運に遭遇せりと謂べし依て向後は長篇大作にして牒數限りある本集中ゐ全載するを能はず聯々數回に渉る者及び諸彦が本社の豫告に負かず惠賜せられし珍籍等を特に號外として發行を以て聊か編者の寸誠を表する事とは爲しぬ

礫川出版會社謹白

飜刻金瓶梅序

九州河ノ匯ヲ流水ナカラン涇水ノ濁レル渭水ノ清メル各其趣ヲ異ニシ各其觀ヲ復一々ス可ヘカラス然𪜈其流水ハ皆彼ノ四大河ト稱スル江淮河漢ノ原委若クハ其支流ニ非サル者鮮矣金瓶梅ナル者ハ水滸傳三國史西遊記ト共ニ四大書ト稱セラレ稗史家ノ縮畧トス後ノ作者意匠各殊ナリト雖𪜈皆之ヲ宗トセザル者鮮矣猶流水ノ四大河ヲ宗トシ儒家ノ六經ヲ宗トスルカ如シ世或ハ本篇ノ文章少ク鄙猥ニ渉ルト譏ル者アリ然𪜈元來水滸傳中ノ武松兄ノ仇ヲ復スルノ章ヨリ脱化シ來ル者ニシテ畢竟勸懲ノ意ニ外ナラス故西亭翁頗ル之ヲ賛シ茲ニ之ヲ譯述メ西門慶ヲ西門屋某ト稱シ潘金蓮ヲ阿蓮ト呼ヒ吾國ノ名字ニ換テ童蒙ヲメ解シ易カラシム亦以テ翁ノ志ヲ知ルヘシ今復之ヲ活版ニ附メ翁ノ志ヲメ不朽ナラシメ永ク小説文科資料ニ充ント欲ス能讀ム者ニメ而之ヲ識ン耳矣

明治歳次辛卯小暑前一日

石膓子識

舞妓菊藻
喜田意庵

山口の遊君武路
通屋九四郎

北利木之助
六條娼奴藻苅

蚊加江萬藏
多金阿蓮
萬松加蘭太

嘶馬暴九郎則武
加古塩七
玉村彈八則高
勇魚守平

則武の妻蘭の前
逆潮笑鮫
西海之悪龍王多羅阿御

特10
918

金瓶梅第壹輯

曲亭馬琴著

第壹編

往時室町將軍の季の世に山城國矢瀬の里に矢瀬文具兵衛大原武具藏といふ百姓兄弟ありけり先祖は由緒ある武士にて矢瀬大原の領主なりけるに亂れたる世の風習にて子孫其地を失ひしより竟に民間に貶落り三四代以前より耕す夫になりたれども徃時のなごりにて兄文具兵衛は此矢瀬の里正を勤めけりされば矢瀬も大原も初代は即ち兄弟にて就中大原は嫡家なりけるに近頃此家斷絶たりければ文具兵衛が親のとき二男武具藏に大原の家を繼せて頓て大原氏を名乘せ其家先祖相傳の田畑三町八段は即ち武具藏が資産として長く相續すべしとて一家親類連名の證状を渡しける然れども武具藏は未だ分家せざりしに父母打續きて身まかり且洛中洛外年々に戰ひ屢々なるにより此邊も過分の軍役を當てられて家を造るに餘力なければ兄文具兵衛と同居せしは兄弟親睦かりければ是彼ともに妻を娶りて一つ竈でありながら些の口舌もなかりしを世には稀なる事なりとて里人賛ぬはなし然れば文具兵衛が女房は其名を山樹と呼びなしたるが是に未だ子供もあらず武具藏が妻は折羽と呼れて既に男子二人まで生たりし其初子を武太郎と名づけて今年を三歳なり二男は此春生れしを武松と名づけたり箇計りの子供等を養ひ難きにあらねども發日應仁の兵亂より花の都は名のミにて年々に荒増り春の燕は木枝に巣造り秋の鹿は大内の御垣のもと迄通ふめり然れば昔日飯尾彦六左衛門が「なれやしる都も野邊の夕ひばりあがるを見ても落る涙ハ」と詠たりし歌の心の憐れなる人營業を失ひて離散する者多かりけり況て都に程遠からぬ田舍彌々衰へ果て豐なる者とてハ何處にも有ことなきに剩さへ此所三年旱

損水損打續き貢の外に粮乏しく食する者ハ飽たらず衣類も亦暖かならず實に亂世のたゝ住居ハ兎にも角にも詮方なし此故は文具兵衛は或日武具藏と談合するやう人の家の費を省くは口を減すに勝はなしと昔も人の言けんを如何にぞや斯打揃ふて乏しき粮を需めんより他郷に行て餬口なば此困窮を凌ぐに足べし五畿内こそ斯の如く衣食に乏しくなりたれ共東の方は豐年にて菽粟の便り宜しき由いふ者のありけるが空言にてはなかるべし潜れば兄弟二人に一人爭で東へ赴きて餬口てこゝの口を減さば迭みの爲にならんかし然ればとて其方は子供二人あり其幼稚を抱きかゝえて行衛も未だ定かならぬ旅行をば爭でせらるべき吾身山樹を携へて出て餬口ばやと思へども身に里正の役儀あればさる事は得なし難し开も如何にしてよからんやと思ひ入りつゝ語らひしを武具藏熟々と打聞て其計りごと極めてよし然らんには某こそ折羽と子供を携へて他郷へ行て餬口べければよしや子供が二人なりとも年倚三つと嬰骸なり夫婦互みに負もしつ抱きもしつゝ行くものならば旅行寢の憂を慰むるよすがありて重荷にますべし此義に從ひたまひねと言に文具兵衛は禁めかねて女房山樹と弟嫁の折羽を招き近づけて事云々と告知らするに山樹は只管止めてやまず折羽は何とも言ねども馴にし里を出て行ば何國へ杖を止めてん行衛も知らぬ門出ハ浮浪人に似たるべき憂を今より思ひやり歎息の外なかりける斯くて武具藏夫婦の者も旅行の談合の既に調ひたりければ彼が田畑調度の類ゐは皆帳面に書き記して文具兵衛之を預り後に異論なからん爲に證文を取替さんとて大原の伯樂にて妹聟なる篠部九郎五郎といふ者夫婦を呼寄せて件の證人にしたりける抑々九郎五郎の女房ハ其名を遲馬と呼れたる文具兵衛文具藏等が妹なりよりて九郎五郎も縁類ながら妹につれて疎からず小口をも聞者にして草筆も人並なれば取換する證文を此九郎五郎に認しめて名印は兄弟自筆に記しつ猪九郎五郎に加印をさせけり其文言の大略は當村連年困窮により這般兄弟熟談の上武具藏は餬口の爲妻と小供を携へて東の方に赴くに付武具藏が所持の田畑三町八段並びに衣類諸道具に至るまで吾等預く置て事實なり若不得已譯により他郷に在こと數年に及びく萬一迭みに世を去るとも彌々以て異論なく其小供に返し渡そべし田畑の劵本衣類調度の數々は證人立合のうへ相改めて別紙に載たり證文仍て件の如し年月日とぞ書付たりける文具兵衛は里正なれば別に村印を取るに及ばず互に安堵乃思ひをなして旅の無異をぞ祈りける○去程に武具藏夫婦は俄に旅粧ひを調へて此年の秋八月の末つかたに二人の小供を携さへて啓行す先鎌倉まで赴きて彼所も營業の方便なくば陸奥までも行て稼がん今の世も國々に戰爭の絶る日のなければ音信んこと難かるべし兄も姉御も恙なく坐せよといふ暇乞も迭みに胸のみ塞りて思ふにも似ず言で別るゝ兄弟の心のうち只身一ッの秋かとぞ打歎かるゝも理りなるかな生れし日より今日までも兄弟一ッ家にをり一ッ竈の飯を食べて妻を迎へ子を擧け苦樂を共にしたりしに憂こと繁き呉竹の世わたる爲とハ言ながら旅だつ弟行衛を定めず止まる兄は今より後の安否其處にを問ふによしなし現に悲しきも死別れより生別れに勝てとなしと昔の人もかこちけんことを爰に思ひ出て迭みに袖を濡ける儕も此文具兵衛武具藏ハ兄弟各四五町の田畑あり亂たる世の荒年にてよしや粮ハ乏しくとも兎も角もしてあらば有べし开を如何にぞや文具兵衛が言葉を設けて弟を慫し彼等夫婦を遠ざけしは元是故ある事にして文具兵衛が妻の山樹は胸逞しき者なりければ此年來陽には武具藏夫婦と睦しく世に隔てなく待遇ども中心にはいぶせり思ひて折に觸ても夫に勸めて彼等を分家させんとせしに夫すら事の障りありて事なるべくもあらざれば此荒年の折を得て竊に夫に勸めつゝ武具藏夫婦その子供等さへ俄に出しやりにきと程經て後に人は知りけり婦言聞こと勿れといふ古人の戒め宜なるかな親兄

胸の中をさくも只その妻の心にあり若宮宜しく察すべし○斯くて大原武具藏は其長月の半頃に辛くして相摸なる鎌倉まで來にけるに兩管領の沒落してより今は昔の鎌倉ならねど流石に都會の名殘にてよき商人も少なからず名所古跡の多ければ神社佛閣を拜み廻りて其夕暮に深澤なる旅亭に宿りを需めて長途の勞を慰めれり抑々この所は往時大異山淨泉寺の境內にて大佛前と稱へたり此處には身丈三丈五尺の大佛あるに依てなりされば武具藏等が宿かりたる此深澤なる旅亭は主個を望月五文次と呼なしたるが脇本陣などいふ物めきて家の造りざま巍しく奴婢なんども五六人ありと覺しく座敷も幾間かありて能宿なり其夕膳の果し頃主望月五文次は武具藏等が邊に來て其國所姓名を問ひ聽て記す程に武太郎と武松を熟々と見ていふ樣客人は二人まで幼きを携へて夫婦旅寢をし給へばさぞ難儀にをはすらんと遮莫能き子持なり兒ども乳を吞給ふか乳の多きゆゑなるべし最痛しくてそはなれと言に夫婦は齊しく答て言る、如く母親が乳の多くいへば二人の子供に吞すれども猶餘りあるに似たり然によりてや子供等は虫氣もあらず壯健なりと言に五文次歎息して某も去年の秋一人の男子出生したり然るに今年夏のころ我妻乳房を痛く腫しつ辛くして愈たれども乳は漸くに細くなりてふ月の頃より絕て出ずこの故に乳母を置きて養育せんと欲せしかども幼少者の癖なれば見しりして些つとも飲まずこれにより乳母をば幾人となく置替つ或日は里人の女房の乳を貰ひなどしつゝ飲せんと欲せしかども面嫌ひして飲ざりければ止む事を得ず粥を啜せすり粉をもて養育めども夫すら多くは得喰べず術計すでに盡果て命旦夕に迫りたり歎きて察し給へかしと言を夫婦は打聞てそは痛しき事ふてそはいへ兎ても斯くても他人の乳をば飲給ずとも手を空しくし死を待んより物は試といふ事あり霎時わたりを小暗くして此乳を飲し見給へかしと等しく勸むる人の誠に心元なく思へどもされとて聽

て五文次は忙はしく退きて女房沖見に這樣〳〵と件のよしを告げ知らせ武具藏夫婦にその子供等を納戸へ招きて引き合せ痩衰へたる獨子の爵之介を抱きしまゝに折羽が傍にさしよするを折羽はやをら抱き取て懷ろ開きて含まする乳房をひねる爵之介は折羽が顏をつく〴〵と見つゝ莞爾とうち笑て心よげに乳を吞こと半時ばかりに及びしかば五文次夫婦は膽を潰して且歡こぶこと大方ならず是までは乳母の乳をだも吞ぬ吾子が御身をのみ嫌で飽まで飲は實に不測の幸ひなり急ぎたまはぬ旅ならば暫らく此處に滯留して吾子を救はせ給へかし其は莫大の功德ならん三人の子供で乳の足ずば御子息には乳人をつけて養はするとも苦しからず願は承諾たまへかしと詞を盡し手を擦で夫婦等しく拜まぬまでに又他事もなく賴むにぞ武具藏折羽は辭みかねて奇異の思ひをなさゝる事なく這は必らず先祖の靈魂の杖を此家に止めよとて今此奇特ある物かさらずば過世の結びたる約束事であるべしと思へば共に歡こびて故鄉を出しとの趣き這樣〳〵と物語りして營業の爲に子供をつれて夫婦遙々來つれども此地に所緣の人はなし是を御緣にお世話になりて落付こととも有ならば其れ子の上はしも乳母替りて何時までもはぐゝみて參らせん吾子の武太郎は三歲なれば乳を放しても能き頃なりこの武松と其れ子に參らするには澤山あり外に乳母を入ず侍りと言に歡ぶ五文次沖見そは願ふても得難かるべき重ね〴〵の幸ひなり故鄉の困窮にて東へ來つゝ稼がんとて此處等へ旅寢をし給ふならば吾等今より身に引受けて兎も角もまて參らせん先夫までは吾宿に心置なく坐せかしあら目出たやと老實だちて是より日每に饗應をしつゝ心を盡して待遇たる去程に爵之介は絕ず折羽が乳を飲しかば漸次に肥て力づき最壯健に成長を見つゝ歡ぶ五文次と女房沖見と談合して或日武具藏夫婦に言やう御身の爲に宜しかるべき稼ぎの筋を此月頃とさま斯さま考へしに未ださせる思ひ付なしされば今より吾等が支店を

預け參らせんと思ふなり某は近頃大佛前に餅見世店を出して大佛餅と呼びなしたり本宅と件の支店をかけ餅にする故に手まはり兼て却つて損あり御身夫婦預りて支店に住ひて吾等が爲に商ひをして給はらば其商ひの高により親子四人の身の衣類小遣諸雜用に至るまで吾等宜しく賄はん只是のみにあらずして故鄕へ歸り給ふ日はいッかとの資本を授けて乳母の恩の報ひとせん此處より支店へ程近く一町あまりを隔たれば餡之介に乳を飲して貰ふにも便りよし此儀を承引給はんやと言れて歡ぶ武具藏折羽ハ爭でか異議に及ぶべき熟々と聞果て开は歡ばしき事にこそいへ受人もなき某夫婦に出店を預け給はらば及ばずながら精を出して商ひを仕つらんと言に主人も亦歡びて件の見世を武具藏に打任せたりけるに餡餅のみの事なれば武具藏折羽は早晩手馴て商ひに身を入れしかば其見世彌々繁昌して大佛前の大佛餅とて土地の名物にぞなりにける○斯くて光陰は矢の如く十年餘りを經る程に五文次が獨り子なる餡之介は十二歲武具藏が二人の子供武太郎ハ十三才その弟武松は十一歲になる物からこの兄弟は出店にありて日毎に多き客前の餅の通ひをしたりたる實に悲しきハ老少不定歡び去て悲み來る其次の年の夏の頃武具藏が妻の折羽ハ最も烈しき時疫の病によりて打臥しが僅かに七日ばかりにして竟に空しくなりにけり其野邊送りの次の日より武具藏も亦同じ病にて打臥たるが枕あがらず五文次は彼等が爲に醫師を招き心を用ひて療治に油斷なかりしかども定業限りありけるにや武具藏も日に增て癒たるべくも見えざりければ其身も既に覺悟をしつゝ或日五文次を枕邊に招きて漸く首を擡げ此年來の恩を謝して偖故鄕の事を說示し先に矢瀬の里を出んとせし折先祖相傳の田畑衣類諸道具を兄文具兵衛に預け置きたるその事の趣きを箇樣々々と告知せ偖後々の爲にとて其折に取換したる手形證文こゝにあり武太郎が年の齡十六七にならん比二個の子供に是等のよしを說示し手形を渡し

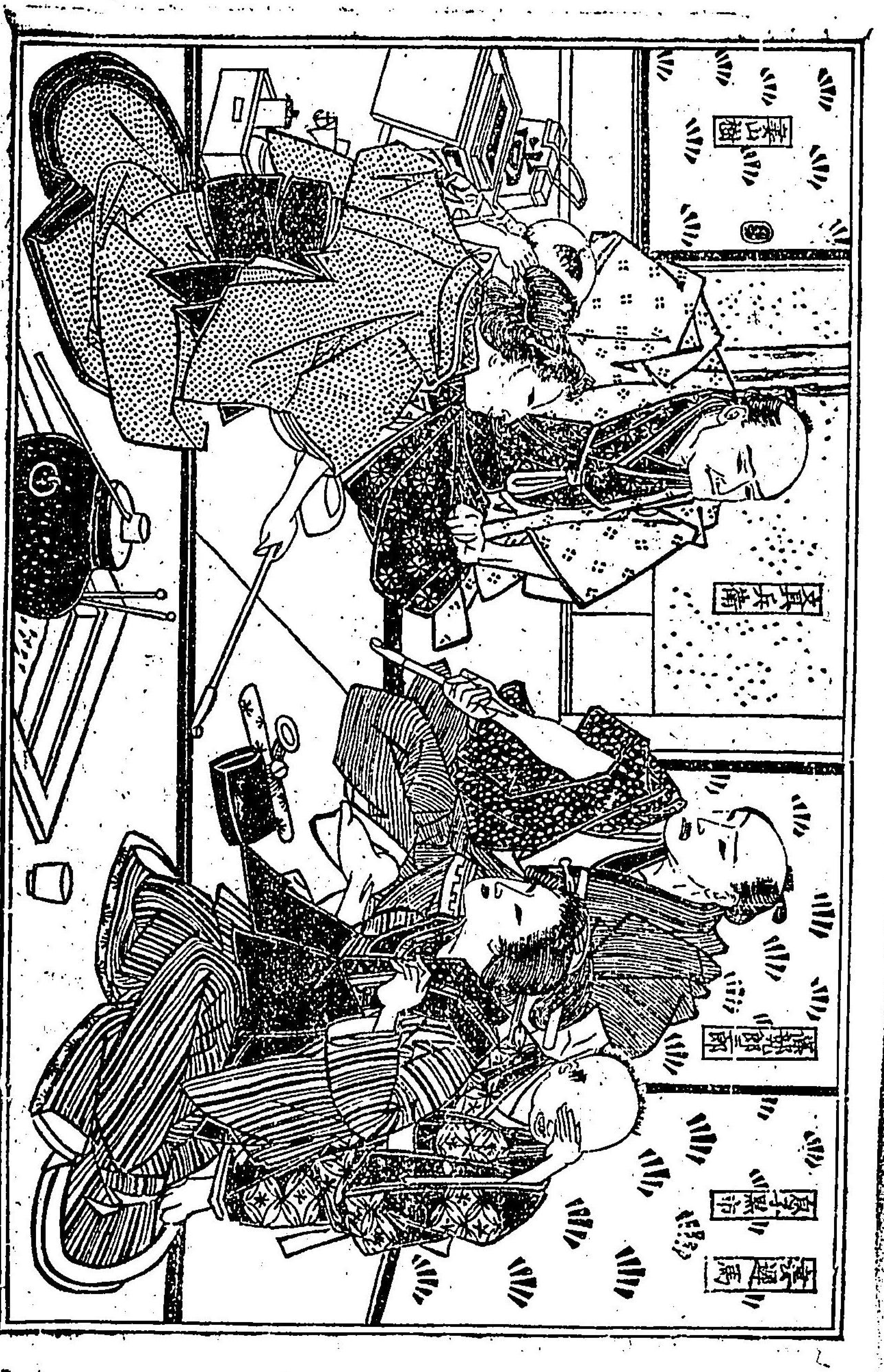
く古鄕へ歸し給へかし某爰に止まりしより便りを求めて古鄕なる兄に書狀を送りしこと五六度に及びしかども路々に戰ひ絕ねば人の往來も自由ならず是等によりて達かざるにや彼所よりは一度も返辭の聞えねども亦老朽たる齡ならねば恙あるべきも有ずかし假令我兄は世を去るとも活る證文のあるからに他人の妨ぐべきにあらず此儀を賴み奉つると病苦を忍び遺言しつゝ件の手形證文と帳面を取出し淚と共に五文次に渡して其夜息絕たり去程に武太郎武松兄弟は僅かに半月計りの程に兩親を失なひて悲みに堪ねども偖有べきにあらざれば元の如く出店にあり喪にをる日數を省れて出て諸共に勤めたり然るに武太郎は身丈低く色黑く額出て取よしもなき醜男にて心性さへ鈍けれども萬事正直にして主の爲になる事あり此故に五文次も彼に外より誂へ來つる餅を持して遣はすに價の錢一文たりとも其勘定に違ふ事なし又武松は年にも增て身丈高く色白く目鼻だち能き童子にて心賢しく力强かり唯其きづとすべき所ろは商人の業に身を入れず相應からぬ武藝を好みて習はばやと思へども師に從ふによしなければ米搗男の休む折に其餅米を搗けるに稍身丈の高からで杵をつかふに便なければ高き足駄を穿ながら久しく搗ども勞れを覺えず其輕けなりければ見る者膽を潰さぬはなく金剛力士の再來ならんと言つゝ知る者多かりけり然れども武松は其心氣こゝにあらず杵をもて太刀に擬へ其搗ごとに心を凝して唯ひとつとなく太刀打の手段を自得したりしかば是よりして又米を搗ず猶さま〴〵に工夫して柔術相撲に至るまで心掛ずと言ことなければ五文次これを嚴敷禁めて呵り懲したりければ陽ばかりし人並に立働きつゝ勤めけり閑話休題去程に望月五文次は武具藏が世を去りしより出店を預かる者のなければ初めの如く本宅を自ら掛持にしたれども行屆かざる事のみなれば兩三年を過して後母方の從弟なりける横六といふ者を俄に江戶より呼寄せて出店の支配にしたりける遮莫件の横六

はまだ商賣に馴ざれば最闇しき折々は妻の沖見を遣して手傳せ坏したれども武具藏が時には似ず營業漸く衰へて評判惡くなりにける心の愁は是のミならで五文次が獨子なる餡之介は幼少かりしとき折羽が乳にて最と壯健に成長けるに年十二の頃よりして目を病思ふこと既に久しく醫療に錢を費やせども些ばかりの驗もなし此故に加持祈禱ありと有べき手を盡しても皆目見えずなりし比横六が勸めにより近比上方より來て深く行はるゝよし聞えたる雲水仙鶴といふ陰陽師を招き來たして障りの有無を占ひけるに仙鶴は五文次の本宅出店の家相を考へ又その家の內の者共の生れ年月を皆書付て卦をしき考へて偖いふやう家相にも少しづゝ惡き所の見ゆれども是等はさせる障りにあらず只出店にて遣はるゝ武太郎武松といふ二人の小厮こそ第一の障りにいなれ其故と箇條々々と餡之助と彼等が八字の名破歳殺にあたる趣むき併びに餡之介の遊年と武太郎武松等が遊年と又これ禍害絶命に當れるよしを說示し早く此小厮等に身の暇を取せ給ひゞ御子息の眼病は立處に本復すべし迷ふて止め置き給はゞ只眼の病のみならず命も保ち難かるべし疾々計ひ給ひねと其掌中を指すごとく說諭されて女房沖見驚くこと大かたならず只速かに武太郎等を追やらせ給へと鬧しだてゝ騷げども五文次は半ば信じ半ば疑ひて思ふ樣よしや武太郎武松等ハ我子の病の障になるとも其親武具藏が勤功あるを追失はんは無慈悲に似たり但武具藏が臨終に言遺し事ありけるに武太郎ハ早十七歳武松は十五になりぬ仙鶴の敎あらずとも彼等に親の遺言を傳へ古鄉へ返すべしと思案をしつゝ次の日に武太郎と武松を閑室に招きよせ此日始めて其親の遺言を傳へ知らせて伯父文具兵衛が證文手形とかの帳面を渡すにぞ武太郎も武松も思ひがたなき事なれば一度は驚き悲み又悅びも大方ならず早く身の暇を給はりていざ古鄉へ歸らんとて心構へをする程に其夜よりして武松ハ俄に瘧病に侵されて間通ひに暇なければ旅立事を得ざりけり

第　二　編

されば又武松は始めて聞たる親の遺言先祖は由緒ある武士なることも定かに知られて深く歡び疾古鄉へ立かへり猶も武藝を習ひ磨きて家を起さばやと思ふ程に其夜さりより瘧病によりて旅立べくも有ざれば兄武太郎も其全快を待つゝ共に立兼たり其時沖見は思ふやう常には病ぬ武松があの大病では迚も斯ても生る事を得ざるべし那はあのまゝ捨置きて一日も早く武太郎を出し遣なば餡之介が眼病の些ばかり瘉る事のなからづやと思案をしつゝ思ふよしを良人に告て催促せしかば五文次も其儀に任して武太郎を呼近づけ竊には汝等兄弟を早く故鄉へ歸さんとて身の暇を取らせしと其夜さりより武松は重き病痾に打臥たるを待とも限りなかるべし然れば先汝一個故鄉へ歸るべし武松と彼病の本復の日を待て靜に後より遣はすべし兄弟この儀を心得て明日の朝早に門出せよと遽しげに吩附けて路用として金僅かに壹兩壹分を取せけり若も武具藏が今迄も存命て故鄉へ歸らば兼て言つる事に違ひて爭でか斯くまで苛酷なるべき其人既に世を去りて幵が子供等は少年なり且五文次が家衰へて始の如くならざるに今又餡之介が爲に忌よしありて暇を取する理由もあれば信實不實掌を返すが如くなりにたり總て浮世の人情に斯る事多かるべし然れ共武太郎ハ利を爭ふべき才も無く心開けき少年なれば去とて不足の面色せず返答しつゝ退きて頓て武松が寐床に赴き只今主個に言れしと明日の啓行を告しかば武松聞つゝ歎息して被褥の中より親兄弟と倶ぶ此地に來りしに親ハ世を去身は病臥して家身と獨還すと誠に本意にあらね共主命ならば如何はせん我身少も瘉らば夜を日に繼でも追付べし家兄道中に心を用ひて人の爲に姦計れ玉ふな矢瀨の里に到る共叔父と互に顔面を知ねば能問極めて相違なくば

彼の手形を見せ給へ斯る物ハ別に寫して开を控として置こそよけれ若叔父の証文を見んと有ば控を凭せて此文面に相違無と言れなば其折に眞の手形を出し玉へ家兄は萬事正直にて人も左あらんと思ひ給へど近世の人心は飯の中に針ある如き者是なしとすべからず必ず油斷し給ふなと病を堪忍て諭したる二つ晩の弟の賢き智恵も器量も世人に賞に武松ぞ頼母しき○斯りしかば武太郎は武松か意見に任して手形の控を書寫件の手形証文をば扇子箱に納て襟に掛其翌日主個夫婦武松並に朋輩に暇乞して覺束なくも都路さして出立けり乱たる世の慣習にて新關も最多く他鄕の者の往來を許さぬ城下も少からざれば彼地へ廻り是地へ戻りて辛して往く程に鎌倉を門出せしより廿日餘の日數を經て路銀も遣果せし頃山城の國矢瀬の里なる叔父文具兵衞の門口迄來にけり里正なれば尋も易ぞ近隣里人の教えまゝに冠木門より進み入に折から文具兵衞が妻の柚は乾たる種物を取入つゝ纔より戸外に出て居りしを武太郎ハ呼掛てやよ伯母様此處ハ吾等が叔父ぞの宿所と聞にき鎌倉より甥の武太郎が尋來りと傳言てたべと言に柚ハ驚きながら暫時顏な打守りて不了解事を言ものかな武太郎と稱名の人ハ世の中に許多もあらん抑其許は誰子ぞやと問れて武太郎些少も疑々せずさればとよ其事なれ吾等ハ該家の舍弟なりし大原武具藏の嫡子にて年三歲の時親兄弟と諸共に東京へ赴き鎌倉にて成長りたる武太郎にていふなり兩親は時疫にて世を去り其時の遺言し故鄕の事を近頃親方へ傳へられ身の暇を賜りて啓行せんとしたる夜に弟武松は病氣起りて待ども頓に癒られねば後より來よと言置て先吾身のみ歸り來つ伯父様は宿所に居ずるならば此由緒傳て給ひねと言に柚は眉を蹙て實に言る、趣きも覺なきにあらね共此十四五年音信絶て何處にあり共知ざりし其人の子の事なるに幼小時ふ別しかば容貌は見も覺ず正さき證據あるにあらずば承諾がたき事にてこそと言を武太郎聞敢ず夫は宜ふな證狀あり吾親の



田畑三町八反其余の衣類雜具迄文具兵衛樣の預り置とて其時吾親に渡給ひし手形證狀爰にあり疑るゝ事あらんやと言ば杣は點頭て其證狀を持來たらば此家の甥子で有べけれど夫を先叔父御に見せ參せて相違あらずと宣はゞ手引して對面させん吾身は汝の伯父嫁にて杣と呼るゝ者ぞかしやよ其手形渡しねと言つゝも疾手を出せば武太郎頭を打振て假令叔母樣で坐する共御身には渡がたかり伯父樣に逢て後にてこそと辭ば杣は聲苛だて吾身に手形を渡さねば其證狀のなきならん斯覺束なき事を誰が伯父公に取次すべき吾儕ハ知ず兎角も汝の勝手にせよかしと云捨て家に入んとせしを武太郎急に引留めて夫は餘りに短氣なり然らば手形を渡すべし伯父公に見せて給ひねと云つゝ襟に掛たりし證狀箱を取卸しやよ彼の手形は內にあり伯父公に見せて些も早く對面を願のみと言に杣ハ微笑て吾身が慥に預りたり彼の證文に相違なくば對面ハ今の間ならん暫時爰に待給へと云つゝ箱を受取て頓て奧にぞ入にけれ武太郎は生得て其性鈍き少年なるに道中の艱苦に因りて武松に云れし事を忘却たるにあらね共今更惡く心得違へて扣へを殘して件の手形を見せよと云しと思ひしかば鈍くも杣に姦計て彼證文を渡しけり○去ば又文具兵衛は弟武具藏に別し後十年餘の月日を經て年齡五十に近かりし頃杣が腹に女子生て其名を鍛金と呼なしたるが今年は三才に成にけり最初武具藏と別れしより五六年を經までは歸りや來ると待たれ共此十四五年音信なければ漸々に思ひ絕て舍弟の事を眷念せず彼田畑をも押領して娘に讓んと思ひけり閑話休題つし程に武太郎は杣が再度出て來るを待事久しくなりしかど絕て返辭のなかりしかば餘りの事に待詫てれとなへ共聲もせず漸くに疑心發りて草鞋を脫捨本家に入て納戸の方を窺ふに文具兵衛は牛睡をしたる邊りに杣も臂枕して鍛金に添乳をして居たるが早く武太郎を覷りて忽然聲をふり立てあれ盜人てそ入たれと呼覺さるゝ文具兵衛は驚きながら身を起して用心

棒を取より早く旣に打んと走り蒐れば武太郎遽て推止め伯父樣人違をなし給ひぞ吾等爭か盜人なるべき汝の爲には甥なりける武太郎でいぞや吾親の預け置たる田畑其餘の証文手形を疑に伯母樣に渡せしを未見給はぬか如何にぞやと問せも果ず身を起す山樹は聲を振立て此盜人奴が何をか云ふ手形とやらん證文とやらん吾受取たる覺なし思ふに此奴は往時の事情を知たる者に騙らはれて此家の甥なる武太郎の名を騙りもがりに掛んと巧んで來つるに疑ひなし惡く騷がば捕縛て當地の法に行なはん疾々出て行ずやと罵りながら爐の邊なる吹竹を持て武太郎が頭をはたと打破れば咄嗟と叫ぶ聲と共に流ゝ鮮血を物とも思はず續さまに打伏て事の紛れに諸道具の控の帳をも奪取て襟髮摑み引立て早外の方へ突出し門の戸礑と鎖固めて又顧りせざりける憐むべし武太郎は鈍く杣に姦計て手形も帳も掠め奪れ身は最强打挨されて痛さ苦さ口惜さ腹立しさは限りもなけれど旣に証據を失ひてハ何をよすがに爭ふべき再度彼所に到る共門より內へは入らるべからず早黃昏になりたるに投宿にも路用は盡たり今宵は近邊に露宿して身體の痛を瘉てこそ又詮術もあるべけれと思案をしつゝ漸やくに僅に行てハ躓き倒れ又步行ては伏轉ぶ往來絕たる畝道の草葉に鳴く虫と共に泣より外はなかりける○爰に又文具兵衛武具藏等が妹婿なる大原の伯樂篠部九郎五郎は借財の事に因五六年先つ頃武具兵衛夫婦と不和なりしより年始の外は迭に行ず久しく疎遠なりけるがこれより先に男女の小供を三人斗り擧しかども得育ずして死去たり斯て一昨年の春の頃又も男子の生れしかば夫を黑市と名附つゝ揷頭の花と慈しむ父母の寵愛大方ならで今年は三才になりにけり斯りし程に九郎五郎は夥伴の者より買たる馬の賣ぬが一疋ありければ其畜料の爲にとて一日秣を刈に出て其夕暮に歸り來る家路に倒し旅人あり見過し難く立寄て其國所を尋れば武太郎漸く頭を擡げて有つる儘に些も隱さず兩親の事弟の事身は只獨

鎌倉より歸へりける甲斐もなく伯父婦杣に誑られて手形も帳も奪い取れ剰へ强く擲悩されて放逐れ之事の趣旨始より終り迄涙と共にさか口說を九郎五郎は分々と聞つゝ驚き且憐みて扨之汝は武具藏殿の初子武太郎でありけるよ吾等は汝の叔母婿ふて篠部九郎五郎と呼るゝ者なり徃日文具兵衛が其方の親に渡せし件の証文手形の證人は吾等なり彼の杣奴が惡心之今にはじめぬ事ながら叚や其許を誑るとも爭でか吾等を欺き得ん手形も帳も取還て其許の親の臨終に云れし如くせざらんや先吾宿所へ伴いん靜に立ねと勞りて杖をつかせ手を引て倶して大原の門に立歸り妻の遲馬に箇樣〳〵と事落もなく告知ずれば遲馬も倶に愕き入りて山樹を罵り武太郎を勞りて頭の疵に膏藥をうたせ粥を啜らせて納戸に寢しめ其夜夫婦談合して次の日武太郎を留守ふ殘して遲馬は黑市を脊負つゝ叚人九郎五郎と諸共に兄文具兵衛が宿所に行きて山樹か武太郎を誑りて手形と帳を奪取たる惡計の筋を青窘めて取還さんとしたれ共山樹は更なり文具兵衛も等しく怒りて些も褒ず昨日怪き若者が午睡の隙を窺ふて盜せんと忍入しを打懲したる事はあれ共吾甥なりける武太郎が持來し手形証文を取受たる事はなし然るを貴殿が腰を押て彼曲者を甥じやと云て見もせぬ手形を求るれ共に騙の惡計向に貸たる三兩の金子を催促したりとて絶交之て足踏もせぬ其根性の置らずや今でい元利十兩餘りになりしを取ずに損して居るに倘飽足でや惡計夫婦密に馴合て何處の馬の骨やらん得知ぬ者を玉ふ遣ふて甥の武太郎也なんど作言て身に覺もなき證文手形を返せと催促大膽不敵沙汰の限雖か實と云聞者あらんや正しき證據あらんにい懷敷思ふ甥の事也和主の差配を受るに及ず名乘合て田も畑も返い此方の本意なれど然證據もなき者を和主夫婦が正しげに云ば逆臚々と誑らるゝ吾にあらず斯ても强て云爭はゞ親類緣者の用捨はせず公廳へ訴へ申して苛め見せん覺悟をせよと夫婦一齊敦圍て事果べくもあらざれば加勢に

來つる遲馬さへ負じと共に罵るのみ嫂の事なれば爭を揚る事も得ならず云甲斐れなく爭ひ負て頤て宿所に歸り來つ文具兵衛杣等が云つる事を箇樣々々と武太郎に告知せ浩れは今更私しの計ひにては勝がたし公廳へ訴へ出て明不明を分別のみ今都府ふは左京の太夫三好の長良おはしまして民の訴へを聞給ふに理非明断の罪あり汝の疵ば未癒ねども綷後なば後悔あらん明日は都に赴かんとて俄に一通の訴狀を書認め翌日武太郎を箯乘物に扶け乘て九郎五郎に附添三好の廳に訴へ出て愁訴の由を聞上けり遮莫九郎五郎が憤怒は只武太郎が爲のみならず五六年曩つ頃九郎五郎は馬を買しに價の金の足ざりければ文具兵衛に金を借て久しく返さゞるに因り杣之嚴敷是を催促て强く罵りたりしかば九郎五郎も亦怒て自是迭に疎遠になりつ其後文具兵衛が娘の出生し時も又九郎五郎が子の出生し折も祝義を口述ず見せもせず胡越の如くに過せしに今武太郎が事起りて山樹は更なり武具兵衛が邪由顯然たるに依武太郎が爲に訴へて其身の舊き怨をも復さんと思しかば斯頼母しく計ひけり○去程に三好左京の太夫長良は武太郎九郎五郎等が訴への趣きを打聞て白洲の內へ呼近づけ幾度となく武太郎に事の趣きを問糺に親の事並に其身同胞の事且鎌倉にありし事再度故鄉へ歸來て伯父嫁山樹に誑られ手形帳も奪ひ取れし其綷の爲体をありける儘に聞え上るに辨舌爽ならざれば聞がたき事あれども其云所幾度も違ず言語巧に非を飾り僞りを以て上を欺く者にはあらずと察したる長良は聞果て大切なる證文は控を一通寫置て人に見すべき筈なるを秘て左ばせざりしぞと問れて武太郎左樣い鎌倉を發足をり舍弟武松の寫見に任て控を寫之置たりしが伯父の宿所に尋來つる悅喜しさに取紛れて其事を忘却れ控の寫を出さず之て信の手形を渡之たり實に失策ふていひきと云へば長良打笑ひて取由もなき白痴なり寫があらば出て見せよと云れて武太郎懷中を探りて寫を取出し恐々參ずるを長良見つゝ九郎五

郎を呼近けて汝は初め此證文の加判人なるよしを云しが此文面に相違なきやと問れて九郎五郎頭をもたげ御掟の如く此手形の加判證人は僕なり十歳に餘りし事なれ共文面に覺あり一字も相違ひらはずと云ば長㒵點頭て此日兩個を退せ其後文具兵衛と山樹をも召喚て武太郎と對決せしめ其云所を打聞に山樹は件の證文手形を受取し覺なし簇に借財を催促しを九郎五郎が遺恨思ふて武太郎ならぬ武太郎を作出してなき事を云募るは是誣言なり去とも正しき證據やある證據なければ贋物なり證據を見せよと接迫て白眼猛る山樹が辨舌最惡とは思へども武太郎は一句も出ず九郎五郎さへ云伏られ黄蘗を嘗たる啞の如く眼を見張のみにして返す辭もなかりけり其時長㒵聲高やかに是彼只今對決にて邪正は大方顯たり武太郎が證文手形を山樹に奪ひ取れしと言上と雖も證據なければ贋物なる事疑ひなし斯れば又九郎五郎も此曲者に一味して文具兵衛夫婦を誣たる其罪は是等しかるべし兩人共に獄舍に繫ぎて呵責を加へて白狀させん文具兵衛山樹等は今日は先退きて重ねての沙汰を待べし其科人を引立よと烈しき下知に雜兵四五人承知りつと返答も果ず早群々と走り掛て武太郎九郎五郎に荒繩掛て引立けり今此事の爲体に山樹は笑を含つゝ文具兵衛と諸共退出て矢瀨へぞ歸りける○斯て其后長㒵は三十日餘りを經卒爾に文具兵衛と山樹等を召寄て扨いふ樣彼武太郎と名乘るものは汝等が甥ならざる歟と問ば夫婦は言語等く簇にも申し上し如く甥武太郎は幼少時に別て數多の年を經たれば迭に見知ずいへども證據の手形も持參せず其云由も胡乱なれば贋物に疑ひなし吾々が甥なりける武太郎にていはずと云ば長㒵點頭て然らんには云渡す事あり彼武太郎は汝等に擲れたる疵遂に癒ず破傷風となりしかば昨夜俄に病死せり彼は胡亂の者と雖も物を盜し事も聞へず其罪定ならざるに汝等夫婦が打殺したる其咎は脫れがたし眞實の甥の武太郎ならば打殺すとも伯父伯父嫁の事なれば其咎に及ぶべから

ず彌々他人の武太郎ならば汝等夫婦は解死人たるべし思案仕換て返答を申せと云れて驚く文具兵衛山樹は顏色青ざめて瞬ながら聲を震はし今は隱すによしもなければ言上ひはん彼武太郎は贋物ならず眞の甥でいなり希かはくば解死人の咎を免せ給へかしと云を長㒵打聞て然ば正しき證據やあると問れて山樹は急速襟の間に縫込置たる彼證文を取出し往日顏色を見知ねば武太郎を疑て追出したる其跡に此證文の落てありし心共なく見出して彼は信の甥なりけりと悟しかども今更に其理由申し上がたければ爭ひ陣じ侍にき然るに甥の武太郎は打疵に因て死去しと承まはりては悼慾後悔の外は侍らず此儀を免させ給へかしといはせも果ず長㒵は件の手形を取上て見つゝ忽ち聲を振立此白痴等が膽の太さよ夫婦等く欲に迷ふて信の甥と知ながら姦計て手形を奪ひ取却つて武太郎九郎五郎等を寃の罪に陷いれんと巧しよされ最初より吾よく察したりけれ共武太郎は愚鈍にして證據の手形も帳面も奪れたる事なれば吾明かに其義を詰ず武太郎等をば其儘に獄に繫ぎ置べしと云しは今日の爲にして武太郎は打疵にて死せる由を云聞せ其解死人に成とならざる此義を以て問探せしに果して吾推考所に違はず爰に山樹か掠奪たる手形證文を出せし上は善惡既に分明なり武太郎等疾出よと呼立られて武太郎はアッと計に返答をしつゝ九郎五郎と諸共に物の蔭より立出て庭の内にぞ居ながれたる今此絆の爲体山樹は更なり文具兵衛も頓使と惘て解よしもなく免せ給へと叫びけり其時長㒵は豫て召寄置ける矢瀨大原の大庄屋並に里の故老等を呼入させて文具兵衛山樹等が惡事の趣旨を說示且文具兵衛が其弟武具藏に渡し置たる手形證文を見せて云樣斯れば武具藏が所持の田畑三町八反と衣類雜具は悉皆武太郎に渡すべし文具兵衛は里正なるに女房山樹に尊製て此年頃私欲多かり此義も密に穿鑿して吾詳細に是を辯り況て武太郎を酷げて其田畠を押領せんと巧たる其罪も亦輕らは首を刎べき者共な

るを出挌の御慈悲を以て夫婦一百杖罪て追拂ふべき者なり因て文具兵衛が田畑家屋庫諸雜具ハ沒收せらるべけれ共其晉家たるをもて是をも武太郎が所得とすべし能此旨を心得よと最嚴重に説示せば一同感とぞ感じける共時武太郎ハ恐々申やう御威勢に依虛實明白亡父并共の素志を繼候事は喜悦雖有義に候へ共甥として伯父と爭論事十二分に勝と云ども多くもあらぬ獨の伯父を追放せられ候ても忍ひ難事にてこそ候へ某扶助候べし如舊矢瀬の里に住居を免せ給へかしと願ば長官頭を振て法度は天下の法度なり豈私しの恩義を以て許を非を得べけんや其願意を決して叶はず早速文具兵衛と山樹等と杖て制規の如く處分べしと烈しき下知に雜兵等は承まはりぬと應答も果ず走り蒐つ文具兵衛と山樹を矢庭に押伏て杖を揚て杖事早一百に及しかば夫婦脊の皮肉破れて血潮ハ胸迄流れけり去ば文具藏が鎌倉より年々送りたる其消息を故郷へ届ざりしにあらぬ共山樹か深く推隱して文具兵衛には見せざる事も又武太郎を打擲せし時奪ひ取たる帳面は宿所に秘置たる事も此時露顯したりける斯て雜兵等は文具兵衛山樹等を日の岡迄追立行て其處にて追放つと聞へしかば矢瀬の里人は彼が娘の鍛金を日の岡迄脊負行て山樹に渡して歸りけり

○去程に武太郎は九郎五郎と諸共に矢瀬の里人等に案内をせられて文具兵衛の宿所に赴き大庄屋等に面會ゝ田畑家屋庫諸道具迄悉皆受取に兩三日にして事果けり該時文具兵衛が貯蓄の金子八十餘兩あり武太郎は悉皆取は要なし密に伯父御に送らんとて其行衛を尋ねしかども絶て在處の知ざりければ詮方なくて止にけり抑々武太郎は其性質鈍くて心附なき者なれ共亦採べき事なきにあらず然れば飽迄離面りける伯父を以て仇とせず竟には是を養はんとて公へ願ひ申し今又其金を送んと欲せし事是其性の人には優て善美所ありと智ある者し評けり斯て九郎五郎は萬事武太郎の後見して文具兵衛に使役たる奴婢には皆身の暇を取せて其身の親きものを附置件の貯

金八十餘兩も吾預らんとて武太郎に渡さず且武太郎が年二十にならん頃迄其身里長を勤んとて此義を里人等に談合させしに里に古老たる百姓們と大庄屋と承諾ず昔が今に至る迄馬商人を村長に爲たる事絶てなし且九郎五郎は大原の者なり何條吾里の長と爲べき思ひも寄ぬ事なりとて文具兵衛の代りには里に由緒ある古百姓を撰擧て里正にぞしたりける此故に九郎五郎ハ八十餘兩の貯金を預りたる而已なれば後來迄の利得にあらず忽まち望を失ひて心變て樂からねば兎さま角さま思慮を爲るに最愚鈍なる武太郎を數多の田畠家庫の主となす共里人等に自由に裁判せらて果は皆失はん事疑ひなし然ば迚吾身此儘此處に在ては些も自由に爲事叶はず只何もかも攫て他郷へ脱走ば吾子の世迄乏き事なく安樂ならん手術もがなと胸に手を置つゝ案じ惡計を然らぬ樣にて妻にも知せず折もがなと窺ふ程に其年冬の項武太郎は傷寒を強く病煩ひて辛して癒りしに熱甚だしかりければ暫時耳聾目さへ朦て平日に似ざりけり九郎五郎し時を得て是屈竟と密に喜悦一日大庄屋と里人の豐饒なる者を招き集合如信實に談ずるやう最云がたき事なから武太郎親父武具藏は鎌倉にて死せしにあらず賭に打負て親方の金千兩餘を遣ひ失ひたりければ遂には公邊沙汰となりて其身は獄舍に繋れたり是故に武太郎を故郷へ遣して田畑を賣却せて借財の金を償いんと欲しに山樹等が惡心にて其談合に及ぶに由なく辛して武太郎が利運にはなりたれども件の金を遣さねば親父の一命を救ふに由なし去に依り鎌倉より數度飛脚到來して催促をせらるゝなり是給へとて豫てより認め置たる贋手紙を人々に見せて又云やう所詮田畑を質に入て金五六百兩調達ねば撈むべし武具藏は存命故郷へ歸る事叶ず武太郎は年も若く辨舌も人並ならねば吾等彼に立代りて此談合に及べるなり該件を依賴奉ると云に一同驚き呆れて武具藏は若時は賭杯ハ爲りしに繁華なる地に年を經て人惡くなりたるか其は捨置れぬ事なりかし武太郎殿

だに同意ならば金子も吾々調達せんと云に九郎五郎悦喜て其取引の日を定め扨武太郎には田畑の券面を書換らるゝと欺きて其日大庄屋の宿所へ同伴て即ち田質の證文に彼が名印を捺させつゝ九郎五郎は保證人にて金を取んとせし折に豫し謀し事なれば武太郎が宿所より人走來て至急の要事出來たり只今返せ給ひねとて早武太郎を呼出して其儘に倶して行けり去ば武太郎は耳も聞ず此日は眼さへ朦しかば其證文を見事もなく跡を九郎五郎に打任して走りて宿所に歸りけり是に依疑ふものなく財主は即ち三人にて金六百兩を取出し其儘九郎五郎に渡したり斯て又九郎五郎は別人をも此手術をもて旨く作爲て武太郎が家倉を質に入又百五六十兩を得たりしかば此上は一日も速早逐轉せばやと思へども妻の遲馬は武太郎が爲には正眞叔母なるに機密を告なば妨害せられん彼をも亦欺きて伴ふべしと思案をしつゝ一日黃昏に立出て其翌朝歸來つ密に書從を書認めて頓て納戸に閉籠り切腹んとしてけるを遲馬は早く發見して驚き騷ぎて推止め先其故を尋れば九郎五郎は歎息して知れたれば包むに由なし吾頃仲間の伯樂某と口論せしに彼者夫を遺恨に思ふて兩三人を語合つ昨夜しかじかの處にて吾を打擲とし去りしかば已事を得ず戰ふて矢庭に相手を斬斃三人に手を負て苛して歸り來れり去共遂には人に知れて必然捕手を向らるべし迚も遁れぬ一命なり妻子に難義を掛しと思ふて既に覺悟極めたり放て死し給ねと信實しやかにかき口說ば遲馬は淚を振り絞り縱に遁ぬ人殺の罪あり迚も遁し丈は遁て社赦免の時に逢もせめ爭で妻子を伴ふて立退んとは思ずに狼狽給か情なしと云れて點頭九郎五郎いなりたりと心に笑止思ど色にも顯さず汝の意見理なり然らば用意をすべけれ迚里外なる古手やを密やかに招き寄て雜具を不殘賣渡て其金を路用と定め借家なれば家屋のみ殘て竊に武太郎を詐りて掠取たる數多の金は旅具の底に隱て遲馬にも是を知せず其夕暮に幼兒の黑市を引抱きて夫婦逐轉した

りける一兩日を經て后に此事矢瀨に聞しかば武太郎は驚き愁ひて親に別れし心地しつ彼所此所へ人を出して行衞を探り索しかども識よし絕てなかりけり去ば大原矢瀨の里人等は九郎五郎夫婦の逐轉の理由を知ねば一同不審て評判せぬ者なかりけり兎角する程に今年も暮て早算日になりし頃武太郎が餘病本腹して耳も始の如く聞へ目も曚事なかりしかば喜悅て春を待程に田質を取たる金主等は保證人の九郎五郎が妻子を携帶て逐轉したれど借主の武太郎は舊の如にて恙もあらねば驚く程の事はなけれど今年は始ての利金なり卒や催促して取立んと打連立て武太郎が宿所に至て催促す思ひ懸なき事なれば武太郎は且驚き且呆て取合ず先其故を尋問しかば財主等は打腹立て初め九郎五郎が云し思慮並びに田質を取し時武太郎も出席して證文に名印を捺たる其事の明白なるを斯々と說示し大庄屋さへ立會て借たる質を知ずとは云れた義理か大膽不敵夫では濟ぬと喚き散して大庄屋へ言出けり爰に至て武太郎も始て悟り益々驚き扨は吾耳の疎くなり眼さへ朦し彼時に九郎五郎の欺りて田畑の券狀を書換と作言て證文に名印を押せて數多の金を借て逐轉せしなりけり九郎五郎は兎まれ角まれ其妻は吾伯母なるに夫婦密に相謀て甥に熱湯を吞する如き惡計こそ無慚なれ如何にすべきと足摺て泣ども今は詮方なし是のみならず家庫を書入て貸たる財主も催促て家を渡せと督責事の騷動に奴婢共は衣類雜具を各々にこかして取逃をしてければ跡には五十餘なる雇老婆のみ殘たり實に前門に虎を防げば後門より狼を進ると云比喩に洩ず嗚呼武太郎が命運薄く共家將に滅亡とする時節には在べけれ共遂に借財を免しに路もなき武太郎は田畑家庫を名殘なく財主に渡し里外なる小家を借て只獨り移住走り使の日雇を取營業としつ漸くに細き煙をたてたりける爰に武太郎が弟武松は其年の冬に至て病痾大半癒れども未た力着ざりければ故鄉へ歸る事を得ず折から出店に小厮少く手廻り兼る日の多

かれば五文次ハ又武松に春迄も助よ迚又々支店へ遣しけり然るを沖見は忌嫌ひて良人ゟ勧して武松を遠避んとしたれ共差當る營業の事ゟしあれば良人は閑で何春迄とて使けり去れば沖見が武太郎と武松を忌嫌しは元來故ある事にして其身とは齢十一二の弟なりける彼支店の支配人横六と密通して忍び會事屡なるに下女小厮等をば手懐て人目の防禦にしたれ共只武太郎と武松は其心條貞正して手懐け難き者なれば横六密に謀計て彼仙鵠ゟ物を贈り機密を密報て心を得させ餡之助の眼の病に彼同胞の障よしを云せて武太郎をば出遣しに其兄よりも心憎き武松は病氣に因て翌の年の春迄居斯て又其春も過又夏も過て秋の頃まで五文次は猶武松を押留て故郷へ歸し遣ず武松は困じ果て屡々暇を願ども宜敷代の小厮なきゟ餡之助の眼の病も聊づゝも癒たれば五文次は武松が障ゟなるにはあらじとて何生憎に留なり是故に沖見横六等は彌増々氣を揉て爭で彼奴を罪におとして逐出すこそ近道なれと示し合つある夕暮ゟ武松が風呂に入し折横六ハ小判一枚を手早く反古に押包し彼が脱たる衣類の間へ入けるを知者絶てなかりけり

第三編

斯て横六は武松を罪に陷んとて豫て謀計し事なれバ彼が風呂に入たる隙に小判壹兩を反古に包みて風呂口に脫捨置たる衣類の袂の間へ密やかに入けるを武松は日比より心利たる少年なるに沖見横六等が密通の爲体並びゟ彼等は兎に斯に吾身をいぶせく思ひぬる事の心も豫てより猜察したる事なれば暫くも油斷せず今宵も風呂に入たる折誰とハ知ず湯殿の彼方に抜足しつゝ來る者あるを心得難く思ひしかば戸ぶしの穴より差覗くに是即ち横六が何かあらん些斗り紙に包し物を持來て吾脫置し衣類の袂の間へ入ると覺敷早くも其處を立去ければ彼奴は何を爲やらんと思ふのみにて呼も咎ず平常より徐々に垢をかきて浴沐し果て身を拭件の衣類を着たりける去ば日頃は風呂に入ゟ沖見横六等が先ゟ入て其後他の者共を入けるに今宵斗りは横六が彼惡計あるにより吾は何要用あり其方衆先入べしとて男共を先と入次に下女小厮等と武松をも入果て終に其身も入たりける浩し程にて武松は人なき所に赴きて袂の間を探り見に果して小判一兩を米問屋より送り越たる餅米の送り狀に押包てありしかば這は横六が淺略にも巧みて吾等が盜たりしと云ん迚の業なりけりと思ふのみにて些も騷ず爲すべきあらんと思案をしつゝ豫て拾ひ置たりし横六が沖見へ贈りし艶書を早く取出て件の金を押包みて横六が沐浴せる折其衣類の袂の間へ密に入換置たりける斯とは知ぬ横六ハ平日より早く風呂を出て急がはしく身を拭ひ脫置たりし衣類を手早く取揚て着折柄主個望月五文次は手づから提灯提げて本屋より出て來にけり是は豫て横六が五文次に内通して近頃は見世の賣貯の紛失する事屡々あり全く見世の者共の盜取にぞあらんずらん今宵穿鑿仕つらん其折に其方へ來まして邪正を糺斷爲給はゞ已後の爲になるべし此義を願ひ奉つると忠義めかして密報ければ五文次は其心を得て自から出て來たるなり此時既に日は暮て暮六半の事なれば商賣は仕果たりけれ共沖見は未だ本家へ歸らず其儘良人を待て居さる程に横六は此支店にて使役るゝ者共を一人も洩さず主人の邊へ呼集合て張臂しつゝ扨云やう近頃見世にて金錢の紛失たる事ありけれ共誰業と云事を知ねば親方に告知申さで窃に心を附たれ共最繁忙敷見世なれば吾眼の遶がぬ隈のあればや今日も又掛硯の抽斗に入置たる小判壹兩紛失したり一度ならず二度ならず斯屡々の事なるに打捨置時ハ見世を預かる吾怠慢を申し解理由もなく遂に此身の越度とならん件の小判ハ餅米の送手形ゟ包みたりしが紛失しより久敷もならず此夕暮の事なりしに今宵旦那の本家より來ましたるこそ幸ひなれ各自旦那の眼の前にて衣類

を脱て見せ參せて此疑念を晴そべしと言に一同呆れ果て迭に目と目を見合するのみ暫時應答も爲ざりける其中にて武松は些少も臆ず進み出て横六に打對ひ只今御兄の言る丶由を推辭ば忽まち疑はれて盗人なりと思はれん然ば誰かは否と言べき裸躰にならん事勿論に侍れ共物には手本と言事あり御兄は此處を預り給ふ支配人で座はすれ其家主ならねば吾々と高下社あれ朋輩なればば御兄先着物を脱て旦那に見せ給へ去時は飯焚のおさんどのでも辭退いならず皆諸倶に裸躰にならんと言を横六開敢ず人も多きに素稚兒の出過た裁判奇怪なり爾言汝か疑いし疾脱ずやと焦燥を五文次霎時と押止めて武松が言理由も其理なきにあらざれば誰彼と言んより皆諸倶ぉ脱べしと言れて横六辭退も得ならず然らば吾等も面晴なり各自一度に着物を疾々脱ねと言つ丶も帶解捨て第一番に襦袢一枚になりしかば順次は武松下男共下女のおさんも已事を得ず困じ果て衣類を脱を遲えと五文次は一枚々に引寄て裏返し〳〵振へ共武松が衣類は更なり其余の者も袂糞と鼻を拭たる塵紙一枚二枚出たるのみ疑ふべくもあらざれば若やと思ひ心遣に終もやらず横六が衣類を取揚て振へば袂の間より紙に包し物ありて落るを透さず五文次が取に驚く沖見は更なり横六は嗟咄と斗り周章惑て出を手を五文次磕と拂ひ除て近傍へも寄付ず眼を瞋し懸焦燥てやをれ横六是を見よ人を疑ふ汝が内通左もあるらんと思ひしに似ず却つて汝が袖より出たるは是小判なり是い如何ぉと突附て詰問ば横六呆れ果て夫い正數武松が袖の内より出べかりしを斗も如何にして某が其衣類より出たるやらん不思議〳〵と斗しに明て言れぬ其身の惡巧の裏を欠れて今更に言解よ去しもなかりけり五文次は既ぉ事の情を推察せしかば金子を包みし一枚の反古を靜に披き見て又横六に打對ひ發ぉ汝失ひし小判は米見送手形に包み置しと言たるが是い手形に似ざる物なり何にかあらん先々と言つ丶行燈を引寄て讀其反古はまごふ方なき横六が手迹に

て沖見に送りし艶書なり日毎ぉ一個見世には侍れど人目多くて能首尾稀なり第一に邪广ぉ成武松をば黄昏より使に出し侍るべし今宵は早く見世を仕舞て緩で一献酌侍らん御婦も孫て心得ておさんに窃ぉ言付て酒も肴も買せ給へよ沖のうみ樣横ふかすみと讀も果ぬに横六沖見は嗚嗟と斗り驚き周章て遁んとするを五文次は透さず沖見を引捕へて早捻伏て動せず夫横六を逃すなと烈敷叫ぶ聲と共に承へりぬと武松はむか骨拂つて横六にもどりを打し投伏て膝に組敷力背早業目を驚かさぬ者もなし开中に五文次は怒れる聲を振立て人間でなし共思知や斯まで證據分明なればいふ迄もなき不義の科吾武士であるならば押重て四段に爲べきを然爲ず迚も穢んや武松其奴を捕縛よと敦圖ながら柱に掛たる細引の用心繩を二筋手早く取却して几一筋もて武松に横六を縛めさせ手づから沖見を縛めて扨諸人に衣類を返し與へて退かせ更に沖見と横六に答をあて丶責しかば兩人苦痛に堪ずして久敷密通したる事又武太郎武松等をいぶせく思ふ由あれば變にハ仙鵠に喋し合せて餡之助の眼病の障りとなれる由をいせせ今宵は又武松を謀りて罪に陷んとて箇樣々ぉ計較しを早くも彼に知れ沖見と喋し合せて商業の資金を引負したる事迄も此時に悉皆顯れけり是により五文次ハ彌々憤怒に堪ずして横六沖見が髮毛を恐皆挾ゝ切て棘栗の如くにしつ又罵つて云げる樣横六は親類の片端なれば最初より此支店を預けしに斯まで不義を働きしは畜生にも劣し者なり況沖見にも十一才になる餡之助といふ子さへあるに其身とは年も相應からぬ横六と密通して武太郎武松等を虐けしい是も又人間にあらず獸類に等しき者共なり浩れば公邊へ訴へ申して首を刎らるべき罪科なれ共然してゝ彌々外聞惡かり打落されん首に換て挾み落せし兩人が髻を後來迄も延すべからず若其髮を延しなば其度は決して免さず命惜くば忘却なと最も嚴敷罵り懲して横六を襦袢一枚着たる儘にて放逐ち沖見い親里へ返し遣して生涯人と交

る事を赦さず尼寺へ遣して居にすべしといふ約束にて事漸くに穏和けり此時迄も館之介が眼病の癒ねば垂簾てのみ居たりしに母の離別を打歎く泪の乾く隙なければにや病痾倍々日に增て覚に瞽になりにけり去程に武松は頻に故郷へ歸んとて身の暇を請と雖も五文次は倚免さず今度沖見横六等が不義の極さの顕れしも汝の忠義に依てなり是に就きても亡人の丈具藏丈姉の心操彌々知れて懐敷けれ汝も早來年は十七才に成なれば額髪を剃落して男子として支店を預ん故郷へは武太郎の跡りにければ家名は立べし兄の便のあらんまで急ぐは要なき事なりとて一向押留て聽ざりしを振捨ては出て行難き武松は困じ果て心ともなく已前の如く支店を勤めて日を送るに五文次は最初の如く本宅と支店を兼帯として商賣を去たりける去ば沖見横六等に相譚れて不義の取持をしたりける下女のおさんを初めとして宜しからぬ者共には身の暇を取せしかば支店は愈々人少し此故に湯にも水にも使われて霎時の暇もなかりける斯はある日の夕暮に五文次は寶溜の錢十五六貫ありけるを兩換の爲にとて武松に是を持して米町へ遣しけり尋常の者ならば永樂錢十五六貫如何として持行るべき力の人に勝れたる壯者なれば容易げに其儘肩に打乗て米町の錢屋に赴き件の錢と引換に金十五六兩受取けり此頃の錢相場は永樂錢一貫文を小判壹兩に換たるなり左右する程に早其日も既に暮しかば武松は件の金を財布に納め襟に掛て宿所を指て急ぐ程に往來とたえしところにて向ひより來る者ありけり其群凡そ五六人態と武松に衝突りて矢庭に喧嘩を仕掛つゝ撃倒さんとて競ひ斯るを武松すかさず一人の小腕取て引周して三間餘り投退け續て蒐る一個の脾腹を礑と蹴てければ苦と叫びて倒れたり其時武松聲高やかに此盜賊等か未宵なるに吾懐中に物あるを知て尾たか不敵の擧動前髪立と侮つて死に出しか夏虫の火虫に似たる白痴們斯ても手並に懲ぞやと敦圍猛く罵つたる聲も引せず傍なる藪蔭より躍れ出る又一個

の曲者あり是即ち別人ならず豫て相識横六なり向鉢卷長脇差裝をひきりて不畏く多勢を頼みて立向ひ噦物々しき丁稚奴が腕に力量のあれば迚今宵は赦さぬ先度の遺恨日頃親しく交したる若衆頼みて斯迄に取圍たれば逃しはせず兩換したる金諸共に命も此處へ踏出して死んで仕舞と不敵の廣言武松騷がず嘲笑ひて誰なるらんと思ひしに不思議に首を續れたる横六なれば倚而白し〳〵敵方は撰まず各同蒐れと云せも果ず加勢の惡徒たゝんで仕舞と左右より手頃のより棒腰刀得物々を打振て撃んと競ふを物ともせざりし武松は飛鳥の如く搔潜り遣違はして痿むを得たりと着入て一個の刀を奪取て當るに任せて薙立れば瞬く隙に兩三人切れて鮮血に塗れたり然はあれども惡漢等は多勢を頼みて些少も痿まず組んで進むを武松は襟髪捕て一礫左右に隙なき手足の働き或は蹴倒し踩躙最も烈しき闘ひの後を覘ふ横六が聲をも懸ず打太刀を右より進む一人を掴んで盾に機變の同士打パッと立たる血煙に驚ろき痿む横六は逃んとするを逃しも遣ずわびせ懸たる武松が刀のさにに空竹割二片になりて斃れたり横六既に撃れしかば況て加勢の惡漢等は兩人矢庭に斫倒され其餘も多くは傷手を負て敵ふべくもあらざれば一同散々に遁失けり其時武松顧ふ樣不慮ざりける今宵の災害止事を得ず横六等兩三人を擊止たれば宿所へは歸りがたかり兩換去たる此金を親方に渡さずして此儘に立退んと心よからぬ業なれども是等の事に關係て身の危急を顧みずば臍を噛とも及ばんや亡兩親は多年望月の支店に功あり又吾々兄弟も此年頃使役れたるに兄貴の故郷へ歸る時旅費僅に壹兩壹分遞與されたるは情なし吾此金を借用して今度の旅費に爲迚も過分たりとすべからず此義を一筆書殘して遁去んと思案を去つゝ腰なる矢立を抜出して懐中紙に云々と横六等が緈の趣き止事を得ず擊果せしかば巾分ありと雖も人殺の罪を如何はせん因て逐轉致す者なり兩換の金十五兩餘は借用して旅費とす僥倖にして后來に志しを得事

有ば還と十倍して返却奉らん早々不具と書止め此書據を横六が死骸の小指に結び付奪ひ取たる脇差と思ふに増て切物なれば鞘に納め腰に帯て行まくしたる向ひより五つの柏子木打ち鳴し忙はしく來る夜行翁が血潮に汚りて吁嗟と斗り叫ぶ聲を立させじと抜ひらめかす威の切先苦と寤て提灯を捨て忽ち逃失たり折柄隈なき月の影今宵終夜走らんと心武松甲斐々しく跡を埋むる木下蔭夜は膚寒秋風の西を差てぞ急ぎける去程に武松は晝は懲て夜は走る浮世を忍ぶ旅なれども旅費に乏しからざれば物不自由なる事もなきを尙も追手の懸らんかとて額髮を剃て容貌を變たりける去ば又鎌倉にては其夜さり夜行翁の報知に依て土地の者ども驚ろき騒ぎて走り來つ死骸を見て軈て有司に訴へけり是に依り司人等は翌の日横六等が死骸と武松が遺書を展撿して五文次をも呼集へ緈の理由を尋問推考るに横六が悪事も露顯又彼に相譚たる悪漢等も發にも犯し罪ありて此地を追放せられし者なり是彼以て武士なれば切徳になりぬべき由もあれば武松が行衛を穿鑿に及ばれず五文次宜しく尋ね出して訴へ出べしと命せられ死骸も皆取捨よとて一轍にして緈落着けり去程に武松は此秋九月の下旬に故郷なる矢瀬に至りて先伯父文具兵衛の宿所を尋ぬるに家は昔に變ねど其人は當所に居ず發に追放せられたる其紡の趣きを武太郎が緈迄も其大略を里人の告るに武松驚愕て兄武太郎の宿所を訪に日雇の稼も墓々しく雇ふて使ふ者なければ過る頃より人の爲に稲田に集合小鳥を追て纔に口を貰ふのみ是に因て宿所に在ず箇樣々の處に居と知るものゝ告しかば武松倍々驚き歎きて霎時もあらず武太郎を尋ねて其處に赴きたり去ば又武太郎は伯母聟九郎五郎が野心に依て去歲の十二月に家庫田地を借金の形に渡しより里端なる小家を借て日雇稼したりけれ共元來田舍の事なれば是將墓々しき營業にならず詮方盡て此秋は山田に群集鳥を追て一日に錢十六文と朝夕二度の粮飯を貰ふて其日を送る程に久しく待し武

松が鎌倉より來にければ喜悦さと恥しさに襤褸の袖を顏に覆て只さめ〴〵と泣にけり其時武松は頻りに兄を勵して彼里人に聞たりし文具兵衛夫婦九郎五郎等が事の顛末を尋問に武太郎纔に涙を止めて最初此地に來つる時伯父嫁山木に欺かれて彼手形証狀を奪ひ取れし初めより伯母婿九郎五郎が情にて其をを都に訴へ三好長良の裁斷により文具兵衛夫婦の悪心露顯て彼身此地を追放せられて吾身の利運に成し事其后又九郎五郎の悪心にて家督と田畑家庫まで悉皆質物に入られて彼人逐轉しつるにより誰に憑らんしまもなく皆悉々く分散して斯なり果し終まで告に武松慰め兼て歎息の外なかりしを熟々思ひ廻すに九郎五郎の悪心にて我兄の欺かれ田質家質証文手形に正しく名印を捺たらんには遁るゝ道はなけれ共一函に近き大金の質を程なく流させて皆引取しは情なく且律令にも相違たり我等此儀を大庄屋並びに財主に説諭して合力を依頼べし女々歔泣て居事かは彼處へ案内をし給かしと云に武太郎力を得てさは迚軈て武松と共に大庄屋の宿所に至りて弟武松を相伴ひて來つる由を云入けり暫時して大庄屋庄野右衛門は武太郎と武松を客座敷に招き入て立出て對面したり其時武松膝を進て庄野右衛門に打向ひ某は武具藏が二男なる大原武松で候ふなり去歲し病に侵れて兄武太郎と諸俱に歸來る事を得ざりしなり然るに近頃漸々に病ひ本復したるにより鎌倉を立去て此地に來つゝ伯父伯母婿並びに兄の緈の顛末始めて聞て驚きたり勿論九郎五郎の悪心にて吾兄を欺きて田質其餘の証文に手形を捺せし事ならば知ずとし云難し元利返濟成がたくば質物を渡さん事勿論の義に候得ども斯大金なる田質家質の其利金遲滯とも或は半年十三が月用捨して後にこそ質を流すが定法ならずや然るを貸て程もなく些少なる利の滞りしとて田畑家庫を渡させ給し貴君の計らひ心得がたく財主達も情なし只是のみにあらずして伯父文具兵衛が所持の田畑は沒収せらるべかりしを當所の舊家たるにより武

太郎是を所得とすべしと當時三好殿の問注所にて仰られしに候はずや然らば是件の田畑公邊よ
り吾兄に下し置れしにあらね共賣買は憚りあるべし然を此儀の斟酌もなき財主の不念云ば更な
り容易も渡させ給ひし貴君の計ひ心得がたし此儀を以て訴訟出なば成敗何が利運なるべき能々
顧見給へかし然れども取引の緯果し后なるを又堀起して人々に難義を懸んは本意にあらず總て
斯の如き分散には戻金とか云事ありて其金主より賣主へ合力することと世に多かり爰を以て彼財
主達より凡の金高一割の戻金を出さるべし元金は是彼合して七百五十兩とか聞ぬ其一割は七十
五兩兄武太郎に贈れなば云分もなく緯を濟さん若し貴君の計ひにて此談合整はずば都へ登りて
訴訟申さん此義を依賴奉つると又他事もなく陳しかば庄野右衛門は困じ果て云るゝ趣意道理
に適へり實に吾々が不念なれば先財主へ通達して有無の返答に及べしと返答て種々に饗應けり
斯て其后庄野右衛門は彼財主共を招き集へて武松に云れし由を箇樣々々と說示し此義は吾等も不
念なりや各々も亦越度なきにあらず兎角に彼が云に任して七十五兩の戻金を出して無事に濟し
たまへ彼武松は若輩なれども武太郎が類ゐにあらず最逞しき者なるを敵手に取は六ヶ敷からん
よしや訴訟に勝事ありとも都へ召れて日を累なば其邊の雜費も多かるべし能々量見し給へと言
葉を盡して諭すにぞ財主共は驚愕て去歳の十二月に取引の濟たるを又今更に數多の金を出さん
とは最難義にいひ得ども棟梁強ければ家を仆といふ諺もあるなれば損する時節を思ひなして
云るゝ儘に涙金を取して緯を濟すべし宜しく扱ひ給ねと言葉等く承諾しかば庄野右衛門悦喜て
軈て武太郎と武松を招き寄て財主等と相對の上件の金を受取せて云分もなく緯濟けり其時武松
は庄野右衛門に對ひて云やう陰によりて吾兄は一資本にあり附たれば見世店を出來いて商業
をすべき者なり然れども單身にては萬事に便なき緯なれば妻を娶らせんと思ふのみ相應かるべ

き緣女あらば媒妁して給ひねと云に庄野右衛門點頭て开は幸ひなる者こそ候へ吾家のかゝり人
に落葉と唱なす女あり彼は我妻の又從弟女にて兩親を早く失ひ孤子なれば此年頃下女にして使
たるに心ばへ愚昧にも非ず今年は廿歲になりては武太郎殿にと二つ斗の姉にはあれど所帶の爲
には年増の妻こそ良るべけれ开を厭はしく思はれずば件の落葉を娶らすべしと云に武松喜びて
武太郎に說勸るに武太郎も亦異義に及ばず兎も角もと應じかば緣談言下に整ひけり是により賣
家を尋ね求むるに里に久しき餠店の衰微たる貸居あり這は武太郎幼少より手掛たる業なればも
ちひてこそ然るべけれとて軈て其家と諸道具さへに購ひ求めて家號を大原屋と改稱餠と大佛餠と
唱へて件の落葉を迎へ取所謂引越女房にて夫婦俱稼ぎにしたりしかば其見世漸々繁昌しけれな
れ共田舍の事なれば商業の暇ある折には武太郎は餠を脊負て近鄕を賣歩行て兎も角もして月日
を送りぬ斯て其翌の年の春に至りて武松は兄武太郎に其身鎌倉にて橫六等を擊果して逐轉した
る共緯の趣旨を初めて密に告しかば武太郎いたく驚き恐れて又いふ由も無りしを武松は打ほう
笑て貴兄さのみな恐れ給ひそ彼橫六等は惡漢なり我人殺しの罪あり迚も今日まで追捕の沙汰な
ければ以後崇りあるべからず其折親方の金十五六兩我懷中にありしまゝ彼地を立退たりしかば
此は我物にあらねども借用すと云事を書殘したるにより是も亦後安かり道中にては如何斗り遣
はず尙十餘金殘たり半は貴兄に參らすべく半は我路用とし中九郎五郎の在所を尋ね逢ずは宜し
き武家に仕へて武藝を以て家を興ん此義を心得給ひねと懇切に說示して其半金を兄に贈り旅行
粧ひを整へて大庄屋庄野右衛門其餘の里人にも別れを告て兄の上を依賴つゝ先都の方へとて三
月の頃に啓行えたり〇爰に又篠部九郎五郎は疾に妻子を携へて大原の里を逐轉せしより和泉の
堺に赴きて裏町なる貸家を購ひ求め暫時潜伏りしが掠免取たる金八百三十兩ありしを倚も女酉

遞馬に知せず今度購ひ得たる家の背戶に築山のありければ是究竟と件の金八百兩を瓶に納こて彼築山の中に埋め置其餘の三十兩を資本として小間物商賣に人に知んことを恐れて通屋九四郎と改名め四國九州に赴きて商賣を爲す時こ十二分の利ある由を傳へ聞たる事もあれば翌年の三月の頃遞馬に旅商賣の事を告て小間物を多く仕入此度筑紫に赴くとも初商賣のことなれば遲くも四五ヶ月早くは五月の頃に歸宅らん萬の事に儉約して留守し給へと說示こ金三兩を遞馬に授與こて留守の間ひの雜費と定こ荷物は舟塲まで馬に負して船路を筑紫へ至らんとて其日門出をしたりける○是こ休題文具兵衛は甕に女房山樹と倶に追放の身となりし頃山科の近傍に些の由緒のあるを賴みて親子三人寄食たれど商賣せんにも資本はあらず浩る折には親き友も賴母敷からずなりもて行が總て浮世の慣習なれば久しく留らるべくもあらず夫婦の間も亦如斯なり迭に其非を云募りて山樹は夫に暇を乞請女子は女親ゐ屬らるゝものなればとて娘たがねを携へて親里へ赴きつゝ永く離別をしたりける此故に文具兵衛は單身になりけれども斯て在べきにあらざれば山科の宿を辭し去りて單身浪花に赴きつ九尺二間の裏家を借て田ばたとか云土を取の輕子に成て漸くに其日〳〵を消光けり浩りし程に文具兵衛は世渡りの遑ある毎に天滿の天神へ參詣しつゝ丹精を凝して祈やう某は最初よりさせる惡心なかりしに妻の山樹が惡計の其終に露顯て追放せらせしのみならず一人娘の鍛金をすら山樹に別て離別して年齡五十に及ぶ身のなれも習こぬ土取の營業を致す事過世如何なる報ひぞや神は邪正を見透の鏡に等くまこまさん浩る歎きを憐みて今一度某を世に出し給へかしと操返しつゝ念ずる事早一歳に及びけり斯てある時日の暮に天滿の社へ詣つゝ例の如くに祈る程に夢ともなく現ともなく髮頰結たる一人の童子の黄金の瓶に梅の花を揷たるを携さへ內陣より現れ出て文具兵衛に告るやう善哉々々吾は是天滿

宮の神勅を受奉りて汝容子を人に問に西國には近頃より尼子大友の戰爭起りて海陸の通路絕たり是により彼處に逗留の旅人は一人として歸る者なく皆營業のたつきを失ひな或は軍兵に亂妨せられて飢渴に迫りて死する者尠かならずと聞へしかば遞馬は驚き打歎きて夜の目もあはず明し暮すに彼三兩の金こ早遣ひ果して藥鹽草搔集こても錢はなし他人に借らんと欲すれども馴染もあらぬ里なるに亂れたる世のことなれば鐚百文も容易貸んや此故に衣類を質にも入賣もして冬迄は凌ぎこが座して食へこ山も空しき比喩に洩ず質物の盡ては雜具諸資わるべき物は日每々に賣て其日を送りたる艱難云べくもあらざりけり○夫程に文具兵衛は天滿宮の示現に任して和泉の境に赴きつ僅少なる借家を借て尙土取をして世を渡るに其近傍に有福なる商人の新規に藏を建るあり此故に近傍に土の壁に用ふべき物あらば五六十坪持來よかし價宜しく買んと云けり文具兵衛は件の土を容易思ひて受負して總て此わたりには海土砂のみ多くして能埴土のなかりしかば困じ果つゝ兩三日彼地此地を尋ね走行に彼九郎五郎の四九郎が脊戶の內に些やかなる築山のありけるを發見して逗ゝ屆竟なる土に社あれ便りを求こて買取ばやと思ふものから其家を音に今宵傳るものなり汝惡心なしと云とも妻の惡事を察せずして共に其螺を虐げたる其罪是輕にあらず然れども彼武太郎は命運渺ものなれば得たる家督を保つ事能こず伯母婿九郎五郎ゐ姦計て忽ち資產を失ひぬ斯く又九郎五郎も不義の寶を保つこと能はず彼が所持なす金銀は半分は是汝が物なり是を以て件の金を暫時汝に貸與へん汝成出たる後に又九郎五郎に返し遣いし夫よりして彼終に武太郎の物となるべし早く境に赴きて尙土取の營業をば必然幸ひあるべきなり凡そ汝等が吉凶禍福は是此の瓶の梅花の如し其折々に効しあらん努々疑ふ事なかれと妙音高く示し給ふたん聲に驚き覺れは是なん南柯の夢なりける文具兵衛斯る示現に感淚のこゝむを覺にず

其夜ハ御神の通夜して尙行末を祈りつゝ、竟に境に移り住て又營業したりける

第四編

是は又九郎五郎の九四郎が妻の遲馬は商業の爲にとて遙〻筑紫へ赴きたる良人を遲しと待つ程に早くんば五月の頃遲く共四五ヶ月には歸り來つべしと云しにも似ず夏も經過て秋も早九月の末になる迄そよとの風の便りもあらず如何にしくと思ひ詫て彼地の妹婿なりける篠部九郎五郎が隱家なりとは夢にも知ぬ事なれば白地に人の脊戸なる土山を買んと云に由なく如何にせまじと思ひ兼て行も得やらず佇む程ゐ内より出る古金買あり文具兵衛は忙しく其者を呼留めて和主は此家の得意なるべし吾等至急に賣口ありて彼土を買まく欲す仲人して給ひぬかし家主の賣んと云なれば五百文に買取べし又和主には仲人賃百文を參せん此義を賴み申なりと云に古金買は一義に及ばず點頭て察しの如く徃る頃より吾等は此家の古びぬ雜具を幾度となく買たりき家主は逆旅の留守なる由にて女世帯の廻り兼てや最窮したる折なれば幵は喜びて賣るべしいで仲人して參せん暫時爰に待給へと應て再度内に入て遲馬に云々と告しかば遲馬は聞つゝ思ふやう既にして質物も賣べき雜具も盡果たるに今彼土を五百文に買取んと云者あるは思ひ懸なき幸福なり爭でか賣ざるべきと賢ら顔なる女子の量見更に又異儀に及ばず賣に彼土は有ても無ても事の欠ざる物なるに錢にだに成んには望の隨意賣與へん先其錢を取て給べ然らんには彼處の土を其人の思ひの儘に取持て行ともけしうわらずと云に古金買心得て又立出て云々と文具兵衛に告しかば文具兵衛喜びて豫て用意の財布より鐚五百文取出して土の價として是を渡し又百文取出して古金買に贈りけり是に依り古金買は件の金を遲馬に遞與しつ暇乞して出て行けり去程に文具兵衛ハ件の土を堀取に身一の事なれば篠に盛り是を擔て幾度となく徃復して早夕暮に成にけり然れ共遲馬は身の形態の惡敷に恥て出ても見ず固より土の事なれば何かハあらんと思しのみ其土取を其身の兄なる文具兵衛ならんとは神ならぬ身の知よしなければ終日土を取搬べども面を合ずる事もなく迭に知ず識れずして後の歎きとなりにけり去程に文具兵衛は其日も既に暮るまで土を頻りに取程に早築山を堀崩して下の處に至りし時最さゝやかなる瓶の土中より現れ出しを何にかあらんと思ひつゝ引出しつゝ忙しく瓶蓋を開きて能見るに瓶の内には小判八包餘迄も然も其金の八百兩ありければ且驚き且嬉しさに夢現の境を辨ねず和主に知るゝ事もやと思へば遽て忙きて篠の底に押匿し瓶諸共に打擔ぎて其儘宿所に走り歸りつ分々と思ひ見るに此金の埋めありしを家主も知ねばこそ彼土をば賣つらめ或も又主人のみ知て妻子は知ざる主人の逆旅の留守なれば吾に委して彼土を取せしものか計り難かり今更思へば徃る頃天滿の神の示現ありて黃金の瓶に梅の花を揷たるを示させ玉ひし件の花は蕾みと共に僅かに八輪ありと見たりき是即はち瓶に入たる八百兩の應驗にて金は則はち天滿宮の授與賜ひし物なるべし然りとも此地にありて身を立んとしたらんには彼家主の歸り來て穿鑿するを有もせん左では却つて吾身危うし早く浪花へ立歸りて是を資本に商賣を始むるに如く事あらじと思案をしつゝ綷に假托翌の日借屋を明渡して幵が儘浪花に立歸り扨何をもて家業にせば宜しからんと思ふ程に米問屋の賣家ありしかば其家庫と株式を三百兩に買取しに筑紫の戰爭平定て西國の米多分來にけり是に因り價俄かに下落なりしを思ひの儘に買入れしを俄かに都に戰爭起りて商人の貢米を悉皆く燒失なはれ或は亂妨せられしかば都は更なり五畿内まで米の價の騰貴し畢聊かの事にあらず是に依り文具兵衛は初商賣より十倍の鴻利を得て件の米を思ひの儘に賣てけり只是のみに有ずして此頃文具兵衛が見世店の向ひに呉服屋の賣家あり店附の品物は皆夏物のみなるに頃は十二月の事なれ

ば時候はづれの物なりとて買ふもの絶てなかりしを文具兵衛吾買んとて殊に下直に直段を附て家庫物品悉皆く漏さず至急に買取けるに此冬ハ例に變りて暖氣なる事夏の如く世の人更に絹單と購求る者の多かりしかば文具兵衛は見倒して買取たる夏物を幾程もなく賣盡して又十二倍の利を得たり其后又試驗に多く藥種を買入れて藥種店を出せしに其年唐藥欠乏くなりて又十倍の利を得たり總て箇樣にする事なす事利を得ずと云事なければ僅か二年斗りの程に八萬兩の分限になりぬ最初見世店を出せし處其町の西の角なりければ家號を西門屋と唱へ名を文字八と改めて別に居宅て築造て此處を其身の住家と定め米店呉服店藥種店には其商買に心得て貞實なる者を支配人として萬端のヿを司どらせ其身は毎日に三軒の店々を打巡りて聊かも驕奢事なく或は高利の金を貸出して催促り取事苛酷く或は分合よろしき家屋敷を買取て借家の賃を登せなどして總ての人に貸たりければ只金銀ハ日に月に入るのみにして遣ふ事なく萬事質素に暮しけり○是は休題扨も其后九郎五郎の九四郎が妻の遲馬ハ其年の終り迄良人の歸り來ざりしかば朝な夕なの煙の代に物悉皆く賣盡し床板を取外して薪木にさへする斗りなれば既に明日の粮盡て親子の飢を凌ぐによしなく身には襤褸の衣一ツに肌を覆ふのみなれば況て亂れし髪も結ばず其身單一は斯てもあらめ幼少ものゝ飢に絶ねば乳に携れ其乳は出ず母樣空腹物欲いやよ何なりとも些斗り食させ給へやよ喃と泣ども求め兼たりし子の悲哀より母は倚慰め兼て抱ぎしめ喃空腹もあらん物欲しからんと云も飲ますする物はなし辛抱せよと云聲も淚に曇る十二月の空の世は春めきて暖和なれども親子ハ既に凍えたり今年ハ何處も豐なれども吾々斗り斯は飢たり如何なる過世の業報ぞやと人をも怨み世を果なみて泣より外はなかりけり斯る折から九郎五郎の九四郎は西國の亂れに依りて久敷歸る事を得ず物悉皆く亂妨せられて命も既に危うかりしを辛くして遁れ

つゝ其年の冬の頃漸く彼地を立去りて乞食をしつゝ十二月半に歸りて見れば妻も子も最强に窶れ果て家さへ既に荒にけり這は开も如何にと驚き呆れて先其故を尋ぬるに遲馬は怨みの淚を拭ひて能思ふても見給へかし門出なされし彌生の頃遲く共四五ケ月には必ず歸り來つべしとて金二兩を殘し留めて賄なハせ玉ひしに秋果れ共音信なく且西國の亂れにて米穀萬の價貴く秋の半に遣ひ果しつ詮方なさに衣も雜具も朝夕の煙りの代に賣盡し粥を啜りて昨日迄親子二人の命脈を漸く繫ぎ止しかど今日は煙の代絶て飢て死るを待んのみ亦詮方もなき折から偶歸り來給ひし御身も愛でや零落て其有樣こそ淺猿しけれと云懸て又泣沈むを九郎五郎は慰さめて御身の怨みは理りなれども吾迚も西國にて箇樣〱の厄難あり物悉皆く掠め奪れて歸る道さへ無なりたれば心ならずも彼地にありて乞食をしつゝ辛くして立歸る事を得たり只是時の廻り合せの良からぬ故にはあなれ共去れば迚歎くべからず吾倘多分の貯へあり脊戸に古たる築山のあらん限りは氣遣ひなしと云ふを遲馬は咎めて心得ぬ事を宣ふものかな彼築山が何にかならん幾に土取の翁とやらんが彼土を買んとて人を頼みて云ふに依り錢なき折の事なれば望みに委して彼土を價五百文に賣侍りきと告るに九郎五郎驚き騷ぎて开は一大事になりにけり將々と云ながら其儘脊戸に走り出て彼築山の跡を見るに八百金を埋め置たる邊りまで堀崩されしを如何にして彼金のあるべき爰に至りて九郎五郎は足摺しつゝ或は罵り或は頻りに悔恨みて狂氣の如く悶へたる縡の情を何知ぬ遲馬は愈〱訝りて只管よしを尋しかば九郎五郎は今更に勢ひ隱す事を得ず大原にありし時武太郎が伯父文具兵衛に贈らんと云し金八十兩を預かりて終に又彼に返さず其后又武太郎を欺むきて彼が家庫田畑まで皆悉々く質に入て其金七百五十兩を掠め奪其縡後に露顯れんと思へば更に遲馬には人を殺せし由を告て諸共に大原の里を逐轉し堺に住家

を求めし頃脊戸に微小なる築山あれば件の金八百兩を密に瓶に納めつゝ山の半腹を堀穿ちて埋め置たる事の由を初て具に説示し彼武太郎は心ざま最愚なる者なれば數多の田畑家庫の主となるとも後竟に他人の爲に横領せられん所詮彼を誑り迄其一世帶を掠め取り他郷へ奔らば吾子の世迄萬事豐に送らんと思ひにければ箇樣〳〵に姦計て八百三十兩の金を得たるを御身に告なば絆の障りになりやもせんと思案をしつゝ僞りて大原を引退べき端た金の三十兩もて商賣の資本としつゝ西國へ赴きしに危難忽然身に逼りて資本を失なふのみならず去り共知ぬ御身は又八百兩を埋め置し彼築山を發てやな僅かに五百文の錢に換て賣し則ち因果覿面惡事の報ひの最早さよさしも八百三十兩の金も吾身と吾妻子の身には些少も着ずして殘らず人の物となせしは不思儀と云も餘りあり吾後悔は此故なりと初めて明せ匿人の惡心遲馬も聞つゝ呆るゝ迄に愕きつ又打泣て扨て〳〵淺間しき變にも嫂山樹殿の最鬼々しき惡心にて甥の武太郎が虐られしを御身の扶助て訴へに勝事を得て親父と伯父との家督を彼が繼たるい理の當然で侍れども一方喜ければ又一方の惡さも孰れも親身ども甥の利運を喜こべば兄の落目の哀しさあり夫すら論快とはせざるに山樹殿には彌増たる御身の計ゝは恐ろしき類稀なる大惡人妻さへ子さへ計るとも天道赦し玉はねば其金一ッも身に着で皆亂になりにたり斯ても浮世に住存命へて若武太郎に逢事あらば何をよすがに面を合さん神にも人にも捨られし夫婦親子が世に零落て生耻を露さんより責て我身は自害して罪を現世に滅せずば七生迄も浮む瀨あらじ悲しき哉と聲を揚て泣つ叫びつ物狂しげに外面指て走り出るを九郎五郎は追止んとて泣黑市を脊らに負て跡を慕ふて追駈しに運の極みか追付ぬ間に遲馬は近傍の早川へ身を躍らして飛入たる其川流れ早ければ瞬く間に押流されて骸も留ずなりしかば九郎五郎の九四郎は愈々益々後悔して打歎くとも終に及ばでおさり兼つゝ宿所に歸りぬ斯くて在るべきにあらざれば家をば月頃の土地の形に地守の者に引渡して又黑市を携さへつゝ乞食をしながら浪花に赴むき天滿の社の近傍に立て編笠に面を隱し世に長々しき浪人の妻の大病に難義の由を一枚の紙に書認め往來の人に一錢の施こしを請求めて僅かに露命を繫つゝ二年餘りを送りけり○去程に文具兵衛の文字八は假分限となりし后一人倩々思案をするに吾は聞ひしに彌増て既に所有金八萬兩の大商人となりしかど讓るべき子のある事なければ萬事に行く末頼母しからず山樹が腹に產したる娘鍛金は母に屬て離別せしより不通になりぬ變に所緣の方に便て彼等の在所を尋ねしに山樹は娘を連子にして再縁して人の妻になりしとやらん聞えたり詳細き事を知ねども是も又思ふに任せず是故に近き頃音羽と呼るゝ娚女を娶りて茶呑友達にしつれ共彼も四十に餘りぬる婦女なれば如何にして今更に子を產べき吾斯迄に出身しは天滿の神の冥助なれば尚彼神を祈り祭りて貞實の子にも等しかるべき養子を願ひ奉まつりなば萬づに一つ本意を遂る事あるべしと推考しかば每月の二十五日には必らず天滿の神社に詣でゝかたの如くに祈る事早一年に及びけり斯くて一日下向の折彼九郎五郎の九四郎が編笠を深くして天滿の鳥居の邊りに居其傍らに黑市も親に等しく窶れ果て燒餅を食ながら文具兵衛の文字八が過行を見つゝ走り出て袖に附つゝ錢を乞けり文具兵衛は矢瀨にありし時九郎五郎と絕交して黑市を見たる事只一度に過ざりしに夫すら既に三四年の月日を經たることなれば此者共を九郎五郎なりとは爭でか識るべき尻目に懸て黑市を熟々と見てけるに其形こそ窶れたれ眼鼻だち人に勝れて最愛むべき童子なれば親知ずとか云ふ約束にて此幼稚兒を貰ひ取ば天滿の社頭のことなるを以て神慮に適當て後來は吾爲になるべしと思ふものから袖乞のとにしあれば立寄て明々地には談合しがたく如何にすべきと思ひ兼て錢一文を取せけり斯くて二三町行程に

店の抱の若い者に飛藏と云ふ男に端なくも行逢けり彼は忽ち小腰を屈めて旦那何處へ行せ玉ひし早御歸りに候ふかと問を文具兵衛見返りて件の養子を談合せんには此者こそ宜るべけれと早くも腹に思案をしつゝ其が儘耳を引寄て事附々と説示し事で和主が貰ひ人になりて彼親に談合せんに親知ずの手切として金一分で承知せば和主受取て吾等に渡しね勿論後々に至る迄出入をする事ハ更なり其子も道路にて行逢とも物云ふ間じくと云ふ由を証文に書入れて一判を取ねかし其邊に油斷すべからず吾は彼處の茶店にて待ん忘れても西門屋のにの字をも云ふべからず能くせよかしと私語示すを飛藏は打開て宜ふ趣むき心得たれ共一分にては餘りに安かり切て一兩出し給へと云ふを文具兵衛聞敢ず大氣なる事を云ふものかな親知ずにて貰ふとも袖乞の子のとなれば其兒は浮み揚る僥倖又此上の事やあるべき一分贈るも分に過たり益なきとを云そんより疾く吾爲に談合せよと云へば飛藏嘲笑ひて御身ハ豐富でおはすれば西門屋にて貰ふなりと云はゞ一分にて承知すべし去るを某しが貰ひ人になりて只今談合せんは彼一分にて承引んや此義を思ひ酌玉へと云はれて文具兵衛首を傾むけ然らば枉て二分出さん夫で宜しく働きね其上は出す氣なしと云ふに飛藏辭みもならず其金二分を受取て馴れて九郎五郎が傍に赴むき扨幼兒を其身の養子に貰ひ度よしを云ひ出て親知ずの契約にて只今親子の緣を切て其子を吾に賜そらば手切として金二分取せん吾は斯々の場所に住居て些計り人にも知れし飛藏と云ふ者なりと名乘て貰ひかけしかば九郎五郎悦喜て具實は母のなき兒にて養育最とも難義なり斯れば望みに任し奉つりて親知ずにて參らせん去りながら悴は今年六才にて名を九四太郎と呼なしたり六年以來養育しものなるを如何にして僅かに二分にて他にすべき今少し量見し玉へ金高に因て參らせんと云ふに飛藏心に耻て然らんには二分の外に錢八百文出ずべし其餘は吾等の力に及ばず早く思案を

爲よかしと云へば九郎五郎打案じて此兒を放つは惜けれども放つが該兒の爲なれば二分八百にて參らせんと云ふに飛藏悦喜て望みの如く緣切の手形を書せ件の金と其身の懷中に持合せし錢八百文を九郎五郎に遞與して幼兒を抱き取種々に賺し慰めて足早に立退ぞき文具兵衛の文字八が憩ひ居たる茶店に相伴事の趣きを私語告て件の手形と幼兒を遞與せば文具兵衛悦喜ながら又八百文を增したるを働らきなしと思ひけり斯くて文具兵衛の文字八と幼兒を其が儘に飛藏に抱かせて急ぎて居宅に立回り扨音羽其餘の者には吾天神の示現に依りて今日計らずも彼社頭に迷ひ子を拾ひ得たり年齡ハ五か六なるべし是見よ好子振なり今より是を養育て家相續をさせまく欲す扨も何とか名を呼べき吾家名を西門屋と云ふに依り門に開くと云ふ緣あらば啓十郎と名稱へし兎角に人の命運も開かざれば出身がたし花も開けば實を結ふ商人の見世店を出し始むるをも開くと云へり啓ハ開くと讀文字なれば啓十郎社よかりなん皆々此意を得よかしと最喋々しく説示すに兒珍らしき家の内の男女同一く持はやして彼も抱取是も抱奔走大方ならざりけり去れど黒市の啓十郎は既に六才なるを以てことの情も梢覺知ば其四五日は實父を慕ふて夜も日も父樣々々と呼尋ねつなくのみなりしを皆〳〵賺し拵へて三度の膳には美は美味を盡し菓子菓ものの類迄味ひ尋常に勝れしを與へずと云ふ事なく衣物には絹布の種々に縫箔したりけるを新規に仕立て着にければ得了に幼稚心にも幸福ありと思ひけん早晩實父の事を忘れて后々に至りては文具兵衛の文字八を實眞の親父の如くに慕ひ音羽を母の如くに思ひて隔つる事のなかりしかバ恩愛是より彌増て吝くやぶさかなる文具兵衛も啓十郎の事とし云へば何事も費へハ厭はず年十歳餘りになりし頃より手習算術云へば更なり戰國の習ひなりければ商人の子に相應からぬ柔術劍術に至る迄良師を撰みて是を習れせ立花茶の湯香なんど遊藝も又好むまに〳〵錢を惜まず習

せけり嗚呼因果のまつはる處其に是一朝の事にあらず武太郎が相續したる彼田畑半分と家庫ハ最初より文具兵衛の物なりき然るを九郎五郎が悪心にて武太郎を姦計て皆質に入れて盗ミ去たる彼金ハ慮らずも文具兵衛の手に入りて是より强く身出たり斯くて九郎五郎ハ塒へ棄て其兒を僅かに貳分八百文に文具兵衛に質與へ去は互に知ぬ故なれども黒市の啓十郎文具兵衛の養子となりて其家を相續べき果報ハ文具兵衛が彼金と殖して九郎五郎に返すに似たり遮莫九郎五郎は盗賊に等しき者の事なれば此よき報ひあるべからず其妻遲馬が耻を知て身を殺せける故にこそ其子は一旦出身けん斯れば文具兵衛も啓十郎を其身の甥なる事を知ず啓十郎も亦文具兵衛を毋の兄とは知ず去て竟に親子となりし事天滿宮の示驗に遁れず行末ハしらねども最も不思議の幸福なり去ば又九郎五郎の九四郎は黒市を人に與へてより彼些斗りの錢金を資本として商業をせん爲にや其次日より天滿の社頭に立て又袖乞をせず何へ行けん其后は行衛も知ず成にけり○夫る程に大原武松は兄武太郎夫婦に別れて九郎五郎が在所を尋ね掠め奪れ去彼金を取返さんと思ひつゝ望て行衛は定めねども先都に赴むきて暫時旅宿に杖を駐めれさ〳〵彼を尋ね去かども覚に其便りを得ず四國に渡らば本意を遂んと賣卜翁の云へもあれば軈て四國に押渡りて彼方此方に逗留しつゝ殘る隈なく尋ね周るに一歳餘りに及び去かば路用も既に乏敷なりぬ斯くては茲より九州へ赴むかん事ハ最難のり三河の方にも尋ねて見度處あれば歸るにしかじと思案をしつゝ讃岐より船路を浪花迄歸へり來つ是れより頻りに道を急ぎて伊勢の鈴鹿の關まで來にけり該時路用は盡き果てたるに而も九月の末なりければ最苦勞れて暑さに堪ず暫時此處に憩んと宿外れなる松原の芝生によりて休息ふ程に心ともなく傍を見れば一振の旅行刀の捨て叢の中にありたり取擧て見るに最重かり試みに又拔て見るに二三寸なる木刀にて其空鞘のみ重かりければ訝し

さに逆手に取て振ば件の鞘の中より金若干共なく出たるが悉皆小粒にして百兩ありたり其時武松思ふ樣這は盗人の所爲にはあらず旅行する者の心を用ひて草盗を妨かん爲に斯ぐ拵らへて帶たるを茲に憩ひて失念しものか若果して然らんには其人必ず復り來つべし其折返し與へんずと思案をしつゝ元の如く鞘の中に金を納めて彼木刀を差固め己が臀尻の下に敷て主の來ぬるを待程に其日ハ散果なく暮にけり然れども武松は倘其處を立去で露宿をしつゝ明したる其翌の朝日はさし昇りて己の時ならんと思ふ頃飛脚と見えたる一人の男鎌田の方より忙敷げに武松が居邊に來て叢を搔探り頻りに物を尋ねしかば武松ハ心の裡に是なるべしと思ひつゝやよ〳〵と呼懸て先其故を尋ぬるに件の飛脚も隠すによしなく武松に告る樣吾等は北畠殿の家臣なる楠木氏の飛脚なるが昨日都より歸るさに炎暑に堪ず茲に憩ひて思はずも目睡しかば日の傾きしに心遽て傍に置し刀を忘れて昨夜は鎌田に止宿りたり斯くて今朝立ち出る時刀を帶んとするに無りき忘れにたりと心附て遽て取て復しつゝ見らるゝ如く尋ぬるに一夜さ經たる事なれば早失なりけん見へざるなり彼刀は我身にも換難き物なりしを平常には刀を帶ぬ身の隅々差たるをなれば失念たる社悔けれと云ふを武松打聞て騒ぎ玉ふな吾等も昨夜此處に休息て不憶一振の刀を拾ひたり和殿の刀の造樣を先具に告玉へ其縡能符合せば只今刀を返すべしと云はれて飛脚は喜悦に堪ず柄は藤柄其余は云々身は木刀にて鞘の中に小粒百兩ある事まで包まず詳細に告しかば武松屢々點頭て然らんには相違なし吾も昨日申の頃に此處に休息つ彼刀の叢らの中にあるを見出して取揚て見れば木刀にて鞘の中には金百兩あり打捨て行時ハ餘の人に取れなん持て行ば此刀の主に逢がたしと思ひしかば此處に露宿して今迄待し甲斐ありて主に還與すこそ本意なれ先々受取玉へとて件の刀を取出し驟て飛脚に復すにぞ飛脚は恭敬拜受戴て且感る事大方ならず年倘若き人

成に最有難き心術御君は吾等が命の親なり今之何をか包べき吾主君は河内の國守成たる楠正勝主の末孫ぁて一味齊正方となん呼れ玉ふ去ば伊勢の國司北畠殿に招て客分にて仕玉ふが所領八千貫を宛行せれて軍學弓馬劍術の師範たり是を以て藩中の外五畿内にも弟子多く僕は名を蔦平と呼れたる下僕にて候へ共心性正直なる者なれば迚今度都なる門人達より參せらるゝ金百兩を受取ぁ遣之玉ふ件の飛脚ぁ撰出され往る日都へ登る折御主君の差圖にて此木刀を貸玉はり件の金を受取なば鞘の內へ能納めて腰に帶て歸り來よ然すれば道中禍ひあら志と仰含られたるを形の如くにしたれ共常にハ帶ぬ刀なれば憂でや茲に忘れ置て既に一夜さ過せしを早く貴君に拾れすば如何にして今返さるべき如何斗りなる報ひをそる共飽足べくはあらねども下賤者の悲さは夫將已が心に任せず先賜へ主君の邸へ同伴て明白に聞へ上なば吾等に代りて然るべき御計のあるべきなり枉て此義に從かへ玉へと又他事もなく誘引ぁぞ武松聞て打微笑吾は亦人を尋ねて久敷旅寐をしたるに依り路用既に盡たれ共尙三河路に所要あれば四國の方より立戻りて昨日此址迄來つるなり莫遮我は和殿の報を受んと欲する者にあらず武藝は我好む處爭で良師に仕へて修行をせまく欲かり之に楠木殿の邸に赴むき傍對面を願べしと云ふ蔦平喜びて幷が儘武松を伴ひつゝ北畠の城中なりける楠木一味齋の邸に歸り來てよしを主人ぁ告知せ武松即ち一味齋の見參に入る所此段は尙長やかなれば此餘の事は第二輯に詳らかに認すべし(作者曰)是迄は物語の發端にて唐本の金瓶梅にえなき事なるを新規に起案けたり第二輯に至りて武松が虎を擲段より原本に基づきて水滸傳にならふと雖共其と少しく同じふ志て強く異なる由あらん且此度も其の虎を出さんと欲するに傾城水滸傳の趣向と同からず看官是れを如何にとするや其邊は第二輯に付て作者の腹稿をしるべし

(第一輯終)

金瓶梅第二輯

第一編

去程に楠一味齋の奴僕蔦平は大原武松を伴ふて主家の邸宅に皈り來つ原來其身の麁忽にて道中にて腰刀を失ひたる始めより幷と武松が拾ひ取り一夜其處に立明し遂に蔦平に歸したる彼が篤實の爲体又武松之能師に仕へて武藝を修行せまく思ふ事の心も聞にしかば相伴ひて皈り來ぬる此一條の趣きを主人一味齋に告知せて彼金を鞘に納めて持來ぬる木刀をそが儘に差出すを一味齋は受取り且感づる事大方ならず其武松とかいふ若者之今の世に多く得難き善人にてそ有べけれ然れば今吾對面せん此方に呼と忙く席を正して待程に蔦平は心得て案內をしつゝ武松を去來とて席へ進めけり折柄一味齋が門人なる川北一郞雲津の七郞山路彈作阿濳綱二郞なんど呼れたる同家中の若者ども威儀を正し臂を張て師匠の左右に居たりけり其時楠一味齋正忠之武松ぁ打對ひて蔦平が道中にて打忘れたる腰刀を皈されしといふ悅びを懇ろに演て偖ていふ樣聞が如きは和殿の心實世に有難き作善の一條感ずるぁ猶餘りあり原來武藝執心の事の心もつた平が告たりければ粗知れり抑〳〵和殿は何國ぞやさしもいそがぬ旅なれば暫く茲に杖を駐めて猶又當家の太刀筋をも試ミ給へと懇ろに言はれて武松悅ばしげぁ恭しく頓首て其身の素性還樣〳〵と事審かに演了りて武藝ハ總角なりし頃ろより大方ならず好めども過世惡くて親兄弟と共に鎌倉に赴きつ商賈の家にかゝり居て人となりしハへば只一日の師匠もあらず心を師として忍び〳〵に腕を試みしのミ然るに思ひがけなくも名家の弟子になされんとて止免置せ給らは火を焚水を汲て幾層の骨を折とても仕へまつらん事をのみ願はしくてそハなれと言ぁ一味齋點頭て然らば其意ぁ任せんとて師弟の約をなす程に傍に侍りし雲津川北山路阿漕の若者どもは皆武松に

各對面して武藝の上を問試み頻りに試合を望みしに武松ハ固く辭みて某は自己流にて行ひして
ともなき者をいかにして各々方のれ對手になるべき只御指南を願のみと云れて誇る四個の若者
夫ハ常座の卑下なるべし是非に一太刀試合をと頻りに迫りて許さねども武松は俯從ず頭を低て
居りしを一吻弱兎て喃武松よしや習し事はなく共幼き頃より心掛て深も嗜み技ならば自ら得
たるよしも有ん何事も稽古の爲なり門人輩の望みに任して一太刀受て見せられよかえさのみ遠
慮に及ぶ事かハやよ疾々と忙したる主個の差圖ヽ鶴の一聲武松今は辭むによしなくさらば敎を
受奉つらん免させ給へと會釋して襟搔合せ身を起せば望む處と川北等は柱に架たる木刀を早取
御す身搆へ第一番に山路だん作いざ參らんと聲をかけて袴の股立早手襷件の木太刀を引提て前
に進みて待程に武松も又木刀を撰つゝ靜に立向ひ迭に劣らぬ試合の作法程もあらせずヤト聲掛
て打んとしたる彈作がさしも鋭ひ太刀風を柳に流す大原武松暫く挑み戰ふたる彈作忽ち太刀筋
乱れて疲むを得たりと武松ハオット噢き去聲と共に閃かえたる手練の手の內あえらひ兼たる彈
作は肩先痛く打すゑられて太刀を捨てぞへたばりたる二番は兄弟子川北一郎天晴な手練大原氏
いざれ相手にと名乘かけ早立替る健氣の身搆へ否とも云れず武松は又川北と立向ひて秘術を盡
す處々實々二十太刀餘り戰ふ程に一郎も又武松に持たる太刀を打落されて打れて尻居に倒れた
り偖其次には雲津阿漕三番四番と立合ども誰か一人もかなふべき皆武松に打据られて負腹立た
る四個の若者是非に勝んと追取こめて這回は左右前後より惣がゝりにして打んとせしを武松猱
む氣色もなくて何事ぞと許りに右に受留左にさゝへて絕て一個も寄付ず初めの程は遠慮去て
さのみ力を盡さゞりしに對手四人に及びては夫をあえらふに隙なく一期の晴と身をいれて或は
蹴倒しいりとばす力量早業手足の活用三面六臂ある如く能八方へ當り去かば只風下に投らるゝ

張籠に似たる四個の若者舌を震ひ各我を折て免せ／＼と許りにへたばり伏て諸共に習しは息を
つぎあへず一味齊之を見て實に逞しき大原が手練の働き感じ入たりいざさらば我打太刀を試ら
れよと云つゝも早身を起去近寄て邊りに落たる木刀を搔取わげつヤト聲かけて打を閃りと引外
す武松ハ今更に辭するに隙なきものから去とて騷ぐ氣色もなく猶精神を鎭せども當時日の下開
山の名さへ拔さへ隱れなき一味齋を對手にえて適ふべくもあらざれば應刀かねつゝ後しさりし
て思はずも椽側の邊りへ追詰られ去時一味齋はヤト聲かけし武松が木刀を水も溜らず打落去ん
び打んと振擧る程去もあらず武松ハ閃りとあは去て椽側に立たる石の手水鉢を左右に取つゝ引
上て今打かゝる一味齊が木刀を丁と受たりける鬼神を欺く大力無双の此事の爲体に一味齊代思
ずもアット感て只とかう見つゝそが儘にして再び打ず微笑ながら靜やかに元の座席に退きたり
されば川北阿漕雲津山路四個の輩は驚き呆れて眼をみはり俄に容を改めて我々が武松に負たる
は耻ならず我から死して根を合まず是より去て何となく皆武松を敬ひけり其時術一味齋は武松
を招き寄て驚き思ふ和殿の武藝の世ホ勝れたるのミならず力飽まで猛き事昔の義秀親衡にも劣
らじとこそ思ふなれ之に侍る門人等は皆是未熟の若者なれば和殿の對手ホ足ものならず只今彼
等に勝たりとても夫を模範と去て世の人を侮らば不覺の誤ちあらん譬へば其許が某に勝難きを
もて思ふべし和殿の武藝よしと雖も學ばざるゆゑ拔目多かり只力をもて取挫げば未熟の者にハ
勝べけれども其技に丹練したる對手に逢ば今の如く勝事を得ざるべしされば和殿の氣量をもて
師に隨ふて修行せば虎に翅を添るが如く誰か其右に出る者あらんや愛を尤もと聞れなば吾も又
秘術を惜まず宣しく敎へ諭すべし暫く我等に仕へよかえと最懇ろに說示せば武松は一議にも及
ばず且感じ且悅びて敎を受んと願ふにぞ一味齋も亦歡びて則ち師弟の義を結び是より武松を止

先置て弟子若黨にして部屋を與へ月を重ね年を經まて能々教へ導きたれば武松は其恩を感じて老實に仕へつゝ其身に劣り去輩にも高慢となく謙遜して身の行ひを愼みければ川北山路雲津阿漕等も武松を恨むる事なく各々彼を重んじて世に隔なく交りたり去程に西門屋文具兵衛の文字八は其身の爲に恨みある篠部九郎五郎が單子なりし黒市なりとは露知ずして養ひ取て寵愛しつ啓十郎と名號しより彼が事には財寶を惜まず筆算の技は更なり商買の子には相應からぬ柔術ゐあひ何くれとなく能乱舞香鞠茶の湯の遊藝まで彼が好む技としいへば其師を撰みて之を學はせ其身の爲には錢百でも絕て費ず事をせず家は益々富榮へて早年頃を經る程に已にして啓十郎が十八九才になりし頃親文字八は卒中にて病倒れつゝ身も叶はずものも得云で其次の日に忽ち冥土の人となりけり家には有金十五万兩あり此所彼所へ貸出せしと店の代呂物を合去なば三十万兩にも及ぶべき俄豪富でありたれども極めて吝嗇なるをもて恙なかりし折々に妻子にも心得させて吾身の命終らん時葬禮抔に氣を置て錢を費す事なかれ假葬禮と披露して夜中に寺へ送るべしと兼て云付ることなれば萬事質素を旨と去て夜葬式にぞしたりける浩りしほどに文字八が後妻の音羽も風の心地とて打臥せしに病むこと十日ばかりにしてこれもむなしくなりにけり啓十郎打續きて雙父母の世を去しかど元來孝心ある者ならねば僅ばかり歎きの色も見へず其次の年都にて血統宜しき商人の娘呉服と呼なしたるを媒妁ありて娶りけり呉服は此年十七にて標致尋常に勝れたれども富では奢る人心なくて浮世の習ひなれば啓十郎は妻のみにては飽足ぬ心地して力野卓二と呼なしたる妾兩個を召使ひて唄はせもしつ彈せもしつ只絲竹を旨と去て折々酒宴を催ふす程に同氣をもて相求むる友人都て八九人ありそが中に喜田意庵と呼なしたる藪醫者又羽屋念藏と以ふ閑人あり此者どもは人の金を借出し遣はして禮金を取そのみ活業りにすと聞えし

此儕らなりければ日毎に西門屋へ入ひたりて何時も酒宴の席に列り啓十郎が爲に帮間を持てはくぎやく知音と稱へたりされはこそなん啓十郎は殊更なる色情好みにて男と生れし思ひでに一千人の美女の肌を觸ばやといふ慾心發り目にだにかゝる女子あれば娘にもあれ後家にもあれ媒妁を稱へて艶書を送り物を遣去花に浮れ月に仮托て其貸席に轉び寐の夢を結ぶも多かりけり實に人の心ばかり遷るに易きものはあらじ啓十郎は浪花にて多く得難き豪家なるに男振も人に勝れて女子の悦ぶ世才あり只是のみにあらずして京都の將軍管領家名たゝる武家の歴々に軍用金を調達去て親しまぬもなかり去かば此義に依て威勢あり彼に付是に付て人の羨やむ福者になれば慾に迷ひ威勢に憚りて靡かぬ女子稀なれども啓十郎は末かけて契らんと思ふ戀ならねば幾程もなく秋風たちて忘れらるゝも尠かゝず浩り去程に啓十郎は天滿の祭禮見に行し折圖らず見染去女子ありいづれの者ぞと人に問に此日も啓十郎に隨ひて祭禮の座敷に侍りたる喜田意庵が遠よそに相識者の娘なり其素性を尋ぬるに親は浪華堀江の邊りにて按摩導引を活業にする瀧塚附齋といふ者にて娘は今年十七才其名を刈藻と呼なしたるが起舞技藝に絕なれバ去頃より舞の師匠となりて親の世渡りを助くる者なり若し心に叶ひなば拵へて見候はんと言に啓十郎悅びて彼奉公の望みあらば仕度金は請に委せて爭で妾にせまくほしけれ此義を以て兎も角も計らひ給へと密語にぞ意庵は異議なく心得て次の日附齋か宿所に赴き啓十郎が懇望の事の心を密語示して今此浪華で一二を爭ふ大福長者に緣を結びて娘子を彼人樣の妾に遣し給ひなば御身は左團扇にて老樂にてそ成べけれ此儀を承引給ずやと慾ゟ導く內密の談合と皆甘く敎唆せば附齋は娘刈藻と共に聞つゝ頭を搔て开は思ひがけも無身の僥倖にはへ共爰に一ッの障り有吾娘刈藻には許嫁の男有其聟かねは餘所ならず去年の秋世を去し我妻の姪にして空八と呼るゝ者ゝ彼は此四五年

稼ぎの爲に鎌倉へ趣きて武家に仕へて下ざまなる奉公をしつれども元來細工をよくすれば奉公の隙ある毎に只内職を旨として給金は少とも遣はず年々我方へ烟の代にと送り越にき然るに我妻は世を去りつ、某も年寄たれば稼ぎも思ふ如くに得ならず此故に空八を鎌倉より呼取て娘刈藻と夫婦にして養はればやと思ひつゝ去る頃吾妻の便りに狀を遣したりければ遠からずして回り來つべし是等の障りあるをもて殘念ながら斷りを申すより外は候はず宜しく頼み奉つると辭退を意庵は聞あへず开は據ろなき筋なれども物には方便手術もあるべし昔堅氣に義理をたて貧の山に入ながら手を空しくし給はゞ後に悔しく思はれんと云つゝ暫く打案じて此義を我等に任せられなば其聟取を變替そるとも浪風立ぬ手段ありといふに餠齋は思はずも膝を進めて打微笑开は又如何なる手段ぞやと問ば意庵は聲を密めて某が今胸に浮みし計事を云々なり這樣々々と落もなく心の秘密を說示せば餠齋は頻りに點頭て奇々妙々なる計事夫に增たる事はなし然らば某娘を伴ひ明日西門屋へ參るべし彌々目見への首尾調はゞ仕度金も其餘の事も宜しく頼み奉つるといふを意庵は聞あへず夫は云るゝ迄もあらず仕度金は五十兩其上に親御には月々に三兩宛合力せんと兼てより西門屋の主は言れしなり我いふ言の疑しくば明日にも旦那に面談して思ひの儘に取極給へといふに餠齋は悅びて欵待ぶりも大方ならず前祝ひにとて酒を進め猶密々と語ひたり斯て意庵は其夕暮に西門屋へ歸り來て餠齋が娘の事の趣き許嫁の聟あれば始めの程は固辭しを這樣に計ひて遂に納得致させたりよりて餠齋は娘を具して翌參らんと申すなり其折に証文を書せ金を渡し給はゞ跡腹やめず御手に入ん心得給へと密語ば啓十郎は手を拍ならして奇妙々々と只悅喜事大方ならず當座の引出物にとて着替の羽織に三兩の小判を添て取せければ意庵は之を受戴きて己が宿所へ罷りけり斯て其次の日餠齋は約束を違へず刈藻に粧り磨かせて意

庵が消息を待程に果して八ッ頃ほひに卒とて意庵が來にければ餠齋刈藻は打連立ちて西門屋へぞ趣むきける其時主人啓十郎は則ち意庵に案内をさせて奥まりたる小座敷にて餠齋刈藻に對面しけり親は兎もあれ娘の面影天滿のまつりて見し折よりも八潮にまして窈窕なれば欵待も又大方ならず刈藻も又啓十郎が男振の婀娜々々しきに名たゝる金持なれば最むくつけたる空八が女房にならんより此家の妾になりてこそ親の爲にも身の爲にも僥倖なりと思ひけりされば餠齋は啓十郎と意庵と共に三ッ鼎にて件の計事を示し合せ則ち餠齋が自筆にて金五十兩の借用証文を書認め其年月は去年の秋七月の事にして啓十郎に渡すにぞ啓十郎も亦刈藻が仕度金五十兩を取せしが今宵にも婿の空八が倒着せんも計り難かりされば刈藻を今日よりして此方へ留め置べけれといふに餠齋も其意に任せてそが儘娘を殘し置て獨り宿所へ皈りしに僅に中一日を經て許嫁の婿空八は獨り鎌倉より皈り着て餠齋が宿に音信恙なきを喜び祝して齎したる些ばかりの土產物を送り抔して迎への狀の着とそが儘主君に願ひて暇を賜り急ぎ皈り來りぬるよしを事細かに告れども餠齋は悅ふ氣色もなく刈藻も宿所に在ざれば空八之を訝りて又其由を尋ぬるに餠齋は頻りに歎息してさればとよ其事なれ面目もなき不仕合にて刈藻は借たる金のかたに西門屋へ娶られて那處の妾にせられたりといふに空八焦燥て夫は心得ず如何なる理由ぞ貸たる金を返さずとて許嫁せし男ある人の娘を呼取て妾にせらるゝ法やある其譯きかん如何にぞやと氣色を變て焦燥ども餠齋は騒がず押止めてやよ燥事かな聞ねかし去年の秋我妻大病に朝鮮人參三分宛用ひよと或醫者の指圖に否とも云れず西門屋にて金を借んと頼みしかども株式もなき我身なればば質物なくては些とも貸ず詮方なさに刈藻を書入返濟延引致すならば娘刈藻を一生涯其方の妾に參らせんといふ證文を認らせて漸く借たる五十兩藥の代となしたれども其甲斐もなく我妻の

卒去しより後の事物の入事のみなれば借たる金の消るが如く遣ひ果して今でゝ後悔返ずよしなき借金の言譯しても利は嵩む去年の暮より幾度となき負債を逃れ言延しても果しなければ公け沙汰にせられんとある財主の勢ひ事の難義にならぬ先に早く其方に娶せんと思ふによりて呼登せしに路遠ければ其期に居あはさで刈藻を無慚や金のかたに西門屋へ渡せしは是一昨日の事なりし斯いふ譯であるなれば緣なかりきと諦らめよ刈藻ばかりが女かは氣長く待ば能嫁あらん思ひきり給と應揚に言くるめたる巧の魂膽とハ知らねども空八ハ彌々焦燥聲高かによしや左右いふ譯ありとても許嫁の男ある人の娘を證文に書入させて金をかし剰さへ金が濟まで刈藻を妾に引取しは言語に絶たる金主の非道夫では濟ぬ西門屋へ一所にござれ出入をつけん疾々御座れと引立て行ハ恨の葛の蔓之より事の縺となりて仇花娟の空八が身の災禍になりにけり斯て吾妻空八ハ藻塚尉齋を引立て西門屋の居宅に赴き主人に逢んと云しかど啓十郎は對面せず老僕何某立出て其いふ由を聞けるに空八は苅藻が爲に許嫁の婿なりける事の趣き逞樣〳〵と詞せはしく説示して取戻さんと敦圉しを啓十郎は兼てより言付置たる事なれば彼男之取合ず开は證據もなき爭ひなり此方にては彼女中の親御の頼みに止事を得ず其意に任して金のかたに引取て妾にせられしを又今更に横合より障りをいふハ理不盡なり對手になるべき事はあらずとしらずと云たゝかに窘めて云甲斐もなく取合ねば空八いよ〳〵焦燥て知ぬといふとて只やは歸らん苅藻は己が女房なるに妾とせしは密通同前奥へ踏込連て行妨げなすなと立掛るを左樣ハさせぬと引留る尉齋を突除打倒して頻りに狂ふ短慮の若者障子紙門を蹴放ちて奥へ入んと立騒げば老僕ハ恐れて次の間より狼籍者ぞ皆々出よと呼はる聲と諸共に兼て用意の男ども手に〳〵棒を閃かし打倒さんと競ひかゝれば空八ます〳〵吼り狂ひて閃りと引拔旅脇差の白刄に痿まぬ棒つく免逐に白刄

を打落して隙もあらせず前後より組留つ捻倒して押へて繩をぞ掛たりける啓十郎ハ兼てより斯あるべしと思ひ設けて深く謀りし事なれば些とも驚く氣色なく事私にはなし難しとて尉齋と共に空八を國の官廳へ引せて事云々と訴へけり此時足利將軍の末の世にて當所は三好長慶の領分なり長慶在城なりければ司人等承はりて事の始末を尋ぬるに空八先申すやう某は伯母婿の尉齋が爲ふと婿がねにて其約束あるにより鎌倉より年毎に此身の給を送り遣して身繼し事も少なからず斯て近頃尉齋が状にて娘刈藻と婚姻させん早々歸れと言越たれば主君に告暇を給り歸りて見れば言しふ違ひて尉齋が先に啓十郎に借たる金を負債の爲に苅藻を妾に遣えたりと言れた難理か不實の擧動未だ婚姻せざれども許嫁ある人の妻を貸たる金のかたにとて妾にせしは啓十郎が强慾非道にハへば某意恨ふ堪兼て尉齋を引立伴ひて啓十郎が宿所へ赴き件の由を理り演て刈藻を返せと敦圉しを彼所の者ども取合ず狼籍ものぞと言なして斯の如くに縛えたり憐れ上の御慈悲をもて此義を糺せ給かしと申すを尉齋ハ推止めて進み出つゝ陳る樣今空八が兎に角と申上しは身に覺なき空言でハ之某ハ初め娘刈藻を空八に許嫁せし事はなし彼は亡妻の姪なれば妻の病に臥たる折鎌倉よりして些許りの物を送越たるゝ只一度の事にして年々に合力を受たる事ハいはず然に此空八は兼て刈藻に戀慕して夫婦にならんと思ひしを啓十郎に娶られたれば嫉み心のやるせなくて許嫁せられたる婿がねなりと申す事跡方もなき誣言なれば某意見を加へしかども露計りも隨はず某を引立て啓十郎が宿所ふ赴き伯父に均しき某を打擲したるのみならず脇差を引拔て切殺さんとしつるより捨も置れず諸人の推止め辛して件の白刄を打落して搦め取てハなりといへば又啓十郎も膝を進めて申すやう某は初めより空八が事は知ず尉齋に貸たる五十兩後返金の手段なし苅藻を妾に參らせん願ふは苅藻か年々の給金をもて借財を引落し給は

れと口説によりて止を得ず苅藻を呼取しひき其証文は爰にあり然るに此空八が苅藻の猾を詐りて宿所を痛く騒せし其事の爲体は餅齋か申上たる如しと誠ゑやかに言くろめて彼證文を出して見せけり司人等は熟々と讀見て實もと打點頭餅齋啓十郎が申す由には此の如き證據あり又空八にも證據なしよしや餅齋が空八を婿にせんと言たりとも口約束の事にして妻せたる事あらざれば苅藻は彼が妻ならず彼は刈藻か夫にあらず浩れば今更啓十郎の妾になりしを妬く思ひて取戻さんと暴せしは之空八が理不盡なり況てや其身のいふ由を聞ればとて伯父に齊しき伯母婿を打擲し剩さへ白刃を打振て害せんとしつる事其罪尤も輕からず暫く獄牢に繋ぎ置て呵責を加へて白狀させせん皆々立ねと言置て餅齋啓　郎等を疑はず空八にのみそが儘に嚴しく獄屋に繋がせけりされば西門屋啓十郎は原より錢あり威勢ありて三好長良の目通りをも許されし者なれば況んや其かたさまなる司人等に一個として親しまずといふ者なし空八は又頼母しき親類もなく友もあらず智惠淺ければ怒りに乘して伯母婿に拳をあげ剩さへ脇差を拔閃かして西門屋を騷がせしを落度とあるにより惡漢と思はれて屢々拷問せられしかば遂に苦痛に堪ずして苅藻に戀慕したるより彼を取返さん爲に無ことを言かけて狼藉に及びし由無寃の白狀してければ日を經て罪を定められ脊一百鞭たして頓て追放せられたり去程に空八は責殺されんと思ひたる命ばかりはたすかりたれども置どころなき身となりては今又重なる怨みに堪ず餅齋父子と啓十郎を殺して我も死ばやとおもひ定めし無分別夜な〳〵浪華へ立回りて西門屋を窺へども名たゝる豪家の事なれば容易く忍び入事難かり詮方なさに又思ふ樣我恨ある彼三人を一度には殺し易からず啓十郎が他行を伺ひ那奴一人を押片付なば餅齋苅藻は其初七日に寺參りをするなるべし又其折を窺ひて件の親子を打果さん之に増たる手段はあらじと獨心に目論見て啓十郎が他へ出て日暮に

歸る事あれかしと忍び〳〵に窺ひけり去程に藥塚餅齋は思ひの儘に計り負せて婿の空八は罪を蒙り浪華を追放せられしかば誰に憚る方もあらず先に苅藻が仕度金五十兩は目見えの日西門屋より受取たれども苅藻は其日そが儘に彼處に止め置れしかば仕度の爲には一文も費やす事のなきをもて只些計り媒人の謝物を意庵に送りしのみ獨住の我身なるに俄に浩る大金の手に入たれば影護くて宿に置んはあぶなしと思へば夜も日も腰に着て暫くも身を離さずされ芝居は嫌ひなり花見遊山も心の合たる友達なくては可笑からずされぱとて年寄たるに廓通ひをすべくも思はず只好ましきは酒なれども僅に按摩導引の其日暮しでありたるに一合飲だに亡妻の機嫌を取て買せしに今此時に飲ずんば上戸冥利に盡ぬべしさり迚人を誘ひてはかみにせられて我懐と夫だけにおく事なれば相手は入ず我獨り思ひの儘に飲べしと思案をしつゝ宿所を出て浮む瀬といふ酒樓に赴き幾等ともなく肴を出させ酌とりの女を對手に名物の杯を取替引替時移るまで思の儘に飲喰ひして早十二分に醉しかば酒肴の價を取せて家路をさして歸る程に路にして日は暮たり深く醉たる癖なれば道の高底嫌ひなく只蹌跟と定めなき足の運びに任せけりされば又西門屋啓十郎は此日得意の武家幾軒か打廻る處用ありとて駕籠に打乘草履取を從へて朝より宿處を立出て彼處此所打廻る程に折柄初冬の末にして日の最短き頃なれば回るさ已に日の暮たり斯る處に向より深く醉たる者と覺しく蹌跟ながら來かゝりつゝ啓十郎は草履取の挑灯に道を照して先に立しに突當り忽ち礑と倒れけり之にぞ件の從者も打驚き道去あへず然しまく挑灯をあげて其人を能見るに兼て見識し苅藻が親の苅塚餅齋で有ければ事云々と主個に告れば啓十郎も駕籠の内より倩々見るに果して違もず見棄て行んは流石にて暫く駕籠を立させて助け起させんとしつれども齢に五十餘りにて深く肥たる大男の醉倒れたる事にしあれば二人の駕丁草履とり諸手

をかけて起しても那方へくら先き此方へも蹌踉聊も手をゆるむればそが儘動と倒れて得起ず啓十郎は之を見て斯迄に醉たる者を携へ肩に掛るとも道一町とも行事得ならざればとて此儘ぉ打捨ては置難し所詮吾駕籠にたすけ乘せ宿所へ具して行こそよけれ疾々せよと急がせば從者等は皆心得て再び尉齋を引起す其隙に啓十郎は駕籠より出て立替れば駕丁等も辛ふして尉齋が手を引腰を押して助けて駕籠にぞ乘てける浩りし程に向ひより又忙しく來るものあり近付まゝに提灯の燈光につきて能見れば是も又別人ならず啓十郎が合口なる意庵念藏兩個なり件の兩個ハ提灯の印に早く猜しけん忽ちに聲をかけて西門屋の旦那折もよく此處にて御目にかゝりにき明日は又例の歌舞伎役者の顔見せの初日なるに如何ぞや今宵の景氣を見ずもあらば流行に遲れやせんと思へば斯連立て御居宅へ參りしに今朝より他所へ出させ給ひて未だ回らせ給はずと聞えしからに望みを失ひ空しく皈る中途ぉて逢參らせしこそ僥倖なれ誘給へ彼所に至りて今夜一夜飲明さんや疾々と誘ふにぞ啓十郎は醉倒れたる尉齋が事の爲体を這樣々々と告知せて詮方なさに那醉倒れを吾等が駕籠に乘たれば我身に足のなくなりたり元より這等に辻駕籠なければとて阿容々々と彼奴が駕籠の後に付て皈らんハ人聞惡かり如何にせましと思ひしに今不圖も各々と此所て逢しは僥倖なり然らば直に道頓堀へ行て一夜さ遊ぶべしと言つゝ供人を見回りて汝等は尉齋を具して疾く居宅へ皈れかし彼は家族のなきものなれば今宵は其儘居宅に止めて翌皈すこそよかんめれ是等の由を我妻にも刈藻にも能告よかしと詞せはしく說示せば從者等ハ皆心得て然らばれ先へ罷るべしと應答て駕籠を擡上れば挑打持し草履取も元の如くに前に立て別れて居宅へ急ぐにぞ啓十郎はそが儘に意庵念藏と連立て道頓堀へ赴きけり○去程に空八は此日頃より忍び々々にて啓十郎が他出の日を彼所此所と窺ひしに此日は朝より立出て日暮て皈る事まで

定かに探り得たりしかば是屈竟と悅びて其皈るべき道條さへ殘る方なく考へて黄昏頃より西橫堀なる材木の蔭に身を潛めて今か々々と待程に向ひより來る駕籠一挺前へ立たる提灯は問でもしるき西門屋の主個にてありければ遣も過さず跳り蒐つて振閃かす白刄の電光挑打礑と斬落せば草履取はアット許りに驚き恐れ逸足出して逃る跡より駕籠丁等も吐嗟やと叫ぶ聲と共に早くも駕籠を擲捨て喘々ぞ逃たりける仕濟したりと空八は閃りと立寄て駕籠の直中ぐさと恨みの手でたへ中にもアット魂消一聲血潮に塗るゝ深疵の尉齋も駕籠の戸礑と押倒して轉び出を空八ものばし蒐りて鍔際まで再び貫く息止の尖刀思むすも手に障る頭を摩れば惣髮なり是ハ如何と許り疑ひ迷ふ眞の闇啓十郎と思ひしに扨は尉齋でありけるか夫かあらぬと許りに呆れて暫時躊躇折から已に逃たる駕籠丁等が走りながらも聲振立てやよ人殺し々々所ぉ人はなからずや人々出よと叫びたる聲に驚く四邊の諸人手に々々より棒燈灯を引提々々群立蒐りて追取籠んと近寄たり空八之を佶と見てさては逃れぬ所なり啓十郎まれ尉齋まれ打果したる我身なれば助かるべき命にあらず憖ひに搦免取れて恨ある奴原に後指さゝれんより死ぬるに如じと覺悟して持たる刄を取直し咽喉をぐさと貫きて其儘息は絶にけり其時所の者共は走りて集ひ來にけれど討れし者も狼藉者も自害して共に絆されたれば評議區々なりける程に逃たる駕籠丁草履等は怕る々々歸り來て尉齋が事を告知せ又空八が死骸を見知て彼が上さへ云々と密かに知れにければ所の者も國の守へ事云々と訴へけり然れども啓十郎が身に干らぬ事を聞得て尉齋に駕籠を貸たるのみ此夜の始末を知ざるよし分疏分明なりけるに空八已に自害をしたれば藻塚尉齊が亡骸は由縁の者ぉ取せよとて事安らかに果にけり尉齊ハ娘菊藻の外に親類とてもなかりしかば啓十郎が引取て懇く葬り遣せしぉ腰に付たる金四十七八兩あり是すら取もの有ことなければ啓十郎が物になり

けり這は前に腑齊に取せし苅藻が仕度金なるに只二三兩不足して啓十郎の手に歸れり浩れば僅二三兩ゐて最麗しき婦女ゐに一生奉公させぬるも最も安直ものなりとて知れる者は打笑ひて世に珍らしき事に言けり啓十郎は運强く爲ことゝ毎になしおはせて思ふに任せぬ事のなければ愚なる者は彼が才の勝れし樣ゐ思ひとりて凡人ならずと稱へけり○爰に又文具兵衛の文字八が前妻山樹ハ十五六年前つ頃文具兵衛と夫婦別れせし時娘鍛金と携へて猶も山科の邊りに居媒介を拵へて身のよすがを求めしに此頃清水の邊りに四橋綿市といふ盲人あり琴三絃の名人にて弟子餘多ありければ其家極めて貧しからず近頃妻の世を去りければ後妻を求る事急なり勿論後妻の事なれば仕度抔に望みなし顔容人並にて世帯を廻す四十計りの女をはしといへる由山樹を媒介する者あり綿市子のなければ連子あるこそ猶よけれとて縁談頓に調ひて身のよすがを得たりしより綿市が心ゐ叶ひて山樹に早く世帯を任せ剩さへ鍛金も寵愛せられて琴三絃を敎へけるに鍛金も浩る技藝にさかしく唄ふ聲絶なるのミならず容顔も又人に勝れて年十五六に至りてハ都にも多からぬ美人にぞなりにける是より前に綿市が鍛金が名を改めて阿蓮と呼も久しくなりぬ斯りし程に綿市は俄に胃中の病發りて打臥たる事二年ばかり針灸醫療に手を盡して漸く平癒したれども右の腕の筋つまりけん折々に痿を覺にて琴三絃を彈こと得ならず此故に皆弟子に離れて世渡の活業なくなりけるに二年の長病なりければ貯へも皆盡果初めにも似ずなりにけり其時山樹は思ふ樣 妾 娘の鍛金の阿蓮は標致十人並に勝れて絲竹の技藝も大方ならず彼を錢ある人に預けて親子諸共其かげに立て月日を送りなば妾良夫の腕叶はで世渡の活業なくなりたりとも自づから世は易かるべし是に増たる手術はあらしと思案をしつゝ綿市にも云々と談合して之より阿蓮が奉公のよすかを只管求めつゝ此頃引出屋根津助と呼れたる奉公の口入人に望みの趣き密語

示して彼か手引に任せしに廣き都の事なれば住口なきにあらねども多くは長し短しと其事未だ調はず山樹は頻りに焦燥ていひ甲斐なしと思ふにぞ或日綿市の手を引て洗湯へ行し歸るさに彼根津助ゐ行遇けり其時根津助は山樹を見て是は〳〵宜き處にて御目に掛りしひき娘子の奉公口の御望みに叶ふべき宜しき旦那の口なり其方樣い別ならず宮の小路の家豪にて數代六十四郎と呼れ給ふが萬端質素にして旦那は齢ひ六十許り御新造阿邊さまは五十八九になり給へども御子一人もあらざれば年若く標致もよく絲竹の道に絕なる女中を表向き侍女にて内証も旦那の召使ひになされんとある俄の注文年期の定めは十年にて給金は一包只今殘らず渡さるべし是則ち御新造の願ひにて旦那に勸め給ひたる奉公人でいへば悋氣嫉妬は露ばかりも之なきよしを察し給へ此義を早く告申さんと思ふものから今日は又外に目見への口もあれば此子も目見へにかけてのち御宿所へ參らんと思ひたりしを略義ながら先耳うちゐ致すなり翌御目見えに遣し給へ凡そは八ッの頃までゐ我等が迎ひに參るべし仕度をさせて待せ給へといふに喜ぶ山樹は更なり綿市も根津助に喜びを演立ち別かれて宿所へかへりけり○斯て其次の日に阿蓮を根津介が手引ゐて母親山樹も附添て藪代六十四郎の宿所に赴き則ち目見にをしてけるに六十四郎の妻岡部が對面しつゝ先阿蓮に琴三絃を彈せて聞しに標致と云其技藝と言又盲べうもあらざるに母親山樹が附添て來れば談合即座に調て其首尾殘方も無年期十年の給金を只今一度ゐ被下可と約束して其外に支度金十兩をねだり出し請狀の日を定られ四五日の程に仕度調ひて阿蓮は藪代許引移り最うひ〳〵しく勤めけり○爰にまた篠部黑五郎は前に並々の活業に迫りて只獨子なる黑市を僅なる錢に換で親知ずに賣渡し其身も京に赴きつゝ件の錢を資本にして雜菓子を賣步行ほどに躬の內頻りに痒く覺えて怪しき瘡の出來しが遂に癩病になりて眉毛髮の毛名殘なく落拔さる面影さへ

に變り果其臭き事いふべうもあらざれば諸人に忌嫌はれて遂に世の交り得ならず近頃浪華に名の高き西門屋啓十郎を我子の黒市なりけりとは夢にも知よしあらざれば今更身を寄る方なく遂に薦冠り乞食になりて洛中洛外遠近となく日毎に人の門に立て食物の剩れるを乞求め僅に命を繋げどもなせし悪事の天罰なりとも思はで只是時のさがのよからぬ其身の不仕合を今一度取直す折もあらんと思ふ程に或日清水寺の道の邊りに薦をかたしき飯桶を枕にして晝寢して有りけるに山樹が其邊りにて根津助に行遇て娘阿運が奉公の談合の事の趣きを心ともなく聞濟して其人を倩々見るに盲人の手を引たる女を慥に見忘れもせぬ文具兵衛が妻なりし山樹なり浩れば娘阿運といへるは必ず鍛金の事なるべし我面影の變りしかば彼は見るとも知でそあるらめ是は好事を聞つるかな詮術あらんと忽ちに胸に計較大悪心山樹が後をつけ行て綿市が宿處を窺ひすまし夫より日毎に忍び〳〵に其邊りに附廻して阿運が目見えの首尾調ひ給金並びに支度金に百兩餘り請受たる其事までも立聞して今は斯と思ひしかゞ或夜丑滿の頃に綿市が家に忍び入先臺所の流し元なる出刃庖丁を探り取是を懐にして納戸に赴き綿市山樹が臥床なる箪笥の錠をこぢ明る音に山樹も綿市も諸共に驚き覺て盗人入ぬと叫びつゝ起んとしたる綿市が肩先丁と斬付る刃の光に有明の燈火消てむば玉の闇にしあれど案内知たる山樹は矢庭に黒五郎が足にまつはり組留て頻りに叫ぶを黒五郎と息の音止んと滅多討に數個處の手疵を負せしかバ山樹も遂に弱り果そが儘息は絶にけり又綿市はもろくも初太刀に急所を斬られしかば倒れしまゝに起も得ず虫より細き聲と共に最苦しげに蠢くを黒五郎は又探り寄て息止をさすが騒がぬ賊心靜に箪笥を掻撈て引出したる財布の百兩大吉利市と押戴きて跡を埋て逃失たり嗚呼災ひのよる處山樹は前夫文具兵衛の姪武太郎と謀りて彼が田地を横領せんと計し悪心のミならず事の破れに及し時心

強く夫に別れて文具兵衛にも實を盡さず其後綿市が妻になりても只利慾をのみ事として娘鍛金の阿運をもて道ならぬ金の蔓に取著んと目論見たる此罪障の報ひにて世に悪徒のなきにあらねど古き恨みの解ずもありし黒五郎が爲に殺されしハ淺間しき身の終りなり又綿市も山樹と共に金ゆゑに身を失ひしは又是物の報ひならん事の元を尋ぬるに始め綿市が兄弟子に糸市といふ盲人あり糸竹の技殊に勝れて世の款待大方ならずそが弟子ども又多かりしかば綿市之を妬く思ひて彼だになくば我藝に及ぶもの有べからず如何にもして糸市を押倒さんと思ひしかば陽許りは隔なく頼母しげに交りつゝ折々宿所に招きよせて酒を勸めて厚く款待女房に機密を示して夫婦馴合て密通を仕掛けさせ其期に及びて綿市は是を嗅付し体にもてなし事の由を訴へて盲人仲間を省かせければ之よりして糸市は都の住居なり難く些の由縁を心當に大津の方に退きしが又糸竹の業をもて活業になす事許されず已にして世渡りの業を失ひたりし事人妻に心迷ひし身の愆ちとは云ながら元は綿市が悪心にて其妻と牒し合して糸市を不義の咎に陷せし由を知ものありて密に之を告しかば糸市も又今更に思ひ合する由あれば專恨みに堪兼て病の床に臥たるが遂に空しくなりにけり斯て糸市が居ずなりしより綿市は計りし如く其身の遊藝行はれて一旦は榮えしかども幾程もなく女房は乱心もやしたりけん故もなきに或夕井に落入て死にり此故に綿市は山樹を娶り鍛金を娘にして年比を經る程に其身に胃中の病發り世渡りの活業を失ひ剩さへ夫婦諸共に盗賊の爲に殺されしは是全く糸市の怨靈の致す處嗚呼事の報ひなるべしとて是等の事を能知たる人は暗に評せしとぞ閑話休題されば又黒五郎は其夜主個綿市とそが後妻の山樹を殺して彼百金を奪ひ取財布の儘に懐中に収めて密に逃失しに流石に人は追ねども夜明ぬ隙に大津の方へ立退んと思ひつゝ大和橋の邊りゟ來にけり然るに此比は洛外も年々の戰ひにて件の橋を燒

落され僅に往來の爲にのみ丸木橋にてありけるに闇さは暗し黒五郎は此橋を渡る時思ふにも似ず朽てや有けん半より礑と踏折吐嗟と呼ぶ程しもあらず黒五郎は忽ちに水中に陷入て浮つ沈みつ辛ふして向かひの岸に着しかど懷中にせし財布を水底へ落しけん邊りにたゞふも有事なければコハ抑如何にと驚き忙てゝ再び淺瀬にをり立て頻りふたずぬ探りしかども箇許りの枝川も今の川筋と同じからず折から出水にてながれ殊更早かりければ財布の金は押流されけん再び手ふ入よしもなし夜は白々と明渡れば人の怪む事もやあらんと影護さに影を隱して濡たる破衣を脱棄つ赤裸身に薦を纏ひて猶も洛外ふ有けるに綿市夫婦を斬殺して逃失たる盜賊の詮義大方ならざるよし聞事毎に快からず我所爲なるを知れぬ前に遠く走るに増てとあらじと思案をしつゝ何時の間にか行衛も知ずなりにけり○夫は措て置茲にまた武松が兄武太郎は向に落葉を娶りしより夫婦倶稼きにして大佛餠を賣弘め武太郎は日毎〳〵に京へ持出て餠を買ひ落葉は見世を管りて倶稼ぎしつゝ世を渡るに子供一人もあらざれば猶物足ぬ心地して七八年を送る程に或年落葉ハ身重くなりて當る十月に産出せしは女の子にてありけれども漸く擧けし初子なれバ夫婦の寵愛大方ならず琴柱と號けて養育程に琴柱が七ッになりける年の秋の頃より母親落葉は痰勞の病にて打臥しより枕上らず漸く危く見ゐしかば武太郎ハ是が京へ買ひに出る事得ならず琴柱ハ年猶十に足ねど人にもまして大人しく孝心も大方ならねば朝毎にも醫者許藥を請に赴きつ或も母の肩を揉腰を摩りて看病に一日も怠る事なきを親心にハ是も又涙の種となりぬべき落葉は已に其身の命の長からしと覺期して或日夫武太郎に言殘す詞の末に妾が死去たらんにハ和主は又後妻を娶り給ん事勿論なり去とて琴柱を繼母の手にかけん事不愍に侍り和主も知せ給ふ如く管領家の眷屬には妾か伯母の侍べるなる世渡りに隙なきゆゑに年頃疎遠なりけれども我亡後にハ琴柱

が事を頼みて京へ遣し給へ和主の弟子武松殿も此年比伊勢の國司の眷屬にありと聞えしのみ便り自由の世の中ならねば和主の談合對手もなし和主ハ萬端正直にて心のどけく居すれば後の妻子に勢ひを取れてな笑ハれ給そといふ聲さへも絶〴〵にて其次の日に息絶たりけり琴柱が哭き武太郎が身の憂事のやる方もなきを措あるべきにあらざれば葬式送も形の如く七日〳〵の追善佛事の早忌明は果けれども親一人子一人なる娘琴柱は猶幼稚見世の買ひふ人手なければ是より見世を開く事なく其身は日毎ふ元の如く大佛餠の箱を脊負て京に行て商ひしけり留守には琴柱一人が居るを彼が事も隣の人々或は親しき輩に頼むは心苦しかるべし兩頭話説茲に又山樹が娘阿蓮が主なる藪代六十四郎は其家豐なる者なれども年六十に及ぶまで子供一人もなかりしかば年來夫婦此事と打歎きたりけるに六十四郎は年こそ寄りたれ尙ほ壯健かなりければ妻の岡邊が願ひにて子孫を儲くる爲なれば妾を娶りたまへかし妾も齡五十に餘れば些とも嫉なみの心ろはわらず枉て此儀に隨ひ給へと詞を盡し貞女めかして頻りに勸めたりければ六十四郎は深く感じて遂ふ其意に任せけりよりて岡邊ハ奉公人の手引する者に注文して顏よき女子を求めしに緣てそありけめ山樹が娘の鍛金のれれんを百兩にて十年期にて呼取て良夫の妾にしたりける世に女房は多けれども斯までにきれ離れよく子孫の爲を思ふが爲に若き女子を良夫に勸むる貞女は廣き世界にも又有難き事なれば六十四郎は且感じ且悅びて現なく夜毎に阿蓮に腰を打して一ッ臥床に睡りけり岡邊ハさしも貞女めかして良夫に妾を勸めかしども六十四郎が現なく只阿蓮を寵愛して世に舌たる爲体を見るに付聞ふつけて始めの心裏表にて胸の火炎のやるせなく妬ましき事限りもなければ折に觸れて科々しく阿蓮を叱り罵りて良夫にも當り惡く後には兩個が中を裂て遂ふ又一ッ寢を免さず此故六十四郎は只是畫きし餅を見て飢を凌げる心地しつ最口惜く思

へども初めは岡邊が心から勸めし女子なるよしを云爭ふても其理は通らず却つて口舌の種となりて人聽も又宜しからねば阿容々々として口を噤み折を伺ひ阿蓮を招きて邊りへ寄んと欲すれば岡邊が不測に疾知て良夫を罵り阿蓮を賴ち一日も安き事なければ阿蓮はいとゞ殘間敷悲しき事のミ多かれども許多の金に身を任して使はるゝ事にしあれば今更逃るゝ道はあらず加之母親と養父親は盜賊の爲に討れて賴母しき親類とてもあらざれば談合すべき人もなし兎ても角ても惡緣ならめと思ひ絶つゝ辛抱して五とせ餘り此にありし六十四郎も又妻に罵らるゝが外聞惡さに阿蓮と一ッ寢をもせず苦しき月日を過せしが夙に餠を賣に來ぬる武太郎が妻世をさりて寡夫となりぬと聞えしかば阿蓮を彼に娶せて我家の內亂を治るに増てとあらじと思案をしつゝ武太郎が來るを待つゝ呼入て件の由を密語示し此義を納得せられなば我等則ち里になりて阿蓮を其方に嫁らすべし然れば緣者の好みをもて資本もほしくは貸べきなりといふに武太郎一義に及ばず賞人だに嫌はずば仰せに隨ひ候はんと即座に返答してければ六十四郎喜びて由を岡邊に告知せ阿蓮が年期之半殘りて尚四五年のありと雖も今更彼は無用の人なり且兩親之横死して親類あらずと聞にしかば片付て遣すべし其緣組は外ならず日毎に餠を賣に來る矢瀨の里の武太郎なり此儀を何と思ひ給ふと問ば岡邊も異儀に及ばず妬しくと思ぬる這奴を人の妻となさ之是より胸は安かるべしと思案をしつゝ、點頭て然るべしと答へつゝ頓に阿蓮を呼寄て件の由を說示せば阿蓮は聞て竊くまでに最淺間しき醜男の餠賣の妻になる事は望ましからず思へども主命なれば固辭によしなく武太郎の親の恨みある從兄どちとは知るよしもなく开は兎も角もと答へたり

第　三　篇

斯て鍛金の阿蓮が緣談武太郎頓に承引て双方熟談してければ六十四郎悦びて阿蓮が爲に些許りの着物手道具杯を調へ遣すに岡邊も此義は目の上なる瘤を除く心地すれば其意に些とも拒まず結句其身の持古したる櫛笄衣類さへ餞けにとて取せけり矢瀨小原は田舍なれども二三里の程にしてをまで京より遠も有ねど結納の樽肴は六十四郎計ひて京にて買取せて事を濟せし其後又吉日を撰て阿蓮を遣すに六十四郎は媒介なり里親の事成ば一個二個の奴僕を倶しておれんを送て武太郎が宿所に赴き自ら盃の差配して婚姻を調へさせ其夕暮に席を辭して夜更て京へぞ歸ける

○去程に鍛金のおれんは圖ずも故鄕によすがを求しのミならず從兄どちなる武太郎が後添の妻になりたれども始此里に有し程は猶幼稚頃なるに人となるに及ても母親山樹が忌よしあれば武太郎武松が事などは審かなる事を知せず只故鄕は矢瀨なる事と阿蓮が伯母聟篠部黑五郎といふ者の惡心にて實父文具兵衛の追放せられし事の顚末是より活業なくなりて文具兵衛と談合の上夫婦別れをせし事をのみ萬端己れの善やうに密語示したりければおれんは武太郎が事を知ず武太郎も又おれんに叔父文具兵衛の娘なる鍛金なりとは知ざりけるにおれんか嫁りて來つる頃より素性を知たる者ありて彼に告是に語りつぐ程に武太郎も聞知て半疑ひ半信じておれんに由を尋ねけり爰に至りておれんも又始めて其身と武太郎とは從兄どちなる由を悟りて迭に竊き且泣て過去年の物語らひに奇緣なりとぞ思ひける浩りけれども武太郎之腹黑からぬ愚直人の深き思慮ある者ならねばおれんを鍛金なりと知ても些とも隔つる心なく前に文具兵衛夫婦の者の此地を追放せられし時彼家庫を賣去金八十両を送らんと思ひにけるを黑五郎に橫領せられし事の趣き澶樑々々と物語之に叔父文具兵衛之今も猶存命たるか卒去たるか後の所在はおれんすら知よし絶てなかりし由を聞もせびしき有爲天變我身の上に思ひ競べて歎息のほかなかりえをおれんは女の疑ひ深くて產の親の此里に追拂はれし由を思ふに彼黑五郎とかいふ伯母聟の惡心のみ

には有べからず其折は我良父も一ッになりて目論見たらんと思ひとりつゝ忍びやかに親しき人に尋ぬれども事の起りは阿蓮が母の山樹がなせし所爲なるを明々地にはいふ者なく其事具ならざればおれんはいよ／＼快からず如何なる宿世の惡緣にて世に多からぬ醜男の女房になりしのみならず産の父には仇敵ぞと知で嫁りし悔しさよと思ふものから訴ふる所なければ樂まず是よりして後世帯の爲には些とも心を用ふる事なく朋ても暮ても髮化粧を造り磨くを業としつ十にも足ぬ琴柱にのみ火を焚せ水を汲せて最似なく遣ひけりされば又數代六十四郎も岡邊が妬みのやる方なさにおれんを自ら媒介して武太郎が妻になしたれども思ひ絶たる情慾ならねば折々事お假托て朝疾出て矢瀨に趣きおれんが顏を見て皈るを身の娯めとする毎に價を出して酒肴を買して共に飮食ひつゝ猥りがはしき事あれども武太郎は餅を賈に出たる留守の事なればさまでに怪したからず斯て又六十四郎は武太郎が前妻落葉の病中より彼處此處にて借たる金のありける由をおれんに聞て武太郎に金を貸て舊借を返させ又折々に資本を貸て表向斗りは賴母しく琴柱おも襦袢の襟袖髻結の小ぎれ抔を秩土産おせざる事なし況ておれんには來る毎に小遣ひにとて金を取せ需めざれども悉く心を用ひたりければ武太郎も其譯ある事を知とも咎むる事得ならず阿容／＼として商賈に出て其座を外せしを四邊の人は嘲り笑ひて世に男甲斐なしと云けり斯て又六十四郎は我休息所の爲にとて武太郎に金を取せて脊戶の方に二階造りの小座しきを補理はせ其身の京より來る毎に茲にておれんと酒打飮で娃をのみ事とすれども老たる人の事なればおれんも原より實情にて逢まく思ふ戀にはあらず只年來遣はれたる元の主人にして今初て身を任す事にもあらず年こそ寄たれ錢あれば尙武太郎には增たりと思ふによりて粗略にせず人の謗りも思はぬ迄に旦那／＼と慕はしげに最喋々しく欵待ければ里の若者皆憎みて六十四が來る毎に門に集ひてどよめき罵り礫を打もありければ里の年寄等怪みて斯ては遂に騷動起りて所の煩ひになりぬべし氣の毒ながら武太郎を追立るに增ことなしと談合しつゝ事に假托さて武太郎を呼寄て俄ふ地立をしたりける兩頭話說爰に又武太郎が弟大原武松は楠一味齊に仕へてより名を武二郎と更めて武松をもて名乘とせしかば人押しなべて大原武二郎武松となん呼なしたる武藝は好む業なれば奉公の暇ある毎に一日も稽古を怠らず又餘暇ある折には兵法の七書は更なり和漢の書讀に螢雪の眼をさらし年を重ねて文武の技藝に闇からず已にして伊勢に居る事十五六年に及びしかば人品骨柄起居まで又いふべくもあらざりけり抑も一味齋に子供兩個あり長男楠七郎は本國河内にあり次は女子にて千早とよびなしたるが年は十八才になりぬ其顏面の麗しきをいへば更なり心ばへも愚ならず女子の技藝は一ッとして知ずといふ事なかりしかも同藩の若者等媒介をもて婚姻を求むる者の少なからねど一味齋は婿を擇みてまだ誰人にも之を許さず心の内にも武二郎に娶せんと思へばなり去程に一味齋は兼て思ひし事の由を娘千早に說示し其後武二郎を招き寄せ件の一義に及びしかば武二郎は驚きて頓には隨はざりけるを一味齋はかに角と詞を盡し說すゝめて和殿を聟ふと思ひし由は只是千早の爲ならず則ち主君の御爲なり夫萬卒も得易くして一將も得難し吾此年來密かに試して和殿の心ざまは能知たり已に文武の達者となりしを今更に勸め申さずば君に對して不忠に似たり近日舘に聞へ上て御家臣になして後願ふて千早を娶せん必らず辭退すべからずと諭して用意を仕たりける浩りし程に武二郎が同門なる川北一郎雲津の七郎山路彈作阿漕綱二郎を等始めとして血氣盛んの若者等件の由を漏聞て驚き騷ぐ猜ゝ心の是彼均しかりければ忍び／＼に打集ひ偕談合しつる樣彼武松の武次郎奴が武藝は我々に勝るとも聞が如きは鎌倉なる原是餠屋の丁稚ならざるを先生贔負して舘にすゝめ奉つり

の家臣になすのミならず我々が懇望したる千早を這奴に娶せられなば弓矢八幡武士道たゝず若さる事のあるならば武二郎奴を打果して我々當家を立退べしと衆議早一決したりけり惡事千里を走ると云世の諺に漏る事なく件の事の趣きを知人ありて這樣〳〵と一味齋に告しかば一味齋し點頭のみ些とも騒ぐ氣色なくとさまかうさま思案して其次の日武二郎を閑室に招き近づけ彼若者等が巧みの由を聞たる儘に説示して我始めは主君の爲に和殿をすゝめ參らせんと思ひし事の仇となりて事の騒ぎに及びなばあたら家中の若侍士を忽ち多く失はん去時は我なす忠は却つて不忠になるべし最いひ難き事ながら和殿此義を思ひなば一先當所を退けかし今武用ふる時なるに和殿の藝術力量もて他に仕をもとむるときは千貫や二千貫の祿を得ん事難からず此義に納得せられなば今宵千早を娶せて婿舅の親みを結ばん斯て兩三日を過して後心靜に首途せよ此義を頼むとまめやかに説諭したる師匠の情に武二郎は又驚きて重ね〳〵しの厚恩いかで辭み奉つらんされ婚姻の一義のみ今更仰に隨ひ難し只此儘に身の暇を給はるこそ後易かるべけれといふを一味齋押返して偖は我此內談は彼若者等の怕しさに婚姻の義を變換て和殿を追出すと思はるゝか其議ならば是非に及ばず始めの如く取計ひて和殿の斷義に及びなば我は和殿の助太刀して仇する奴原斬盡し相共に腹を切ん是より外の了簡なし何れを能とせらるゝやと恨みを含みし勇氣の決斷諌めて聞べき氣色ならねば武二郎はいよ〳〵感じてさまでに思召れなば今更辭退申がたかり賢慮に隨ひ奉つらんといふに一味齋悦びて祕藏の短刀一腰と金百兩を出し與へて此短刀は先祖より相傳の名作にて山味丸と號けたり是し婿引出に參らする又此金は餞けなり和殿他郷に趣きて仕へを求めて身の落着なば早く此義を知せよかし其折にこそ館へ願ふて千早を送り遣すべし夫までは我預りて指でもさゝする事はあらじよしや障る事ありて夫婦再會しがたく

とも千早は再緣すべからず彼にも昨夕きかせしに千早も親の心に同じ此義も心安かるべしと懇ろに諭示して其夜俄に形ばかりなる祝言を取行ひて千早を武二郎に娶はせつ夫婦臥床を共にする事僅かに三日斗りにして武二郎を出し遣りけり然れども中途にて禍ひあらん事もやと思へば事に假托て主君北畠殿に五六日の暇を給はり一味齋し供人夥多從へて國境まで武二郎を送り袂を分ちけり此故に彼若者等の巧計案に相違して些とも手出しをなす事得ならず武二郎が居ずなりては師匠を對手になし難しとて皆々件の憤りの勢ひ拔て止にけり○斯て大原武二郎武松は一味齋に別れてより故郷矢瀬を心ざして赴くに亂れたる世の事にしあれは遠近に關を据られて旅客の往來自由ならず折から本海道には障りあれば伊賀より大和へ打廻り奈良より浪華に赴きて夫より山城矢瀬の里に至るべしとぞ思ひける供にし兼て一味齋の下僕蔦平を付られたれば始終の由緣空しからず是よりして主從兩個又只一日ならず山を越峯に上り辛ふして大和に至りぬ原より急がぬ旅なれば名所古跡を一覽し果し次の日奈良旅宿を出て浪華をさして赴く程に闇がり越の麓まで來ぬる折日は早西に傾きて七ッ下りになりにけり其時武二郎主從は此麓路に只一軒酒を賣る家の有けるに忙しく立寄て酒を求めて飲ける程に主個は武二郎に打向ひて旦那は未だ知給はぬや近頃此暗黒峠には世にも稀なる虎ありて人を傷ふこと屢々なり此故に領主より數多の獵人に仰付られ五十貫目の賞美を掛て件の虎を討取せんとし給ふ事久しくなれども今に至りて討取者なしさるにより村長より斯の如き札を出して此峠を越る旅客に十人以上の道連を待合せよと掟られたり然るに今日は日の傾きて七ッ下りになりたれば待合せ給ふとも許多の道連にあるべからず今宵は此に泊らせ給へといふを武二郎打笑ひて老爺戲れ言をないひそ古へより此御國に虎のありし事を聞ず夫は山犬にぞあらんずらんと言ば主個は眼を見はりて何條空言を申す

べき山犬などにはあらずして眞の虎でいなりと許りにては倘疑ひて心得難く思はれん這は一奇談ある事なるを語り申さん聞給へと云つゝ邊りに立寄て見給ふ如く此所は山又山の連りて左に國府志貫越あり又十三峠中垣越あり右に小倉山ありこま山あり猛獸毒蛇のなきにあらねど虎はあるべき物ならぬに近頃此暗がり峠の那方なる鳴川の片傍り因果山前後寺と云山寺に一人の所化ありて名を寅念と呼れたり親は獵人なりければ殺生の報ひにやありけん怪しき病に侵れて兩親ながら同じ日に狂ひ死に終りけり獨りの孤子ありけるを親族はからひて法師にせんとて彼前後寺へ遣して住寺の弟子にしたりける右の寅念即ち是なり然るに件の寅念ハ幼き頃より畫を好みて獨り自ら書覺えしが前後寺の弟子になりて已に剃髮したれども經文などは讀もならはず師の坊の教訓同宿の嘲りをも見返らず只顧に畫をかくと雖も山水人物花鳥の類ゐは些とも之を畫かず只虎をのミ畫きしかば人訝りて問ものあれば寅念答へてされはとよ虎こそ我法名の一字にて十二支俗に見る時は寅念の字も又虎なり虎は獸の玉なれども日本になき物なれば畫くといふとも眞の虎に似たるや似ざるや人も吾も能之を知によしなし此故に未だ見ざる虎をのミ吾畫くよしは吾筆遂に自得して眞に迫るの妙ニ至らばさばかりの名ハ殘すべしよしや此御國にて眞の虎を見難くとも吾筆遂に眞に迫りて畫に魂ひの入ならば彼金岡が馬に齊しく夜な〱紙より拔出て眞の虎の如くならんと思ふによりて畫くのみと言に人皆呆れ果て鳴呼かましくぞ思ひける斯て住寺も其事を傳へ聞つゝ打驚きて寅念を招き近付て其方は云々の宿念ありと告る事の有けるが最淺間しき事ぞかし人ハ好む所によりて佛ともなり餓鬼ともなれり往昔惠俊僧都は正眞の阿彌陀如來を拜んとのみ願ひて年來念じ給ひしに遷化の時火葬ニしたれば御胸の骨の中に阿彌陀如來の御姿の現はれ給ひたりとかや其方は之ニ相似たれども眞の虎を見まく欲せば死して畜生

道へ墜べし最怕るべき事にあらずや出家なりとも餘力あらば畫を止むるにあらねど同じくは佛菩薩の尊像をよく寫して人に施さば功德にもなるべし今よりして一片なりとも虎を畫く事を誡さず此教訓を用ひずば必ず寺を追出して師弟の契を斷べきなり此儀を屹度愼しむべしと懇ろに說諭して同宿の所化達にも寅念が又虎を畫かば吾に告よと觸示して倶吟味になし給ひしかば是よりして寅念は虎を畫く事叶はず獨心を苦めてとさま斯さま思ふ程に漸くに氣のむすぼれて病の床に臥したりければ師の坊不愍に思ひ給ひて醫師を招ぎ藥を求めて療治等閑ならざれども寅念こそ藥を飲ず同宿の所化たち齊しく勸めて飲せんとしたりしを寅念ハ猶辭みて耆婆扁鵲の療治なりとも吾病の如何にして藥を以て癒る事あらんや許して虎を畫かせ給はば夫に增たる保養はあらじといふに人又憐れに覺ゑて斯まで好む所爲なれば密に虎を畫かせよとて紙筆を與ふれば寅念悦び身を起して虎を畫きて樂みをり然れども度重ならば住寺に知れん事を怕れて止むる者もありければ寅念は病重りて白粥だにも啜る事なく瘦衰へたる顏面の最凄じくなる儀に宛から虎に似たりしかば看病の同宿達は恐れて邊りへ寄付ず夜は次の間に臥たるに或夜件の寅念が一聲たかく叫ぶにぞ人皆驚き起出て間の紙門を開きて見れば怪むべし寅念は生ながら最大いなる虎に變じて臥床ニ居今人々の來ぬるを見て再び吼り走り蒐りて前に立たる一個の僧の首を忽ち嚙切たり是は怕しやと聲立て驚き騷ぐ同宿ばら目をまはし腰を拔して虎に食はるゝ者兩三個其餘は辛く逃走る騷動いふべうもあらざりけり斯りし程に寅念の虎は飽まで人を食いて戸を蹴破て走り出頓て後の山に上りて行衞も知ずなりにけり夫よりして件の虎は此闇がりの山に居樵夫炭燒旅客を傷ふ事の多かりければ遂に領主の沙汰となりて十八以上の道連なければ此山越を許されざる事只今咄し申せし如し枉て今宵は泊らせ給へといふを武二郎打開て徃古漢國なる牛哀

と云し者も生ながら虎になりにきと彼國の冊に載たれど夫はまだ見ぬ國見ぬ世の事なり思ふに其實念とかいふ法師は山猫などの化たるならんさらずば根なき事を作して旅客の足を止むる世渡りの手術ならずや今宵は峠を打越て今鄕に宿らざれば明後日故鄕へ到り難といふを主個は聞敢ず我等は老婆心切にて御爲なれバ止むるを世渡の手術かなんど云る事こそ本意ならね慾ひに此處を出て後悔しさに堪ずもあらば立な戻らせ給ひそと嘆くを耳にもかけぬ武二郎は酒の價を主個に取せ身を起して去來と許りに蔦平を忙し立て出て行を蔦平は引留めてあれ程までに主個のいひしを聞給はずば後悔わらんといへば武二郎冷笑ひてやくなき諫言聞れぢすな疾々來よとたしなめて山路をさして急ぐにぞ蔦平は猶危ぶみて胸安からず思へども酔たる人の癖なれば再び云ば怒りに逢んと思ひかへして阿容〳〵と後に付てぞ走りける去程に武二郎は彼西はた村なる酒屋を出し時暮るにぞ僻程あるべしと思ひしも空だのめにて行こと未だ幾多ならず秋の日の早く暮にけり然れども望月の隈なき光に便りよければ酒氣に任して物とも思はず武二郎は前に立て已に峠に上る程に夜ハ早五ツ頃にぞなりける之より下りの坂なれば憩はで再び走ること二街三街になりなる往方に繁き枯尾花のさや〳〵となる程しもあらずおほきさ子牛に齊しき虎の忽然と現はれ出て此方を白眼で蒐んとす前に聞たる事ながら蔦平ハ驚き恐れて吐嗟と叫ぶ聲と共に身を翻へして倒れけり其時武二郎些とも躁がず刃を閃りと抜持て寄ば刺んと身搆へたり虎も其機を察しけん勇士の義勢にさりなく蒐らず頻りに吼り睨まへて聊か隙を得たりけん飛鳥の如く飛蒐るを武二郎早く身をかハして咽喉のあたりを刺んとすれば虎も眼の早くして閃りと避て一二間向ふへ抜て吼りたり是よりして後再び三たび虎ハ武二郎を蒐得ずして心頻りに焦燥けん又無二無三に走り蒐るを武松そかさず丁と斬る刃の光諸共に虎も右手に退たりければ武二郎ハ思もずも刃を石に打當て半より礑と折れけり虎ハ刃の折たるに機を得てまた〳〵走り蒐れる猛勢颷風の巻如く瞬間隙もなかりしかば武二郎は差添の短刀を抜に及ばず足を飛して礑と蹴る虎は大力無双の勇士に肋骨を痛く蹴られて僅少痿みたりけるを武二郎得たりと走りかゝりて項を摑んで大地に押付右の拳を閃かして續けさまに打ければ頻りに苦み呻きつゝ血を吐ながら死でけり浩る所に又向ひなる尾花の戰ぐ音するにぞ武二郎遙に見返りて偖は又猛き獸の吾を蒐んとするにやあらん遮莫いか許りの事やはなさんと立向へば夫は獸にはあらずして鐵砲引提げたる獵人五人顯れ出て聲をかけつゝ進み近付我々は此日頃此虎を討ん爲に頭主の下知に從ひて群を立手組して夜毎にあさりし者なり然るに今圖らずも此所へ來かゝりて獨拳をもて此虎を打殺し給ひたる勇力に膽を潰して垣間見て居しひき願ふも我々諸共に村長の宿所に到らせ給へ偖も〳〵と褒めきて奔走大方ならざりければ武二郎も其意に任しつ先倒れたる蔦平を獵人等に助け起させて共に呼生などする程につた平は吾に回て此景況を見つゝ聞つゝ且呆れ且喜びて其勇力を感じける浩りし程に獵人等は呼子の笛を吹ならせば遠近の山の際より五人を一組としたる獵人三四十人集ひ來て武二郎が勇力をもて虎を容易く打殺したる由を聞膽を潰して是凡人の業にあらずとて尊敬初めに彌増けり斯て許多の獵人等は一所個麓に下りて村長に告るもあり或は木をきりて押擔を造り或は各々腰にしたるせて縄をより合せて件の虎の四足を捆げ又藤蔓をもて虎の口をくゝり蘇生の害を防ぎ件の押擔に差入て虎を擔もの五六人辛くして擔げ起しつ四五丁にして堪ざりければ交代に擔ほどに思ひしより猶時移りて麓の里に到る頃は早曉方になりにけり去程に麓の里なる西深江の村長は獵人の知せによりて出て武二郎を迎へ里所の患を除かれし悦びを演武勇を譽て宿處へ誘へ休息せて朝飯を進めなどす歎待大方ならざりける斯て

村長も武二郎に打向ひて急がせ給ふ旅なり共領主の御館へ案内を致さん浩る大蟲の勝れ人を此儘放ち遣參らせては後の咎めを免れ難き此義を承引給ひねと進先て武二郎を轎籠乘物に打乘つゝ件の虎を獵人等に擔せて尼が崎へ赴きけり此時津の國は三好修理の太夫長慶の手に切從へて尼が崎に在城せり三好は本國阿波なれども近頃大物の浦の戰ひに高國入道定觀を打亡して威勢朝日の昇る如く室町將軍に昵近きたれば管領に異ならず去程に此處彼處なる百姓町人老若男女押なべていざや件の虎を見んとて街に立集ふ者多かりけるに尼か崎の城下に到りては人の山に山をなしたる群集は押も分がたかりそが中に最麗しき一個の女房虎毛の小猫を抱きつゝ立て群集の内にありしに怪しむべし今擔れゆく虎の死骸より鬼火ハッと飛出て彼女房の懐りに落しを人皆吁嗟と驚きて見返る隙に消にけり虎と猫とは形相似て其性も又同じければ其氣を感せし故にやわらんと博識者のいふもありしを後にぞ思ひ合されける斯て大原武二郎は尼が崎の城に到る程ゐ其日も早く暮しかば旅宿に一夜さ休息して次の日城内に赴きつ三好の役人に對面の折先青ざし五十貫文を褒美として引たれども武二郎は之を受ず日來久しく山に叫せし獵人等に給いるべし某は幸ひに路用もあればとて固辭けり長慶是を傳へ聞ていよ〳〵感心斜めならず其大原武二郎は武藝力量あるのみならず心ざまの廉直なる斯の如き勇士は稀なり今吾對面すべけるに用意せよと忙しける然るに武二郎は旅客にて禮服の用意なかりしか此役人等計らひて新しき肩衣袴を送りて見參の案内す其時三好長慶は書院に出て武二郎に對面の作法正しく家臣等左右に居流れて最晴がましく見えにけり其時長慶は自ら武二郎が素性を尋ね又虎を打たる始末を聞て感心益々淺からず今より當家に仕へなば先五百貫の祿を宛行ひ此後軍功あるに於ては高祿と取すべし和主が虎を討し時太刀の折しとか聞にき先是を差料にとて左文字の刀を賜はりける懇命

大方ならざりければ武二郎辭むに詞なく遂に尼か崎に止りて三好氏にぞ仕へける然るに此頃城普請にて給ふべき小屋なかりしかば武二郎は町宅にありて當番日のみ務めけり茲に於て武二郎は一味齋に由と告る消息を書認めて萬平を伊勢へ回し遣す時是等の由を先生に告申せとて餞けに金三兩を取せしかば萬平は悦び受て別れて伊勢へぞ回りける

第四篇

去程に三好長慶は武二郎が打殺したる件の虎を一覽の後城下の街に曝ずこと三ヶ日死骸を前後寺へ遣して燒捨よと下知せられけるされば又大原武二郎武松と思ひかけなく三好に仕へて諸士の列にありと雖も未だ定まれる職役なければ三ヶ日に只一日還侍に伺候するのみ月に二十日の非番あり其時武二郎思ふやう初め吾伊勢を首途しつる折疾故郷へ立回りて兄に逢んと思ひしに三好殿の懇望默止かたく此地に足を止めしかば今更進退自由ならず嫂落葉の卒去し事並びに姪の琴柱が事又去る頃我兄の後妻を娶られたる是等の事は風の便に聞にけれど其後は安否も問で過したり亂れたる世の慣習とて徃も復るも障りある胸苦しさを如何はせん此より矢瀬へ遠くもあらねば春にもならば願申して爭で故郷へ赴きて兄ゐ對面すべけれと思へば專わびしくて日毎に徒然なりければ從者一個を從へて漫ろ歩行をせし折から向ひの方より來る一個の商人忽ちに聲をかけて夫は武松か夏戀やと云れて武二郎熟なから近付まゝに能見れば兄の武太郎なりければこれは〳〵と許りに互に其處に立集ひ恙なきをぞしくしける武太郎かさねて喃武松往ぬる頃闇がり山ゐて虎を手討にせしといふ風評は此所等に隱れもあらず其名を聞ぐにまがふ方なき和主ならんと推せしかども程もなく館へ召いだされて御家臣ゐなりぬと以へば尋ねて行んは流石にて今日までも默止たり我等が此處に移り往しを未だ知さでありければ嘸不審く思はれん

積る咄しは宿處にて涍みに胸を盡すべしいざ此方へと前に立て頓て宿所に伴ひつゝ先早れれんに由を告て引合し杯したる其欵待大方ならず其時れれんは琴柱を走らせ酒よ肴と那處彼所より買求め之を勸めて亭主を尻に敷だへの枕屏風を押疊挾き座しきに向ひて居武太郎が琴柱を相手に勝手働き暇なく漸くに調へ果て團居に居て横座に居其時武二郎武松れ兄に向ひて別れし後の其身の上を告知せ嫂落葉が事をしも最惜み云出て姪の琴柱を呼近付名を問ひ年を問ひ慰めて世ふ頼母しき親身の實情又他事もなく見えたるをれれんは心ふ悦ばずいふ由なければ倩々と武二郎を打見つゝ腹の内に思ふやう疎ましや我良人は端折屈む兄なれども似ても似つかぬ鳶と鷹いかなれば斯までに劣り勝りのせしならん願ふは浩る壯士と夫婦にならば朝な夕な樂しからんと任せぬ物は實に妹脊の縁にこそ思ふ心を得ぞ言ぬ情慾やる方なかりけり去ども知ぬ武二郎は再び兄に打向ひて馴し故郷を立去て此地に移りし事の理由を如何ぞやと尋ぬるに武太郎れいひ兼て否さしたる事にはあらず前にれれんを娶りし時日毎に郷の徒者等が口喧しくかにかくと馬鹿にしつるが惱さに此處へ住家を替たりきと許り答へて具に告ず彼六十四郎が事は更なりれれんれ鍛金なりけるよしも此折には猶言がたさに困じて口を噤みたり故あるかな武太郎が近き京へは移らずして此尼が崎に轉宅したるも先度に痛く懲たるより初め武太郎が矢瀬を追れし時京にて得意多かれども彼處へ移らばいよ〳〵日々六十四郎が通ひ來て又災ひの種となるべし遠く浪華が尼か崎に到らば後易かりてんと思案をしつゝ馴染もなき此地に移り住けるに後六十四郎は老人の淫慾ふ耽りし故にや病てそ二月許りにして衰へ果て卒去りつ妻の岡邊も其翌の春雜煮の餅の咽喉につまりてそが儘に息絶にけり家は富ても讓るべき子供一個もある事なければ諸親類談合して六十四郎が甥何某を夫婦の死後に養子にせし由程へて玆へも聞えしかば武太郎は悔し

く思ひてさる事ありと知ならば京へ移轉すべかりしにと臍を咬ども今更に及ぶべうもあらざれば日毎ふ餅を賣歩行てからく妻子を養ふ事二年三年になりにけり閑話休題　阿蓮は今武太郎が武二郎に問るゝ由を答へ兼るを見送りて紛かさんと思ひけん忽ちに膝を進めて喃武二郎主御身は未だ宿所のあらねば町家を借てれいするならずや然んには萬の事にさてそ便なくあるべけれ官より宿處を賜るまで此方を宿にし給へかしと言を武二郎聞あへず开て幸ひなる事なから某し町家にありと雖も官より下僕を二個まで附置せ給ふをもてさまで不自由なる事なし然るを叟を宿とせば姉子の厄介ならんのみと固辭を阿蓮れ押返して夫は益もなき遠慮に侍り此方を宿にし給へは其附られし下僕は用なし御身一個の殖たりとて別に炊きをするにはあらず不鹽梅で、も妾が手料理むさく穢なき男たちの給仕に勝る事あらんと詞を竭して勸むるにぞ武太郎も諸共に其議尤も便利なり枉て此方へ來よかしと言ふに武二郎辭みも兼て然らば官へ願ひまつりて兎も角も仕つらん已に數杯の御欵待にて殆んど酩酊致したり又こそ參りらめ今日れ先身の暇を給はるべしと應へて盃を納めさせ別れを告て從僕を催したてゝぞ皈りけり○斯て其次の日ふ阿蓮れ武太郎に催促して武二郎を一日も早く呼取給へと言しかば武太郎此議に從ひて弟の宿所に尋ね行て妻に云れし趣きを演て同居を勸むるにぞ武二郎左右なく承諾て密に阿蓮の素性を問しに武太郎も今更に隱すべきもあらざれば彼れ叔父文具兵衛の娘鍛金でありけるを初めは迭に知よしもなく娶りし後に聞にし事并びに山樹れ文具兵衛と夫婦別れせし後に綿市といふ盲人の後妻になりし事其後夫婦諸共に盜賊の爲に殺されたる事の始末を聞たる儘に逐樣〳〵と密語告て和主も兼て知ごとく叔父嫁の山樹どのこそ胸の惡からぬ人なりしかど叔父れさまで惡心なかりき近頃あづさの巫女を賴みて口よせをしてけるに叔父も死去たるよし朧氣ながら聞えたり我身の黑

五郞の勸めに任せて叔父と家督を爭ふて公沙汰に及びしは是止事と得ざる所爲にて其折利運になりたれば恨みは晴て今更に痛ましくてそ思ふなれ斯れば不圖其娘を娶りにけるは切てもの罪亡しであらんかしと言ふを武二郞熟々と聞つゝ心に喜ばず邊りを見返り聲を密めて御身の心正直なれたさはかり思ひ給ふとも人の心ハ計り難かり親み深き夫婦の中でも才ある女に油斷はならず況て世に繼母の先妻の子を密かに憎みて酷くすれども父親は曉らで却つて其子を疎むも和漢に類ゐ少なからず其等に用心したまへかし同居の事ハ官に願ふて御許可を受されハ吾私しには出難しと答へて武太郞を返せしが武二郞再び思ひ見るに彼嫂は我同胞の從女鍛金ならんにハ心よからぬ所あり吾先彼處へ止宿して事の樣を窺はゞ其胸中を知よしあらん只是兄の爲なればと思案をしつゝ町宿へは附人の奴僕を殘して其次の日に獨兄の宿所へ赴て昨日催促せられたる同居の事ハ願しのみ上より未だ御沙汰なけれど障りあるべき事にはあらず依て先四五日厄介にならんと思ひて奴僕計りを殘し置て居馴まん爲參りにきと言に喜ぶ武太郞より阿蓮は一入愛々しく偖も能こそ來ましたれ先茶々めせと汲て出す晩茶も色の下心是より萬良夫にもまして他事なく款待けり斯て又武太郞も朝疾餅を賣に出て夕暮ならでは返り來ず琴柱も又手習に師匠許赴けは彼も宿所にある事稀なり非番多かる武二郞も二階住居も嫂と留守する宿の徒めたさに兎もすれば立出て漫步行をしつゝ歸るを阿蓮は暗に待詫て茶を勸め酒をすゝめて事に觸たる詞の端に仄めかしつゝ情をひけども武二郞ハ兄武太郞が歸らざれば酒を飮ず折目正しく應答へして心を動かす氣色なければあれんもいよ〳〵胸を焦して云甲斐なしと思ひたる其次の日武二郞も當番なれば朝出て未の刻に歸り來り見ばあれんも夜衣引被ぎて最惱ましげに臥ており武二郞之に驚きつゝそが傍邊りに立寄て先其樣子を尋ぬればあれんは眉を顰まして持病の痞が發りしかども身一ッなれば詮方なかりき妾が痞ハ藥も針も絕て驗はあらずかし只水落を押こと久しき時も納り侍りあな苦しやと身を反しつゝ絕も入べく見へしかば武二郞いよ〳〵驚きて开は胸苦しき事ぞかし折も折とて琴柱さへまだ歸らねば人手はあらず驗か驗ぬか覺束なけれど某押て參せん無禮を免し給ひねと言つゝ夜衣を押上てあれんが胸を楚と押其手を確と引〆て御身に誠のあるならば後の世かけて是斯と抱きつかまくしたりしかば武二郞吐嗟と突退て忽ち怒れる聲高やかに吁淺猿や畜生に均しかるべき尾籠の擧動武二郞を媚けき者と思ふて侮りめさるゝか之にも懲ず又重ねて婬かはしき事あらば嫂なりとて許さんや耻を知らざるげんざいかなと罵りつ刀を引提て走りて二階へ上りけりあれんは兼て思ひしに似ず今飽までに武二郞に耻しめられたる腹立しさに身を起し二階を見上て獨呟く恨みの數々那白徒どが逆しらだちて姊に齊しき嫂をげんざい呼はりしつるよな原是汝等兄弟ハ御身の親仇なれども這奴ハ彼をり鎌倉に遐りて事に干らずと聞にけれハ心ろざまも兄にはまし頼母しからんと思ひしことの悔しさに如何にすべきと身を揉で憤れども甲斐ぞなき斯る處に武太郞は賣ひ仕果て歸り來つあれんが臉を泣腫せしを見つゝ心に訝りて先其故を尋ぬればあれんは泪を押拭て御身の弟に侍れどもあの武二郞の畜生づらが妾を捉て口説たて猥がましくものせしを腹立しさに罵りて飽まで耻しめたれば二階へ上りにき這奴が此處にあらんには妾は心安からず疾追出し給へかしと言に武太郞は呆れ果て夫も御身のいふ言なから武二郞は兄耻かしき志ある者なるにさる擧動をすべくもあらずといふ聲二階へ漏聞にけん武二郞は身拵して忙はしく下て來つそか儘兄に打向ひて兼ても申たる如く未だ上より許可を受ねば久しく止宿は憚りあり故に暇を申すなり此義を心得給ひねと演終り身を起して元の町家へ歸り行しをあれんも見つゝ冷笑ひて見給へ這奴は其躬の不埒を告らるゝ事あ

るべしと思ふに依て忙しく逃て宿所へ歸りたりさるを猶弟と思ふて問音信をし給れば妾は縊れて死ぬるとも操を立んと思ふなり此義を忘れ給ふなといへば武太郎頭點のみ猶疑ひ解ねども私れんに知れん事を恐れて日數經まで武二郎を問と絶なかりけり斯て二十日餘りを經る程に或日武二郎武松は奴僕に酒肴を携して兄の宿所に來にけるに武太郎は買ひを仕果て折よく宿所にあり阿れんは早く武二郎が來ぬるを見つゝ腹の裡にさては此人去る日の難面かりしを思ひ返て詫て同居をせん爲ならんと推して忽ち微笑ながら出迎へつゝ坐敷に請じて初めに變らず款待けり其時武二郎は携したる酒肴を開きて夫婦に勸めつゝ兄武太郎に打向ひて吾等只今參りしは須臾の別れを告ん爲なり今般主君三好殿本國阿波へ赴き給へば往復の供を言付られて某も參るなり勿論往復の事なれば四五十日の程には歸り來るべし某小屋を賜らば御身夫婦琴柱まで迎へ取繕を分ちて必ず養ひ參らせんと思ふ物から其處までにまだ到らねば申すなり姉子も左に聞給へ凡そ尊きも賤きも能家を治むる者は夫婦身持を正しくすされば聖賢の教にも妻に教るには初見にあり又婦言をば聞べからずとて世に志ある者は假にも妻の助言を受ずされば世の諺に七八の子は爲とも女に心を容すなどをしへを思ひ給へかしといふを阿れんは聞肯ず眼を怒らし聲振立てこな武二郎の何をかいふ初め汝等兄弟は叔父を倒て田も畑も横領したる者なれば出し心に押競べて妾をさみする讒言過言菩薩に均しき者なりとも聞つゝ黙止て居られんやと恨みつ泣つ席を蹴立て厨の方へ赴むくを琴柱はさてこそ宥めかねて後に踉つゝ退そきて猶いたいけに宥めけり然れども武二郎は些とも憚かる氣色なく再び兄に打向いて只今もまをせしごとく某小祿なりと雖ども君より五百貫をたまはるに御身に餅を賣走行のせては本意に差ひて外聞惡かり浩れば翌より宿所にありて賣商に出ず宵より外面を鎖して無益の人と交はる事なく吾回るのを待給へ夫

までの烟の代り某宜しく賄ふべし御身親子を呼取のちに便を求めて琴柱をば夫人附に願ひ申して御給事に侍さをべし此義を心得給へかしと繰返しつゝ諭し示して金十兩を武太郎に暗に送りて其宵の間に好僕に仕出しの盃盤を持して宿所へ回りけり斯て其次の日に武二郎は形の如く主君長慶の倶に立て阿波へ赴きたりければ武太郎は弟の教を守りて是より後は商賣に出す日毎に早く外面をさして閉籠りて居程にれ遣い由を聞知て良夫を罵り冷笑ひつゝ坐して食へば山も空しといふ事あるを如何ぞや僅五兩や十兩ばかり弟のくれたる金ありとて商賣に出ぬ事やある云れし如く彼人が今年の内に歸らずば其金盡て後悔せんとく出給へと頻りに催促せられしかば武太郎漸く思ひ回して又商賣に出たれども常より早く皈りて早く外面を鎖せしを阿れんは夫をも嘲りて世間並といふ事あるに夕七ッより表面を鎖て人の謗りを思はずや要なき事ぞと呟けども武太郎は爭はずさりとて妻のいふ如くせで自ら鎖去たりければ阿れんは遂に罵り勞れて後にはさまで拒む事なく武太郎が遲く回る日は必らず良夫の手をまたで形の如くに鎖しけり然るに或日武太郎は常より歸りの遲かりければ阿れんは先二階の窓より鎖をせんと思ひつゝ獨二階へ登る程に彼虎毛なる飼猫の何地より持來にけん最大きなる魚の腸を摑みて有けるを阿れんは見つゝ聲をかけて虎よ开いよからぬ物を食べなば又吐やせん疾打棄て此所へ來よやよ喃々と招けども猫は見返るのみにして邊り近くは寄ざりしをいでや落して捨させんと思ふ阿蓮は梃張棒を搔取つ振上て打面色をしてければ猫は是にぞ驚き怕れて件の腸を檐よ礑と落して逃たりけり浩る所に一個の若人西の方より出で來つ此所の表面を過る程に猫が檐より振落し彼魚の腸とッさりと件の男の肩先を一打々てぞ落たりける阿れんは上より之を見て开い淺猿やと計りに慌て惑ひて下て來つ顚て側へに走り出て彼若人に打向ひて何方樣かは知ず待れど开は畜生の所爲な

れば爭で免させ給へかしと詫れど答ぬ若人は飽まで罵り懲さんと思ひつゝ早く見回へれば思ふにも似ず女房の最麗しき顔面に怒りも失て今更に鈍くまでも見とれたる魂ひ浮れ微笑て否打置せ給へかし僅取羽織の汚れしとても箇許りの事何かあらんといふ端に筋向ひなる菴りの門に彳みたる尼が此方を遥かに見て旦那よ何とて此頃は立寄せ給はざるや着物の汚れなば兎も角もして參らせん此方へ來ませと呼かくるを若人早く見返りて微笑ながらそが儘おれれんに別れて彼尼の庵の方へ赴けども殘り惜彼妻戀し實に幾度となく見返り〱折戸の内に入にけり抑も武太郎が宿所の筋向ひに月下庵といふ尼の庵あり此は或人の別荘なれども其家已に衰へて守る人もなき折から東の方より來ぬる尼あり年は五十計りにて妙潮となん呼れたる一生不自由の者ながら別荘の主個と縁あれば妙潮比丘尼に家を取せて彼が庵にしたるなり然れども妙潮は一個も檀越ある事なければ世渡の爲門内へ腰掛茶店を補理て煎茶を賣て往復の人の憩ひし所にしたるなり浩りし程に近郷なる果敢なき者の娘の両親を失ひて寄べなきがありければ金二歩に買取て弟子にして髻を剃せ妙汐と号けたるに件の茶店を掌とらせて活業になす程に彼小比丘尼の妙汐は早十三四才になりにけり此地も繁花の港なれども茲等は町の外れにて外には憩ふ茶店なければ只寄ものゝ少なからねば世の人遂に渾名して比丘尼茶屋とぞ呼なしける偖又おれんが飼猫に魚の腸を落し掛られて圖らずおれんを見染たる亦件の若人は是則ち別人ならば二代豪富と世に名たゝる彼西門屋の啓十郎なり啓十郎は尼が崎にも出店ありさらでも三好長艮の軍用金を調達して目通りを免されしかば尼が崎の城内へ疎からず且三好の執事に船舘葊左衞門時景と聞にしは本妻呉服が叔父なり是等の由縁あるをもて啓十郎は浪華より尼が崎へ赴くに僅二三里の程なれば往復最も自由なり斯て此回は長艮の阿波へ歸國を見立の爲且出店にも要用あれば逗留して此

地にありさるにより啓十郎は習々此等を過る折比丘尼茶屋に立よりて茶を飲足を休めしかば妙潮は浪花なる西門屋の主と知りて欵侍常に大方ならず此日は花を買に出たる歸るさに啓十郎が猫の爲に羽織を穢されしを遥に見て招ぎ入て茶店に憩ひて羽織を撮み洗して棹にかけて乾かし杯す其時啓十郎は妙潮におれんが事を潛に尋て彼れ大佛餅を賣歩行武太郎が妻たるよしを初めて知て呆るまでに最惜む事大方ならず世には美人のなきにあらねど彼が如きは最稀なりさるを吾も見認たる彼餅賣の武太郎が女房になしたるハ月下氷人の誤りならん惜むべし〱と獨言身を起して又武太郎が宿所の邊りを往つ戻りつ徘徊して又比丘尼茶屋に來て憩ふ事凡そ三たびに及びしかば妙潮早く其意を猜て西門屋の旦那樣今日ハ〻てふお足が近くされども餅屋の若猫は未ださかりの付ざれば表面を鎖して呼ども出すさはれ好餅を買給はゝ呼ずる手段あらん氣を揉給ふ事かはと言れて啓十郎はえましげに進み近付聲を潛めて實に推量せらるゝ如く我居宅にハ本妻あり妾も三人あるなれどさまで心に協ふ者なし今より御身の働きにて彼若猫の手なづかば吾御身には骨折賃に金十兩を參らせん又其上に庵室の屋根のふき替盤がへ其折々の施主にならん拜む〱と手を合して頼めば妙潮點頭て然らば今宵能考へて翌又談合し侍らんといふに啓十郎は歡びて別れて宅へ回りしが曉の朝最早く比丘尼茶屋へ來にけるに妙潮頓て出迎へて昨日の事は箇樣〱云々にし給ひゝ望み必ず調ふべしと私語示せば啓十郎は雀躍しつゝ喜びて开ハ最易き事なりかし出店は小間物店なればさる代呂物は幾等もあり只今もて來て參せらんと回答て頓て出て行しが須臾して玳瑁の櫛笄簪を箱に入て持て來にけり妙潮之を請取て御身今日は浪華へ歸りて明後日晝ころ來給へかし其折は箇樣〱と耳を引寄て密語示せば啓十郎は點頭て其日の酒肴の料にとて懷中より小判一兩を出して妙潮に渡しけり妙潮は啓十郎を須臾茶店に待せ

僊て即ち件の櫛笄を服紗に包み携へて倩武太郎が宿所に至るに此時武太郎は買ひに出たる儘に未だ回らず琴柱も又手習ひに赴きて阿蓮一個ぞ居たりける倩も此妙朝の素性を如何ぞと尋ぬるに元ハ鎌倉の者にして武太郎兄弟の爲には故主なりける大佛屋五文次に離別せられし彼淫婦沖見なり彼は横六と密通したる事顯はれし時良夫五文次に髻を切れて親里へ歸されしが再び髮を延しなば永く崇らんとあるによりそが儘剃髮して兄親にかゝり居事五六年に及ぶ程に實の出家ならざれば又々善からぬ事を仕出して兄親にさへ見限られ些の由縁を心當に此津の國に流れ來て又年月を送る程に人の別莊を預りて庵の主となりたるなり然るに近頃武太郎ハ矢瀬の里より移り來つ間近き借屋住居にてあるを妙潮は稍聞知りて須臾は隱れしかど隱れはつべき事にもあらず彼が弟の武松てそ心さま逞しく古き恨みのある者なれども武太郎は最鈍くて毒にもならず藥にもならず我身の離縁せられし頃彼は早故郷へ歸りて共等の事に干らねは武松と同じからず名乘て對面したらんてそ心安くあるべけれと思案をしつゝ武太郎が宿所に赴き對面して古き懺悔物語りに心にもあらぬ涙を拭いて吾若かりし時の誤ちにて浩る姿になり果たる昔の親みを忘れずば迭に頼母しかりぬべし願ふは今より親類の思ひをなして給ひねと播口說たりければ武太郎漫ろに憐れに覺えて實に此人の不義の事は吾弟に聞たれども首めは故主の妻君にて吾等兄弟が稚き時より世話になりたるよしゝあれば今更憎むべきにあらず吾身此地に移轉てより處に馴染薄ければ此比丘尼てそまさかの時の談合對手になる事ならんと思案をしつゝ隔なく最懇ろに欵待けり是よりのち妙潮は折々武二郎夫婦を問音信阿蓮も亦彼の茶店へ行て煎茶を請ふ日もありけり浩りし程に武二郎が虎を打殺せし風聞あり彼は武太郎が弟の武松なる事も又三好の家に抱へられて長良の家臣になりし事も是等に隱れなかりしかば妙潮暗に駭き怕れ武太郎夫婦に深

く憑みて弟に對面し給ふとも我等が事は風評にも知せ給ふなと頼みしかば阿蓮はさらなり武太郎も其心を得て武二郎には沖見の妙潮が事を告ず其後又武二郎は主君長良に隨ひ阿波へ赴きにきと聞えしかば妙潮は心落付て是より又始めの如く武太郎夫婦を問音信て最頼母しげに交りけり閑話休題去程に妙潮は武太郎が留守を計りて其日件の櫛笄を彼宿處にもて行去に果して阿蓮一個なり妙潮はさらぬかほにて櫛笄を取出して阿蓮に見せてさて云やう是ハ或人の拂ひ物にて價は三十五兩なり買せ給はんやといふに阿蓮は及ばぬ事ながら先誂取て倩々見るに皆最上の玳瑁にて今様の櫛笄も前ざしの簪二本あり微笑ながらそが儘に歸して實にいと目出度物にはあれど價に恐れて兎も角もいふべき由は侍らずと因辭を妙潮押返して如いはるゝは理なれども是には曰くなきに侍らず此賣主ハ浪華にて一二を爭ふ大盡なるが此地の領主に願ひの筋ありなれども城內に識人なし是等の手引をなす人あらば報ひとして此品々を送らんと云れたり我身思ふに此の旦那の弟ハ領主の御家臣なり御身彼義を取持給はゞ此品々は得易からんと思ふにより持來るといふを阿蓮は打聞て實に由緣はなきにあらねど言に云れぬ譯あれば弟は談合相手にならずと再び辭むを又押返して夫は餘りに正直なり談合相手になるにもせよ彼弟は今此地に居ず浩る由緣のありとのみ彼大盡に告知せて一たび對面し給はゞよしや其事は調はでも一旦くれたる其品々を歸せとは言れまじ寶の山に入ながら手を空しくする事やある明日晝の頃はひに彼大盡は我庵へ必らず來給ふ筈なれば行て對面し給ふべし留守には妙汐を遣さん遠慮も事による物をと敎唆されて實にもと思ふれれんはほしき玳瑁の髮の飾に引されて漸く其義に隨ひけり斯て妙潮ハ返り來て啓十郎に這様〳〵と此日の首尾を告しかば啓十郎は悦びて此日も出店に逗留しつゝ次の日は巳の頃より早く妙潮が庵に來にけり去程に妙潮は武太郎が宿所へは小比丘尼妙汐を

遣して昨日約束の大盡の前より待て居ますなり疾々來給へと言せしかばおれんも兼て仕度之て心待せし事なるに武太郎琴柱も毎日の如く宿にあらざる折なれば誰に憚る事もなく件の菴へ赴きしを妙潮早く出迎へて奥なる小坐敷へ案内して啓十郎之引合せ兼て準備の酒肴を備ならべ頻りに勸めて盃の數も重なる儘におれんは已に微酔の最艶しき顔の早櫻色にぞなりにける其時妙潮之銚子を替んとて外して廁へ退くにぞ啓十郎はおれんに向ひ兼て庵室に頼みし事を大方聞せ給ひけん吾等が願ひを協へ給はゞ櫛笄は數ならず命なりとも參せん承諾給へと寄添之おれんは吁嗟と驚きて振放さんとしたりしを啓十郎之抱きて放さず猶兎に角わと口説たる男振なり辨舌まで女子わ好る〻風俗におれんは漸く心動きて從弟どちとは白波に浮寢の鳥にあらねども遂そが儘に新枕暫く夢を結びける是より之て啓十郎は暫々浪華より通ひ來て件の庵を中宿にしておれんと忍び逢と雖も武太郎琴柱も朝夕ならでは宿所に居る事稀なれば知よし絶てなかりけり○夫は偖置て爰に又啓十郎が實父なる篠部黒五郎は先に綿市と山樹を殺して早く都を逐電しつ〻尼が崎の浦に來て猶野臥にてありけるに近頃武太郎が妻子ともに此地に移り住しより黒五郎は彼等を知れどもおれんは更なり武太郎は黒五郎が面影の最變りしかば見ると雖も之を知ず事をもて黒五郎は些とも憚る氣色なく其等を徘徊する程に吾子と知ぬ啓十郎が月下庵を中宿にしておれんと忍び逢よしを忽ちに聞付たる原來惡徒の癖なればいたぶりて酒代にせんとて啓十郎が後をつけて比丘尼茶店に押かけ來つ何やら斯やら言ひつけていたぶり取んと欲せしに妙潮も又唯は食れぬ氣強き老尼なるをもて些少も弱身を見せず思ひの儘に罵りあふて打てかゝるを突倒し引摺出して扒戸をたてたり浩りけれども黒五郎之難病久しくなるまゝに力も強く衰ろへて妙潮わだも勝事叶はず腹立しさに思ふやう吾身乞食の事なれば造奴と爭ひ難くとも武太郎に

足労をこふて奸夫婬婦を捉へさせ其折金にすべけれと胸に巧計み因果覿面其子の仇となるを得知ず其次の日武太郎が餅を賣に出しを尋ねて人なき所で呼止め見忘れたるか武太郎殿よ我身は伯母婿黒五郎なり徃昔和殿を誑かりて悪事をなしたるむくひにて妻を殺し子を失ひ偖此さまになりたれば死んと思へど死に難さに爭で和殿の手にかゝらんと思ふて再會したるぞやと名乘を聞て武太郎は驚きながら倩々見るに面影痛く變りたれども聲は正しき其人なり先試みて伯母遅馬がこと從男の黒市が事ハ更なり古にし事を尋ぬるに答へ分明なりければ漸くに疑ひとけて憐む心起りしかば古き恨みを思ひかへして賣殘りたる大佛餅を取出して喰せけり其時黒五郎は空涙を押止免て和殿が故郷を住も得果ず斯まで貧しくなりさるも皆是我等がなせし所爲ぞと思へバ身で身を恨るのみ今更返す金はなけれど告知せて報ひにすべき一大事の密議あり其事ハ這様々々と阿蓮が啓十郎と密通して比丘尼茶屋にて忍び逢ふ爲体を今見る如く尾鰭をつけり報告すれば武太郎聞つゝ又驚き且憤る事大方ならず思はずも太息吻きて實に言るれば此日頃阿蓮が面色詞の端に思ひあれする事なきにあらず況て彼妙潮は元ハ故主妻なれども鎌倉にありし時一個見の事だに思はで出店の老管饋六と密通したる婬婦なれば年は寄ても不ゝ徒らの媒介をせ去事も有べし彼といひ是といひ聞棄難き畜生ども如何すべきと熟圖を黒五郎押止めて忙てハ事を仕損する這奴等兩個を捉へて後に詮方ハ幾等もあらん翌も必らず啓十郎奴が來つゝ内室と忍び逢へし其時程を窺ひ辨して我等先彼處に至りて彼妙潮奴を僞引出して確と捕へて動すべからず其折和殿ハ走り入て這奴等兩個を捕へ給へ斯する時は妙潮が知せて逃すに隙なく事皆不意に迯るをもて這奴等は嘸狼狽へて阿容〱として納められん事の手筈は斯樣〱と時刻を約束したりしかば武太郎は心得て別れて宿所へ歸りけり○斯て其次の日も武太郎は例の如く朝よりを餅賣に

出て遠近と打廻て眞晝の頃に黒五郎と約束の所へ來ければ黒五郎は待てれり木蔭に招て密語やう前より彼所に窺去に啓十郎も内室も已に宿所より來つ今は能處なるべきに手筈を違へ給ねと示合せ前に立て比丘尼茶店の脊戸口ら昨日の意趣を返さんとて罵ながら進み入ば妙潮隙す走り出て今日も乞食めが身程知ぬ高ゆすり今日ハ少も許ぬぞと叱懲を物とも思ぬ黒五郎は妙潮を抱きすくめて動せず其隙に武二郎ハ表の方より走り來て奥を目掛て馳入を妙潮早く振返りて驚きなから聲ふり立てやよ武印が來つるぞややよ喃々と呼立れば阿れんは更なり啓十郎も驚き忙てゝ身を起せども度を失ひて狼狽る騷ぎの中に武太郎は驀地に走り來り不義者ども奴動くなと聲をかけつゝ勢ひ猛く早捉へんとする程に阿れんは忽ち胸をすゑてやよ啓十郎主日頃より柔術も習ひて修練したりと宣ひせしは浩る時の役に立べき爲ならずや最鳴呼なりと勵したる程もあらせず武太郎は已に近付火急の問着心得たりと立向ふ啓十郎が覺ゑの早業足を飛せて武太郎が肚を礑と蹴たりしかば憐むべし武太郎は脇骨痛く蹴挫かれて呀と叫びし聲と共に血を吐く事夥しく動と仰反倒るゝにぞ阿蓮ハ隙さず側なる蒲團を刎下打冠せて上去かゝりつ動かせず此時小比丘尼妙汐は俄に烈去き奥の騷ぎに打驚きつ茶店より眞一文字に走り來つ出合かゑらに啓十郎は己に一生懸命と力を極めて武太郎を早蹴倒したる心も轉動眼眩みて妙汐を這も武太郎が腰を押す同類の者ぞと思ひけん寄を斜じと拳の中身に思ひがけなき妙汐も胸骨丁と打擢かれて叫びも果ず倒れけり今此事の爲体に黒五郎はきよつとして仕損したりと見てければ吾身の上と勢ひ擢けて挑み爭ふ妙潮を振放ちてぞ迯失けるされば啓十郎阿蓮等が辛して火急の難義を逃れし事は遁れたれども一個武太郎のみならず妙汐さへも側杖うたせて是彼均しく息絶たり又生べくも有されば之にぞ再び膽を潰して妙潮も諸共藥よ針と手を盡せども遂に届かず成にけり這は如何に

せんと詐に當惑したる啓十郎阿蓮も顔色青くなりて又今更に計事の出る處を知ざればそが儘三個額を集めて密談す爰に及ぶ程に妙潮暫く打案じてさのみ苦勞にし給ふな我又宜しく詮方あり其計事は這樣〳〵云々なりとぞ密語ける武太郎が横死の始末は金瓶梅にも水滸傳の儘にして載たるを此には聊か飜案して其事は異なれども亦趣きの同じからぬを能見る人には分明ならん

（第二輯終）

新編金瓶梅第三輯

第一編

去程に西門屋啓十郎て思ひがけなく武太郎に不意を打れて辟易したる勢ひ止と得ざり去かば手練の當身に一當當たる拳のさゑに武太郎は肚を摑かれ血を吐て矢庭に息は絶たるに剩さへ小比丘妙汐も側杖を打れつゝ倶に仰反綷されて又いふべくもあらざれば阿蓮は更なり啓十郎も後悔こゝに立よしもなく又今更に祟りを怕れて如何おすべきと密えけば阿蓮も再び驚き怕れて綷の破れを補繕ん才覺とてれなかりけり斯り去程に妙潮ハ黑五郎が揮切て逃るを追ず忙しく啓十郎等が傍らに來つゝ件の事の趣きを聞と雖も些とも騷がす暫く頭を傾けて莞爾と笑つゝ私語やう此期に及ひ時を移して人ゐ知れなば解死人の罪を遁るゝ處わらんや妾宜しく詮方あり是を物怪の幸ひにして御身兩個連添て永く娛まんと思ひ給はゝ骨折賃は五十兩又其上に此庵室の普請造作よろづの施主になりて不自由させ給はずば宜しく計ひ參らせん夏冬の着物月の小遣ひ錢まで永く施主になり給ふやと問を啓十郎は聞あへず其儀は勿論心得たり術よく事の治らば骨折貨ハ望みに任せん疾々計ひ給ひねといへば阿蓮も諸共に手を合しつゝ賴むおぞ妙潮さてこそと點頭て

然らば早く用意をすべし其謀計は箇樣〳〵云々なりと密語を倶に打聞啓十郎阿蓮开は妙なりと悦びて等しく用意をしたりける去程に妙潮は先剪刀とりて武太郎が舌を引出し切取て开を妙汐が口にくゝませ又武太郎が吐たる血液を妙汐が口の邊り那所此所へ塗付て兩個の死骸を押重ね其爲体武太郎が妙汐を押轉して强て犯さんとしたる折妙汐に苦しきまゝに武太郎が舌を咬切其身も陰門を破られて倶に死去たる如くに拵へ偖啓十郎と阿蓮にも後の事さへ示し合せて暗に宿所へ皈し遣し又妙潮は程遠からぬ鄉人の家に趣きて竇しやかに告るやう妾は今朝所用ありて云々の所へ赴きて只今皈り來つゝ見れば大變なる事侍るなり疾庵室に赴きて事の容子を見給ひてよといふ面色さへ常に變りて最忙てたるやうなれば鄉人等ハ訝がりながら事の仔細を問隙もなく妙潮を立して尼の庵へ來て見れば無慘なるかな武太郎は妙汐を押倒して伏重りて死してあり其爲体問でも去る邪淫により諸共に思はず命を殞せ去ならんと思いざる者なかりしかば且驚き且あきれて先武太郎の女房おれんに事の由を告んとて鄉人等一個二個件の宿所へ走り行て事云々と告知せれば女房おれんは痛く驚きたる面色しつゝそが儘に鄉人等と諸倶ゐ尼が庵へ走り來て事の容子を見つ聞つ面目なやと許りに袖に雨なす空淚良夫を恨み妙潮に詫て只管穩便の計ひを賴めども兩個とも命を落せし事にしあればうちも置れず則ち事の趣きを三好の城へ訴へたり之により三好長良の家從なりける蔦松加闌太と呼るゝ者組子幾人か引連て妙潮が庵に來つゝ武太郎と妙汐が横死の趣きを鬧糺し其亡骸を撿察するに疑はしき事なきにあらねど三好長良の執事なりける船舘幕左衛門春景は啓十郎が本妻呉服が叔父なりければ啓十郎は忍びやかに其かたさまに物を進りて彼妙潮は某と脱れ難き族縁あり術よく計らひ給へかしと密語拵へたりければ加闌太は其心を得て疑はしきを强ち糺さず是全く武太郎が兼て小比丘尼妙汐を口說などせし事

ありけんを僧十二三の小比丘尼なれば何も難面もてなせしを武太郎執ねく附つ廻りて庵主妙潮の他行を窺ひ此小比丘尼を押転ばして本意を遂んとしたる折妙汐は苦しき儘に思はず武太郎が舌を食切其身も胸をふされ且陰門を破られて死たるに疑ひなし武太郎も見悪からぬ妻さへあるに如何にぞや尋常人の娘にもある事か假初にも佛門に入たりたる小比丘尼を强て犯さんとせしのみならず婬慾によりて害したる其罪輕きにあらねども其身も舌を咬切れて倶に即死に及びしかば今更是非の沙汰に及ばず妙汐の亡骸も尼が隨意葬るべし又武太郎が亡骸は妻のかれんに取するなり皆是旨を得よかしと厳重に言渡して三好の城にぞ回りける郷人等は思ひしより事安らかに果たるは原來小比丘尼妙汐が兩親は世を去て親類もなき者なるに武太郎も又墓々しき親類もなく縁者もあらず剩さへ弟武二郎は阿波の國へ赴きて折柄此地にあらざれば障りを言べき者もなく妙潮の謀計思ひの儘に行はれて啓十郎ハ夜毎〳〵に武太郎か宿所に來つゝかれんと忍び合まく思へどかれんが爲には繼娘なる琴柱は今年十一にて殊に怜悧ものなれば流石に憚りなきにあらず然れども小夜更て彼が能眠りし折或は遠く使に出され或は墓參りなどに行し折などには合圖にまかし出て來てかれんと忍び逢けるを郷人等は未だ知ねど武太郎が老實なる美顏妻を持ながら小比丘尼を犯さんとて供に命を落せしは日頃の氣質に似氣もなく思案の外の珍事なり別に譯ある事ならずやと呟きつ眉顰めて疑かふものもありしかど然とて見留し事なきに口に出さんは偵にて苦々しくぞ思ける〇去程に大原武二郎武松は向に主君の供に立て阿波の國へ赴きしに往復の事なりければ彼地に久しく召も置れず一月餘りにして身の暇を賜はりければ頓て尼が崎へ歸り來て歸城の由を當家の執事船舘幕左衛門へ屆けなどして此日は休息する程に兄武太郎の横死の由を暗に告る者ありければ武二郎聞つゝ駭きて且疑ひ且哭くのみ此日は已に暮にければ次の日一個の奴僕を隨へて兄武太郎の宿所に赴き事云々と音問するにかれんは此日琴柱をば父の墓參りに遣したり兼て合圖をもしたりしかば啓十郎が來るならんと思へば髮わけ化粧して今か〳〵と待程に待人は來ず武二郎が早く阿波より歸り來て門邊に佇みたりけるをかれんも垣間見驚きながら手早く髮を解ほどきて櫛卷にしわがね紅に白粉を洗ひ落して漸くに出迎へ开ハ武二郎殿恙もなく何の程にか皈り給ひたる琴柱も御寺へ遣したるに妾は今朝より痞發りて打臥てありしかば暫く待せ侍りたり卒此方へとさりげなく座敷へ誘ひ茶を進めて恙なきを祝するにぞ武二郎愁ひの眉を嚬めて某昨日當所に皈りて人の噂に驚き思ふ我兄は不慮の事にて世になき人になり給ひしといふは實に候かと問れてかれんは淚を拭ひ世に耻かしき良夫の不所存人の噂さに聞給ひなば今更具に告るに及ばず思案の外とハ云ながら面目もなき非業の最期跡に殘りし此身の行末察し給へと許りによゝと泣つゝ伏沈めば武二郎も慰めかねて吾兄に老實にて白痴き所爲をなす人ならず夫には別に譯ありて人に計られ給ひしが心得がたき事なれども諺にいふ死人に口なし彼小比丘尼も諸共に命を落せしよしなれば仇ありとても今更に知べきよすがはなきものから天道賊を照し給へは遂に虛實現はれて耻を清む折もあるべし和女は年猶若かればば再びよすがも幾等もあらん又こそ音信申さんとて兄の位牌に回向しつゝ暇乞して立出にけり〇斯て又武二郎は菩提所へ赴きて歸城のよしを兄武太郎の墓に告んと思ひつゝ其方をさして急ぐ程に琴柱は寺より歸るに逢けり武二郎はまことに好折なりと思ふにぞ奴僕に花を買取て早く菩提所へ赴きて墓の掃除をして待べし我は暫く用事あれば後より行んと心得させて此所より前へ走らせ其後琴柱を木蔭に招ぎて昨日阿波より歸りし事且武太郎が横死の赴き日頃の事其日の情況聞たる事はなかりしやと問に琴柱は打泣て問せ給へる事ながら正しく聞たる事はなき御身の

兼て父樣に阿波より皈り來ぬる迄商賈ハな出給ひぞと止めて金を送り給ひしその甲斐もなく母樣の進めて日毎に商賈にいつもの如く出給ひき然るに彼日玆等にて癩病と呼るゝ乞食妙潮庵へ赴きて庵主の尼と何事やらん物爭ひをしたる事あり我父樣の事ありけるも同じ庵同じ折にぞ候るめり然らば件の癩病を敲かば知よし有もやせんと噂せし人ありけるを思はず漏きゝ侍りにきといふに武二郎點頭て开は宜事を聞つるかな其事必らず故あるべし其癩病は何處に居る委しく告よ如何ぞやと問ば琴柱は四邊を見返り彼癩病ハ這樣〳〵云々の乞食にて野臥なれば宿所は侍らずされとも此等で隱れなければ尋ね給はゞ紛れハあらじといふに武二郎は又點頭て然らば是にて立別れん件の事は忘れても繼母にも其他の人にも秘めよ知する事なかれ母には早く死に別れ一個の親は非業の最期皈らぬ死出の山吹の身にてそならぬ繼母に浩る哭きは和女の不幸さぞな苦しき事多からめ又てそ逢ん耐忍せよと慰められつ慰むる爰に親身の叔父姪が歎きは同じ愛ことを云も盡さで別れけり已にして武二郎ハ頓て琴柱に立別れて行こと未た百歩に過ず忽ち後に人ありてやよ喃旦那待給へ侍せ給へと呼かくるを武二郎急に見返れば是則ち他の人ならず又彼乞食黑五郎なり其時黑五郎は聲を密めて只今姪子の噂に聞れし某ハ此等の人に癩と呼るゝ野臥なり和主が姪子と密談を圖らず彼所で立聽て武太郎主の御舍弟にて大力武勇隱れもなき大原武二郎樣なる事を初めて聞知たりければ御爲と思ふて呼掛たり暫し木蔭に寄せ給へといふに武二郎點頭て言るゝ趣き心得たり吾も其方に逢まく思ひし好折からにて幸ひなるかな卒々と云ながら供に木蔭に立寄ければ黑五郎聲をひそめて某ハ日頃ゟ武太郎ぬしの情を受て窮殘りし餅のある折は幾度か給はりて飢を凌ぎし事多かり然るに往る日武太郎主の暗に我等に宣ふやふ我妻阿蓮は何の間にか西門屋啓十郎といふ浪華に名たゝる大豪商の此地の出店に逗留してあるに忍

び逢こと度々なり其仲宿ハ程遠からぬ庵主の尼妙潮なり我已に臭付たれば彼等が密會しぬる折尼が庵へ踏込で押捉へんと思へども身一ッにてハ不便なりよりて其方を賴むなり爭で我等に力を戮して此憤りを晴させ吳よと他事なく語らひ給ひしより某日頃の情を感じて異義なく賴まれ奉つり偖其折の相圖と定めて彼啓十郎が妙潮庵へ忍び來て武太郎ぬしの內室と忍ひ逢ぬる折を窺ひ裏表より押蒐て某ハ仲宿の庵主の尼を捉へ武太郎ぬしは奧へ踏込奸夫淫婦を捉へんとし給ひければ口惜や啓十郎が手練の當身ゎ武太郎主は胸を打れて仰反倒れ給ひしかば某一個三個に敵すべくもあらざれば引外し逃れ出て辛く命を汲留たり斯いふ譯にて候へば武太郎主は奸夫淫婦に殺されたるに疑ひなし开を這奴等が惡巧みにて小比丘尼さへ縊り殺して事云々と拵へて後難を遁れしなり某此義を知と雖も柔弱不具なる乞食の身にて勢ひ高き豪家を相手に訴へんよしもなく專無念に候ひき兄の仇を報せんとし給ハヾ某を證人にして訴へ給へ何方までも罷り出で件の由を申すべしといふに武二郎悅びて吾推量に違ふことなく悼しや吾兄は奸夫淫婦に害されてよなき耻は濡衣の乾よしとてし難かりしを幸ひにして好證人を得たるし方に天の賜物哭きの內の悅びなり其義を以て訴へ申して兄の恨を晴すべし其方し常に何所に居ぞと問ば黑五郎さん候某し因果橋の土手の邊りに起臥すれば彼所に至りて尋ね給へ御用の折ハ何時にても呼せ給へ何所へも行こと候はずと言に武二郎其意を得て後日の手配兎に角と牒合して別れけりされば黑五郎ハ武二郎を武松と知るとは雖も彼には其身の素性を明さず只妙潮等に彼折の恨みを返さん爲にのみ實盲空言打雜て事云々と武二郎に告て證人になりたるなり黑五郎が面影の變りし故に彼を伯母鐙黑五郎かなれる果とは思ひかけず且妙潮は其身の故主彼鎌倉なる大佛屋五文次が離緣の妻沖見なりしと未た知ず況て件の啓十郎を黑五郎の子の黑市なりとは神ならぬ身知る由

兼て父樣に阿波より皈り來ぬる迄商賣ゐな出給ひぞと止めて金を送り給ひしその甲斐もなく母樣の進めて日每に商賣にいつもの如く出給ひき然るに彼日茲等にて癩病と呼るゝ乞食妙潮庵へ赴きて庵主の尼と何事やらん物爭ひをしたる事あり我父樣の事ありけるも同じ庵同じ折にぞ侍るめり然らば件の癩病を敲かば知よし有もやせんと噂せし人ありけるを思はず漏きゝ侍りにきといふに武二郎點頭て开は宜事を聞つるかな其事必らず故あるべし其癩病は何處に居る委しく告よ如何ぞやと問ば琴柱は四邊を見返り彼癩病ハ這樣〳〵云々の乞食にて野臥なれば宿所は侍らずされども此等で隱れなければ尋ね給はゞ紛れハあらじといふに武二郎は又點頭て然らば是にて立別れん件の事は忘れても繼母にも其他の人にも秘めよ知する事なかれ母には早く死に別れ一個の親は非業の最期皈らぬ死出の山吹の身にてそならね繼母に浩る哭きは和女の不幸さぞな苦しき事多からめ又こそ逢ん耐忍せよと慰められつ慰むる爰に親身の叔父姪が歎きは同じ憂ことを云も盡さで別れけり已にして武二郎ハ頓て琴柱に立別れて行こと未た百歩に過ず忽ち後に人ありてやよ喃旦那待給へ侍せ給へと呼かくるを武二郎急に見返れば是則ち他の人ならず又彼乞食黑五郎なり其時黑五郎は聲を密めて只今姪子の噂に聞れ玄某ハ此等の人に癩と呼るゝ野臥なり和主が姪子と密談を圖らず彼所で立聽て武太郎主の御舍弟にて大力武勇隱れもなき大原武二郎樣なる事を初めて聞知たりければ御爲と思ふて呼掛たり暫し木蔭に寄せ給へといふに武二郎點頭て言るゝ趣き心得たり吾も其方に逢まく思ひし好折からにて幸ひなるかな卒々と云ながら供に木蔭に立寄ければ黑五郎聲をひそめて某ハ日頃ゟ武太郎ぬ玄の情を受て零廢りし餅のある折は幾度か給はりて飢を凌ぎし事多かり然るに徃る日武太郎主の暗に我等に宣ふやふ我妻阿蓮は何の間にか西門屋啓十郎といふ浪華に名たゝる大豪商の此地の出店に逗留してあるに忍び逢こと度々なり其仲宿ハ程遠からぬ庵主の尼妙潮なり我已に臭付たれば彼等が密會しぬる折尼が庵へ踏込で押捉へんと思へども身一ッにてハ不便なりよりて其方を頼むなり爭で我等に力を戮して此憤りを晴させ呉よと他事なく語らひ給ひ玄より某日頃の情を感じて異義なく頼まれ奉つり偖其折の相圖と定めて彼啓十郎が妙潮庵へ忍び來て武太郎ぬしの內室と忍ひ逢ぬる折を窺ひ裏表より押寬て某ハ仲宿の庵主の尼を捉へ武太郎ぬしは奧へ踏込奸夫淫婦を捉へんとし給ひければ口惜や啓十郎が手練の當身ゐ武太郎主は胸を打れて仰反倒れ給ひしかば某一個三個に敵すべくもあらざれば引外玄逃れ出て辛く命を汲留たり斯いふ譯にて候へば武太郎主は奸夫淫婦に殺されたるに疑ひなし开を這奴等が惡巧みにて小比丘尼さへ縊り殺して事云々と拵へて後難を遁れしなり某此義を知と雖も柔弱不具なる乞食の身にて勢ひ高き豪家を相手に訴へんよしもなく專無念に候ひき兄の仇を報んとし給ハヾ某を証人にして訴へ給へ何方までも罷り出で件の由を申すべしといふに武二郎悅びて吾推量に違ふことなく悼しや吾兄は奸夫淫婦に害されてよなき恥は濡衣の乾よしとてヿ難かりしを幸ひにして好證人を得たるヿ方に天の賜物哭きの内の悅びなり其義を以て訴へ申して兄の恨を晴すべし其方ヿ常に何所に居るぞと問ば黑五郎さん候某ヿ因果橋の土手の邊りに起臥すれば彼所に至りて尋ね給へ御用の折ハ何時にても呼せ給へ何所へも行こと候はずと言に武二郎其意を得て後日の手配兎に角と牒合して別れけりされば黑五郎ハ武二郎を武松と知るとは雖も彼には其身の素性を明さず只妙潮等に彼折の恨みを返さん爲にのみ實言空言打雜て事云々と武二郎に告て證人になりたるなり黑五郎が面影の變り玄故に彼を伯母聟黑五郎かなれる果とは思ひかけず且妙潮は其身の故主彼鎌倉なる大佛屋五文次が離緣の妻沖見なり玄と未た知ず況て件の啓十郎を黑五郎の子の黑市なりとは神ならぬ身知る由

なけれど正しき證據を得たりしかば獨憤り胸に滿たり兄の恨を返さんと思ふ心の忙がれ之を其日は先墓參りして兄武太郎の墓に花を手向程なく恨を返そべき便りを得たる由を告て其靈魂を吊ひ慰め次の日一通の訴書を以て啓十郎阿遂妙潮等が惡事の趣き證人を引子細を演て兄の恨を返させ給へと事審かに聞に上げり此時三好長長は阿波に在國なりければ第一の郎等船館幕左衛門景春件の訴書を一覧して次の日大原武二郎を問注所へ召出し諸役人列座にて船館幕左衛門の云けるやう其方の兄武太郎が横死の事對手の小比丘尼妙汐も諸共に死したれば容子定かに知るよしなけれどそのことの爲体外に仇あるべくもあらず然るに其方證人ありとて强て訴へ願はるより猶また詮義を遂げらるべし其證人をともなひて明日また〱罷り出べし此義心得候へと嚴重に言渡しけりされば又西門屋啓十郎は大原武二郎が阿波より皈り來り彼乞食の起廢がことの證人と申したてゝ啓十郎阿遂と密通のことならびに妙潮とともにひそかに計りて武太郎を殺したる惡事の趣き這樣〱と審かに訴たへ出て兄の恨みを返さんと願ふ由を幕左衛門が家の老管目谷小内とゆふ者より忍びやかに告にければ啓十郎深く驚き怕れてよしを妙潮れれん等に告知せ兎に角と商量するに所詮起廢を押片付て證人だになくなれば武二郎如何に思ふとも彼が願ひは立べからず此義を早く計ひぬへと詞等之く進めしを啓十郎沈吟じて起廢めを殺すは安けれども乞食仲間の知る事あらば又々事の難義になるべし三好殿の家來人なる蔦松加閻太は吾妻吳服と内緣ある船館殿に取立られたる者なりければ彼人も我と原より疎からず這樣〱に計ひて彼起廢に情をかけて遠く他郷へ走らせなば後に用ふる事もあらん吾等に任せぬへとて走りて加閻太が宿所に赴き事の機密を私語ければ加閻太異議なく頷れてその夜は一兩人の奴僕を從へ因果橋へ赴きて土手の筵に臥したりける黑五郎を引出さして新刄の太刀を試すと詐り己に奴僕に取籠さして斬て棄んと犇めくをり啓十郎と妙潮は牒合せし事なれば其等を過る面持してことの容子を見つるにより憐む体にもてなしてこれは我等が兼て知る乞食にて侍るなり人を救ふも佛の慈悲尼にゐへと種々に詞を盡して詑にけり加閻太是を打聞て流石は出家の衣にかけて命乞をせらるゝを聞ざらんは無慘なるべし命冥加のある奴かなと呟きつ睨まへて白鞘引提げ歸り行を須臾見送る妙潮啓十郎黑五郎に打對て犬畜生でも恩を知る其方の必死を救ひしは願むべきよしあればなりされば以前の恨みを棄て我々が荷擔人にならんとならば今爰にて金三十兩を取すべし今宵の内に何所へなりとも早く影を隱せかし若武二郎が追かけて遁れ難き仕義になるとも其折は寢返りて初めと口を違へなば諺にいふ乞食に棒打武二郎は詮方なくて彼身の難に及ぶべし能せよかしと密語示して啓十郎は懷中より件の金を取出して黑五郎に取するにぞ慾に目のなき黑五郎は我子と知ねば仇となり味方ともなる惡徒根生一義に及ばず承引て早くも影を隱しけり啓十郎は證人の難義を已に遁れしかども又妙潮を庵に置なば武二郎が尋ね來る事あるべしと疑みて彼をば浪華へ遣して便利よき所に忍ばせ偖武二郎を除く手術を暗に幕左衛門に賴み置て漸く事の治るまで有馬へ行て遊んとて通し駕籠に打乘つゝ早く彼地に赴きて暫く湯治したりけり

第二編

去程に大原武二郎は次の日因果橋の邊りへ赴きて彼癩病を尋ぬるに何地へ行しか居らざれば猶此所彼處と尋ね歩行て人にも問ひ他の乞食にも問つゝ只管尋ねけれども行衛を知者なかりけり武二郎深く不審ながら是非なく由を聞えあげ彼證人は病發りて打臥いゑば今日は相倶之難し兩三日には癒すべしと申立て日延を願ひ次の日も此所彼所となく乞食の所在を尋ぬる事早二三日

に及びしかど絶て行衛の知れざりければ深く心に疑ひて若啓十郎が聞知りて癩病を殺しやしせん假令起癡なくなりたりとも彼仲宿の尼を打たゞば悪事を白状せざらんやと思案をしつゝ妙潮が庵室に赴きしに彼も又庵にあらず事皆喰も違ひては獨疑ひ迷ふのみ其夕暮に宿所に歸れば折から幕左衛門より使をもて頼みやしと度一義あれば此使と諸倶に只今參出ゐはるべしと忙しげに言せければ武二郎是を打聞て何事やらんと思へども當家第一の執事なる船舘の所用とあれば否と言れず使と共に幕左衛門の宿所に來にけり其時船舘の家の老管なりける目谷小内の出迎へて客座敷にて茶を進め主人の口状を演るやう招ぎやす事他の義にあらず徃る夜より此所に變化の物の出ることあり宛がら女の幽靈に似たり是により陰陽師に占せせしに船舘の家の重寶なる鹽竈の香爐あり此祟りならんといへり香爐ハ元より非情の物なり祟をなさん物にあらず和主は武勇の聞えあれば暗に頼み參する願ふは今宵止宿して見届けてゐはるべし此義面談にて申すべきを右に付昨日より物忌して籠り居れり失禮ながら老管をもて頼み申すなり彌々香爐の祟りなるや事の虚實を知れん爲に香爐を預け參らする是を此等に措れて御試し下さるべしと懇に演示して携へ出たる件の香爐を武二郎に見せ抔して盃を勸めて欵侍けり武二郎は心得ぬ事なりけりと思へども固辭て聴したりと云れん如何許り事あるべきやと思ひながらもさりげなき御頼みの由承知せりさらば今宵は通夜致して御厄介になるべけれと答へて香爐を側に差措その欵侍を辭めども早種々の肴を出して小内並びに若徒等が盃の對手になりて交代に強ければ武二郎は困じ果て思はずも酔にけり斯て饗應事果て此夜も已に更にければ稍杯盤を取納めて皆々辭して退きけり斯て武二郎は只一個客座敷に通夜して居り深更になる儘に酒の酔いたく上りて頻りに眠を催すを猶睡らじと氣を勵ませども次第〳〵に堪がたくて暫時目睡其隙に忽まち一個の曲者あ

り客座敷に忍び入て武二郎が側に置たる彼鹽竈の香爐を取りて走り出さんとせし程に武二郎早く目を覺して其方を佶度見返れば白き衣着て髪を乱し其さま女の幽靈にやと思ふ許りに怪しき曲者件の香爐を掻攫いて逃るを透さず武二郎は曲者まてと呼かけて刀を取りて追蒐れば彼幽靈は椽側より早廣庭へ逃出るを猶逃さじと逃蒐る折から二十日餘りの事にして黒白も分ぬ暗なりければ武二郎は追縋りて走り出たる庭面に掛繩あるを知ざれば件の繩に足を搦まれ忽ち動と伏轉ぶば待設けたる若徒奴僕盗人入ぬと呼わり〳〵前後左右の木蔭より等しくいつと走り出て起んとしたる武二郎が手足を取りすくめ足を捉へて折重りて縛りけり其時主個幕左衛門ハ手燭を取つゝ奥より出て事の容子を尋れは若徒奴僕詞等しく今宵盗人の入いひしを我々早く眠り覺て追掛出つゝ辛くして生捕りしなりと云せせも果ず武二郎は怒れる聲を揮立つて人々麁忽の事をないひそ我は大原武二郎なり今宵船舘どの、汝頼みにより當所の變化を見届けん爲客坐しきに通夜して在しに果して怪しき曲者あり側に措れし香爐を奪ふて走り出るを捕へんとて追蒐たる此庭面にて物にげしとひ轉びしのみといふを幕左衛門冷笑ひて我家には變化なんとの出たる事は絶てなく又武二郎を招ぎし事あらず論より証據懐中に盗みし物のありもやせん皆々早く詮索せよといふ程に一兩個早挑灯を照し來つ見れば果して鹽竈の香盧は碎けて武太郎が懐りにあり俗は此香爐を盗まんとて忍び入しに疑ひなし侍士に似氣なき悪事なりとて言解よしを些とも聞ず曉の朝武二郎を獄舎へ遣し繋せてよしを阿波へ聞えあげ死罪に行ふべき者なりとて禁獄等閑ならざりけり以有也幕左衛門は啓十郎と内縁あれば兼て暗に牒合して彼が爲後々まで後安くすべけれとて計りて斯は武二郎を無寃の罪に踏しけり○されば琴柱は叔父武二郎が盗賊の罪ありとて禁獄せられし趣きを傳へ聞つゝ愁き歎きて繼母阿蓮が漏目を忍びて船舘幕左衛門が宿所に赴

き慈悲の御赦免を願ふてと再たび三たびに及びしかバ幕左衛門立出て汝が願ひ不愍なれども武二郎が罪輕からず何條故なく免さるべき但し上の御物を盗ミたるにあらざれども我秘藏せる瞻竈の香爐を盗み剰さへ打碎たる事なれば其償ひとして今二百両速かに納めなば死罪一等を赦さるべし此義を心得ひへと嚴重に言渡しけり這乜媢館が難題にて所詮小女娘の分際にて二百兩は扨置十兩の金も調ふべからず若又餘處に金主ありて二百兩を差出さば安陶器の香爐の價に過分の利を得る事なれば其折に又詮方あらんと思案をしたる貪慾の答へを琴柱は曉ねども其金あらば叔父の命を助けられんと言れしを切ての事に思ひて宿所に罷りて獨心を碎けども二百兩といふ大金の調ふべくも有ざれ乜此上は神佛の冥助を祈る外なしと思案をしつ、隙を窺ひ宿所より程遠からぬ因果橋の邊りに赴き川水に身を浸して垢離を取こと七日ばかり心に天滿天神の冥助を祈り丹精を凝し願く乜叔父の爲に二百兩の金を得さして無寃の縲目を解しめ給へと祈念する事已にして七日の結願に及びし程に思ハず琴柱が足の邊りに流れか、る物ありしを何ぞと思ひて取上見るに奇なる哉縞の財布にて確も最重かりければ忙しく其紐を解回して中見るに這ハ二包の金にして其高二百兩許りなり琴柱ハ是を見てしより夢かと許り嬉しさの天へも昇る心地乜て打戴き〳〵岸へ上らんとせし折から由緣ある武家に給事する女中ならんと覺しく年は五十餘りなるが從者五七人從へて轎をば後邊につらせ因果橋を打渡來る程に琴柱が水垢離をとりし容体を橋の上より倩々見て心得難く思ひけん供若徒を走らせて只今汀へ歸り上り忙しく身を拭ひつゝ岸の木の枝に掛置たる衣物を着て帶引結ぶ琴柱を邊りへ招きよせて其方は十か十一になる女童には似氣もなく今水垢離をとりし容体如何なる大願あるやらん若や親の病氣平癒を祈んとての所爲なるか如何なる者の娘ぞやと問れて琴柱は隱すによしなく妾は此里の餅商人大原

武太郎が娘にて琴柱と呼る、者に侍る座の母は世をさりて繼母御に養はる父は去る日横死してまだ光陽も果ざるに親と賴む一個の叔父大原武二郎武松と呼なせ侍士は頭主三好殿に仕へまつるに無寃の罪に捉はれて殺さるべしと聞えしかば夫を救はんと欲するに二百兩の金なくて乜願ひ叶はずともあるにより日頃信ずる天滿宮の冥助を禱り申さん爲に母には隱して日每〳〵に此川水に水垢離をとる事今日乜七日に及びて不測に御利益侍りにきといふに懃く件の女房さては和女は我姪の落葉が娘でありしよな傳聞たる事もやある吾身は則ち和女の大伯母京なる管頭家の夫人に年來仕へ奉まつりて栞戸と呼るゝなり初めは最下ざまなる下婢ものでありけるを給事等閑なく乜年頃になるまで次第〳〵に御取立御恩によりて思乜ずも今乜女老になされたり然るに管頭家の夫人と三好殿の內室とも御內緣あるにより這回御使を承はり此地へ來つるも昨日今日逗留の內閑を得て此地の名所をみればやとてそゞろ歩行をせし程にこの地にありとはれもひもかけぬ姪甥なる武太郎の娘に逢しは互ひの僥倖委しき容子も聞まほし此方へ來よと伴ひて道の邊りの茶店に憩ひ偖武太郎が橫死の趣き又後妻の阿蓮がこと又武二郎が人と爲禁獄せられし罪の始末並びに琴柱か孝順を神も憐ミぬひけん不測に得たる金の事聞に淚ぞ玉はしる世に云親身の淚よりやかたミに積る物語に時の移るを知ざりけり栞戸僅に淚を止めて落葉といひ武太郎殿さへ世を早くせられたる亓は哭くとも返すによしなし琴柱私女が孝順の信心空しからずして武二郎殿の罪を贖ふ二百兩の金を得たらんには先彼人を救ふべし我身宜しく圖はんに諸倶に船館の宿所へ行ねと密語示してそが儘琴柱を伴ひつゝ偖幕左衛門の宿所へ赴き即ち主個に對面して武二郎の姪の琴柱か叔父の死罪を贖ん爲に兼て云れし數の如く二百金を調達して持參せしよしを告て件の金を渡しけり爰に於て幕左衛門は今更否と言によしなく其願ミを受入て浩れば

武二郎が死罪を宥めし由を主君に聞にあげて阿波の國へ送り遣し淡路の領地へ配流べしといふに栞戸其意を得て然らば武二郎に暫時對面をせまくほし都歸りも程遠からねば今日對面を赦しゐへと只管に賴みけり栞戸は傾管家にて給事する老女なれば幕左衛門は辭みかねて頓て大原武二郎を獄舍より引出さして栞戸琴柱等に逢せけり去程に武二郎ハ初めて栞戸に對面して助けを得たる事を喜び且琴柱が孝順世に勝れて得難かるべき許多の金の不測にも手に入て其身の必死を救ひたるよしを聞つゝ涙汲まで感ずる事大方ならず某當家の譜代にあらねば幕左衛門は啓十郎と内緣あるを知らざりしに獄卒等が噂にて聞しる事を得たりしかば遂に彼等が奸計に陷されたるを悟ると雖も今更脫るゝよしなかりしを圖らず琴柱が孝順にて死罪を宥められし事是切てもの僥倖なり然れども某ハ淡路へ流罪の罪定まれば再會は計り難かり賴み申すし栞戸殿琴柱が上を兎も角も宜しく計らひ給はれかしといふにて戸點頭て其義は心易かるべし妾都へ携へ皈りて宜しく養ひ侍るべしと懇切に慰めて琴柱を宿所へ歸し遣し偖武二郎に別を告て又從者を從へつゝ武太郎が宿所へ赴きけり尋るに琴柱が因果橋の邊りにて水垢離をとりし折不測に得たる二百兩は向に黒五郎が都にて綿市山樹を斬殺して盜み取たる二百金なり彼折に黒五郎は丸木橋を踏落して大和川に溺れし程に財布と共に件の金を失ひし由は第二輯に見たり然るに其金は川筋を流れ〳〵て海に入り大物の浦よりして又尼が崎の枝川に入しならん其ハ彼財布にて知るしよし後に北野の神の示現あり此折は浩るべしとは悟る者なかりしなり這は後々の卷に到りて說分つべき事なるを詰めて爰に知すのみ善惡必らず應報なり因果橋の名空しからずと言べし○されば又姪婦阿蓮は去る日大原武二郎が阿波より皈り來つるより易き心もなかりしに啓十郎が計ひて本妻吳服の伯父幕左衛門が手を借て彼をば盜賊の罪に陷して獄舍に繫れしと聞にしかば

後易しと思ふのゝ啓十郎は事の治るまで有馬へ行て湯治せんとて假初に別れしより徒然に堪ざりしに或日琴柱は寺參りにとて朝より出て久しく皈らず啓十郎も此地にあらず其も亦却つて僥倖なれども波し湯治に行て暫く逢よしなき折なれば心に疑ひ思ふ程に七ツ下りになりし頃琴柱が歸り來にければ阿蓮ハ強く罵り怒りて遲きを咎めもくてを侮り嚴しく折檻する折から栞戸ハ轎に打乘つゝ尋ね來て頓て阿蓮に對面しつゝ琴柱が爲には母方の大伯母なるよしを具に告て琴柱を都へ伴ひて養ハん事を言しかば阿蓮は暗に悅びて一義にも及ばず其意に任して琴柱を栞戸に渡しけり○かくて栞戸ハ此地の所用果しかば則はち琴柱を伴ひて都へ皈へり上りけり是より琴柱し辛き目を見ず伯母の局に養なはれて上さまの事を見習ふに其性質かりければ栞戸愈々愛悅びて年十五六になるならば願ひ申して諸共に給事をさせんとて萬の事を敎へけり去程に武二郎は幕左衛門が計らひにより僅に死罪を宥められて阿波の國へ送りやられて淡路嶋へ流されければ是より後啓十郎阿蓮は憚る方もなし今須臾日柄もたゝば浪花の居宅へ引取れんとて其日を遲しと待程に妙潮も又武二郎が罪定りて阿波へ送られたるよしを傳へ聞て元の庵へ立回り日每に阿蓮と酒打飲て啓十郎が有馬より皈るを倶に待たりけり○爰に又黒五郎は去る夜啓十郎に一味して金三十兩貰ひし折早く尼が崎を逐電して浪花の方へ赴く程に獨心に思ふ樣今圖らずも三十両の大金を得たれども人に忌る、難病の身に纏たる此ざまにては活業もなし難し所詮有馬へ赴きて湯治して病を癒し元の身体になるならばよしや資本を失ふとも日雇を仮ても人並に世を渡る事安かるべしと思案をしつ、然るべき身の衣を買求め暗に旅裝ひを調ふるに有に任せし心さへ驕りて旅駕籠に打乘つゝ頓て有馬へ赴きて第一番の湯屋に至りて些少なる座敷一間を借切にして起臥しつゝ暫らく湯治したりけり○されば又西門屋啓十郎は去る日尼が崎の出店よ

り通し駕籠に打乗て有馬の温泉に赴きたれども詞かたきになるよしもなき供人一個三個にては萬づに不自由なる事も又は旅の事なれば盗賊幷びに悪徒の防ぎにとて浪花へ人を遣して親文具兵衛の時より店定抱へにしたる處の若者頭なる飛藏を呼けるに日頃啓十郎の幇間をもつ喜田意庵祝屋念藏等は啓十郎が尼が崎の店にありて久しく歸らざりけるを心元なく思ひたるに彼處より有馬へ行て湯治してありと聞て飛藏と諸共に有馬の宿に來にければ啓十郎悦びて彼等を對手に遊び暮す遊興に日を重ぬるを覺えず日毎に麗しき湯女を集めて彈せもしつ唄はせもして樂みありと思ひけり去程に黒五郎が座敷を借て湯治してある宿も啓十郎と同じ宿にて紙門ひとへを隔てたれども黒五郎は偵に聡て啓十郎には言かけず啓十郎も又彼趣殺か湯治の爲に同じ宿に逗留してあるよしを知れども知ぬ面色して人には告る事もなければ飛藏意庵念藏等は黒五郎の素性を知ず同じ宿なる旅客なりと思ふによりていつとなく物を言かけ言かけられて心易くぞなりにける斯て或日黒五郎は啓十郎が湯に入を見るに彼が臀に痣ありて形ちはつれ雪に似たりしかば心に深く不審て獨倩々思ふやう稚き時天滿にて親知ずの約束にて人の養子に遣したる我犢子なる黒市も彼人とす分違はぬ臀に痣ありけるに是彼に似たるも不測なり尋ねて見ばやと思案をしつゝ或日飛藏と言ふ序にて啓十郎が素性を尋ねて御身の旦那は實子か養子か親御は今も居升かとさりげもあらず問れたる飛藏は旅客を昔し天滿の邊りにて文具兵衛の文字八の頼みにより媒介して僅かの金に其子を貰せし物貰ひの浪人なりとは思ひもかけぬ事なれば役語ひの興に任して漫ろに口を走らせて啓十郎は貰ひ子なる事一伍一什を私語示して養ひ親の文字八は俄豪富なりし事啓十郎が代に到りて家は益々繁昌すれば浪花にて一といふとも三とは下らぬ大豪富なる事の趣き云々と落もなく物語りて現に人の僥倖は計り知られぬ物ぞかし今の旦那は物貰ひ

の浪人の子でありけれども宿世よりの果報にや大身代の子となり上りて榮耀榮花をせらるゝなり與の親は如何になりけん主之實の親あるよしを今も知ずにれはするならんと言に黒五郎は偖はと計り或は驚き或は悦ぶ腹の裏には種々に思ひ計るよしあるを悪徒なれば色にも出さず唯餘所々々しく回答をしつゝ其後運をぞ窺ける斯て其夜去黒五郎は更に又思案をするやう那西門屋啓十郎は吾子黒市なりし事今更に疑ふべからず然れども啓十郎が最稚かりし所相別れたる我身なるに彼は養父に誑かされて其身に恨みの親あるよしを今も知ずは名乘おふとも却つて實とすべからず又彼飛藏とやらんいふ男も往昔西門屋の主個に頼まれて天滿で我等に說勸めて黒市を貰ひ取たる其人にて有たりよ吾面影の變りしに年經て彼も頭の毛の都て眞白になりしかば我さへ見忘れたりけるに彼が自ら口走りて事云々といひければ是も脱さぬ証人なり要あるべし出入の魂膽千々に枕を碎きけり○去程に啓十郎は尼ヶ崎なる船舘幕左衛門より密書到來して大原武二郎を阿波へ送り遣はせし由を告知せ兼て死罪に行れんと思ひたる事なれども主君三好殿の沙汰として淡路へ流罪に行ふべしと阿波より下知せられしかば止事を得ず法の如くに取行ひたりけるなりされば大原武二郎は死なざる事を得たれども已に流人になりたれば繩の切たる釣瓶にて世は出る事なき者なり此義を心得給ひねと事審かに書たれども武太郎が娘琴柱か二百兩の金をもて叔父の死罪を贖なひたる夫等の事も猶隱して主君の下知と僞はりしも親疎によらず利に傾むく是小人の擬方便油斷のならぬ人心をよくも思はぬ啓十郎は見つゝ暗かに悦びて意庵念藏飛藏等をぞ僅浪花へ歸し遣し其身は尼が崎へ赴きて幕左衛門と其輩に音物を多く遣し猪阿蓮妙潮には猶又阿蓮を娶るべき手段を暗に談合して支度金を多く取せ迎ひの人をこさんとて浪花の居宅へ歸りけり斯て西門屋啓十郎は浪花の居宅へ立回りて本妻吳服幷びに力野卓二笳蘊三

個の妾等に告るやら吾尼が崎にて圖らずも阿蓮と呼なす妾を得たり彼は妙潮と云ふ尼の姪にて此外には親類なし迎への轎を遣して早く對面させんとて服心の手代を使として三四人の迎ひ人を尼が崎へ遣しけり去程に阿蓮は萬を妙潮と談合しつ、彼仕度金をもて衣服調度を求め調へ又武太郎か家具雜具を賣代なして其金をば謝禮の爲に妙潮に皆取せて浪花の便りを待程に迎ひの轎來にければ其供人を慰勞て此日浪花へ赴くにぞ妙潮も差添て早本宅へ來にければ啓十郎は酒宴を設けて婚姻の儀式宛がら本妻に異ならず其夜は阿蓮と共に臥床に入て偕老同穴の契りを重ねけり斯て其次の日に啓十郎は阿蓮を本妻呉服と三個の妾どもに引合はせて阿蓮を本妻の次に居らせ妾部屋をも阿蓮が部屋は萬不足なくものせしかば方野卓二莇藥等は心の裡に悦ばず各々妬く思へども威勢爭そふへくもあらざれば表向ばかり睦まじげに恨みを隱して交りけりされば又黑五郎は有馬の温泉に湯治する事二三十日に及びしに其身の難病此時に平癒すべき命運にやよりけん次第〳〵に本腹して只其瘡の跡あるのみ面も肌も人並に名殘なく癒たりければ悦ぶ事大方ならず浩れば浪花へ行て彼西門屋の啓十郎と産の親子の名乘をせんさる時は一生涯左り團扇で安樂に養はれん事勿論なり然なりとて頓て準備をしつゝ次の日有馬の宿を出て殊更道を急ぎつゝ早く浪花に來にければ西門屋の居宅に音信取次の者に打向ひて我等は此家の主個とは脱れ難き親類なり面談すべきよしありて來つるよしを傳へ給へといふに件の取次人は心得がたく思へども云れし儘に告しかば啓十郎も不審ながら先客座敷に迎へ入さして頓て對面する折に見れば去る日有馬にて同じ宿にありて湯治をしたる那奴郎の癩病なり其時啓十郎も思ふやう此奴は我取せたる金を早くも遣ひ果して强談に來つるなるべし見知ぬ面色して吾等と親類なるよしを云れしは和殿なるか吾等は些とも覺へあらず門違へにはいはずやと云せも果ず黑五郎は

阿々と打笑ひて否喃さな云給ひそ滿皿見知ぬ中でもなし尼が崎にて逢し折は我も和主を骨肉の親類なりとは知らざりしに有馬で湯治したる折見れば和主の臀にそつれ雪の形したる最大きなる一ッの痣あり是ぞ確な親子の證據我は和主の實の親なりと許りいふて猶疑はし審かに説示さん我は元山城國大原の郷人にて篠部黑五郎と呼れし者なり其後ゆゑありて妻と一個子を携へて和泉の堺へ移轉しつゝ九四郎と名を改めて商賣の爲に西國へ赴きたる折瀨戸の築山の邊りに埋め置たる貯金八百兩ありけるを用心の爲埋め置しに我妻遞馬は知ずして土取に其土を買たる折に件の金を掻攫はれて行衛も知ねば是より困貧身に迫りて妻の遞馬は果敢なく世をさり六才といへど年弱なりし黑市和主を携へて誘ひ步行し程は只天滿の邊りに袖乞の儘かに其日を送る程に吾子を貰はんといふ者あり親知ずの約束にて果敢なや二分と八百の手切金にて遣したる養の親の町處も名さへ定かに告ざれば逢瀨はあらじと思ひ絶て其錢金を資本にしつゝ小商賣でもせばやとて一個都へ赴きたるに愛でや難病にて面影さへに變り果て人交りのならざれば愈々乞食になりはてゝ此年來を過せしに又世にいづる時節到來有馬の湯にて病難本復剩へ我子黑市の所在を知りて廻り逢悦び何事か之に增べき斯ても疑ひ解ずやと一伍一件の物語を啓十郎は實とせず打聞ながら冷笑ひて怎と云るゝ事ながら吾親のありし時吾身は貰ひ子なるよしを露ばかりも聞たる事なし此身は當家根生の一個子誰とて知ぬ者はあらず臀に痣ある者は廣き浮世に幾等もあらん夫が證據になるべきやと云せも果ず黑五郎は怨れる聲を振立て分口說ても無得心親を疑ふ不孝もの天罰思ひ知らせんと罵りながら懐中に隱し持たる出刃庖丁を取出し閃かして啓十郎が左の胸を二寸ばかり斬たりける浩る折から次の間に容子を窺ふ飛藏は叶嗟とばかり走り出て頻りに狂ふ黑五郎を抱すくめ漸く宥めて啓十郎に密語やう旦那は知て在さんが此黑五郎とね

いふ人の兎に角と云るゝも滿皿になき事でもなし今更隠すよしもなし過去れし大旦那の何に付てもやぶさかなる貰ひ息子の手切金二分で濟せといれしを自腹を切て八百文増せしは我等が當座の計らひ其折證文の何處にか納めて有ならんと言を黒五郎打聞て其證文を見るにも及ばず親子分明ならざる時は互ひに其血を合して見るに實の親子は其血潮必らず一ッに寄ことあり親子ならねば一ッに寄らずと往昔よりいふ世の言種極めて由緒ある事ならん將々と云つゝも出刄庖丁を取上て自ら腕を裂きて啓十郎が疵口より流るゝ血潮と其身の血潮と合して見れば果して違はず磁器の銜をすふ如く血潮と血潮は凝つきて何れを分ずなりしかば啓十郎は今更に驚き愚ふ親子の再會不測〳〵と許りに又いふ由もなかりけり此時阿遊は表の方にて物蔭がしかりけるを若我上にあらずやと思へば胸の安からず拔足しつゝ出て來つ次の間に身を潜まして一伍一什を立聞ば母の山樹の物語にて兼て聞しる黒五郎の事の顛末親子の名乘に心暗に驚きて啓十郎は我父方の從弟どちにて有けるよしを聡るにつけて一方ならぬ妹背の縁なりけりと言に云れぬ此場の容子に愈々耳を側てけり暫くして啓十郎は飛藏に打向ひて已に親子の證據顯はれ我疑ひ解ぬれどもさればとて今更に我身の實の親ありとは家内の者にも知せ難く目親知らずに貰はれたる養父の位牌へ義理立す凡そ初めよりの趣きを知たるは和殿のみなれば扱ひを頼むのみと云つゝ側へに招ぎ寄て私語こと半時ばかり談じ果て恭々しく黒五郎に打對ひて吾身幼き頃の事は何ごとも辨へ知らねど已に血潮の證據あれば今更に爭ひ難かり然れども親知ずの約束にて貰はれたるよしなれば親にして親ならぬ義理あるを如何はせんさればとて心強く御身を粗略にせんとにはあらず委しき事は飛藏に聞給ひねと押宥めて其身は奥へ退きて飛藏をもて黒五郎に盃を勸めさせ大方ならず款待てさて金をもて手を切んとせしと黒五郎は承知せず猶六ヶ敷言募りて

事果べくもあらざりけり

第三編

斯て西門屋啓十郎は彼惡徒篠部黒五郎と親子の証據分明にて脱るゝ道のなかりしかども骨肉なかとて親を思ふ孝心は露ばかりも絶て是なき邪見の本姓原來奢り者の癖なれば外聞惡しと思ふのみ手切金もて親子の縁を切てそよけれと思案をしつゝ年來抱への窟頭飛藏に心を得させて金にて面をはらんとしたれど黒五郎は得心せず生涯此處に居しかりて身を老樂に養なはれずば啓十郎が惡事の趣き彼阿蓮か事までも官廳へ訴へ申して思ひしらせんと言により啓十郎は驚き怕れて出しやる事を得ならず折柄飛藏が隣長家に貸家ありと聞えしかば其空店を購ひ求めて黒五郎を其處に住はせ月毎に金三兩を賄ひ料に送らんとて扱はせたりければ黒五郎稍納得し件の家を住家としつゝ只酒を飲賭に耽りて己が隨意日を送れば彼三兩の賄ひ金は半月にだも足むとて屢々本家に赴きて强求ことの多かれども啓十郎は今更に爭ひかねて二兩三兩其度々に取せてぞ身災禍になるぬべき彼が口を塞がせける○去程に啓十郎は思ひの儘に計り負せて鍛金の阿蓮を娶りし頃圖らざりける親黒五郎の災禍の起りしに夫すら無異に治りければ頓て阿蓮と第一の妾にしつゝ寵愛して他處へも出ず有けるに諺に言ほしき物は隣の味噌にて我物ならぬ折にこそ人目を忍びて逢事の樂みは八汐にましたれ已に手活の花になりては趣き初めの如くにもあらずさればとて秋風の早く立べき中ならねども彼にも増たる婦女に世になからずやと思ふ程に今年の冬の中旬になりぬ折から道頓堀なる歌舞伎俳優の顔見世狂言繁昌して評判高く聞えしかば例の惡友喜出の意稚配屋念藏を伴ひて芝居見物に行たりけるに隣棧敷に一個の美人あり年の程は十八九ありて二十にもやなるべからん物の言ざま愛敬溢れて三十二相足ざる處なく玉をのべ

金を束ねて造るとも及び難しと見えたるに連なる男も良夫なるべし年の頃は二十二三にて醜男にはあらねども其妻の麗しきに競べて見れば強く劣りて錦の表に擬ひ八丈の表を着たるに事ならずされども彼も富たる者にや茶屋の欵待大方ならず處席まで食物を幾度となく持來り啓十郎は初めより件の美人に心迷ひて今日の眺めは是れなりけりとおもへば其日の狂言は中々目に止らず意庵念藏等が袂を引て事の心を知すれば意庵は早く其意を曉りて隣棧敷へ馴々しく肴物を言かけて女子の喜ぶ役者の評判何くれとなく語らふ程に啓十郎も其尾に付て這は憚りて侍れども持合せたればとて美人の夫へ盃をさすを流石に辭みかねけん是より互ひに打解て各々茶屋より肴を取寄或は菓子を取寄て夫を勸めつ送られて隔もあらずなりしかど件の美人は啓十郎を只見返りて打笑のみ未だ物をば言ざりしに其日の芝居の果しかば茶屋が迎ひに慌しく暇乞そら言あへず別れ〳〵になりにけり○斯て又啓十郎は此夜宿所に歸りても彼美人の事をのみ兎に角心に懸りしかば次の日念藏を遣して彼が茶屋に問せしに今日初めての客なれば名さへ定かに聞ざりき況て宿所も何所やらん知ずといふに詮方なければ是より後も忘れ兼て密に意菴念藏等と噂をしつゝ慰めがたき今年を仇に暮しけり○斯て其次の年の春如月の初めつかた例の意菴念藏が慌しく來て告るやう未だ知せ給はずや昨日最珍しき散しの摺物を引來れり是見給へと云つゝも懐中より取出すを啓十郎請取て開きて見れば大奉書に最麗しき花鳥の畫を彩色摺にしたる其裏に一編の和文あり事の心を讀見るに我等近江の觀音寺より近頃此地へ移轉したれど未だ親しき友もなし其友垣を結ばん爲に金襴會を興行す詩歌連俳琴棋書畫此他も遊藝淨瑠理長唄踊り下山の艶曲に至るまで世に一藝あるみやび男達ともに我家に來臨して各々藝を施し給はゞ是より交りを結ばんと欲す會日は二月十五日席を設けて待奉つる長堀の空花屋何某とありけるを啓十郎

は冷笑ひて實に珍しき物好なり此空花屋は如何なる者ぞと問れて意菴は膝を進めてさればとよ其事なれ此空花屋と聞えしは近江の觀音寺に隱れなき糠利名四郎といふ大盡の一個息子にて名は浮吉と呼るゝ者なり彼が父親名四郎も觀音寺にて一二を爭ふ大富家なるをもて觀音寺の城守佐々木殿の金銀の所用を承はり山吹色の光りをもて重き格式をさへ給はりて威勢肩を比ぶる者なし然るに其子浮吉は今年二十の若者なるが佐々木殿の寵愛し給ふ瓶子とかいふ婦女を物の隙より垣間見て戀慕の思ひに堪ざりけん便りを求めて艶書をつけしに其事早く人に知れて無慚や浮名の立しかば佐々木殿怒らせ給ひて速かに浮吉を搦め取て其罪を糺すべしと仰せしを思慮深き役人諫め申して今浮吉を罪し給はゞ彼が親名四郎も上を恨み奉りて必らず他處へ移り住べし然る時は誰か又軍用諸役の御用金を調達仕る者候べき願ふは瓶子を浮吉に賜りて彼が妻になさ事を得させ給はゞ彼身の喜びのみならず名四郎も又御恩を感じていよ〳〵出精仕らん是両全の御計ひ是に増ことはあらじと言語を盡したりしかば佐々木殿良思ひ返して遂に其儀に任せられ頓て瓶子を浮吉が妻にせよとて給りけり去程に浮吉も圖らず瓶子を見染しより思ひに絶ず艶書をつけしにまだ一言の返事も聞えず早く浮名を立られて如何なる祟りに遇もやすらん易き心もなかりしに誰か計らん彼瓶子を佐々木殿より賜りければ愁ひを返せし悦びば只是夢かと思ふのみ頓て祝言を取結びて日頃の望みを遂たるが親名四郎は思慮ある者にて倩々と思ふやう今般上の惠高恩は譬ふるに物なけれども悴夫婦を此處に置ては世の評判も後めたかりようこそあれと思案をしたる用意も已に調ひしかば或日浮吉を呼ていふやう其方には兼てより母の姪にて都に居るれ静に嫁にせんと思ひて許嫁をしたれども上より妻を賜りければ辭み申す事に得ならず瓶子を嫁にしたれども猶又思ふよしもあれば暫く浪華へ移り住て彼處にて活業せよ吾長堀に邸宅を求

めて物不足なく鬪の〜置きぬ資本にハ一万兩今般殘らず渡たすべし世渡たりに油斷なく資本を失なひぞと懇切に敎訓してには子の手代淨六といふ者と其他の手代下女小厮まで大方ならず贈し添て浮吉夫婦を長堀なる抱へ邸宅へ遣しけり是よりして浮吉は家名を空花屋と唱へつゝ一所の主人になりたれども富る家の一個見なれば錢金を物とも思はず世渡る業に疎ければ近江より附られたる老管淨六が幾度となき諫言は世にいふ空吹風にて昨日は芝居今日ハ花見と遊ぶと務めにしたりしが只名聞を好む癖あり當時名高き人々を一網ふ招き寄て早く交りを結ばんとて此會を催ふすよし能其由來を知りたる者の噂さによりて具さに聞に旦那何も慰みなり若此會に赴き給はゞ我々兩個附添行て遣樣〳〵に計はん此錢は如何と勸むるにぞ啓十郎も榮壽おいり开日より暗かに用意をしたりけり○去程に空花屋浮吉去年の冬瓶子を携さへて道頓堀なる歌舞伎芝居を見に行きしより歸り坐敷の若者ハ兩個三個幣間を伴ない又遠もの〜役者等も狂言の隙ある毎に件のさしきへ來ざるもなかりしを最痛山しく思ひしかば獨倩々思もふやうわれも又錢金に乏しくもあらぬ身なれども馴染もあらぬこの浪華には未だたすくる友もあらず世に聞にたる人々と早く交際を結ぶ手術は金翫會を催ふすに如ことあらじと思案をしつゝ次の年の春如月の初めより其會席の日を定めて最麗はしき摺物を殘る隈なく散せしかば此地の諸人是を見て道は珍しき會綳なり諸先生の書畫會ハ只是錢を取んためにて摺物をせらるれども緣なき人には配る事なし是と彼とは事替りて錢取病の能書におらず知も不知も押なべて只交際を紳はんために世ふ一藝ある人々を集めて馳走せんとあれば皆行べしと思へども藝なし猿の悲しさは言立にせんよしもなしと呟くもあり喜ぶも多かり凡そ一藝ある者は其拙きをも見返らで行んと思ふめ

少なからず斯て其日になりしかば書畫詩歌連俳の輩立花茶の湯に至るまで凡そ一藝ある者は皆空花屋に集ひ來て姓名を通じ好ミを結び各々藝を施したる其中に空花屋の老管淨六が知音にて尼が崎の浪人四九見櫂佐有寶といふ若人あり和學漢學の達人にて其詩文章玉を連ねて確も手跡ハ俗ならず書かく事にも拙からねば今日の團居の大先生は此人ならで誰やとて皆恥かえく思ふにぞ其身の藝ハ施さで只有寶が書を求め書を求むる者のみなりければ浮吉も亦彼を敬ひ行末永く斷金の交りを結ばんとて欵待大方ならざりけり○浩る處ゐ西門屋啓十郎は意庵念藏兩個と水木綱之助といふ歌舞伎の娘子を隨へて空花屋へ尋ね來つ主個浮吉に對面して某は此浪華にて僅少世の人に知られたる西門屋啓十郎なり伴ひ來ぬるは朋友にて喜田意庵祝屋念藏と呼なす者なり又是なる少年は都より呼寄たる水木綱之助といふ娘子なり今日の御盛會に嗚呼がましく候へども彼等が拙き遊藝を御笑ひに供ん爲に推參してこそ候なりといふに浮吉も悦びて挨拶しつゝ倩々と見れば此啓十郎ハ去年の冬芝居にて假初ながら酒酌かはせし隣坐敷の客なりければ是は〳〵と斗りに早其事を言出るに啓十郎意庵念藏等も此折初めて彼美人の良夫ハ此主個浮吉なりしを問でもしるき心の喜び譬ふるに物なかりしをきりぬさまに欵待て先朋友等が拙き藝を御笑ひに供へんとて意庵は淨瑠理念藏は三絃にて綱之助がひとかなでの振も妙なる三拍子揃ひも揃ひし艶曲に彼有寶が席書の書畫は忽ち蹴落されて皆此處へこぞりつゝ浮れて等えく塀る聲暫しは鳴も止ざりしを有寶え爪彈きして腹立しさに暇も乞えず暗かに出て行にけり斯て此日も暮しかば諸人は押なべて家路をさして皈りしかども浮吉ハ啓十郎等を止て離席にて再び酒宴を催ふしければ客も主個も醉臥てその夜の明るを知ざりけり然るに水木綱之助は原是京の娘子なるが故ありて近き頃浪華へ來つゝ母と共に親子兩個借家に居り猶又障る事ありて歌舞伎の座へハ出

ざりしを意菴が兼て知りたれば彼が母に談合して月三兩にて是を雇ひ空花屋の金欄會に伴ふて來にけるに此の會主は彼美人の良夫なるを知りしより意菴は早く綱之助に私語示せし巧計あり此故に綱之助は其夜離席にて浮吉に馴親しみ啓十郎等が歴りし隙に頻りに枕をすゝめしかば浮吉は醉に紛れて忌れず契を結びけり斯て其曉の朝啓十郎等は別れを告て歸らんとしたる折此綱之助は某が小姓にせんと思ふをもて彼が身を償ひて召連たる者なれども若御心に叶ひなば傍身に參らせ候はん止め置せ給へかしといふに浮吉悦びて然らば其身代は某償ひ候はんといふを啓十郎聞あへず爭でかれ其義に及ばん斯交りを結びし上は千金なりとも惜むに足ず只此儘に遣れせ給へと信實擬せし心に一物意菴念藏諸共に別れを告つ再會を契りて宿所へ歸りけりされば又啓十郎も向に見染し美人瓶子の住家を知りたるのみならず其夫浮吉と交りを結びしより程なく親しくなりけれども未だ件んの瓶子とも面てを合する便りを得ざればいよ〳〵胸を焦しつゝ例の意庵念藏と密談を凝し手術を運し爭で瓶子を手に入んと思ふより外他事なきを知る人とてはなかりしに獨阿蓮が立聞しつゝ譯も具に知らねども心よからぬ談合なれば是より兎につけ角につけて啓十郎を餘處へ出さず此故に啓十郎ハ暫らく病氣と僞りて空花屋へは意菴念藏をのみ遣して物を贈る事再々なりければ浮吉深く悦び感じて或日啓十郎が病氣見舞に初めて西門屋へ來にければ啓十郎對面して某此頃脚氣發りて歩行不自由なるにより思はず疎遠に打過しに自ら來臨し給ひしを喜び是に增ものなしと盃をすゝめ款待て酒半酣に及びし折本妻吳服を始めとして阿蓮卓二力野刈藻なんと四人の妾どもを呼出して都て浮吉に引合せ醉たるふりして云けるやう見給ふ如く某は本妻の外四五人の召使ひありと雖も未だ心に飽足ず御身も必らず幾個の妾たちの有成べし世に錢金の不足なき者の妻一個を守て暮さは富と雖も貧敷同じ男に生れし甲斐もあらずさは發さずやと窘めて傍若無人に誇りしかば浮吉ハ此爲体に耻て答へんよしもなくいと口惜く思ひけり○斯て其次の日に又意菴念藏が空花屋へ來にければ浮吉ハ昨日西門屋にて主個啓十郎に言れたる事の趣きを言出てゝ吾も又麗しき女を多く召抱へて先途の耻辱を淨むべし之願ふは御身等吾爲に媒介して善妾を求め得さして給ひねかしと賴めば意庵念藏は兼て巧みし懸罠に早入たりと思ふ悦びを色には出さず點頭て詞等しく答ふるやう宣ふ趣き理りなれども都は應仁以來數度の戰ひに荒しかば彼所には麗しき妾奉公人はなし今は周防の山口こそ西の都と世に稱へて傾城町あり藝妓も多かり旦那彼處へ赴き給はゞ我々兩個傍倶して思ひの儘なる上婦人を撰み取に取せ任さん此義につかせ給へかし惡く言ではなけれども西門屋の啓印は其身の富豪に誇るのみ兎にも角にも狡猾てふし旦那の如く温和にあらず此故に我々は牛に馬を乘替たる主の爲には唐までも御供は厭はしからず疾々思ひ立給ひねと手に取如く敎唆せば專浮氣の浮吉は此口車に乘られて喜ぶ事大方ならず然らば老管淨六等には唐物を仕入のため周防の山口へ赴くと云拵へ四五千兩携へて船路よりして彼處に到らん願むは御身兩人のゝ約束を違へ給ふなといふに意庵念藏も其旅立の日を問合せ一日早くと忙しく暇乞して出て行く○去程に意庵念藏は空花屋にて談合に日を暮して其夜九ッ過る頃宿所をさして歸る折から街の物の隱れより現れ出たる二個の曲者問でもしるき追剝しの打扮さへに不畏き眼動頭巾に面を隱して腰にさしたる刷刀を左右等しく引扱て跡先より引來みやをれ木兇入一文野郎命惜くば身の衣類を殘らず脫で疾々渡せと言れて敵く意庵念藏齒の根もあはぬ辭揮はして鳴呼是ぬしたち遁り給ふな見らるゝ如く我々し此べんべらを衬に纒へど七ッ下りの黒羽二重乞食仕立の下着のみ一分と價打物はなしやよ見逃して給ひねと云せも果ず二個の盜賊眼を怒らし聲焦燥て此期に及んで分說きかんや

脱ずば斬しく脱すぞと左右等しく揮上る刃に恐るゝ意庵念藏爭ひかねて諸共に身ぐるみ脱で身震ひしつゝ襦袢ばかりは赦してよと詫るを聞ぬ盗賊等は鼻紙袋に小脇差手拭ひまでも奪ひ取さて一個の賊の言やう這奴等は野幇間にて人の褌で相撲をとる口最惡き者どもなれば今宵の事を諸人に告なば遂に我々が身の災禍になりぬべし殺して仕舞ば後腹やめずさと思はずや如何ぞやと問はれて點頭一個の盗賊實に言るれば其理あり追片付んと又揮上る刄に意庵念藏は魂ひ再び身に添ず脱れ刀の下に立かゝる折にも邪智逞しく惡强逸なる意庵が頓策我身替りに遺ふべき者こそあれと胸巧み分別早く定まりければ些とも騷ず盗賊等に打向ひ跪きて主たちさりとは疑ひ深し我々が斯剝れしを手抦らしく人に語らば損せし上にてよなき耻なり命を助けて給らば其報ひには四五千兩の仕事を手引仕つらん此談合にのり給はずやといふに点頭兩個の盗賊开は滿更でもなき事ながら結搆過て實しからず其譯きかん如何ぞやと問ば意庵は聲を暗めて主たちいまだ知ざるか長堀なる空花屋浮吉と聞えしは近江に名だゝる富豪の子なり色よき妾を娶らんとて四五千兩の金と乘て船路より周防なる山口へ旅立の其日も已に定りぬ案内の爲我々兩個附從ふて行なれば主たち後を付て彼山口に程近き湊にて脅かし金を奪ひ取給へ夫より前に我々は外して陸にて主等を待ん勿論金は山割にして半分渡し給ひなば彌勒の世で人には告ず譯を知たる者とては我々兩個のみなれば後々までも世の人に知らる氣遣ひ些ともなし此談合は旨からずやと毒氣を吹込秘密の魂膽命惜さの出來心身の損代に盗賊の仲間入する惡巧みを傍へ聞する念藏も命に換る者なしと思へば倶に節を合せる密談細かなりければ兩人の盗賊喜びて今いふ由に僞りなくば山分は承知なり奪ひ取たる其次の夜に彼湊にて出逢ん汝等も仲間に入たれば今更隱すべきにあらず我々は白波駝太郎綠野早四郎と呼ばるゝ者なり夜稼ぎてそずれ約束を違へたる事は

なし汝等富座を脱れんために無事いはゞ暗闇にして其折思ひ知すべし能せよかしと期を推て剝取たる衣類を殘らず兩個に投返して行衛も知らずなりにけりされば意庵念藏は手早く着物を取上て砂打拂ひ帶引結び大息吐つゝ顔見合せて命拾りと思ひしより切な細工も物怪の僥倖那駝太郎とやら早四郎とやらが約束を違へずして其次の日に山分の金を我等に渡しなば千兩つゝしめ子の兎幇間世渡りせずとても一生涯は安樂なり此事秘ずべしと私語あふたる相談は諺にいふ小田原提灯尋ねて取上ても明に消て身は暗き慾に不敵な胸巧み宿所をさして急ぎけり○斯て意庵念藏は次の日西門屋へ趣きて啓十郎浮吉にが旅立の事の赴き教唆したる事のよしを這樣々々と告されども彼盗賊に剝れたる惡巧みをぞ深く隱して云ざりけりされば又啓十郎は意庵念藏等が働きにて浮吉を遙々と周防へ行する事のよしを聞悦びに堪されむ小判十兩を取出して意庵念藏に之を取せて猶此後の計事を暗に談合したりける去程に浮吉は意庵念藏等に教唆され早く周防へ赴きて世に麗しき婦女を多く抱へ來て啓十郎に誇らんと思へば心急がれて老管淨六には唐物を仕入の爲に自ら周防の山口へ赴く由に云拵へて淨六が諫めてとゞむるを些とも聞ず旅立の用意の外に他事もなく船出の日さへ早く定めて翌首途と聞えしかば啓十郎は仕濟したりと思ふ心を色にも出さず三種四種の餞けを齎して空花屋へ赴き是を浮吉に贈りていふやう今般の御首途に何ぞ御役に立べき品を參らせんとも思ひしかどもさりとて思ひ付たる物なし彼水木綱之助て某向ふ身を償ひて自由に任する者なれば此品々に差添て彼女も餞けに參らせべし長き旅路に從へて船の內の徒然を慰め給へと懇ろなる人の情に浮吉は喜ぶ事大方ならず互ひの挨拶事をはり奥座敷へ伴ひて先盃をすゝめつゝ心の内に思ふ樣向に我西門屋へ行し折啓十郎は本妻と四五人の妾をも呼出して對面させしが今此折に及びても瓶子を識る人にせずもあらば胸狹しとて矣

れれん我には未だ婦女の只一個も在けれども其ゝ周防にて撰み抱へて立回り來て後にこそ見せめよしや妻只一個なりとも標致は彼が幾個の本妻妾に劣らんやと思案をしつ、奥に至りて由を瓶子に私語示し頓て座しきに伴ひ來て啓十郎に引合して留守の事さへ頼むにぞ啓十郎は既に早望み協ひし心地して暫く胸を押鎮め再び爰に對面の喜びと浮吉が旅立の祝ぎを演ていふ樣向に計らず芝居にて御目に掛りしは假初にて何所の人とも知ざりしは御緣盡せず不測の再會御主人さまと斯までに交りを結びし上は兄弟に增思ひあり然れども女上の御留守には憚りなきにあらず我身は疎遠に過るとも女子共を參らせて御徒然を慰め申さん仍不自由なる事もあらば何事なりとも承らん心隈なく仰せよといふに瓶子も喜びを演盃をすゝむるのみ流石に詞少なにて頓て奥に引入にける○斯て空花屋浮吉は旅立の用意調ひければ譜代の老管浄六と一兩人の手代を留守居に殘し置其身は空七といふ一人の手代と荷持の奴僕兩人を供に從へ又案内の爲にとて彼意庵念藏と綱之助さへ引連て已に宿所を出る程に仕入金と偽りて金五千兩を荷造らせ此餘も衣類手道具なんどは乏しからず船に運ばせ最大きなる海船一艘を雇ひきりにして一人も乘組の旅客を免さず已にして其曉の朝船場をさして立出れば淨六並びに近きわたりの里人も見送る者多かり去程に啓十郎も最早く船場まで來つゝ茶店に待て居り彼是頓て折集ひて用意の餞筵開きつ、暫時留別の盃を廻らす程に追風よしとて船子等が催促頻りなりければ浮吉は諸人に暇乞して忙しく意庵念藏綱之助等と諸共に船に乘しかば空七も荷物等も續きて船に主從七人頃は如月の末つかた空猶寒き朝風に押上る眞帆引ましく西をさしてぞ走らせける○斯て日毎に日和よく追風さへ打續きしかば浮吉等の乘たる船は僅少障る事もなく海上の日數僅にして周防の國山口なる鴻の峯の城に程近き港へぞ着にけり其時意庵念藏と共に浮吉に對いていふ樣我々は其

昔此山口の鴻の峯にも暫く住馴し者なれば旅宿の善き惡きも又貸座敷のある處も悉く能知たり御身は船にて待給へ我々兩個城下に至りて宜貸坐敷を見立問て遲くば翌の朝皈り來つべし其折彼處へ誘き給はゞ萬に便りよかるべしといふに浮吉點頭て其は能心付れたり兎も角も宜らん樣に取斗ひて給ひねと頼めば意庵念藏は心得顏に船より出て城下さして急ぎけり○斯て其日も暮しかば浮吉と意庵等を待つゝ今宵も船に居り斯て其夜も沒靜にて人皆眠りし丑滿頃小船に乘る海賊あり同類僅か兩個眼動頭巾に面をつゝみて港に繫りし上吉が船に釣繩を打かけて早乘移る足音に驚き覺る空七に荷持等這は何者と云せも果ず揮閃かす海賊等が氷の刄に苦と叫べば艫に臥たる船人等も驚き怕れて頭を擡げず其時件の海賊等は腰より繩をたぐり出して上吉が供人と船人さへに一個も漏さず皆船柱に縛り付たる勢ひに獅子の暴たる如く面を向んよしもなければ皆々頭を打低て念佛の外なかりけり掛りし程に上吉は今宵も綱之介と枕を並べて客の間に臥したりしに思ひがけなく海賊に供人船人一個も殘らず縛しめられ之を見てしより魂しひ更に身に添ず慄き慌てる綱之介を小脇に圍ひ身を縮まして赦し給へと叫びしを海賊等は冷笑ひて汝等驚き騷くべからず船に乘て持て來ぬる金の高まで能知たり命惜くば五千兩此所へ出して疾々渡せ否といはゞ片端より芋刺にして水屑となさん疾々出せと左右より倶に刀の尖先を突付く〳〵責たりければ上吉詮む事を得ず實に其金は三ッ四ッのわけ荷の中に入てあり御苦勞ながら頼みやす皆斬解て持て行給へといふに點頭兩個の海賊手に〳〵わけ荷を引出して奪ひ取たる五箱の金を小船へ取入て大吉利市とさゞめきつゝ早同類に艫をれさせ行わと白浪となりにけり○斯て其次の日に意庵念藏兩個之城下より歸り來にければ浮吉は昨夜海賊に五箱の金を殘りなく奪ひ取れし事の趣むき這樣〳〵と告知するを意庵等之打聞つゝ其は彼駱太郎早四郎が所爲なるべ

しと猜するのみ閉に打懲きたる面色して倶に頭を病したる談合果ともなかりけり暫くして意庵念藏がいふやう此所にて物を思はんより先旅宿へ赴き給へ宜貸座敷を求め暫たり彼處に到りて談合の又詮方もあるべきにと慰められて上吉は其義に任せ船より出て設けの宿に赴きしが持て來し金を失ひたれば此處にありても何をかすべし空七と荷持一個を又船に乗せ浪花へ遣し淨六によしを告て再ひ金を取寄んとて手形を認めて空七等を浪花へ返し遣しけり浩りけれ共浮吉は路用並びに小遣ひの爲にとて懐中に入て持て來たる金七八千兩ありければ今更路頭に佇吟にもあらず是を遣ひ果す頃には又浪花より取寄る金は必ず來ざらんやとて日毎に出て山口の街を見物したりけり○去程に意庵念藏は去る頃浪花にて盗賊駝太郎早四郎と約束したる事あれば奪ひ取せし彼金を山分になす時は二箱半の所得あり等閑にして時を過さば寶の山に入ながら手を空しくする後悔あらんと密談しつゝ其次の日に事に假托夕暮より件の港へ赴きて小夜更るまで兩個の賊の出て來ぬをる那處此處と待も尋ねもしたれども夫かと思ふ影もあらず若やと思ひて二夜三夜同じ港を殘る隈なく尋ね巡りたりけれども如何して出て來べき遂に便り得ざりしかば諺にいふ犬骨折て鷹に取せし身の愚さを喞き合のみ又更に行衛を尋ねんよしもなし腹立しさは限りなけれど人に告べき事ならねば只彼折の命代りと思ひ絶ても忘れがたさに浮ぬ心を茶碗酒只鼻唄に紛かして味氣なき日を送りけり○去程に上吉は意庵念藏を伴ひて鴻の峰の町々なる神社佛閣各所舊跡を見物のため出歩行しに實に此地の繁昌て京浪花にも立勝りて街を九條に開きたり此故に人押なべて西の都と言なるべし其六條に傾城町ありされば爰をも六條の廓とは呼なしたり斯て或日上吉は又意庵念藏と諸倶に六條の廓に至りて廓の景況を見物せしに最麗しき傾城等が花にも勝る玉をも欺く打扮の妙なるに糸竹の調べ耳にみちて實に慾界の仙境なりきと思

へば忽ち心迷ひ魂ひ浮れて歸る事を忘れ此夜も廓屋の糸柳といふ廓第一の全盛なる太夫を揚て遊びしに其面白さ得もいはれず只僞りを旨として客を蕩かす遊びの手管に迄乗らるゝ上吉は夜毎に通ひ來て路用の盡る事を思はず已にして七八千兩の金を遣ひて果したれども浪花より又便りもあらず然りとて今更に思ひ止まるよしのけなれば先當分の凌ぎにとて浪華より持て來たる衣裝手道具なんどをば意庵念藏に計はせて賣もしつ典物にも置せて猶廓通ひをなすにより其金も又盡たりければ今は早家重代なる正宗の脇差のみ暫く是を質にいれなば其内には浪花より必ず金をよこすべしとて又意庵念藏に談合をして持せやりしに質にても金多からず此地に來居てる旅客に買んといふ者ありとか聞にきよりて其媒介人を頼みて五十兩に賣たりとて件の金を持て來つゝよしを告て渡すにぞ浮吉は呆れ果て世の諺にいふ如く寶は身のさし替なれども五十兩とも餘りに安しと思へども此外に才覺すべきよしのなければ打呟くのみ云甲斐なしされば意庵念藏は向にも浮吉が衣裝手道具を價ひよく賣しかど半ば抑隱して浮吉に渡さず又正宗の脇差も價百兩に賣たれども五十兩なりと僞りて又半金をくすねけり其時意庵念藏ハ或日暗に談合するやう彼二千五百兩の儲け口は兩個の盜衆にだし拔れて錏一文にもならざれば其後衣裝手道具なんどで些の儲けはありと雖も所詮又浪花より金を送すべくもあらず這樣々々に詐りて又儲けなば言拵へて我々兩個は浪花へ皈らん若浮々と此處に居らば諸倶に飢に望みて身の禍ひになりぬべしとて計較已に定りければ其後浮吉に進めていふ樣僅か四十か五十の金にて夜毎に廓へ通ひ給ハゞ忽ちに代盡て詮方もなくなり給はんよりて思ふに彼君を身請の談合に增ことなし其身の代も幾百兩でも只今手打金百兩を親方に渡して代呂物を引取さて浪花より來る金をもて其殘金を渡し給ハゝ万に便りよかるべし偖身の代の內金にも綱之助を賣給ひ彼も西門屋より餞けに

贈られたる者なれば賣ても障り有べからず此義ハ任せ給はずやと詞巧みに進めしを浮吉聞つゝ打案じてされぱとて綱之助を賣んハ誠に不慇の事にて西門屋へも後が母親にも聞へなば何とか言ん此義計りハ隨ひがたしと辭むを兩個ハ押返えて夫も只又暫しの程にて浪花より金の來ぬる折買戻すこと最易かり我等に任し給へねと屡々進めて默頭かせ偖綱之助にも這樣〳〵と身買の事を告知すれば綱之助は聞敢ず强く歎き打泣て开は思ひかけなき事なり我身は親を養はんため月三兩の約束にて西門屋へ雇されえを再び此處へ倶せられて浮吉ぬしに仕ふれども身を賣るゝ科はなし其義ハ決して隨ひ難えと固辭を意庵念藏は種々に賺し捨へ一旦其身を賣るゝとも浪花より金たに來ば買戻されん事遠かるべからず今更辭む事かはと只管に勸むる折から縁談なんどの媒介して世渡りにすなる阿世話といふ口入老婆一丁の駕籠をつらせて綱之助の迎ひに來つゝ意庵念藏を呼出して斯云々と告しかば意庵念藏ハ浮吉によしを告證文を認め是を阿世話老婆に渡て身の代八十兩を請取しを又三十兩押隱て五十兩成と僞綱之助が行じとく泣をわりなく引立て件の駕籠に打乘れば兩個の駕丁合肩いれて行に引添れ世話婆も飛が如くに馳さりけり〇斯て又意庵念藏は系柳を迎へ取んとて浮吉に由を告金百兩を請取て共に廓へ赴きしが开も如何に言捨へけん系柳を駕籠にのせ遣手若者さへ附添て送りて旅宿に連と來にけり浮吉が些許りは男色を好まねどもされぱとて系柳が身の代の才覺に彼を賣こと本意ならねば心よからず思ひえに意庵念藏が働きにて系柳が身請の金を五百兩と定め僅に百兩渡せしハ早く伴ひ來にければ其悦び大方ならず是より宿に籠り居て折々系柳に三絃を彈せ酒打飲て偵に永き日を面白く浮々として送りけり

されば又空花屋浮吉は系柳を身請の內金其日百兩と正宗の脇差と水木綱之助を賣たると是彼五十兩宛なれば已にして其金を意菴念藏に渡して廓屋へ遣したれば殘れる金は些ともなし如何にすべきと思ひかねつゝ猶も賣べき物もやあるとて空葛籠あけ荷なんどを開ひて尋ね求むるに思ひがけなき皮胴亂に紙に包みし小粒あり不審くも又嬉しさに押披きて數へ見るに其金九兩二分ありけり實に古川に水絶ずといふ世の諺も故ありけり何の時程から此胴亂に此金をば入置けん是だにあれば當分小遣ひには事足るべしと喜びて廓より系柳を送り來ぬ遣手若者に祝義を取せ餓に酒肴を調へて入にも進め己れも打飲て乏しからず物せしかば廓の者共は多く得難き大盡ふなりきと稱へて倶に壽を演て六條に皈りけり〇斯て其次の日に喜田意菴念藏は浮吉に密語やう向に空七等を浪花へ返し給ひしより已に日頃を經たれども今日までも彼處よりそよとの風の便りもなきは浄六が疑ひて此處へは金をおこさぬならん所詮覺束なき便りを待んより我々兩個浪花へ皈りて浄六によしを告兎も角も言捨へて早く金をおこすべしさても老官がしぶりて事の調はずば西門屋へ賊難の趣きを密語告て啓十郎に五六百兩の金を借て持て來るべし身請の金だに調ひなば彼跡金四兩を廓屋へ遣して系柳どのを伴ふて其折浪花へ歸り給へ西門屋は御身の爲に年久しき友ならねども利を取て貸金なるに證文だに渡し給はゞ些とも障りあるべからず我々浪花へ赴かば二ッに一ッ金とゝのへて遂とよず又たかへり來つべしこのまゝに日をおくり給はゞいよ〳〵路用の才覺つきて人の物笑ひになり給はん萬一の爲なれば西門屋へ握らする借用證文一通ハ我等預りて持て行べし此頃より枕を碎て我々合談したりしハ是より外に詮方なし早く此義に付給はずは後悔そこに立難しと言巧みに解すゝむるを浮吉聞つゝ點頭て开は能心付れたれ浄六が何といふとも我身浪華へ歸りなば金の出え入自由なり只夫までの凌ぎなれば面目のなき

事なから啓十郎に五百兩の借用證文を書て渡さん兎にも角にも宜らんやうと取計ひて吉左右を早く知せて給ひねと回答をしつゝ忙しく硯引寄一通の證文を書認め印形を押て渡すにぞ意庵は是を請取て念藏と共にいふやう既に申せし譯なれば我々は一日も早く浪花へ赴くべし翌朝未明に發足して駕籠を急ぐに如じといふに浮吉は其義に任して懷中なる紙入より小判三枚取出して件の兩個に取せていふ樣知らるゝ如き懷中なれば切ては路用の助けにと思ふ許の寸志なり最耻かしき事にてそといふを意庵と念藏と聞も得果ず請戴きて浩る折から此路用は千金にもます御惠み何條多少を論ずべき翌の出船に便船して乘走らせなば此三兩にて往復ふ事足べしと最忝けなくいと悅ひを演用意をしつゝ其曉の朝打連立て旅宿を出て葦が散る浪華へとてぞ急ぎける現に惡徒の邪智深きは計り知られぬ事多かりされば意庵念藏と山口の宿を立出たる其日路にて談合するやう彼五千兩の山分は空だのめに成たれども些の儲けなきにあらず先正宗の脇差にて五十兩又綱之助を賣せたる彼が身の代にて三十兩又糸柳が身の代の內金と云拵へたる彼百兩の內にて七十兩是彼合せて百五十兩开を兩個に分たれば已にして一人前七十五兩の働き代あり夫より向に浮印ふ進めて衣服手道具なんどを賣せたる度每に二分三分宛の儲けありければ我も和殿も懷中に百兩餘りの福の神ありよしや今日より路を急ぎて浪花へ歸り付たればとて如何にして此證文を見するとも五百兩といふ大金を我々兩個に渡さんや是も又無益の業なり浩れば暫く浪華へ歸らで浮印の成行をよく見定めて其折に此證文を西門屋に見せて內緒を吹込貸出金出入にかばりなば貸ぬ金でも借ずとは些とも云さぬ證文あり又五百兩手に入ば西門屋をも一口のせて三ッに分ても百五六十兩また〳〵儲かる樂みあり先嚴嶋へ參詣して歸りは金比羅白峯なんど打

巡るのも能折なり急くば要なき事なりけりと再び計較秘密の魂膽頃は卯月の中旬なれば空曖かき旅衣一ッは脫で風呂敷に包みて脊負兩個つれ慰み詣の嚴嶋安藝の方へぞ赴きける○兩頭話說爰に又西門屋啓十郎は向ふ意庵念藏等に謀合せて浮吉を教唆させて遠く周防の山口へ旅立せたり其日より爭で瓶子に馴親しみて思ふ心を打つけに知する便あれかしと頻に胸を苦めしが漸くに思ひ起せし計事を得たりしかば先尼が崎へ人を遣して尼の妙潮を呼寄て暫く居宅に止めれき人なき折を覘ふて浮吉が事瓶子が事心の秘密を密語示して此戀の媒介には御身の外に賴むべき者なし猶我家に逗留して這樣〳〵に計ひ給へと言に妙潮點頭て开は六ヶしき媒介ながら昔よりしてさる筋をやり損なふたる事はなし然らば兎せん斯し給へといふに啓十郎喜びて事成ときは骨折代は何まれ彼まれ望みに任せん能し給へと密語たる密談頃に調ひ之を知者絕てなかりけり○去程に妙潮は啓十郎が用意をしたる干菓子蒸菓子なんどを折詰二ッばかり齊しつゝ空花屋へ赴きて啓十郎が本妻吳服の使なりと詐りて瓶子に對面を請しかば瓶子は是を打聞て最不審しく思へどもうちも置べき事ならねば奧座敷へ呼入て對面しつゝよしを問に妙潮答へて妾ことは西門屋に族緣あり此年頃尼が崎なる草の庵に住侍れども折々此地に來ぬる折には西門屋へ逗留して所用を果し侍るなる法名は妙潮と呼るゝ比丘尼に侍るかし偖も此程此家なる旦那は御活業の爲遙々と周防へ赴き給ひしとか御留守の徒然なる嘸な淋しく坐するならんと啓十郎も旦暮に御噂をし侍れども女主の留守居の宿を問奉まつるは後護かりさればとて浮吉主とは向に友垣を結びしより兄弟にも異ならぬに疎遠に過んは本意にあらず男を使ひに遣しなば瓶子どのも遠慮あるべし御身彼處へ赴きて是等の由を告給ひねと他事なく賴まれ侍り去しかば尼法師ふと相應からぬ彼處の使に立侍り這は珍しからぬものには侍れど西門屋の本妻吳服どのゝ參らせよとて

齎し侍りと言つゝ件の折詰を恭々しく先出せば瓶子は喜び受頂きて這は思ひがけもなき彼御夫婦の御深切てとに心を用ひられたる御使といひ賜といひ最有難く侍るかし既に知らせ給ふ如く良夫の旅の留守の宿ふれ言がたきも侍らねば打くろぎて語ひ給へと止めて頓て茶を進め菓子を進めて款待たり〇是よりして妙潮は日毎に空花屋へ赴きて或は呉服の使と詐り或は其身の所用に假托物を贈る事も屡々なるに原來談話上手にて世の中の事何かれとなく長物語に日を暮して最懇ごろに慰めければ瓶子は興ある事に思ひて歸さの遲くなる折はわりなくも宿處に止めて一ッ臥床に枕らを並べ小夜更るまで打語はせて共に目睡曉天もあり又或時は妙潮に酒を進め對手になりて其身も深く醉たる日もあり斯何時となく親みて迭に思ふ胸の内を語りもしつ語はせて世に隔なくなりにけり斯て又妙潮は或日一樽の銘酒と重詰の肴さへ齎し來て是を瓶子に贈りて云やう此頃は幾度か御款待に逢侍りしに僧侶の事にしあれば御報ひをせんよしもなし這は僅少に侍れども妾が土産に侍るなり折柄の御氣晴しに用ひさせ給ひねといふに瓶子は辭みかねて歡びをのべ妙潮を止めて其夜件の酒肴を開きて兩個さし向ひ獻つ酬つ小夜更るまで最面白く語ふほどに妙潮は啓十郎が噂をひたと言出て彼人は好色にて四五人の妾ありと雖もされぱとて本妻を些とも粗略にし給はず夫婦中の睦まきは萬浮氣にあらずして心に誠あればならん又御身の旦那浮吉ぬしの御噂も聞知り侍りぬ最いひ難く憚りなれども啓十郎ぬしには品變りて斯麗しき御内室を巣守の鳥になし給ひて網之助とかいふ娘子に現を抜かして剩さへ佀に勝れたる妾を撰み抱へんとて餘多の金を船に積して周防の國の果まで遙々に赴き給ひし他心餘所に聞だに腹立しさに御身はさしも思ひ給はで最をとなしく留守し給ふは世に珍しき貞女にてこそと云れて瓶子は紅なる顏に紅葉は酒の咎そが僞醉に紛らして云るゝ如く我夫は萬浮氣で頼母しからず水臭き

こと多かれども我身には親兄弟の一個もあらねば歸るべき郷さへなきを如何はせん心を察し給ひねかしと言を妙潮慰めて主の浮氣は是非もなし御身の貞心悼はしければ翌貸參らする物侍り开は邯鄲の枕と号けたる世に二つとなき寶なり若戀しきと思ふ人ある女子其枕を戴きて寢る時は其夜の夢に戀しき人に逢て無量の樂みあり向に故ありて都人の我庵へ納められ妾暗かに試し見たるに實に不測の枕にて些とも違ひ侍らずかしと言に瓶子は打笑て开は奇妙なる枕にこそと答へはすれど疑ひて猶實とはせざりけり斯て曉の朝早く妙潮は別れを告て忙しく皈り去しが又其日の黄昏に件の枕を携へ來て开を瓶子に見せていふやう昨夜咄しやしたる邯鄲の枕は即ち是なり今宵は御身此枕を戴きて旦那に逢て夢の内に樂み給へ空言にし侍らずかしと密語ば瓶子は顏を赤うして回答は得せず其枕を見るに實に麗しく硝子にて造りたるが中に男女兩個あり枕を並べし容体の透明りて見えにけり瓶子は夫を能も見ず元の如くに箱に納めて心の内に思ふやう云るゝ如く此枕に奇特あるや無やは知らねども浩る物さへ貸れしに昨日うけたる酒肴なの報ひを社すべけれとて今宵も亦妙潮に盃をすゝめて款待けり去程に妙潮は醉たる体に紛して其身の若かりし時の狂ひ初し鎌倉にありける程密夫さへに物したる不義密通を耻もせず懺悔ばなしに假托て猥りがはしき事までも忍びやかに説示せば瓶子も醉たる上なれば最興ありきと聞聳て枕淋しき留守の宿男戀しく思ひつゝ頻りに重ぬる盃の數も覺にず醉にけり斯て其夜の深しかば何もの如く妙潮を止めて倶に寢るをり妙潮は件の枕を忘れ給ふなと取出さして今宵は夢に御夫婦兩個絶て久しき添ぶしのさてこそ樂み給はめと打戯れつゝ一つ座敷の臥床へ傾て入しかば瓶子は獨り邯鄲の枕引寄夜着打被ぎて我にもあらず醉臥けり既にして妙潮は瓶子が醉て睡りたる寢息を窺と覘ひて忍びやかに起出つゝ宵より早く引入て行燈部屋に忍ばせ置たる啓十郎が手を取て

瓶子の臥床へ案內をしつゝ獨り被ぎし夜着を掲げて其懷へ入たれども瓶子は今宵常にもまして醉て臥たる事なれば久しくなるまで知らざりけり斯て瓶子は丑滿ごろに醉も眠も僅に覺て見れば不潮や身は男に抱かれて有けるに燈火の影幽にて迷ひは深き夢心我夫なりきと思ふのみ日頃の恨ミも云あへず疑てや枕をかはしけり既にして事果しをり瓶子は初めて心付て能々見れば臥たる男は其身の夫浮吉ならで啓十郎にてありければ遣开も如何にと驚き狼狽て起んとせしを啓十郎は些とも放さず引止めて驚き給ふな今更に逃るとも匿るゝとも元の白地になるべきや抑も去年の冬の頃初めて芝居で逢し日より千萬無量の心を竭して本意を遂しは夢ならで宿世に結びし妹脊の奇緣これ仮初の事ならず不義は承知の小夜衣重ねし妻を結びし上は命も絕て惜からずやよ喃々と搔口說ば瓶子は我を怪しむまでに呆れ果つゝ茫然として返す詞もなかりけり折から屛風の那方に立て容子を窺ふ妙潮は進み入つゝ微笑て濡ぬ前こそ露をも厭へ實に爭れぬ枕の奇特已に斯なり給ふ上は此儘にして止とても不義ならずとは誰か言べき浮氣の夫を思ひ捨て男振さへ情さへ世に多からぬ啓十郎主と末かけて契り給かし逢夜の首尾は妾にだに任し給はゞ人は知ず思案に及ぶ事かはと勸る惡事を惡事とは思ひながらも女子の水性つい今宵より濡染て深き中とぞなりにける○男女の情慾品多かれども彼人妻を偸るは其罪殊に輕からざるを思はざりける啓十郎は向に瓶子を見染しより戀慕の思ひ止事なく意庵念藏を助けとしつゝ浮吉を敎唆させて遥く周防へ旅立せ其後又妙潮を助として瓶子が心を動かせて勸むるに酒を以てし終に硝子の枕を贈りて彼を愚にしたりしかば瓶子は思はず其掛罠にのせらるゝ由を曉ず未だ一言も交へずして早く彼が懷に入し事無慚といふも餘りあり去程に妙潮は已に瓶子を敎唆して件の枕を貸たる折其黃昏より啓十郎は空花屋へ忍び來て背戶の方に彳みしを妙潮暗に立出て手引をしつ

ゝ啓十郎を行燈部屋へ匿し置瓶子が彼枕をして醉臥たりし折啓十郎を出し來て瓶子が臥床に入たるなり是より後も啓十郎は妙潮と合圖を定めて彼を空花屋へ遣して彼處に泊る其夜さりは啓十郎も忍來て脊戶の內に隱て居り其時妙潮は人目を窺ひ立出て啓十郎を行燈部屋へ引入て隱し置小夜更て瓶子が臥床へ忍する事屢々なれども初の程は心腹の侍女の外に知ものなしされば又浮六は周防より空七と一個の荷持が皈り來て彼港にて浮吉は海賊の爲に五箱の金を奪ひ取れたる事具に聞しかば或は驚き或は疑ひ空七を押止めて周防へ金を遣さず其後又浮吉が廓通ひの爲に重代の腰の物さへ質代なせし事までも風聞此處へ聞しかば浮六等は呆れ果て近江へよしを告知せ身の用心をなす程に瓶子が不義の爲体を人もしり己も曉て最苦々敷思ども主個の留守にあら立て罪を糺さば毛を吹て疵を求むる事あらんと思ひ返しつ暫くは知れども知ぬ面色して過る空七其餘の手代の妬を暗に押止て折々密談したりける○爰に又周防山口の旅宿なる浮吉は物賣盡せし其後に尋ね出せし金九兩二分は糸柳を送りて來ぬる廓の者へ祝義に取せまた意庵念藏が路用にも與へしかば殘るは僅に三四兩に過ず然れども浪花より金の着く日を心當に酒を求め肴を調へ日每に糸柳と遊び暮して有ける程に五七日たつや經ぬに件の金さへ遣ひ果して如何にせましと思ふ其翌日一個殘し止められて炊きの業を勸めたる荷持の男逐電して飯を焚ものなくなりければ浮吉いよ〳〵難義して手ヅから水を汲などしつゝ小竈にて飯を調へ糸柳と取膳にて味噌菜の外に物もなきわび住居も亦風雅に近しと口にはいへど糸柳が思はん程も耻かしく凡そ十日許り過す程に六條の廓なる靡屋の老管靡八と云者が一丁の觸籠をつらせ抱の者を引連來て浮吉に云樣御約束の日限も昨日迄に候へば太夫の迎に參りたりと言を浮吉不審て心得ぬ事をな言そ彼は身の代五百兩にて身請の相談調ひて內金百兩渡せしかば彼身を此處へ呼とりぬされば

浪花の本宅より金だに來なば殘金を渡さんといふ對談ならずさるを日限までたればむかひに來しとは何事ぞと云せも果ず廉八は冷笑ひつ、懷中より一札を取出し今更論は無益なり糸柳を十日貸て呉れよと云るゝ由の聞えしかば一日三兩の揚代にて意庵念藏の兩個より三十兩渡されたれば止事を得ず十日の間貸參らせたる太夫なるに迎ひに來しとて咎めらる、は逆夢にても是玉ひしが此一札のあるものをと云つゝ頓て押拔くを浮吉れ請取て見れば果して糸柳を十日借たる證文にて其身の印形押てありさてこそ意庵念藏が巧みにて甘くも我をば欺たるよと初めて驚て腹立しさに猶かに角と論ずるを廉八は冷笑ひていふ事あらば彼人だちに逢て何とも云玉へさる事を間隙はあらずサア／＼太夫立玉へといふに糸柳微笑て昔の虎が曾我の郎に逗留して居る樣なる食客に逢てつらかりしに漸く年期が明いした浮さんさらばといふ程に早搔寄る迎の駕籠に乘るを遁しと廉八等は後につき又前に立て廓をさして急ぎたり泄る折から此貸坐敷の家主は浮吉が爲体心得がたく思ひしかば家たてをせんと思案して咳吹ながら出來つゝ浮吉に打對いて此家俄かに入用なれば今日明渡し玉へかし付て家賃の勘定も只今請取いさんといふに浮吉又驚きて宿賃の義ハ浪花より取寄る金の來ぬるまで暫く待て猶暫く此處に居らせて給ひねと詫るを聞ぬ火急の催促开ハ來る事やら來ぬ事やら知れもせぬ金を心當に何日まで貸て置べき勘定たゝそば是非もなし諺にいふ百貫の方に編笠一蓋なりともたゞやは止んと敷圍て浮吉が寶殘したるお什荷胴乱夜るの物着物さへお上着をば脫せて殘らず取上てそが儘に追出しけり○去程に浮吉は重ね／＼し負債にて衣さへ剝れし羽拔鳥爭で浪華へ歸らんと思へども路用はなし如何はすべきと思ひかねて暫く街に彳む程お向ひより來る浮世話婆が早くも打見て走りより其爲体を不審りて事の由を尋ぬるにぞ浮吉は面目なけれどさて止べきにあらざれば意庵念藏に計られて斯なり果

し始終を這樣／＼と物語て今更思へば吾正宗の脇差を賣去時も又網之助を賣去身の代も彼意庵念藏が價五十兩つゝなりと云しが胡論なり御身こそ能知つらめと思ふを阿世話が聞あへず夫も又彼人達に半金儲けられ給へり脇差と彼娘子も百兩にてこそ賣たりきと言に浮吉又更に意恨を重ぬれども後悔此に立よしもなし僅か阿世話が情にて笠と手杓と草鞋とに錢五百文貰ひしかば拔參りの姿たに打扮或は徃復の紬につゝる或る人の表にたちて乞食して行旅なれば路もかどらず日を重ねて漸く其年の秋の頃浪花の家に皈り來て見れば家も何の間にか空家になりて人氣なく賣居といふ紙札の門の戶に張てありしかば這は／＼如何にと許りに呆れて暫時彳みたり○其時此邊の町代何某思はずも出て來て浮吉を見て駭き怪み這は空花屋の旦那殿いつの程にか返り玉ひし其爲体は如何ぞやと問れて浮吉耻かしさに暫時顏を背けしがさて有べきにあらざれば進み寄つゝ聲を密めて周防の旅宿に在し折伴ふたる兩個の友に敎唆されたる若氣の誤り遂に此身の破滅となりたる始め終りを告知せて抑も吾此居宅は何者ゆゑに空家となりて賣居にはせられけん心得難き事にてそといへば町代眉を顰めて偖は未だ知り給はずや御身が周防の山口にて數多の金を海賊に取れ給ひし事又彼地にて放埒の風聞此地へ聞えしかば老管淨六を始めとして行末心元なしとて身の覺悟をしたりけん空七も其餘の手代も小厮等に至るまで皆悉く慣合て貯への金幾干か鐚一文も殘す事なく皆搔攫ひて逐電したり跡に殘りしは內室と一個二個の侍女のみ取殘されて詮方なきよし其間にありしかば即ち當所の年寄中より觀音寺へ飛脚を遣し由を親御に告たりければ名四郎殿驚き怒りて兩三個の供人を引連て觀音寺より來給ひて年寄衆に談せられ悴が放逸言語同斷彼をば則ち勘當すべし女は良夫につく者なれば嫁の瓶子も離緣せん此儀を心得玉ひねとて侍女等には暇を取せて人を附て近江なる親里へ送り遣むし嫁御は由緣ある人の引

取んといふに任して頓て其人に渡し遣はし家財道具は賣拂ひて家をも賣居にすべしとて我々に頼み置て近江へ歸り給ひしが其後買んといふ人あり近江へ掛合商量調ひ昨日金を渡されたれば幵を又近江へ遣ししたり浩れは其人遠からず移り住ふそあらずらん已に賣たる家なれは賣居といふ札を今取捨んと思ひつゝ計らずも此へ來て和殿に御目に掛る事誠に笑止千萬にて最悼しく思へども畢竟ば和殿の不所存腹立給ひし親御の心を察ずれは無理ならず爭で心を改ためて便を求めて勘當の詫てそ肝要なるべけれと繰返したる長物語に浮吉いよ〳〵縮きて塞がる胸の當惑に暫時回答もせざりしを思ひ返しつ太息を吐きて言るゝ趣き心得たり兎にも角にも此身の誤ち人を恨みんよしもなし偖我妻は如何なる人に引取れて何處へ行けん其義も聞知玉ひしかと問ば町代さればとよ尼が崎に庵を結びて年頃彼處にありといふ妙潮庵主とか聞えし比丘尼が逗留して此地に居り事のよしを傳へ聞けん此人和殿の內室に古き由緣の有由にて引取て尼が崎の菴室へ倶して行にき彼處に至りて尋ね玉はゞ對面難くもあらじと言を浮吉打聞て悅ひを演別れを告て尼が崎へ赴むく程に路にて日の暮ければ此夜は路の邊りなる辻堂に野宿して寢られぬ儘に思ふやう我妻瓶子は近き巳たりに親類も絕てなし况て比丘尼に識人のありとは聞も及ばざりしに幵も如何なる由緣にて彼身を引取たるならん夫も兎もあれ角もあれ今此ざまにて阿容〳〵と尋ねて彼處に行ん事耻を知ざる者に似たれど逢て此儘行水の永き別れになるならば愈々浮子が恨みやせん面目もなき事ながら一度逢て今生の暇乞をすべけれと思案に闇き胸の暗ふた路かけて早晩に心變りて密夫と二世の契りを結びたる妻とし知らぬ愚さの又今更に憐れなりし斯て浮吉も次の日に尼が崎へと急きつゝ妙潮の庵を尋ねて折戸の內へ進み入て尋問こにに妙潮は立出てよしを問に浮吉對へて某は瓶子が良夫空花屋の浮吉でいなり斯なり果し事の由は告ずとも知れん瓶子は此所へ引取れてありと人傳に聞しかば耻かゝやかしき所爲ながら妻の爲に一言の喜びをも申入るべく又瓶子にも對面して身の誤ちをも詫ばやと思ふによりて參りたり抑も貴老は我妻と如何なる由緣なれはしましけん思ひがけなき御深切辱けなくそいへと言を妙潮打聞てさてれ和主は兼てきく浮吉主でおはせしよな妾も元は京の者なり那の子も都にありし折ゆゑありて懇切にせられし好みあるにより立はに迷ひ給ひぬる家の破滅の痛しさに人を救ふは佛の慈悲原より出家の役なれば止事を得ず倶して來て今日まで養ひ侍りたりといふ聲輿へ聞にけん瓶子も頓て出で來つ浮吉を見て淚ぐみ喃我良夫か淺猿や變り果たる其容体心柄どは云ながら餘處に見る目も耻かしやとて後ろに濡す袖の雨心誠か空泣か思ひかねたる浮吉は慰めかねて諸倶に淚さしぐむ事りなり其時妙潮は浮吉に打對て今は此子の良夫の尋ねて此處へ來ませしに若き女中を何迄か尼か菴に養なひ置べき喰雜用の仕拂ひして疾々連て行給へと言れて愈々當惑の浮吉儘かに頭を掻げて某今は此ざまにて妻を倶して諸倶に乞食にせんは不愍なり離緣の外には詮方なし此上ながら礼竃さす爭で瓶子が身の片付を宜しく賴み奉つると言に妙潮點頭て幵は悼ましき事ながら良夫ありては又餘處へよすがを求むる事も得ならずされはとて尼か鉢米にて此後々を養ひがたし畢竟此子の身詰りなれば離緣狀を渡し給ふとも緣だに盡すは又元の夫婦になる事ありもやせんと妾も思ひ侍るのしと言に浮吉又更に賴むよしなき姉脊の別れぢ現をかりて墨摺流し書てぞ渡す離緣狀はれ定まりなる三條半妙潮請取篤と見て是だにあれば那子のよすがも妾が宜しく世話をべしトハ言物の行末さへ專悼しきは御身の事のみ向に那子の手道具の無意氣な物は賣したり其金此に三兩あり是を御身に參せん是が姝脊の手切金是を資本に取付て笑ひし人を見返し玉へと云つゝ渡す件の金を浮吉は今更に辭みかねつゝ受頂きて喃瓶子只今聞れし譯なれば

あかぬ別れになりにけり面目なきに言べき事も言ぬ心を察してよさらば〳〵と暇乞瓶子は始終伏沈みて泣か笑うか時鳥一個之此處に有明の月ならなくに影さへや後暗きを得ぞ知らぬ愚男之妙潮に一禮演て寂々と庵を出て行にけりされば又啓十郎之計りえ事の皆行はれて空花屋の家分散の折瓶子を妙潮に引取せて尼が崎へ遣し其身も彼處へ赴きて久しく出店に逗留しつ、夜れ妙潮が菴へ通ひて瓶子と倶に樂みを極えすといふ事なく既に日頃を過す程に浮吉と兼ねて折啓十郎も來合えて尼が庵に在ければ隱れて容子を立聞えつ、既にして浮吉が離縁狀を殘し止めて出て行し、暗に歡び三人與に寄こぞりて更に祝きか酒宴しつ〻只三兩の手切金は最とせ安き物なりとて妙潮が働きを稱擧て骨折金十兩を取せ其後瓶子を浪花へ伴ひ阿邀が次の妾にして樂ミ多しと思ひけり兩頭話説是より前に意菴念藏い浮吉を欺きて周防の山口を立出し其次の日に報野とんふ一里許りの荒野を過らんとせし程に村雨俄に降注ぎて笠宿りせん家もなければ最大きなる樅の木の本へ暫時と立寄て晴るゝを待つ、過にし事を兎に角と言出て浮吉が事其日の巧策爰に憚りなしと思へば聲高やかに語ひながら倶に側へを庭返れば此木の邊りに大きなる石の地藏菩薩わり念藏態と舌と吐て聞人なしと思ひしに爰に地藏の在座ましたり只今つひ口走りし我々が巧策を必ず人に告給ふなと戯れて打笑へは性むべし此石佛忽まち聲を發し玉ひて己は言ぬが聞人やり覺悟をせよと罵られて驚き怕るゝ念藏意菴逃んとしたる後より顯はれ出る兩個の侍士深網笠も一對の朱鞘の大小いかめしく走り蒐りつ是彼兩個が襟髪摑んで引寄て詮所るぞて懐中へ右手を差入念藏意菴か襟に掛たる金財布を双方等しく奪ひ取て悶掻を頓て引搭ぎて左右へどつさり投退けて供ゐ怒れる聲も等しくわをれ不敵の惡徒共汝は早忘れしか我は白浪駝太郎我は緑野早四郎昨日よりして後をつけて來ぬるを知ぬれろかさよと言れて意庵念藏は痛みを忍んで身を匿して倍之先度の盜衆よな五千兩の山分を無沙汰にしながら我々が路用を奪は是重惡天罰思ひ知せんずと諸聲立て敦圍は兩個は供に冷笑ひて汝等こそ天罰を思ひ怕れぬ白徒なれ向に奪ひえ五箱の金は原より譯わりて遣るべき方へ渡したり又此金も汝等が浮吉を誑かし掠取たる物なれば今取返す天の冥罰开を爭はば兩個ながら押なべて首打落さん浮吉を欺瞞えたる汝等が惡巧みの一伍一什を白狀せよ是でも云ぬか云すやと踏付られて念藏意庵は苦痛に堪ず諸供に始め啓十郎ゐ賴れて浮吉を愚にしたる其巧策を總りまで具に白狀えたりしかば駝太郎等は冷笑ひて然らば今汝等が懐に付たる小遣ひ錢も皆浮吉が物なれば此方へ渡せと腰を探りて彼証文さへ取上て又呵々と打笑ひて赦すまえき奴原なれども猶又思ふよえわれば首は暫く預けて留ぞ此後を屹度愼めと罵り懲して臨打拂ひ卒と斗に是彼兩個打連立て悠々と何處ともなく立去ければ意庵念藏は金を殘らず奪ひ取れて詮方のなき儘に脊負たる着物と合羽上着を賣代なして當分の路用を調へ辛ふして播磨なる室の津までたどり着しに此津に識人ありしかは暫く其處に足を止め秋の頃まで室の遊女の幇間をして身裝りを繕ひ些の路用を利けて後に供に浪花へ歸らんとて容を求めて稼ぎけり○去程に浮吉は瓶子とわかぬ別れをせしより又倩々と思案をするに迚も斯ても此二兩にて再び花咲よすがはなし皆是親の罰なれは死んと覺悟を極めしハ切ては忍びて故郷へ皈りて那處の土ともならんと思ひ定めて金二兩にて新しき衣類を買調へ殘る一兩を路用ゐして近江の觀音寺へ返り來て日暮て親の家近く涙と共に伏拜ミ又伏拜足ばやゐ一町ばかり退きて慈愛川なる恩愛橋のたゝ中に彳みて口に稱ふる念佛の聲諸供に欄干へ足を踏かけ水底へ飛入んとせし程に後に伺ふ兩個の侍士わりやよ待給へと呼止めて走り寄つゝ抱き止め有無を言せずつりもて行て人なき處へ下したる折柄隈なき月影に浮吉い其人々と見れば一人は見覺えある向

に金閣會の日に淨六の知寄なりとて來ぬる那晉齋の先生四九見權之佐なりければ這れそも如何おとヨりに不審げに顔打守れは其人も又篤と見て始ハ實の姓名を告ざりければさもげへど此春の金閣會に四九見權之佐と名乘しは假の名にて實は和殿と從弟どち都の阿静が兄風間權七郎友影なり聞及び給ひけん我總角の頃よりして商人の業を好まねハ文學習讀に心を委ね武藝も又習ひうかめて忍びの術さへ得たりしかば兩親の世を去し頃妹阿静をば堂上方に給事に參らせて我身ハ東へ赴きしより相撲の北條家に仕へたり然るに此春主君京浪花西國まで地の容子を見て來よと仰付られたりければ是なる同役隙間誰次郎景好と諸共に西へ赴く路の便機に此處へ立寄て叔父御の安否を問しお和殿が浪花へ移轉の事のよしも具に知ぬ其折叔父御に和殿の事を頼まれし密議われば誰次郎も共に浪花へ赴き未だ顔面も見知られぬ四九見權之佐有實といふ變名して和殿の金閣會に出席したるが和殿は只管名聞を好みて人に驕らせんと欲し心の迷ひより西門屋啓十郎といふ徒者と親しく交はり其惡友意庵念藏等に教唆され麗しき妾數多を求めん爲に五箱の金を携へ周防なる山口へ赴くよしを我々早くも聞知たれば彼意庵念藏を脅して虚實を探らんと思ひ計りて或夜さり彼等が歸さへ伺ふて誰次郎と諸倶に白浪駝太郎綠野早四郎といふ盜賊の体にもてなし意庵念藏を追赫して命を取んと敦圍しかば意庵等は驚き怕れて命を赦し給らば浮吉が周防へ持行五千兩の金わり开を手引して奪ひ取せん事成る時は山分にして我々にも賜へといふ彼等が惡心顯然なれば其巧策について事を行ひ彼折和殿の跡をつけて山口の港にて海賊に打扮て五箱の金を奪ひ取しハ是我々が所爲なれども原より身の慾にしたるにあらず和殿が意庵念藏等に計られて許多の金を失なはん事を思へばなりされば件の五千兩は觀音寺へ送り遣して名四郎殿に此由を告知せ我々は猶山口の里に忍び居て和殿の容子を伺ひしに數多の金を失

ひても懲て浪花へ歸る事なく六條の廓なる糸柳といふ傾城に打込て衣類手道具賣果し斯ても金の續かねば重代の脇差と啓十郎が餌に付たる娘子綱之助を賣るゝよし我々忍びの術を以て事審かに知たれば阿世話婆を廻し者に使ふて彼脇差も又綱之助をも買取たるは是即ち我々なりよりて綱之助には送り人をつけて彼が母親に歸し遣して其後此地に忍ばせ置ぬ是等も後に災禍の起らん事を怕るゝ爲にて正宗の脇差も人手に渡さじと思ふが故の所爲なりき然るに意庵念藏ぞ和殿に勸めて綱之助をも賣することお價を盜みて半金ならでは和殿に渡さず已に掠めつくすに及びて猶も和殿を欺きて浪花へ歸る事のよしさへ我々窺ひ知たれば暗に彼等が跡をつけて次の日報野といふ荒野にて意庵念藏を打懲し掠めし金を取返して又其惡事を問しに事の起りは去年の冬芝居見物の折啓十郎が和殿の内室瓶子どのに深く思ひを掛しより便りを求めて本意を遂んと心を暗に碎く程に金瀾會を僥倖にして和殿に親しく交はりしは妻を盜まん爲なるよしさへ具に白狀したりしかば誰次郎をのみ山口に止めて我ハ浪華へ赴き又忍びの術をもて和殿の居宅と啓十郎の立擧動を窺ひしに果して啓十郎は妙潮といふ比丘尼を媒介にして瓶子を欺き陷し入て或夜枕を替せしより魚と水の思ひをなして夜毎々々に啓十郎を引入て忍び逢ぬる其事已に紛なければ我又暗に淨六等と談合して和殿の居宅の有金をハ或夜暗に觀音寺の本宅へ遣し淨六空七其餘の者をも都て近江へ遣して世には逐電のよしを披露し名四郎叔父御の計ひにて長堀の家藏をば寓居にせられしなり然るに和殿は路用つきて山口の貸座敷を追出され袖乞をして漸くに浪華へ歸り着たれども妻の惡事を猶曉らず只三兩の手切金を受て離別の悲さに堪ず耻も思はで故郷へ皈りて死んとせられしは迷ひの上の迷ひなり斯ても未だ悟らずやと言ば又誰次郎も言を竭し意見を加へて我ハ又山口より和殿の跡を着て來たれど和殿の難義を見つゝ知つゝ救はざりしは

運じやうさせて誠の人になさん爲なり懲て行ひを改えなば我々親子へ勘當の詫して對面を願ふべし和殿の胸は如何ぞやと詞等しく諭すにぞ浮吉は良此時に始えて夢の覺たる如く只感涙に噎びつゝ土地に頭を堀埋えて誤り入ていなり以後い心を改めて屹度愼みいはん爭でく／＼と希願ば風間隙間ゟ亦喜びてさらば此方へ來玉へとて浮吉が親名四郎の本宅へ伴ひければ浮六空七綱之助其餘の者も出迎へて恙なきを祝せしかば浮吉は面目なさにさし俯向て居たりけり其時糠利名四郎は此の阿靜を伴なふて奥の方より出て來つ浮吉を佶と白眼て不埒もの思ひ知たか愚のくせに名を好み色を好みて大膽なる國の守の妾に艶書をつけしに僥倖に其咎めを蒙らで却つて妾に賜りたれば其方が心いよ／＼奢りて遂に其身の破滅に及ぶ災禍を引出さんと思ひにければ一万両の資本を授けて浪花へ遣し其行ひを試ミしに飽まで盪せし白痴の擧動自業自得の憂き艱難世の胡慮になるべきを折よく東の風間氏が相役隙間殿と連立て此本宅へ立寄れえかば密談して助けを求め彼人達の情にて金を多くも失はず乞食をするまで艱難は却つて其身の僥倖にて錢金の貴き事を今こそ思ひ知つらん赦し難き奴なれど恩深き人々に詫られたれば默止難くて斯對面に及ぶものなり瓶子は上より賜りたる嫁なるをもて私しに故なくては離縁しがたしされはとて不義密通の事のよしを中立なば是も又良夫の耻なりよりて病死と披露して空葬式を出すべし其根生を磨き直して親の家を繼んとならば是なる元の許嫁の阿靜を妻に持すべし心得たるか白徒奴がと懲して諭す親の慈悲に浮吉益々後悔えつゝ感涙滂ろに止めかねて身の誤ちを詫にけり親子の和順調ひければ風間隙間の兩個も其次の日ゟ別れを告て東へ歸らんとせし折名四郎は餞けに金を多く送りしかども兩人共に些とも受ず風間が妹阿靜い事を名四郎親子に頼みつゝ相模路さして急ぎけり此兩人の心性智惠も氣量も世ゟ得難しとて聞者感心したりける（第三輯終）

新編金瓶梅第四輯

第一編

散花を惜みし人の仇心移ろも早き春の青山さても其後西門屋啓十郎は空花屋の浮吉を思ひの儘に計り負せて其妻瓶子を手に入しかばいざ浪華の本宅へ伴ふて皈らんとて事の用意をなす折から此尼が崎の出店なる西門屋の支配人寒八と呼なす者尼妙潮か庵に來て啓十郎に告る樣只今船舘幕左衛門樣より御狀到來して啓十郎に折入て賴みたき一義あり委細之書面ゟ記してあり相違なく屆けよと仰越されいとて携さへ來ぬる革狀箱のいと重やかなりけるを其儘啓十郎に渡すにぞ啓十郎は不審ながら其狀箱を開きて見るに内用と小書をしたる八重封じの狀一通に差添たる縞の財布に小判二百兩ありさて其書面に我一個の子なる苫四郎と知らるゝ如く阿波にありえに此度主君三好殿より軍用金千兩を受取奉つり此地をさえて來ぬる程に播州室の津の傾城に心迷ひて逗留して今に皈らず若件の軍用金を遊興の爲ゟ失ふ時は彼が不覺といふも更なり其祟り我等に及ぶべし和殿は浩る事にすら心得たる人なれば闇に頼み申すなり早く室の津に赴きて苫四郎に異見を加へ伴ふて皈り給ひね定めて主君の用金に手を付たる事も有べえ其頭の消費を塞がんために金子二百兩遣はすなり和殿是を預りて揚代金に滯りあらば宜しく計ひ給へかえ偏に賴み參らする心得給へと云れてこしぬ抑も件の苫四郎遠景は幕左衛門が一個子にて二十餘りの弱冠なるが其心性親に似て身の行ひ正しからず酒を嗜ミ色を好めども極めたる醜男にて女に好るべくもあらねど親の權を笠に着て且錢金を物とも思えず驕に耽る白徒なれば今度主君の軍用金を預りて尼が崎の城へ來ぬる程に或日室の津に船繋りせし逗留の徒然に此津に名たゝる浮世毬屋の二見路といふ遊女に相馴染しより忽ちに現を拔して其身の破滅となる事を思えず主の物を

我物顔に金銀を蒔散したる遊興にのみ晝夜を分たず尼が崎なる親の元へは路より病起りしがば暫時此津に保養して本服せば參らんとて從者をのみ尼が崎へ遣して親に告させしかば幕左衛門不審て其從者に問糺せしに果して苫四郎が詐りの事の趣き定かに知れて憎しと思へど愛子の事なり其儘にして置難さに啓十郎を暗に頼みて彼を迎ひに遣はすなりけり偖件の幕左衛門も前々の巻にも見えたる如く啓十郎が本妻呉服が母方の叔父にて三好の家の執事なれば尼が崎の城を預りて威勢肩を並ぶる者なし浩る内縁ある上に啓十郎は當城内の用を達こと常に多く幕左衛門を拵へて非分の利徳を得ぬる事も幾度といふ事なければ今更に辭み難くて心得たる由の返り言を記し遣し扨かめ子妙潮に件のよしを說示して這樣〳〵の譯なれば我身室へ赴きて彼所の所用を果してこそかめ子を浪華へ伴ふべけれ其折までは妙潮尼に預けて留ん暫時の程ぞ歸り來る日を待給ひねと慰めつ出店へ歸りて旅粧ひを調へつ、從者一個を從へて播摩路さして急ぎけり「作者曰く第三輯に啓十郎はかめ子を手に入しより浪花の本宅に伴ひ歸りて妾にせしよし記せしも後々の事にして此折しかせしに有ずかめ子は尼が崎なる妙潮が菴にありし程猶是彼と物語り多くあり其は此編に具へ」去程に啓十郎は播摩の室に趣きて便り宜しき旅宿を求めて船舘苫四郎が逗留しぬる郎の宿所を尋ぬるに浮世袋屋と呼なしたる遊び宿でありければ兼て用意の衣裳を着飾りて最風流なる打扮しつゝ浮世袋屋へ赴きて苫四郎に逢まくせし折思ひがけなく喜田意庵と祝屋念藏が此津にありて幇間をして其日を送るに逢けり互ひに不測の再會なれは膽を潰しつ客なき空座敷に立集ひして過來を問とはるゝに先意庵念藏は往る頃浮吉を計りし事は違はねども後談に至りて齟齬ひ儲けし金も浮吉を敎唆して借せたる五百両の借用手形も盜人の爲に奪ひ取れ剩へ身の衣服まで剝れて詮方なかりしかば辛ふじて此室の津まで來ぬる事は來たれど

もさる身のざまにて阿容〳〵と浪花へ歸る面目なさに諺にいふ藝は身を助けばへなき港の客の幇間して漸くに露の命を繫ぎしかども京浪花の全盛なる廓と違ふて客人は一夜泊りの旅客と船繫りする船頭のみ錢には絶てならざりしに此頃よき客一個あり那の夕霧伊左衛門の浄瑠理にはあらねども亦是阿波の大盡にて此家の二見路といふ傾城にはまり込て碇を卸し逗留に日を重ぬるまゝに些はれ蔭を蒙りて見給ふ如く身の衣服も何やら斯やら出來たりされば今宵も坐敷を勤めて只今㝵へ納めつゝ退き去んとせし程に圖らず汝目に掛りしは地獄で佛の方便より猶有難き御利益にて是より浮み上るべし偖又御身は何等の爲に此津へ來ましたると問ば啓十郎聲を密めてさればとよ聞給へ我は僅ゝ三両にて甘くかめ子を手に入たり其故は這樣〳〵の浮吉が西國より尾羽打からして來つることその日の手段を始めより終りまで[illegible]談示してかくの如く上首尾なれば巳にかめ子をともなふて浪花へ歸へらんとしたる折船館氏より賴まれて居續け客を迎ひの爲相應からぬ緊氣役今和ぬし等が阿波大盡といひしは則ち我尋ぬる船館氏の一個息子今般阿波より千両の軍用金を預りて尼が崎の城へ來ぬる船館苫四郎の事なるべし此所にて浮々遊び過して軍用金を失はゞ其身は更なり親御まで中譯立がたかり然らば又其上汁を啜りたる和ぬし等さへ祟りを逃れ難かるべし先此由を彼人に告て對面させ給へ疾々せずやと脊さるゝ念藏意庵は驚き周章て走りて二見路が坐敷へ赴き偖苫四郎に這樣〳〵と啓十郎が迎へに來ぬる事の由を密語告れば苫四郎も驚きながら起出て對面しけり其時西門屋啓十郎は意庵念藏に案内させて二見路が坐敷に入て苫四郎に打向ひ父幕左衛門が憤りの趣きを告知せ私の旅にあらぬ主君の軍用金を預りながら遊廓逗留は若氣の誤り是非に及ばず速かに立去て尼が崎へ赴き給へ是まで遣ひ失ひたる金は如何ほどにいぞ押隱しては汝爲にならず有つる儘に宣はゞ某宜しく計えん如何

ぞやと問詰らるゝ苦四郎は頭を掻つゝ暫くゝ兎や角と陳じしかど包み果べき由のなければ其身の路用はいふも更なり彼軍川金千両の内凡そ三百両斗り遣ひし由を私語告ぐるを啓十郎打聞て然らば是大金なゝ某とても旅なれば然ばかりの金ゝ用意せず浪華の宿所へ云遣はゝて取寄て貸参らせん翌より他處へ旅宿を替て金の調ふを待給へ今より後も此遊廓に逗留の事聞えなば假令金は調ふとも元の鞘へは納め難かり何れの道にも今宵一夜が此里に名殘なり我等も倶に飲明さんさのみに鬱ぎ給ひそと心實ごかしに慰めて二見路にも飲込せ其身は一人の新造を對方に呼上して諸倶に遊びしかば意庵念藏は啓十郎が捌きを妙と褒美して酒宴の興を添れども苦四郎は二見路に惜む別れの悲しさと親の怒りも心に掛れば巡る盃を取上げて酒すら咽喉に通らねどもさらぬ顔して調子を呼び肴を多く取寄て啓十郎を待遇けり浩りし程に啓十郎は二見路を倩々見るに京浪華にも多からぬ標致といひ仕こなしまで最憎からぬ趣きあれば又色好みの病起りて腹の中に思ふやう我身偶々此所に來て此傾城を餘所に見ば寶の山に入ながら手を空しくして歸るに似たり此所にて遣ふ錢金は皆苦印の遣ひ込と云なして算用を合する時は我懐中に一文もわく事ゝなし幕左衛門より送られたる二百両は此にあれども三百両の遣ひ込を償はんには百両足らず原より富たる人の子なればよしや三百四百の金を遣ひ失ひたればとて一個息子の事なれば兎も角もせらるゝならん預られたる二百両を生す仕方もあるべしと思案をしつゝ苦四郎にし親の送せし金ありとは初発よりして告もせず其夜は一座賑しく諸共に遊び戯れて曉の朝苦四郎と伴ふて旅宿に歸りしが已に心に計較あれば苦四郎に私語やう御身が遣ひ込たりし三百兩を償はねば尼か崎へは伴ひがたし我等は浪花へ立回りて金を携へ再ひ來ん今日より旅宿に閉籠りて何方へも出給ふな又廓通ひをしぬはば我等は世話を仕難しと誠しやかに誡めて浪華へ歸る面色しつ

頓て旅宿を立出しが昨夜意庵念藏に密語示せしよしあれば頓て浮世袋屋に趣きしに二見路も意庵等が内通あれば心得て啓十郎にさしもつかず男振さへ氣取さへ苦四郎には八汐に勝たる客なりけりと思ふにぞ最憎からず待遇て室に塗よの花燃離れぬ中とぞなりにける去程に啓十郎は浮世袋屋に居續けして思はそも日を過せしに或夜浪花の本宅より黒五郎と九四郎と抱の駕の飛藏が啓十郎を尋ね來て呼出して私語告るを啓十郎は驚きながら耳を傾けて打聞に尼が崎の執事なる船舘幕左衛門春景は年來の私慾奸曲本國阿波へ聞えしかば主君三好殿より咎めを蒙り閉門のよし風聞あり西門屋は彼人と内縁あるのみならず幕左衛門と馴合て道ならぬ錢を儲けし事の此折に若顯れなば罪を免れがたかるべしといふ世の取沙汰の概略さへ此折始めて聞えしかば啓十郎は驚き怕れて如らんにハ尼が崎へも浪花へも浮々と只今ハ歸り難し苦四郎にも由と告て暫く影を隱さんのミ但し我等ハ彼災禍を避て再び浪花より來ぬる趣きにすべしとて黒五郎にも飛藏にも心を得させ示し合して二見路にハ遁れ難き急用ありとて最慌しく浮世袋屋を立出て苦四郎か旅宿に赴き今宵聞たる尼が崎の大變這樣〳〵なりとて苦四郎が父幕左衛門が年來の非義顯れて閉籠られたる事の趣き其概略を密語示せば苦四郎ハ驚き呆れて顔色忽ち土の如く暫時は言をも得云ざりしが思はずも大息を吐て然らんにハ浮々と尼か崎へハ行がたく阿波へ歸るは愈々危ふし扣も如何にして宜らんやと問ば啓十郎沈吟じて某しとても内縁あれば祟りなしとハ言難かり暫時倶に影を隱して那所の容子を聞定め事治りて浪花なる本宅へ歸るべし和主ハ親の罪重くて歸るに家のあらずなるとき猶僥倖に預り來たる軍用金七八百兩あらん夫を資本に世を渡らば一生涯は易かるべし此義に任し給はずやと言は苦四郎點頭て其義實に然るべし斯なる上は主の物我物の差別ハなし金のあるこそ僥倖なれこれより伊勢へ參宮して多氣の伯母御の宿所に

赴き手引を求めて北畠に仕ふる事もあるべきか是もまた計り難かり彼伊勢の國司なる北畠殿の御家人楠一味齊正忠の妻此石ハ正しく我身の伯母なれば和殿も亦縁を焦たる鍋とか世話にいふ如く些の内縁なきにあらず且一味齊の一個娘千早とか呼なしたるは美人なるよし兼て聞にき爭で和殿の媒介をもて我其聟になるならば开は上首尾と言ものなりよしや其まで附會ずともさる美人を見て置ば後の咄しになりやせん何れにしても損はなし疾々伊勢へ行べしとて談合早く定りけり其時黒五郎の九四郎も獨倩々思ふやう我も又西門屋の隱居にて啓十郎が親なれば災禍の咎めも掛らば苛きめをや見ん件の事の治るまで伊勢路へ行べしと思ふ心を啓十郎に告て則ち參宮の一群にぞ加りける去程に啓十郎は尼が崎より俱して來ぬる從者飛藏を皈し遣して此方の事を呉服等に告て災禍を免るべき事の手術を示し敎ゆる文を細かに書認め猶又浪花尼が崎なる本宅出店の支配人寒八等にも心得さすの密書を從者に渡し遣し意庵念織両個は旅路の談合相手にせんとて是をも一群に加へけり又船舘苦四郎が阿波の本國より從へ來ぬる八九人の從者ハ先に尼が崎へ遣して此所に止め置たるは一個の草履取のみなれば彼をば俱して行んとて同行都て六人にて其翌朝旅宿を出て伊勢路をさして赴く折啓十郎は又思ふ樣幕左衛門より送られたる二百両は浮金なれば我撫込でも後腹やめず且苦四郎が懐中には七百両の大金あり今般我々四人の路用も皆苦四郎に賄はすれば今此金を長旅に持行んは無益なり是をば阿道に握らせて吾此日頃心を盡して遂に瓶子を手に入しを妬しく思ふ彼奴が角を折には如じと思案をしつゝ物影へ飛藏を招き寄て件の金二百兩を財布の儘に取出して飛藏此財布の内には小判二包納てあり是は阿道に遣すなり何まれはしき物あらば是もて買と言傳給へと密語渡せば飛藏は一義に及ばず請取財布を襟にかけつゝ道の程便機の里まで見送りて啓十郎が供人と両個は其處より立別れて浪花をさして急ぎけり○爰に又楠一味齋正忠は大原武二郎が内弟子となりてありし頃娘千早を娶はせて聟養子になさばやと思ふ心を妻の此石又千早にも說示して已に主君北畠殿へ願ひ奉つらんと欲せし程に人の猜みのやるせなく事の障の出來しかば是非なく武二郎によしを告て彼を他鄕へ遠ざけしに武二郎は津の國にて或法師の生ながら虎になりしに出會して件の虎を打殺したる武勇によりて尼が崎なる三好長慶に稱美せられて彼處の家臣になりたるよしの風の便りに聞に之が其後又武二郎は人の爲に謀られて罪人となりしより淡路嶋へ流されて今は彼處にありといふ世の風聞さへ聞にけりされば千早は容顔の最麗之きのみならず親の武藝を見習ふて太刀あわせに愚ならず且又和漢の書を好みて詩を作り歌を詠に古人に耻ざる手段あり文武の道に才たけて世に両個とは得難かるべき乙女にてありければ心暗に聟を擇みて武二郎こそ我良夫と傅ぐに足る壯夫なれど思ひし縁は空だのめに彼まだ添臥も夢の間に墓なく別れしそが上に彼人は罪ならぬ罪に陷されたりしより波路遥けき淡路嶋へ流されたりきと人傳に聞に悲之く味なき思ひは胸にむすぼれて遂に病になりしより勸る藥の功もなく加持も祈禱も驗あらず病煩ふ事久ふして竟に縡切たりけるが猶胸先暖かに之て絶たりとも思はれねば両親いと惜みてそが儘置て櫃に納めず息出る事あらんかと枕邊後邊に附添て涙とゝもに守り居ること三が日にぞ及びける偖も其後大原武二郎武松之向に船舘幕左衛門春景が詐りの計事に陷されて思ひがけなく盗人に似たる罪を得たりしかば命も已に危ふかりしを姪の琴柱が叔父を思ふ其孝順の赤心を神も憐み給ひけん水垢離とりし洮れ川にて財布に入たる金二百兩を不測に拾ひとりしより其金をもて漸くに叔父の環緒を繋ぎとめしかば武二郎之死罪を赦されて三好の領分なる淡路島へ流されける是等の事の趣きハ前々の輯にて人皆承知の事ながら其大方を記すよ之は爰に重ねて彼壯士の物語あれ

ばなり去程に武二郎ハ尼が崎の城內より三好家の雜兵に送られて船出をしつゝ遥々と淡路島へ赴きしに船も恙なく那所に着て雜兵等ハ島役によしを告て差送りの手形を渡し返書を取て再び船に打乘つゝ尼が崎へぞ皈りける其時此島の流人ども今武二郎か來ぬるを見て相憐みて告るやう和主は未だ知ざるべし此島第一の司人は三好家の郎等にて横島郡次浦主と呼なしたる底意地惡き侍士なり又流人預りは岩坂苦六郎知義といふ惡人なるが始めて來ぬる配流人は殺威棒とて二百の榜笞を背中へ當らるるが此島の号令なり其折用意の山吹色を岩坂殿へ參らすれば榜笞を脱るゝのミならず宜しき役を吩附られて明し暮すに最安かり我々は貧しき者にてさる齎のなきにより鹽木を運び貝を拾ひて憂年月を送るぞかしと告る折から島の雜兵兩三人出て來て新參の流人武二郎は汝よな今御頭の出給ぬ疾々來よと引立て流人役所へともなひけり斯て大原武二郎も雜兵等に從ふて役所の坪の內に來にければ岩坂苦六立出て武二郎ゟ打向ひ流人武二郎汝はれ此地に來ぬる罪人も殺威棒一百擲き脊中ゟ當て懲すこと往昔より號令なれども其身に病ありて榜笞を受るゟ堪ざる者は黄金十枚を差出して呵責を暫く延されん事を願ふも又例あり汝も又病ありて願はしく思ひなば贖ひ料を疾出せといふを武二郎聞あへず和殿も未だ知ざるか我身に犯せる罪なけれども人の爲に誣られて竟に死罪に定められしを姪の琴柱か孝順にて二百兩の金を持て僅に命を贖ひて流罪になりたれば鐚一文も持て來ず假令其錢ありとても非道の金を貪りてさばかり流人を翫遊ぶ惡人奴を肥さんや打んとならば幾等でも辭退はなさぬ打るべしと言せも果ず苦六も眼を怒え聲焦燥て憎き其奴が擬廣言疾く打伏て擲かずやと下知に從ふ雜兵奴はや群々と立蒐りて武二郎を押留し三四尺なる樫木の棒もて脊中を打懲す其數百に及びしかども武二郎は不死身なれば些少も痛を覺えず疵付てともなかりしかば物とも思えず打笑ひて人々

さては餘りに手ぬるし我肩壁の癒るまで幾百なりとも能打ねといふに苦六驚き呆れて猶打せんと下知なす折から二十計りなる若者の身長高く色白く肥膏きりたるが奥より忙はしく出て來て何事やらん苦六に私語たりければ苦六屡々打點頭俄に面を和げて雜兵等を押止め實此大原武二郎は虎を手打に殺せしといふ勇士のよしは我も亦世の風聲に聞たるが今見る所さもあるべし那痛しは有ずとも殺威棒は是までなり皆退々と雜兵を遠ざけたりし爲体始めに似ざる苦六が心の底を武二郎は圖り兼つゝ不審さに默然として居たりける

第二編

其時岩坂苦六は先雜兵を遠ざけて面を和げ莞爾に武二郎に打對ひて和殿武勇の譽れある事彼虎を手縛にしたる其事の趣きは吾等へも粗聞えて最頼母く思ふものから凡そ初めて來ぬる流人にも島の掟あるなれば止事を得ず榜笞を當て聊か試みたりけるに身の中都て金鐵なるか荒き榜笞に屈せずして皮肉些とも破るゝ事なく痛む氣色のなかりしは誠に稀有の勇士なり我等深くも感ずるの餘り今日よりして和殿をして鹽木小屋の番人とせん凡そ此嶋なる流人の勤めにハ日毎に磯に流れよる鹽木を拾ひ焚木に賣て些の錢を得て飢を凌ぐに其木十束あれば一束をもて貢の爲に當役所へ差出すなり开を月々に貯へ置所を鹽木小屋と號けたりされば多かる流人の內にて律氣にして算筆をよくする者を撰取て件の小屋の番人とす然るに件の小屋を守る流罪人は往る日に病死して未だ後役のものなしよりて和殿に小屋守りを吩附るなり彼所には些の所得あり只鹽木の數を改めて开を打守るのみなれば骨の折る事はなし疾々彼所へ到るべしと最懇切に私語示して更に又重立たる雜兵等を呼寄て武二郎を鹽木小屋の番人になすよしを言知しつゝ員數の帳を渡しにければ件の雜兵等は心得て武二郎を誘ひ立て件の小屋に赴きて帳面に引合せ鹽木の員

數を改めて武二郎に引渡し偖言やう此所の番人ハ流人なれども役義あれば日毎に麥五合づゝ下さるゝなり活れば飢に望む事なし能々務め候へとて携へ來ぬる一袋の麥を渡して出て行けり其時武二郎ハ獨頭を廻して熟々邊りを見るに彼鹽木を入置く雜庫四五戸まへありてそが眞中に萱葺の小屋あり凡そ番人たる者は此小屋にあり莚僅に四疊ばかり敷設けさる壁は所々破れたるが居爐あり鍋一つありこれらはすべてまへ〳〵の番人よりつけ置たりの物なるべしそのとき武二郎思ふやう前にハ岩坂笞六が錢を求めて無慘あたりし勢ひには似氣もなく俄に佛心をもて撰擧て此役義を吩附たるは如何ぞやと何さま斯さま思へども思ひかねつゝ有ける程に此島の流人共は今參りの武二郎が一個逸早く取立られ鹽木小屋の番人に成たる由を傳へ聞みな諸共に集ひ來て喜びを演て言樣和主は如何なるひきあるにや流れて來ぬる其日より活る役義を云付られしは昔よりして例もなき能僥倖にて侍るなり翌よりハ又貢の鹽木を此所へ納る我々なれば宜しく頼み奉つると皆口々に禮義を延て暇乞して歸りけり活る所に一個の小厮御膳籠と夜具包みを擔籠に打かけ舁ぎ來て武二郎に對ひていふやう已れハ岩坂樣に使はるゝ仕出四郎といふ者なり若旦那施恩吉さまより晩食を送らせ給ふなりいざ先召れ候へと告知しつゝ御膳籠より用意の膳を取出すを武二郎は不審ながら見れば一汁三菜にて並々の料理にあらず中酒の盃肴口取の菓子までも添られたるに如何なるゆゑぞ門違ひにはあらずやと言ども聞ず置並べて頻りに勸むる馳走振に物ほしかりし折なれば又今更に辭かねたる武二郎は飽まで飯を食ひ酒さへ飲て其悅びを伸しかは仕出四郎は持來たりし夜具包みを取出して是も若旦那の遣し給ひし御身の夜具にて候なり今宵より召され候といふに武二郎愈々呆てよしを問ども其譯を小厮の知べき事ならねば心元なく思ふのみ是よりして日毎〳〵に三度の膳は施恩吉が仕出四郎をもて送らして武二郎に勸めしかば武二郎は一度も手つから炊の業をせず田舍に稀なる美食珍味の口に入ざる事もなければ偖は彼施恩吉とやらん飽まで我を肥太らして新身の刀を試さんとての用意にこそあらんずらん兎ても斯ても命運盡たる我身を今更惜まんやと思へば飽まで打食ひて十日餘りを過す程に或日岩坂施恩吉ハ仕出四郎をもて武二郎を其身の部屋に招ぎよせて恙がなきを問慰め疾にも對面せまく思ひながら親の役義に憚りて今日までは過せしが今日ハ我身の誕生日なれば聊か盃を進めんと思ふて招ぎ候なり某が年十一二の頃より相撲の業を好むにより姉婿の弟子となりて淡路島とハ名乘れども未熟にしてさせる擧れも得難きに姉婿は世を去りて今に師と頼む者もなし和殿は勇力世に著るく虎を手拍にし給ひたる手並ハ人の噂に聞にき事で敎を受んずと思ふによつて此日頃聊少心を用ひたり惡くな思ひ給ひそと肝膽を吐き信を示して此日祝ひの酒肴をもて最懇ろに欵侍ければ武二郎は今更に日頃の疑ひ忽ちとけて其悅び大方ならず一個の知己を得たりと思へば武藝の物語して向に楠一味齊を師として學びし劍術柔術居あひ相撲の業までも奥義を隱さず説示せば施恩吉溫ろに與に入て亦他事もなく語ひけり斯て大原武二郎は淡路島施恩吉が大方ならぬ欵侍にて終日醉を盡しつゝ其夕暮に別れを告て鹽木小屋へ歸り來つ中に入んとせし程にやよ暫しと呼かけて磯邊の方より來る人あり武二郎誰やと見返れば年の程十七八なる最麗しき女子なり武二郎愈々不審て抑も御身は何國の人ぞと再び問ば淚ぐみ其は餘所〳〵して別れし後は津の國なる尼が崎の城に止められて三好の家に仕へ給ふと人の噂に聞たりしが近頃又彼所にて人の爲に謀られて罪ならぬ罪に陷入て爰等へ流され給ひきと世上の風聞しかすがに風の便りに聞悲しさにあるにもあらずあこがれ出て便り求めし淚枕遙けき船路を辛ふして漸

く々尋ね來つるなり憂に仕へん心の信を憐れと思ふて給ひねと掻口說つゝ泣にけり武二郎是を打聞て且駭き且憐れみ兎にも角ふも拵へて返して遣らんと思へども出船なれば詮方なしさりとて此身も流人なるに若き女子を止め置ば非法の罪を遁れ難けん如何ずべきと思ひかねて殆ど困じ果けるがよしや祟りのありとても女子の身にて遙々と爰迄來にけるを難面內へいれずもあらば人たる心なきに似たり且兩三日止め置て便り宜しき船を尋ねて返さんに如ずと思案をしつゝ漸々宿所へ伴ふて旅路の憂を問慰め迭に積る物語に日も暮て夜の更しかばそが儘此處に止めしに元より挾き鹽木の小屋は夜の物さへ兩個なければ一ツ臥床に木枕の堅き男も緣の糸結ぶは夢の浮惱や水漏さじと妹と脊の深き中にぞなりにける去程に武二郎は千早を小屋に忍せ置て故鄉へ返し遣るべき便船を待程に思ひず三日に及びたる其曉方まで枕を並べて臥したる千早は何地へ行けん臥床に居らずなりしかば不審ながら彼處此處と隈もなく尋ねしに絕て行衞の知ざりければ偖は千早と見えたるは狐狸の所爲にして我を愚にせしならん若然らずば若き女子の海山越て遙々と一個此地まで來べきあらずさしも勇士の聲を得たる我身流人になりしより畜生にすら侮られて浩る不覺を取にきと思へば獨心ふ恥て人の知ぬを僥倖に尋ねもやらず止にけり○斯て又楠一味齋が娘千早ハ向に大原武二郎を戀の病ひに弱り果て一旦絕されたりけるが第三日の曉方に始めて眠の覺たる如く忽ちに息出て甦生りたりければ親の悅び大方ならず藥を飲せ粥を進めて種々に撫恤程に凡そ七日許りにして病名幾なく平ぎて常に變らずなりけるが此頃より月の穢血を見ず斯て四五ケ月になる儘に酸物を好み折々病煩ふことと全く姙病に似たりし剩さへ腹の邊り脹らかになりしかば兩親竊に不審で千早忍ひ男ありて懷姙したらんと思ひしかば或日側に人なき折兩親は千早を招きて近頃和女の御腹の容子身籠りたるに疑ひなし若き者の習ひなれば親の許しを待ずして仇し男と忍び寢に情の種を孕せしならん其男は何者ぞや包み恥べき事ならぬに隱さず告よ如何ぞやと嚴しく問るゝ千早が面なき只泣沈みてありけるが側の短刀引拔て已に自害と見えしかば兩親驚き押止めて假令分訛あらずとも譯をも告ず死ぬる事かハ包まず告よ其上にて又了簡もあるべきにと賺しつ威を右左り涙ぐみたる親の慈悲に千早は隱す事を得ず向に病にさし詰られて三日息絕たりし折夢とも知ず現ともなく一個淡路嶋に押來りて武二郎に對面して三日彼處にありし程に夜每に枕を川瀨の水に馴れたる心地して暫く睦み語ふと思へば忽ち蘇生りて死なざる事を得たりし事又武二郎が爲体鹽木小屋を預けられて詫しき住居なりし事又流人預り苫六が事其子淡路嶋施恩吉が事聞たる儘に逼樣〳〵と始め終りを告知せて此事は神かけて空言ならず侍れどもさりとて正しき證據なければ實なりとは聞給はじ斯まで思ふ武二郎ぬし兎にも角ふも添遂られぬ妹脊の緣絕しより親に先立不孝の罪科免させ給へと忍び音に掻口說つゝ泣にけり事の不測ふ母此石し驚き感じて回答も得せず一味齋ハ倩々と聞果て眉を蹙め男女の情義には死して連理の木に生じ或は鴛鴦となりし例なきにあらず況て魂ひあこがれ出て千里の外に遊べるを神遊とも言なれば其事なしとすべからず淡路へ人を遣して彼處の容子を聞せなば疑ひを解よしもあらんさはとて奴僕蔦平に機密を示し飛脚として淡路嶋へ遣すに符合したりしかば一味齋は忽ちに疑ひ解て深く感じ彼武二郎し類ひ稀なる義勇勝れし若者にて無實の罪を得たりと聞つゝ彼を流人となし果なんは最惜むべき事にてそれ向には我筭にして娘千早を添遂させんと思ひし事の仇となりしふ浩る不測の事ありて千早は懷姙したらんにし今更に捨置難かり我自ら彼處に行て許多の金をもて武二郎が罪を贖い伴ひ歸りて爭で千早と元の如く夫婦になして世の中廣く初孫を產せんずと分別已に定りければ即ち主君北畠殿へし湯治の

願ひ書を奉つりて五十日の暇を申給はり蔦平此餘に從者を五六人從へて已ゝ啓行をしたりしが其頃浪花の旅宿にて枕探しといふ者ならん盜人臥床へ忍び入しを一味齊眠覺て枕上なる刀を攫取盜賊まてと聲かけたるに驚き怕るゝ盜人は庭面さして逃走るを一味齊追かけて垣を越んとする處を刀に付たる小柄をもて手裏劒に打けるがさしも武藝の達人なれども夜目にて覘ひのくるへるか盜人は小柄にて襟を縫れしのみにして身ゝは疵を受ずやありけん閃りと垣を乘越て彼方へ䠖と飛下りつゝ行衛も知ずなりにけり其時蔦平供若徒等は此物音に驚き覺て手燭を取て椽側より等しく走り來にけれども盜人は已ゝ早逃失たる後なりければ罵り騷げど甲斐もなし一味齊後悔して我盜人に手裏劒を打かけたる彼小柄は先祖相傳の重寳にて赤銅なゝこに金と銀との菊水の彫物あり殊ゝ秘藏の品なるに木の蔭暗く覘ひくるひて夫を失ひしは盜人に糧を齎す類ゐなり悔しき事をしてけりと只管ゝ悔恨むものから詮議の手掛りあるよしなければ次の日旅宿を立出て淡路をさして急ぎけり〇兩頭話說爰に又船館苦四郎は啓十郎等一群と共に伊勢路を來にけるが參宮は先後にとて楠一味齊が宿所に赴き便りよくば身の落付を頼まばやと思ひしかば啓十郎等に此義を告て北畠の城下なる多氣の里に着しかば便宜の旅亭に宿を求めて次の日花美なる衣裳を着飾り啓十郎黒五郎と共に一味齊の宿所に赴き姓名を告げよしを伸へ主個に對面を請にけり抑も一味齊の妻此石は苦四郎が伯母とはいへども寔は骨肉の親類にあらず船館幕左衛門が初めの妻は此石が姉なりしに其腹には一個も子のなくて世を早ふし後の妻は苦四郎が產の母にて啓十郎が妻の伯母なるが去年の秋卒去ぬ浩れば年頃疎遠にて問もせず問れもせぬに世の諺に苦しき折の神たのみと云るが如く苦四郎は思ひがけなく寄邊もあらぬ身となりしかば古きよしみを僥倖にして猶此石を伯母と稱へ便りよくば楠の婿にならんと計りたる已勝手の擬

深切些の土産を齎えて此日楠の宿處に來にけり去程に楠一味齊が妻此石は古き由緣の船館氏幕左衛門が一個子なる船館苦四郎とかいふ弱冠が伊勢參宮の序なりとて道連人等と諸共に思ひがけなく問れしかば打も措れず客座敷へ迎へ入て對面し折から主個一味齊は湯治に暇賜はりて他國せし由を云知して懇切に待遇ければ苦四郎打聞て遙々推參致せしに折の惡くて先生に拜顏を遂ざる事尤も意恨の至りなり憚りながら御息女樣とは從弟の續きもいへば千早殿とやらんに對面を免されなば親類がひのあるに似たり此義御許容あれかしと言はれて此石辭むによしなく頓て千早を呼寄て苦四郎啓十郎等に引合たりければ皆々等しく目を斜にえて始終て此娘を見るに月とや言ん花とや言ん類ゐ稀なる美人なれば飽るゝ迄に驚き見惚れて温に詞を出す者なしそが中に啓十郎は腹の中に思ふやう我本妻の呉服は更なり鍛金の阿運李の瓶子妾にも美人なきにあらねど今此千早に比ぶれば實に花の側らなる御山木に似たるべし如何にもえて緣談を我媒介して苦四郎に取組せ事成をりに横ばんをきりて千早を手に入るゝ手術を意庵念藏等に智する狂言は幾等もあらん彼災禍を除れんとて此處へ早く來にけるも又滿血ではなかりえと心暗に計較あるを氣色には顯はさず都て能く千早に名對面して只人柄を繕ふのみ狠者とは見えざりけり遮莫一味齋が旅の留守にて女主個の事なれば頗に云よる序もあらず迯に詞少なにて長居もえ難き苦四郎は此石に別れを告て暫く此地に滯留すなれば又々見參もべけれとて啓十郎等と諸共に旅宿をさして歸りけり〇斯て苦四郎啓十郎は黒五郎と打連立て其夕暮に旅宿に歸りて留たる意庵念藏に今日の首尾を密語示して件の千早と緣談の手術もかなとかたらふほどに已にして日の暮ければ酒肴を求めつゝ夜と倶に密談するに此旅宿の奥座敷を二間借切にしたりしかば餘處へ憚る事もあらず皆々頓て團居して盃を打巡し只彼一義を談ずれども折柄主個一味齋が留守

といひ年頃疎遠に打過て此度始めて對面せしにさる便機もなく打つけに婿になるべし婚姻を結ばんと言寄とも承引るべき事にはあらず一杯甘く食すべき手術もがなと額を集めて皆智恵袋を絞れども流石の意庵念藏も何と曹べき狂言の趣向は絶て投首の思案に小夜の徹るのみ丑滿頃になりふけり浩る處に椽側なる障子の影に人ありて旦那衆屈度し給ふな智恵がほしくば金との談合よき手術もあり買氣はなしかと呼かけて障子を開きて出るを皆々駭きながら等しく其方を見返れば怕ろし氣なる一個の曲者月代さへも最長き剛刀腰に横たへて苦四郎等に打向ひ諸人さのみ駭き給ふな我等は名たゝる盗人にて野鼠の空市と呼なす者で候なり今宵此所等へ忍び入て踏用を取んと思ひつゝ前より那所に立隱れて各々の談合を心ともなく打聞しに屈竟の一品ありといひつゝ脇差に付てある小柄を拔とり指示して是はこれ一味齋が刀に付たる小柄なり我等往る日浪花にて仲間の者と面々の功名咄してしける折一個の仲間の言けるは今宵云々の旅宿に宿りぬる武士の旅客は軍學武藝の達人と聞えたる伊勢の楠一味齋なり我仲間の者誰にてもあれ這奴が臥床に忍び入て一品なりとも盗み負せば我々が頭にせんと教唆せども我こそといふ者一個もなかりけり其時我等進み出て僅計りの事せざらんや今宵必らず忍び入て手並を見せんと約束しつゝ件の旅宿に紛れ入一味齋の臥たる坐敷へ漸く忍び近寄程に一味齋早や目を覺して夜着を掻やり枕邊なる刀を取て身を起し盗人待と呼かけたる聲に我等は仕損じたりと思へば頓て引返して庭口さして逃出つゝ塀を乘んとせし程に一味齋追かけ來て刀に付たる小柄を取て發矢と打たる手利劍に襟を縫れて身に疵付ねば命限りに逃のびしが窃に怪我の功名にて盗まされども彼人の小柄を我手に入しかば仲間の者に見弄して思ひの儘に誇りしが又賣もせず爰にあり此小柄は赤銅七子に菊水の彫物あれば其妻娘も見知て居ん這樣〳〵に言拵へて這を結納の一ッになさば退引ならぬ證據となりて緣談即座に調べし入用ならば價は百兩さる價直にて賣もせん此談合も如何ぞやと言れて悦ぶ苦四郎啓十郎意庵黑五郎念藏さへも笑坪に入て开も奇妙なる計事夫に増たる直徑なし價の百兩承知なれども事調はずは買損なる手附十兩渡さんに四五日我等に貸ねかしと言ば空市頭を揮て十兩計りの目腐れ金で一日なりとも貸氣はなしさればれ暇申さんとて行んとするを苦四郎も押止めつゝ念藏意庵の兩人に掛合せ漸く半金五十兩を渡して小柄を借請ければ空市は返濟の時日を堅く取極先て何地ともなく出行けり〇斯て船舘苦四郎は大願成就と悦び勇みて猶啓十郎其餘の者にも翌の手筈を談合しつゝ曉るを遲しと待詫て次の日千早へ贈り遣す結納の品々を買調へ小柄のみでは物足じとて近頃父幕左衛門が贈り來したる短刀あり這は大原武二郎が秘藏の名作なりけるに武二郎が淡路へ流さるゝ折あがり物になりけるを幕左衛門が捲上て苦四郎に遣したり然るに苦四郎も武二郎を一味齋の弟子とは知ず是より前に武二郎を出しやる折娘千早と婚姻を取結ばせて三夜臥床を倶にせし其等の事は密々の取結びなりければ夢にだも是を知ず漫に件の短刀を彼小柄に相添て樽肴と倶に五品供の奴僕を雇入の誰彼に是を舁せて又啓十郎黑五郎等と倶に一味齋の宿所に行て此石に對面し昨日御意得んと思ひしかども初見參の事なれば心ならずも默止せしが某此地へ來ぬる折浪花津にて一味齋殿に一ッ旅店に宿りしがば叔父甥の名乘をしつゝ一夜語り明したり其折一味齋叔父の宣ふやう我娘千早は已に年頃になりしかど未ださしたる婿がねなし和殿は古き緣者なり若嫌はれずば婿にせん多氣に至らば此由を妻と娘に告知して先密々にて婚姻を取結ばせて我皈るを待給ひねと教へ示して即ち證據の爲にとて刀につけたる此小柄を某に賜りて是は此石千早等も能見知りたる物なれば決して違背すべからずと仰られて候へば輕少ながら結納の印を齎し候なり开が中に又短刀は我

先祖より相傳の業ものなり媒妁にも町人ながら由緣あれば西門屋啓十郞を頼みたり目出度御受納あれかしと演れば啓十郞黑五郞も詞等しく祝儀を演て只管取持けり思ひがけなき事なれば此石不審疑ひながら先其小柄を取て見るに寔に良夫の重寶にて菊流しの小柄なり又短刀も見覺ゑあり向に千早を武二郞に娶する折婿ひきでに一味齋の取せたる山吹丸でありければ其詐りを早くも悟りて苫四郞に打向ひ只今言るゝ婚姻の一義は更ゟ心得がたし小柄は眞に覺ゑある良夫の差料に似たれども娘千早は親の許せし大原武二郞武松といふ戀婿あり彼武二郞は一味齋が允とも秘藏の弟子なれば婿がねにしたりしを其折事の障りありて婚姻の後程もなくあかぬ別れに及びしのみさりとて離緣せしにあらず已に是人の妻なる娘を又御身が妻にせらるべき筈はなし且此短刀も我家の重寶にて山吹丸と呼なせしを去る年一味齋が婿ひきでにとて武二郞に取せたる物ぞかし婿武二郞は去る頃俄に當所を立さりしが其道中にて思はずも荒たる虎を打殺しぬる武勇の譽れ隱れなければ三好殿に招がれて其家に仕へしに佞人に計られて罪ならぬ罪に陷入しより淡路の荒礒へ流されたるよし風の便りに聞知たり思ふに其山吹丸は武二郞が思ひがけなく獄舍に繫れたりし折あかり物になりけるを名作なれば和ぬし親子が横領せしにぞあらざらん是によりて推量るに小柄も大方道中にて竊み取しを婚姻の印にてこそせしならめよしや千早に武二郞といふ許嫁の男あらずして我夫が和主をもて聟にせんと思ふとて旅路にて約束して妻にも子にも談合せず只一筆の證據だも贈らで僅に小柄一ッを渡して證據にせられんや是等の由を我君へ訴へ申さば事の虛實の立處に顯はるべけれど內緣ならずも伯母と呼れ甥と稱ふる由緣あれば此度は許しなり小柄幷びに短刀は元我家の重寶なれば夫の皈り來ますまで此儘預り置べきなり此他の品は一ッも用なし疾々持て皈りねと巧みの裏を斷までに示しを指たる賢女の明辨苫四郞等

はぎよつとして仕損ひぬと思へども猶懲ずまに弱みを見せず辭戰ひ仿なく只囂々と爭ふのみ女を相手に打擲く事も得ならず理に負し啓十郞等に諫められて一先旅宿へ皈りしが五十兩にて買取たる小柄は更なり短刀さへ捲上られて阿容々々と此儘には止離し折から主個一味齋が旅の留守こそ僥倖なれ又た書換て彼所へ押寄有無を言せず踏込て千早を攫ふて他所へ走らん是より外に詮方なしと頻りに逸やる苫四郞が無分別なる擬膽男に引立られし啓十郞意庵念藏黑五郞まで然るべしと同意の手配暗に竹鎗飛口なんどの道具々々を用意しつ更に所の溢れ者に錢を取せて味方に語ひ其次の日に苫四郞も啓十郞黑五郞意庵念藏と諸共に最いかめしく身拵へして溢者等を從へつゝ黃昏頃に一味齋が宿處をさして押寄ける此事早く彼家ゟ告知する者ありければ此石聞つゝ驚きて即ち主人の甥なりける志貴の實一郞盛賢といふ若者は一味齋の甥にして武藝の奧義を極めたれど尙內弟子にて叔父の留守を預りてありければ此石之を呼寄て這樣々々の風聞あり如何にせべきと意見を問しに盛賢騷ぐ氣色なく其義も我等に任し給へ苫四郞を除くの外は皆是町人藪醫師のみ某一人出迎ひて追返しいはんと最容易けに回答つゝ早く奴僕に吩咐て門前を掃除させ大門を押開かせて那惡徒が押寄來ぬるを待間程なく苫四郞も味方の多勢を從へて眞先に進み近付叫と喚て無二無三に込入んとせし程に表門の蔭よりして立顯るゝ志貴の盛賢袴の股立小高くとりて弓矢を携へ立塞りて苫四郞等に打向ひ汝等鈍くも巧みたる事の行はれぬを意恨に思ひて力づくにて勝んとするか代々軍學武藝をもて世に許されたる楠氏主個は他國したりとも志貴の實一郞盛賢此處にあり若一足でも近付ば矢先にかけて射て倒さん覺悟をせよと罵つたりさしも一個の敵ながら弓矢に憚る苫四郞浩る事には功者なる黑五郞さへ驚き怕れて人の後へ隱れしかば況て其餘の者どもは堪へかねつゝ後退して忽ちはッと惣崩れに崩れたちてぞ逃たり

ける斯て志貴の實一郎は奴僕に門戸を閉させて其身は奥へ趣きつ此石千早ゐ惡徒等を追退けたる爲体を這樣〳〵と告しかば千早もよしを打聞て苦四郎等は再び三たび惡巧みを仕損じたれども猶も執念如何ならん巧みをせんか計り難かり當所の司で侍るなる拇尾の前司光忠ぬしは世に多からぬ賢人にて民の訴へを閉定むるに私の計ひなく理非明斷の譽れあり早く件の趣きを彼人に訴へ給はゞ便り宜しく侍るべしといふに此石点頭て其夜實一郎に一通の訴へ文を書せつゝ次の日早く實一郎を問注所へ遣して苦四郎等が惡巧みの事の由を訴へしに果して千早が推量に違はず苦四郎等は負腹立しを邪になすべき術なさに又々意庵黑五郎か惡智恵を借啓十郎ども種々に談合して意庵に詐りの訴へ文を作り書せ啓十郎黑五郎等を証人にして多氣の御所へぞ訴へける

第三篇

去程ゐ楠一味齋が妻此石か志貴の實一郎盛實をもて舘苦四郎等が惡巧みの事のよしを多氣の一の司人拇尾の前司光忠に訴へたりける次の日に苦四郎も又啓十郎黑五郎意庵念藏を證人として強て此石が非義の趣きを數箇條に記載て一群と諸共に多氣の問注所へ訴へけり其時前司光忠は苦四郎等が訴狀を見るに一味齋が妻此石は苦四郎が伯母分にて元より疎からぬ舊緣ある然るに往る日苦四郎が浪花の旅宿にて一味齋に對面せし折娘千早を娶せんといふ約束ある證據の爲に一味齋が刀に付たる小柄をもて苦四郎ゐ與へしかば頓て此地に趣きて此石ゐ其由を告知せ則ち件の證據の小柄を苦四郎が秘藏の短刀並びに帶代の金樽肴なんど五種六種を結納として千早へ贈り遣せしに此石肯て承引ず却つて苦四郎を疑ひて盜賊の穢名を負して小柄と短刀を奪ひ取千早には大原武二郎といふ婿ありと詐りて肯て苦四郎が結納をも返さず事理不盡の擧動なれば捨置がたくて此訴へに及べり爭で此石千早を召出されて一味齋が許せし如く千早と婚姻を結ばするかさらずば小柄短刀は更なり結納の品々を送り返し候やう仰付られ下さるべしと辭巧みに書たりける光忠も既にもや昨日此石が訴へによりて事の虚實を知と雖も猶も思ふよしあれば苦四郎等に打向ひて一味齋は彼身の病保養の爲に十日の暇を申し賜りて他國せし留守の事なれば此石が疑ふて頓に承引ざるも故なきにあらず獨又双方を召出して對決の上虚實を糺さん其折までは旅宿に罷りて重ねて沙汰を相待べしと嚴重に言渡して苦四郎等を退かせ偖足早く心利たる夥兵兩三人に秘密の旨を心得さして其一個をば尼が崎へ遣し又兩個をば有馬の湯治場と浪波津へ分ち遣し又苦四郎等が旅宿と聞にし多氣の旅店の主個何某を忍ひやかゐ呼寄て彼等が日頃の爲体を審かに問糺すに彼盜賊の事なども緒口僅少現られけり是により光忠は苦四郎が訴への詐りを知るものから其盜賊を捕ふるに未だ手掛りあらざれば如何にすべきと思ひ豫て忍ひ使の歸るを待つゝ五六日を過る程に先有馬と浪波津へとて遣したる夥兵兩個が歸り來てよしを告るを打開に楠一味齋は湯治の願ひによりて旅立に趣きたりと雖も有馬の湯治場には行ず其聟大原武二郎といふ者が罪ありて淡路へ流されたりければ自ら彼を問んとて浪波津より船出をせんとて日毎に追風を待と雖も一日も順風なきゐより止事を得ず滯在して今も浪波津旅宿にあり然るに向ゐ其旅店に盜人忍び入けるを一味齋早く目を覺して刀を引提て追蒐しに盜人は庭へ逃出て垣を乘越んとせし程に一味齋は小柄をもて手利劍に打かけしに上手の手より氷や漏けん盜人は手を負で却つて小柄を失ひしよし彼處に活る風聞あり彼人は軍學武藝の世に聞にたる名家なれば箇許りの事をすら人皆風聞するならんと言に光忠點頭て偖は苦四郎が緣談の証據なりとて齋せし件の小柄に疑ひなし然らば向に浪華にて其盜人に密に頼みて小柄を盜み取せんと計り

たる物なるかさらずば其盗人の手より小柄を買取たるか此二ッをば出べからずと思ふのみにて言にも出さず稍又一個の歸るを待しに其夕暮に尼が崎より件の夥兵が歸り來て彼船舘幕左衛門は年頃の奸曲顯れて嚴しく閉籠られし事又其子苫四郎は主君の軍用金千兩を預りて阿波より尼が崎の城へ來ぬる折播磨の室の遊女に迷ひて久しく滯在しぬる程に父幕左衛門が咎めを蒙りて閉籠られたるよしを傳へ聞打驚きて其身の罪を遁れん爲に件の金を搔攫ひて仲間の徒者と諸共に暗に此地へ來ぬるなり又彼西門屋啓十郎は浪華津の大商人にて尼が崎にも出店あり甚だしき驕奢者にて其行ひ正しからず且幕左衛門と内緣あれば祟りの其身に及ばん事を恐れけん折から室の津に來てありしか遂に浪華へ歸り行ず伊勢參宮の志願ありとて苫四郎と諸共に是も當所へ來つるなりされば啓十郎が浪華の本宅其餘尼が崎の出店まで戶を卸たし渡世を止めて幕左衛門が事の落着を暗に待といふ風聞まで具に注進したりけり其時光忠思ふやう偖は苫四郎等ともがりの骨頂忽せならぬ重罪人なり搦め取て嚴しく鞠かは惡事を白狀すべけれどもさしては千早が許嫁の武二郎が爲に障りあり彼大原武二郎も武藝力量世に勝れし一味齋が高弟にて千早と前に婚姻を取結ばせたりと雖も由を主君に願ひ申さず武二郎は當所を立去り三好長良ぬしに仕へしに無寃の罪に陷入しより淡路へ流されたりとか聞ゆ今般一味齋が忍びやかに彼所へ赴かんと欲するも浩る内緣あればならん然るに苫四郎等が惡事のよしを三好家へ告知して彼所で罪に行いせなば武二郎が身の障りとなりて生涯赦免あるべからず只穩便に事を計りて彼等が罪に伏する折追放つに如くとあらじと已に分別定りければ則ち國司北畠殿へ一味齋が妻此石と船舘苫四郎が訴への事のよしを聞えあげ這樣〳〵に取計ひ候てやと申すにぞ北畠殿聞給ひて其義實は然るべし我も透見をせまく欲す疾々用意をせよかしと即座に仰せ渡されけり〇斯て掉尾の前同

光忠が其次の日に船舘苫四郎を呼寄て此度其方等が訴への事の趣き一味齋が歸るを待て俱に對決に及びなば愈々明白たるべけれども其方仕官の身なるをもて久しく滯留し難たしといふ是も亦不止得なし但し大原武二郎は一味齋が婿なりと雖も主君へ願ひたる事ならねば其義は取上給はざるなり遮莫千早は武藝あり且詩を作り歌を詠ば文武に秀でたる丈夫にあらざればよしや親も許したりとも決して婚姻すべからずと誓ひを立て申すなり浩れば其方文學武藝の奥義を千早と比較て其方千早に勝ならば上より仰付られて一味齋が婿になされん如何此義をよくするやと問れて苫四郎擬眞面目に其義も望む處なり仰せ付られ候へかしと即座に承受たりしかば然らば翌御舘にて互ひの才覺を試みられん時刻を違へず罷出べし此餘の事は這樣〳〵と懇切に心得させて苫四郎を退かせ又志賀の實一郎を呼寄件の由を言渡し此義相違なきやうに此石千早に傳ふべしとて其用意を急がせける去程に苫四郎は頓て旅宿に歸り來て今日光忠に言渡されたる件の事の趣きを啓十郎黑五郎意庵念藏に說示して我等詩歌には委しからねども武藝は女子に負んとは思れず各々宜しきもち歌あらば貸て我等を助けばやと言ば意庵と念藏は諸俱に頭を搔て三味み合する長唄かめりやすならば人並に彈もせん唄ひもせん三十一文字は百人一首も空には能も覺えぬ我等其談合にものり難しといふを啓十郎押止めてよしや詩歌に負るども武藝は武士の家業なり我々は其職ならねども柔術にも骨を折て已に手練の本事あり翌は渉身に附添て萬一負色になり給はゞ我亦暗に詮方あり然らば鬼に金棒あて心元なき事はなしと言に苫四郎悅びて示し合しつ勇し氣お事の用意をしたりけり斯て其次の日に苫四郎は時刻を違へず最花美なる打扮して啓十郎と諸俱に從者を從へつゝ多家の問註所に赴きて側添として啓十郎を召具したるよしを聞えあげしかば役人即ち條内をして苫四郎と啓十郎を廣書院へぞ伴ひける其事の爲体上段に簾を

垂しは國司北畠殿彼處に座して透見し給ふ處なるべし夫より左右兩側に文武に猛たる諸役人種服の袖を列ねて出仕の景況滔々たりそが程よき所には左右に兩の文題を對へ据て料紙硯を添られたり暫くして一味齊か娘千早も最花美なる打扮して母親此石と諸倶召に應じて參りたる面影の麗しさは方に彌生の初花の咲出んとするに似て未だ席に着かざるに南部の移り香邊りに薰じて人皆見返らざるはなし其時掛尾光忠は千早と苫四郎を呼近付て昨日も已に仰せし如く汝達が文學武藝の甲乙を試みて何れにも勝たる者の願ひに隨意なされんとなり先文を前にして歌學の心得を問べて(ほの〲と明石の浦の朝ぎりに島かくれゆく船しぞ思ふ)といふ古歌は世に柿本の人丸なりといへり此歌何等の歌昔にあるやと問れて苫四郎眼を見張て出所は覺えいねども此歌已に明石の浦の人麿の社にあれば疑ふべくもいはずと事もなげに答へける暫くして千早が言やう只今問せ給ひし歌は古今集にありて旅の部に讀人知ずとありさるを舊本今昔物語にも小野篁の歌なるよしを言りなれども人麿の歌と言べき事別に傳ふるよしあるかその義は知ず侍るなりと言に光忠懇き感じて此一條にて是彼の才學とて現はれたり勿論千早の勝たるべしといふ書記心得て其勝負を記しけり斯て又光忠は千早と苫四郎に問けるやう後拾遺集雜の五に見にたる中務兼明親王の歌に(七重八重花はさけども山吹のみのひとつだになきぞ悲しき)是によりて昔より山吹は實のなき物と人皆いへり此義も如何に聞まほしと言ば苫四郎些とも疑義せずそは宣ふまでもあらず山吹には實のなき事勿論に社いなれと言ば千早も又答へて妾が思ふよしは如らず山吹に二草あり花の一重と八重と是あり八重なるものには眞に身がなし花の一重なる物には極めて實あり其身こぼれて苗を生ず世に花を愛る者の多く知所に侍り此をもて兼明親王の歌に七重八重とは詠めり是八重なる物には必らず身のなき明しなり然るを世の人誤りて八重一

重の差別を思はず彼歌によりて山吹は一重の物さへ押なべて身のなき物と思ふは違へりさは侍らずやと淀みなく答へ目出度才女の論議に光忠いよ〱感心してあはれ目出度才女の論辨古人未發の妙考なり是も勝たる事論なしといふに書記心得て又云々と記しけり其時光忠又いふ樣是より題を出さるべし各々其題をもて早く歌を詠出すべし其歌は子丑寅の十二支を隱し題とせん男女倶に此意を得て疾文題に直るべしと言に千早も苫四郎も承りぬと答へつゝ頓て左右に立別れて設けの文題に着しかど苫四郎は屈度の氣色を見せじと硯を開き墨を摺り筆を染て頭を傾け額を押へ何さま斯さま思へども元より三十一文字には最も疎かる俗物なるに況て浩る難題を得て詠出すべくもあらざれば困り果つゝ向ひを見るに千早は早く詠得たりけん用意の短冊を取上て筆を染つゝ皆立をる此石とりて進み出て光忠に渡せしかば光忠是を倩々見て聲朗かに吟ずるを人皆耳を傾けて諸倶にきけば千早が歌に(尋ねうしうみのうまでのいぬ居なかとらえざるとりひつじ田になく)斯吟ずる事再び三たび左右遙かに見返りて人々之を聞たるか尋ねうしとは尋ぬるに發てとにて辰子丑に通へりうみのうまでい實の孫にて卯巳午に通へりいぬるなかは田舍へ行てとにて戌亥なりとらにざるとりは捉へぬる鳥にて寅と申と酉なりひつじ田は二度ばへの種にて未にかけたり誠によく十二支の隱し題に適へり類ゐ稀なる才女なるかな偖苫四郎も如何ぞやと問ば苫四郎焦立て文題搔やり進み出光忠に打向ひて某實に不才にて十二支の隱し題を未だ詠得ずいへども歌は長袖の業にして武士の家業は武藝のみ楠一味齊も軍學武藝の勝れたる故をもて當家に仕へ奉つるにあらずや某歌には負たりとも武藝も千早に劣らんや願くば此所にて試合を仰付られよと言を光忠打聞て尤勿論の事なりかし疾々仕度を致すべしと言れて悅ぶ苫四郎は啓十郎に目を加し次の間に退きて肩衣とつて甲斐〲しく刀の下緒を手襟にかけ

て袴の股立毛脛を顕し啓十郎を後に立去て元の所に出て來つ程よき方に座を占れば千早も母親諸倶に衝立の蔭に退きて打かけの衣脱捨たる柳の腰に二重帯長き袂を引上て左右に狭む金襴の帯も輝く玉手襷用意早くも調へば又母親と諸倶に元の所へ出て來る粧ひいよ〳〵麗しきを諸人暗に稱美しけり去程に一個の青侍が竹刀四五本持來つゝ千早と苦四郎に打向ひ何れなりとも此中にて各々撰み取ねかしと云つゝ渡せば苦四郎は最長やかなる竹刀の二尺四五寸ありけるを流々と揮試みて傍に引付さし置けり其時千早は小太刀に等しき一尺餘りの竹刀を詮取て倶に席上に進み向ひ長き短き竹刀を打ちがへ差置て互ひに呼吸を定めつゝやと聲かけたる双方等しく竹刀搔取り立上りて丁々磁と打合したる陰陽上下の太刀筋に何れ隙間はなきものから原より手練の千早が切先あしらひかねたる苦四郎は打太刀狂ひ拳亂れて心慌て、竹刀を思わず丁と捲落されて狼狽周章て組んとせしを寄も果さず磁と打さしも烈しき千早が太刀風苦四郎ハ眉間の眞中一寸餘り打破れて呀と叫んで身を空さまに筋斗つ椽側より庭へ動と轉び落て暫去は起も得ざりける始めよりして苦四郎が後に附添啓十郎は此景況に堪兼て突と身を寄て千早が裾をすくふて投んと手を延ると千早ハ閃りと身を替して再び寄するを手練の當身に胸を盪せし啓十郎も吐嗟と一聲叫びも肯ずたぢ〳〵と幾足か後退り去て椽側より等しく轉びにけり其時雑兵五七人庭の側の柴垣の蔭より咄と走り出て手に〳〵去ごく用意の捉繩起んと蠢く苦四郎と啓十郎を取籠て押へて繩を掛しかば驚き騒ぐ兩個の悪徒枯る諸聲高やかに這ハ何事ぞ我々は些とも犯せし罪あらずよしや試合に負たりとも縛めらるゝれぼゑは非ずと言せも果ず揖尾光忠其方に屹度進み向ひて咄なり苦四郎啓十郎も承れ汝等何條罪ながらんや向に我先忍び使を以て汝等が身の來歴を探り聞せ去に苦四郎が父船舘幕左衛門は年來の奸曲露はれて尼が崎の城内に閉籠

られ又苦四郎之主君の軍用金を預けられて阿波より尼が崎の城へ來ぬるほどに播摩の室に艤りして遊樂の爲に其金を遣ひ込且其親の咎めに逢たる事のよ去を知聞て其身の崇を遁れん爲に件の金を掻攫ひて啓十郎等と諸共に逐電して此地に來つゝ一味齋の娘千早が最麗しきに心迷ひて彼が婿にならんと計較一味齋が旅の宿にて盗人に打かけたる小柄を以て婚姻の証據なりと詐りて此石千早を欺きしに其計事行はれねば仲間の悪徒と牒去合せて一味齋が邸宅へ押寄しに志貴の賢一郎が武勇に脅されて其事も亦成がたさに猶詐りの訴へ文をもて悪事を果さんと欲したる最淺墓なる巧みの赴き已に露顕に及びしかば搦めとり拷問して仲間の悪徒諸共に三好家へ引渡し遣すべき奴原なれども猶又思ふよしあれば知ず顔して願ひの隨意千早と文武の才藝を比競べさせて試みしに事皆未熟の白徒にて斯まで不覺の爲体尤も笑ふに堪たるならずや嚴しく獄舎に繋き置て猶も詮鑿すべきよしあり者ども這奴等を引き立よと烈しき下知に雑兵等は承りぬと回答つゝ繩取詰て追立けり苦四郎と啓十郎ハ巧みの裏を見抜れて呆れて陳ずるよしもなく阿容〳〵として立にけり去程に伊勢の國司北畠殿は千早が文武の才藝を感じ給ふ事大方ならず則ち揖尾光忠をもて此石千早を擧させ給ひ千早が婿と聞えたる彼大原武二郎が事ハ兼てより人の噂さに聞しめし及ばれけり淡路の配處にありと雖も其罪にあらずと聞ぬ婚姻の義を願はしくば免させ給ふべき者なり一味齋が歸り來なば此義を申し傳へよと仰渡させ給ひしかば千早之更なり母此石も君恩面目身に餘る悦びを演暇を賜り宿所をさして罷りしを人皆擧て見送りけり其後揖尾光忠ハ苦四郎と啓十郎を折々獄舎より引出させて一味齋が小柄の始末彼盗人の來歴を嚴しく拷問したれども苦四郎も啓十郎も彼盗人は何國にあるや聞漏しいひき其餘の事は斯樣〳〵と落なく白狀したりけり折から國司の先君の十三年忌に中りしかば此折大赦を行はる之によりて

苫四郎と啓十郎も罪を免されて他郷へ追放せられしかば雑兵等下知をうけて件の両個を獄舍より引出し追立て重ねて當所へ足踏なさば其度ハ許されず必らず頭を刎らるべしとて揶放しにしたりける去程に黒五郎の九四郎喜田意庵祝屋念藏等は彼日船館苫四郎が千早と文武の才學を比競べられ之折文學武藝一つとして勝事を得ざりしそが上に彼身の顛末巧みの趣きまでも何の間にか光忠に見拔れて啓十郎諸共に嚴しく獄舍に繋れたりと傳へ聞恐き怕れて肯て此地に居るべからずとて苫四郎が供人なる草履取節内といふ者をも進めて倶に逐電しつゝ金銀荷物を分ちて脊負ひ多氣の城下を離るゝ事凡そ二三里許りなる僻田舍に立忍びて夜毎〳〵お旅宿を替つゝ折々忍びて多氣に赴き彼両個が罪の落着を迭替りに探り聞事凡そ三十日許りに及ぶ程に苫四郎啓十郎は僥倖にして死罪を赦され明日云々の村境にて追放せらるゝと聞えしかば件の四人は暗に忍び路用は更なり旅荷物を湿さず各々身に纒ひて其翌より件の處へ赴きつ立隠れて苫四郎と啓十郎が追立られて來ぬるを待しに此日七つ下りに國司の雑兵五六人手に〳〵割竹六尺棒を突ならして苫四郎と啓十郎を此所まで追立來て則ち掟の條々を最不畏しく言渡して縛めの縄を解赦し割竹を以て両個が脊中を三つ四つ五つ打擲きて頓て多氣へぞ歸りける去程に苫四郎と啓十郎は辛くも命を赦されたる身の僥倖と思ふにぞ黒五郎等四人の道連ハ何地へ行けん今更に彼等が行衛を知るふ由なく身ふは鐚一文の路用もあらず成ふける進退爰に谷りて呆れて暫時イみしが己ふ國司の雑兵等は影だに見ゑずなりしかば里ある方へ赴きて今宵の旅宿をば乞ばやとて良立去んとせし程に思ひがけなき木蔭より這や喃々と呼人あり両個は愕き不審て等しく其方を見返れば是則ち九四郎意庵念藏節内等でありければ這は〳〵如何と許りに憂を忘るゝ心の悦び頓て木蔭に立集ひて互ひに積る物語のそが中に九四郎は意庵念藏等と諸共に事の破れを聞し折崇

りを恐れ宿を替て忍び居たりし事の顛末并びに今日追放の風聞を聞知りて密に出て迎へたる事の心を告知して用意の衣類腰刀草鞋脚半に至るまでもて來し儘に取出して苫四郎と啓十郎に卒とて頓て着せければ件の両個悦び受て手早く粧ふ立派の打扮六七百両の路用も其儘持て來にけりと告知りて偖は愈々心強かり早く當所を立さりて又分別を仕替んとて打連立て行程に黄昏頃になりにけり浩る所に又木蔭より踏ハれ出る曲者三人問でも知き山賊の腰に差たる長刀行方の道を立塞げば吐嗟と驚く此方の主從眼を定めて能見るに中に立たる曲者は往る夜楠一味齋が小柄をもて五十両にて貸與へたる盜賊野鼠穴市なり其時穴市聲をかけてやをれ和主等見忘れはせじ百両の代呂物を五十両にて貸渡したるは我等が佛心なれども約束の日が切たれば殘金五十両を請取かさらずバ小柄を取戻さんと思ひし程に和主等は惡き巧みに尻がわれて獄舍に繋れにきと聞えしかば詮方もなく日和を待しに僥倖にして主從両個ハ辛くも命を助けられて此等で追放をせらるゝ由を聞知りてより一日千秋の思ひとやら漸々待續けて此處で逢たは絶体絶命何の道否應いはさぬ爲に己が仲間の兄弟分此野良猫の屋根四郎と鮫蛇の野太九郎を雇ふて此所へ連て來た日切の過たる五十両に又一倍の利をまして百両渡すが否ならば小柄を返しね受取べしと言へば屋根四郎も野太九郎も相槌合する廻脅の魂膽弱身に祟の聲不畏く笠にかゝるを苫四郎等ハ折惡かりと思へども彼ハ三個此方は六個人多げれば些とも擬まず呵々と冷笑ひて知れたる事をいふ者かな件の小柄は計較の種になさんと思ひし故に五十両にて買もしたれ其事終に成就せず剩さへ小柄は楠の女房に捲上られて揚句の果は獄舍に繋がれ漸く娑婆に歸り來ぬるに今更又汝等に取する錢の有べきやと言せも肯ず三個の盜人共は高聲揮立て彼後金は愚なこと六七百両ずつしりと路用のあるを嗅付て出入を仕掛た我々が手を空しくて行さんや物な言せぞたゝんで仕

舞と言より早く引拔剛刀四邊も端麗切先に吐嗟と騒ぐ念藏意茬は思ず共に逃退て木蔭をさして隱れたり浩りけれども苦四郎啓十郎等は些許り習ひ得たる武藝あり又黒五郎は年老ても及に恐れぬ惡徒根性節内諸供主從四人是非なく等しく拔合して此所を先途と斬結ぶ何れに隙なき烈しき太刀音遙か後の木蔭より差覗き居る念藏意茬見る目危ふく氣を揉のみ流石に命惜ければ出もやらず木隱れに神佛を念じける去程に盜人の中に野鼠穴市ハ已に二ケ所の深痛を負て生死も知ず倒れたり又苦四郎が供人なる節内は始めより進む穴市を防ぎ止て暫く挑み戰ひしかども深疵を負ひしかば遂ふ得堪ず踉蹌て同じ所に倒れけり去程に苦四郎も屋根四郎と戰ふて是彼ともふ此處彼處と數ケ處の淺疵を負ながら猶もしのぎを削りつゝ勝負も分ず見えたりし苦四郎が業や勝りけん竟に野良猫屋根四郎を破刺離ずんど切倒して止息を刺んと胸先へ上り蒐りてグサと刺程も有ず屋根四郎ハ下より丁と突切先に苦四郎も亦胸を刺れてウンと一聲呻も果ず刺つ刺れつだんまつま伏重りて死てけりそが中に啓十郎は野良九郎等と戰て已に危く見へたる折から黒五郎の九四郎は良穴市を斬倒して側を急に見返るに啓十郎一個賊に斬立られて已にはや受太刀四度路になりしかば黒五郎ハ噬と許りに走り蒐りて後ろより只一打に野良九郎を乾竹割に斬伏て啓十郎を救ひけり其時意茬念藏は共に木蔭より出て來て手强かりける盜賊を名殘なく打はたされたるよろこびをのべて言やう知らるゝ如く劍術柔術は夢にも知らぬ我々なれば怒ひに足手纒ひにならじとや思ふて隱れたれども日頃信する神佛の只一條に祈りたる利益によりて御身親子の恙なきこそ嬉しけれと言ば啓十郎も又言やう我々年頃思ひの儘に無理なる道を行と雖も不覺を取し事なかりしに苦四郎に連累せられて浩る難義も物怪の幸ひ苦四郎主從兩個は深疵に堪ず死ふ果て殘るも彼金六七百兩今よりして我々が物となりしは滿皿ならず人目に掛らぬ其

隙にいざ行べしと急がせば皆々肯て異義に及ばず揮落したる旅包を拾ひとり肩に打かけて立去んとせし程に日ハ暮果たる宵闇の一條路なる向ひより遙に來ぬる箱挑灯は是菊水の紋ありて武士と見えたる主從四五人頻りに急く夜るの道啓十郎等ハギヨツトして偖は楠一味齊が旅より歸り來にけるならん折惡かりと密語あふて引返しつゝ傍へなる木蔭に暫し立忍ぶを斯とは知ぬ楠の主從挑灯提げて前に立つ蔦平が思はずも倒れ伏たる穴市に忽ち礙と躓てけし飛機會に節内が脊中したゝか蹂躙ればウンと呻きて息吹返す兩個の手負も血刀杖に身を起す程しもあらず木立の蔭より出て近つく黒五郎が提灯筥を斬落せば吐嗟と叫ぶ蔦、が從諸共に穴市節内眼眩み心迷ひて敵も味方も見分ざりけん双方等しく一味齊を討んと烈しく閃めかす及ぇ疲まぬ手練の老人引外し着入て右と左に取しばる敵の利手を動かせずそが儘動と捻伏て押重ねたる柔術の精妙さては曲者逃すなと言せも果ず啓十郎が闇の礫の覗ひは頭て遙か那方の杉の木へ礑と中りし小石と共に落て行衛は定めねど暗を便りに啓十郎意庵念藏黒五郎等は共に此場を脱れて影だに見ゑずなりにける〇去程に楠一味齊は婿の大原武二郎が淡路の配處を問んとて往る頃浪花津より渡海の船出をしたれども南風の爲に兩三度吹戻されて口惜くも容易渡る事を得ず兎角する程に限りある五十日の身の暇も早五七日になりしかば最本意なく思へども斯て有べき由のなければ漸くに思ひ棄て浪花の旅宿を立出しより從者等を忙がしつゝ伊勢路をさして歸り來る程に凡そ三四日にして多氣城へは二里許りなる小松原を過る頃已に日は暮たる路の行方に曲者ありそが一個ハ挑灯を斬落し兩個は一味齋を討んとせしを左右に引請捻伏て手早く繩をかくる程に其餘の曲者幾個か闇に紛れて逃失けり斯りし程に四邊近き郷人等兩三個火松を揮照して此處を過るあり一味齋も是幸ひと呼止めよしを告其火をかりて四邊を見るに斬殺されたる者三個あり搦め

取たる兩個の曲者を責て此義を尋ぬるに是等手負たりければ事の始末を初めて聞知のみならず搦め取たる一人は苦四郎が從者節內といふ奴僕なり又一人は一味齋が浪花の旅宿へ忍び入し盜賊にて其夜手利劍を打かけたる小柄の行衛も知しかば一味齋悅びて鄕人には鄕長に告よと下知して死骸を守らせ生捕たる穴市節內を從者に引せつゝ多氣の城に皈り着しかば由を有司に訴へて生捕兩個を引渡し其夜宿所へ歸る事を得たりされば此石千早等は恙なかりし旅返りの歡びを伸て勞り慰め次の日彼苦四郎が惡巧みの始末文學武藝試合の事まで事審かに告しかば一味齋は又浪花にて久しく順風なきにより淡路へ赴く事適はで空しく歸り來ぬる事又云々の荒野にて苦四郎は盜賊の爲に殺され盜賊も又一個斬殺されてありし事一味齋は其折圖らず其野を過るとて手負し盜賊野鼠の穴市と苦四郎が從者なる節內といふ者を搦めとりて一の司搨尾の有司に引渡したりし事彼小柄の事其餘の事まで漏さず具さに告知すれば此石千早は驚き感じて向に苦四郎がもて來ぬる小柄と菊水の短刀を見せしかば一味齋は歡びて心の憂も大方ならず此菊水の短刀は武二郎が別れに望みて婿引手にとて取せしに廻り〳〵て家に歸り來ぬるは妹脊の緣の絕も果ざるさがにはあらずや开は兎まれ角まれ已に主君の御內意のありとしも聞にしかば早く千早が婚姻の願ひ背を奉つりて成か不成か天命に任せん物をと思案をしつゝ此次の日に出仕して旅歸りの悅びを聞えあげ且娘千早は元の弟子大原武二郎武松に許嫁の義もいへば只今此地にあらざれども彼が妻たるべき由の免許を願ひ申せしに願ひの隨意たるべしと早くも仰下されけり此折また一味齋は搨尾光忠が宿所に赴きて向に千早が苦四郎と文武の才藝試合の折の取計ひの公けなる悅びを演なとして彼穴市と節內が罪の落着を問しに光忠答へて彼罪人等は白狀已に分明にて助かり難き者なるが兩個ともに手疵に弱りて次の日獄舍の中に死したりき又苦四郎は上の御仁心をもて命を助けて追放されしに立去る事の遠くもあらで盜人等に殺されしは汝に出て汝に皈る天の冥罰恐るべし又苦四郎が道連なる啓十郎は浪花の豪家九四郎なんど聞にしも皆其間仲の惡者なれども彼等は當時威勢高き三好家の町人なれば肯て又御沙汰に及ばず此義により て彼等が事は穿鑿無用たるべしと言に一味齋深く感じて頓て宿所に皈り來つ則ち此石千早等に婚姻の願ひ速かに免許ありし由を告知せ爭で明年之又迎ひに身の暇を願申して淡路へ行て武二郎に由をつけ罪を贖ひて必らず伴ひ來つべしと言に悅ぶ此石千早最賴母しく思ひける兎角する程に千早が懷妊はや臨月になりしかば最安らかに產の紐解て出產せしは男子なれば一味齋此石が悅び更に言べうもあらず母さへ子さへ壯健にて枕直しは侍れども如何なればにや此赤子産れし時より泣もせず世に骨なし子といふ者にて年二つ三つになるまでも首も坐らず下にも居らねば一味齋不審て夫婦倶に添臥して擧けたるにあらざれば父の陽氣足ざる故に尫弱不具に產れしならんと思ふのみにて詮術なきを專不愍に思ふのみ其名を頓て夢松と号けて寵愛したりける這は又後々の咄しなり○爰に李の瓶子を向に啓十郎が播磨の室へ赴きしより久しくなるまで皈り來ず剰さへ尼が崎の城の執事なる船舘幕左衞門が罪ありて閉籠られしと聞えしより啓十郎が身にも亦事の係はる由ありとて祟りを恐れ世に憚りて浪花の本宅はいへば更なり尼が崎か出店まで皆見世の戸を打卸して商ひを休みて居啓十郎は室の津より苦四郎等と諸共に何地へ行けん音信なければ妙潮深く驚き愁ひて彼人も亦罪を蒙りて身上の滅亡せば我身も斯ては居がたし夫のみならず那瓶子を預げられたる米飯料も俸に振かといへばえに云で日毎に觸ぎて居りされば瓶子は彼を思ひ是を思へば味氣なく今更悔しき身の行衛近江にあらば何不足なき大豪富の嫁なるに他なる人に對られて夢かとぞ思ふ小夜衣も愁ひ夫を重ねしより身の貯へは有ながらよすがのあら

ず成けるは元の男浮吉ぬしの恨みの祟りならんがと心柄とは云ながら浮吉ぬしは零落たる身の置所なき儘に淵川へや沈み給ひけん最惜き事をえてけりと悔の八千たび百千たち過越かたを思ひ詫て身をし恨えば氣の鬱結て病の床に着しより間なく隙なく浮吉が幽靈夢の内に現はれて瓶子を責る怨みの數々其面色の怕しさふた目とも見るべからず或は又啓十郎を追捉へ烈しく喰ふ勢ひさへ惡鬼羅刹に異ならねば瓶子は其度ごとに魅るゝ事大方ならず伏つ轉びつ叫びつ泣つ物狂はしき景況は妙潮は只呆れ迷ひて詮術もなき介抱に易く寐る夜もなかりけり

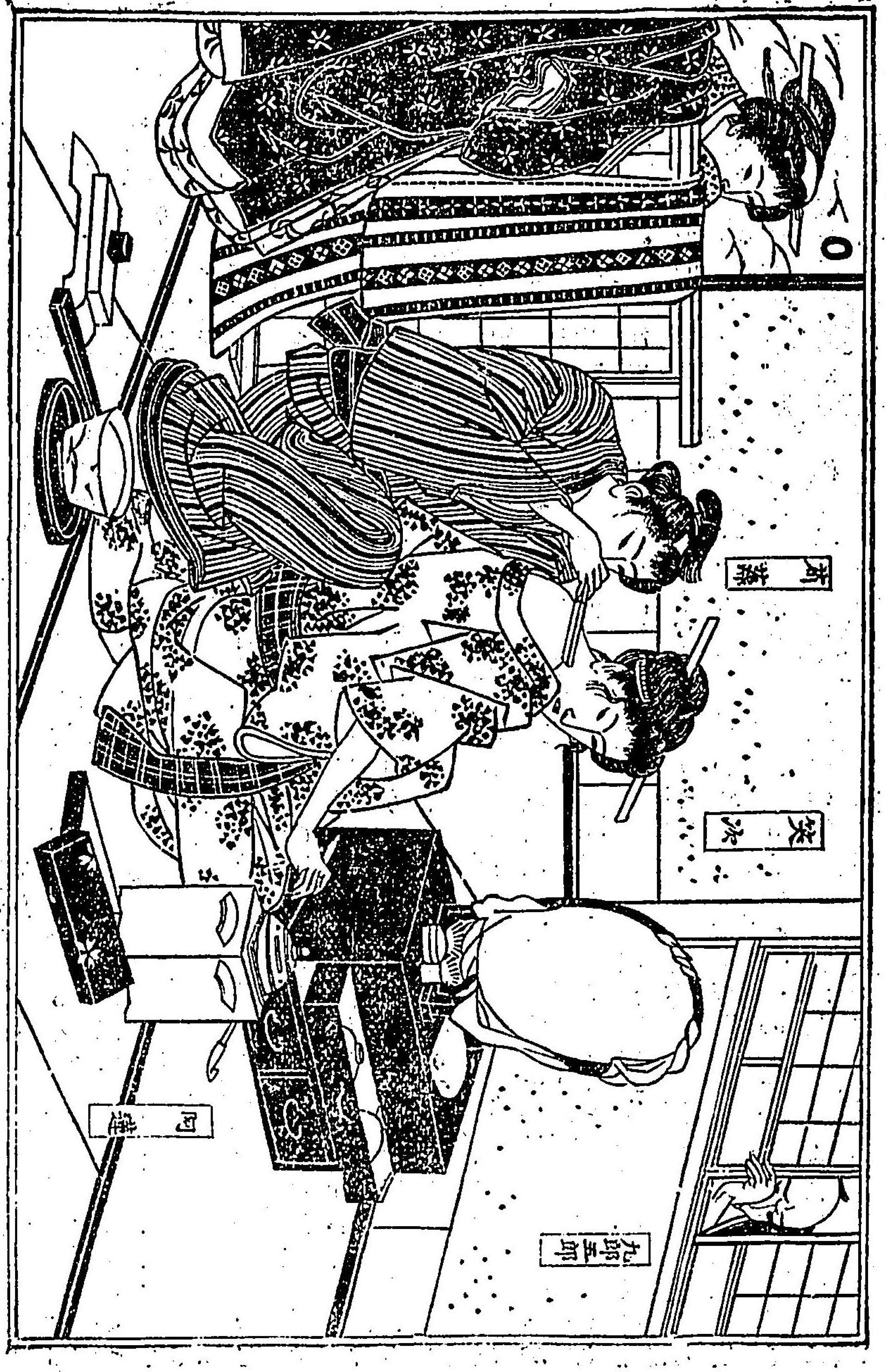
第四編

去程に瓶子が氣の病ひ夜は殊更烈しくて恐れ慄き狂ふこと曉天まで止ときなければ妙潮も又駭き恐れて醫師を招ぎて藥を求め又修驗者も頼みて物の怪の祟りを禳はせ其身も日毎に觀音經讀誦して瓶子が平癒を祈れども些の驗もなかりしに或人教へて此尼が崎の里盡所なる入戸町といふ所に斧形曳水といふ針醫あり年は三十許りにて未だ娶らざれば子もあらず其身只一個にて最も詫しくは暮せども療治に功あるのみならず或は物の怪氣の病勞症なんどの難病なりとも必らず即功ありと言り招ぎて療治を頼み給へと言ふ妙潮点頭て實に其斧形とかいふ針醫の事は我身も兼て聞知たりされば招ぎて容子を見せんと言に其人心得て自ら妙潮が使となりて曳水が宿處に赴き件んの由を告知して見舞給へと頼みしかば曳水聞て一義に及ばず先其人を返らして一頂羅なる晴着を着換て走りて妙潮が庵に赴き妙潮に對面をして瓶子が病の容体を審に打聞て頭を傾け打默頭て聞が如くは婦人の病症开は心より出る病にて物の怪の所爲にあらず假令物の怪の所爲なりとも千金方に鬼邪十三穴の針方あり开が中なる鬼藏の穴處に針を刺ば即功あらずといふ事なし其穴處は憚りながら天數の下にあり療治厭はれいはずも本腹疑ひなかるべしと言

に妙潮悦びて由を瓶子に告知せ頓て斧形曳水を瓶子が臥床へ案内しつゝ其療治にぞ任せける去程に曳水は先瓶子が肩と腰を彼處此處と揉和らげて針治を施すこと半時ばかり翌又參りいはんとて忙はしく出て行しが瓶子は胸の痞え僅少開けて其夜ハ浮吉を夢に見ず曉天まで能寢入けり是よりして七日許り曳水が療治を受る程ふ心地は愈々すがやかにて怪しき夢を見る事なければ是全く曳水の療治のかげに社あれとて妙潮が悦びいへば更なり瓶子も深く曳水を信じて頼母しく思ひけりされば斧形曳水は極めたる醜男なれども原來辨佞利口にて女子の氣に入る世才あり日に〳〵療治に來ぬる度に浮世雜談芝居の咄し萬瓶子が心に適ふ物語をもて慰めしが始め瓶子が怨靈に魔れたる故由を問ふに瓶子は今更に隱すによしなく還樣〳〵と元の男浮吉と離別したる事の始末幷びに西門屋啓十郎の妾にならんと約束したるに思ひがけなき障り出來て今更よるべは在ずなりたる身の憂事を云出て只潸然と打泣しを曳水聞つゝ打笑ひて某は初めより汝身の病症は氣の病ふて物の怪の所爲ならずと見立たりしが果して違はず我等が故郷は近江にて彼空花屋浮吉ぬしの隣村なるをもて往る日も亦彼所より來ぬる親類の噂にて汝身と離縁に及びたる事の始末を具に聞にき未だ知せ給わずやと浮吉殿ハ往る頃一個近江へ歸り來て詫て親父に勘當を免させ剰へ親族の娘ふて都の阿靜とか呼なしたる二八許りの美人をもて浮吉殿に娶せられ睦まき事魚と水に異なるべくもいあず頓て世帯を渡されて富榮えて居らるゝに何の爲に汝身を恨みて其怨靈が祟りをなすべき又彼御身の思ひ人なる西門屋啓十郎は養父の朮蔭て手も濡さず浪華一番の豪商なれども胸惡くて人を倒す巧みを常にする若ゆゑに行末宜しき事にあらじと心ある人は舌を振ふて厄病神と言ざかえ思ふに今般障り出來て逐電せしは年頃奸計の天罰にて彼の家の破滅疑ひなし浩れば早く切替て身のかたつきを仕給はずば連累せられて後悔あらん此

餘の事は這樣〳〵と彼擬盜賊白浪駝太郎が事の趣實は金を失ざりける浮吉が親棣利名四郎が兼て計りし事までも聞たる儘に說諭せば瓶子は聞つゝ呆れ果て始て夢の醒たる如く悔しく思へど甲斐もなき涙を袖に押拭いて言るゝよし理りなり今日より心を改めて此身のよすがを思ふのみ願ふは汝身の女房に持給ひなば諸倶に稼ぎて浮世を渡るべし我身に些の貯へあり夫を資本に參らせん汝身の心如何にぞやと言れて拽水聯く胸を止めも肯ず席をさけ恭々しく拜伏して美婦人思ひがけもなき世に有難き託宣を何條愚に思ふべき男振こそ二の町なれ心性貞良にて稼ぐ事油斷なく女房ふは孝行にて朝夕尻に敷るゝとも些とも不足に思はざる某にていへば御心易く思し召されよ善は急げと世話にもいへば早く尼御を媒介にして結ぶ縁の盃こそ最願はしくいなれど言ふ瓶子は微笑ながら妙潮を招ぎ寄て件の由を說示しつゝ其善惡を尋ね問に妙潮も亦啓十郎が罪の輕重を計り兼て彼家滅亡するならんと暗に危み思ひたりしに幸ひにして瓶子が貯への穗待金少なからずと聞に今更賴母しくて聊かも異義に及ばず然るべしと回答つゝ其身出家に相應からぬ親分媒介二役を務まるゝ儘に引受て其夜瓶子と拽水に妹脊の盃取結ばせて千秋樂とぞ祝ひけるされば瓶子は隱し持たる穗待金多くあり开は近江の觀音寺の城內にありし時國主佐々木殿に寵愛せられし第一の妾なりければ殿より常に賜りたりける金銀に餘りあり夫のみならず浮吉が久しく旅路にありし程忍び〳〵に身の覺悟して私偸たる金も少なからず是彼の金を合して七八百ありけるを衣物櫃の底に秘置て妙潮啓十郎等に是を知らせず此餘羅紗羅背板呉絽服綸などいふ唐渡りの絹をも多く持たりし等ば都て佐々木殿の賜りし物なりけりよりて瓶子は拽水に二百兩を資本に渡し又妙潮には謝禮として金二十兩を取せけりこれによりて拽水は尼が崎にて土樣付のよき賣居を購ひ求め藥種を旨として賣藥をも賣けるに西門屋の出店なる藥種店

ば此時久しく戸を下して買ひをせで在ければ拽水が見世繁昌して物買ふ人の絕間なし此をもて手代兩三個と小厮二人を召使ひて最賑しく日を送れども威勢も只瓶子にありて何事も其旨に任せずといふ事なし此故に手代小厮まで皆瓶子をのみ敬ひ拽水をは物とも思はず宛から男妾の如く口惜きこと多けれども細き煙りを立んとて人の足腰を擦りて暮したる初めを思へば箇許りの欠めい有べき害なりと思ひ返して朝夕に瓶子が機嫌を取ざる事なく妙潮にすら心を置て彼が折々來ぬる每に走り陵付迎へて親の如くに待過けり瓶子が事は暫く置て爰に又西門屋啓十郎も向に多氣の郊外にて盜賊穴市等を斬伏し折辛くして一味齋が武術の手先を脫れて跡を闇まし影を隱して黑五郎意庵念臟等と諸共に其終夜走りつゝ次の日に尾張なる佐谷の里まで來にければ初めて生たる心地して酒賣店に立よりつゝ𨻶て二階に打登り酒を飲み飯を食べ行べき方を談合するに伊勢は更なり伊賀も大和も皆北畠の領分なれば大和巡りをすべくもあらず四國は阿波の差合あれば西の方は塞りなり是よりして美濃路に趣き北國を經巡りて鎌倉に至りなば其程には舟館氏の災禍も治りて浪華へ歸る事を得つべし苫四郎が命を殞して流れ込だる金多かればよしや半年三ヶ月旅より旅に遊ぶとも路用は人の褌にて些とも腹は痛からず此義は如何にと意見を問ける啓十郎が分別に誰かは異義に及ぶべき然るべしとぞ荅へたるぞが中に黑五郎の九四郎も久しく旅をせん事を願はず我は斯まで年寄たるに若き人々と諸倶に長旅は難義なり一個浪華へ立回りて是等の由を呉服にも其餘の者にも告知すべしといふ啓十郎點頭て云るゝ趣き極めてよし然らば行先は箇樣〳〵云々の處なり五六月を經たらんにも我等は所々を巡り果て鎌倉に至るべし彼地ふも買ひの得意もあれば知れ安かり時分を圖りて吉凶ともに鎌倉の旅宿に先越給へかしと云つゝ胴卷の賊布より金百兩を取出し餘さん是は骨折代なり失はぬ樣に持て行給へ言



迄にもあらねども浪華の本宅尼が崎の出店の者にも今般の大失策の一件を伏てれくびにも出さず給ふな若人ありて苦四郎が行衛を問ば伊勢路にて立別れたりければ何地へ行けん夫より後は知ずと答へ給へかしと諭すを黒五郎聞あへず开は助才もなし氣遣ひすなと答へて金を懐中へ納めて意庵念藏等を忙しつゝ飲食らひの價をとはせて啓十郎に錢を出させ打つれたちて佐谷の酒店を出たるが美濃路に至り袂を分ちて啓十郎い旅裑籠に打乘て意庵念藏と諸倶に信濃路の方に趣きて黒五郎は只一個空尻馬に打乘て浪華へとてぞ別れける去程に啓十郎は意庵念藏を隨へて越後路に趣き陸奥を遍歴せしに風雅に疎き身にしあれば名所古跡も可笑かゝず色を尋ね酒を欲すれども田舍なれば心止まる花もなく香もあらず歴莫日數を過さん爲に此處彼處に滯留して旅にある事已にして四五ヶ月なり啓十郎は竟に鎌倉に赴きて暫く此處に滯留しけるに繁昌往昔に及ばねとも今も猶一都會にて萬の物に乏しからず且年來取引しぬる 買 の花生もあれば其 輩 に慰めされて今日は江の島翌は金澤なんどとて日毎に遊ひ歩行つゝ滯留一兩月に及ぶ程に或夜浪花の本宅より飛脚到來して本妻呉服幷ひに支配人等より告知せぬる消息を啓十郎も意庵念藏等と倶に暗に披きて讀見るに船舘幕左衛門が罪科の事其子苦四郎が軍用金を横領して播磨の室より逐電したるをもて事の咎め愈々重くて逃るゝ由のなかりしを何やら斯やら拵へて一千兩の金を償ひ且阿波の重役人等に物多く贈り遣して暗に助けを求めしかば事漸く決斷せられて幕左衛門は役義を黜され淡路の司ハ横島郡領の手に付られて彼處の小役人になされしかば徃る日淡路へ赴きたり偖尼が崎の頭人にハ蔦松加闌太ぬしをなされしかば此方の爲に便り惡からず又此方の一義い仰越れし如く寒八を阿波へ遣して彼處の重役人たちに許多の贈り物をもて暗に頼み拵へたれば且那の名を除かれて善悪ともに沙汰に及ばれず事易らかに治りければ徃る日浪花も尼

が崎も都て見世の戸を開きて商内繁昌以前に替らず是等の悦びのみならで奥樣春の頃より懷妊のよしなりけるが早臨月に及ばせ給へり疾々歸らせ給へかし待奉つると有ければ啓十郎深く悦びて向に我計りし如く黄金湯の功驗早く船館の災禍を讓ひ果せしぞが上に年來妾も多かるに一個も子育なかりしに本妻の腹に子を儲けしは此上もなき僥倖なるかな日ならず此地を立さりて早く浪華へ皈らんとて手づから返詞を書認めて飛脚と返し遣しけり其時意庵念藏ハ喜ひを演相祝きて今は此地の名殘になりぬ其所の料理酒屋にて一杯酌で歡びを盡さば妙にあらずやと言を啓十郎打聞て开ハ興あらん行べしとて三個宿を立出て雪の下の邊なる仕出し酒屋の二階に登りて有ん限りの肴を出させ三人鼎に坐を占て盃を廻らずに啓十郎は興猶足ず酌を取る小女に打對ひて此等に藝妓はなからずやと問ば答へてされば侍り此には藝妓のなかりしに近頃上方より誘なひ來たる阿貳と呼なす藝妓に侍りといふに啓十郎點頭て开は又妙なり疾々と忙し立て待程に習くして藝妓阿二は小女に三味線箱を委ねて二階に登り來つ啓十郎等に打對ひて皆樣今日は能こそと云つゝ僅に頓首て早く頭を擡るを只見れば是別人ならず向に室にて啓十郎が幾夜さか馴染を重ねし彼處の傾城苫四郎が對方なりし二見路でありしかバ迭に驚き且不審りて思ひがけなき再會の事の由を問ひとそるゝに二見路涙さえぐみて告るも面なき事ながら何ぞや浮身に開れし頃此鎌倉の呉服店なる仕入番頭はめ七とは言し人が京登りして室にも來つ逗留の内妾に馴染て幾程もなく受出しつゝ暗に此地へ伴ふて圍妾れかれし程もなく事顯されてはめ七ぬゑは引負の咎めによりて無慙やな附上せになり侍りにき後に殘りし我身一つのよすがは有ずなりにしを憐れむ人のなきにあらねば大磯まれ化粧坂こそ二度の勤めをせよかしと勸められても今更に流の里に望ましからず些は彈得し三味線の糸發束なき業ながら藝妓になりて稼がんと思ふて斯

はなりたれども今は此地も衰へて甚々しき客のある事なければ如何にせましと思ふ程に上野桐生の絹商人四九二郎と呼なすが此地に來つゝ早晩に妾を深く思ひ染て流行の小袖櫛笄何から何まで不足なく餘多の金を費して世話せらるゝ頼母しく思ふものから田舎人にて男振さい卑賤たれば心實添氣ハなけれども竟には義理の柵にかけ止られて今更に退くに退れぬ此身の難義竟に今宵に迫りたり夫に付ても室の津にて仮初ながら二世かけて契りし浮身の事をのみ忘れかねつゝ亡後までも迷ひやすらんと思ひ詫て最香懲悲しかりしに圖らずも今日此處にて再び浮目にかゝりしは盡せぬ縁でありながら逢甲斐もなき暇乞憐れと思ひ給ひねと云も終らず男の膝に身を投かけて泣沈む涙は瀧の糸切て落て流れて行水と人の行衛の定めなき心くみ見る啓十郎はさてこそと勞り慰めて聞が如きは其客の事の難儀のありとても今更に如何はせん开を打歎くは愚痴ならずやと言ば二見路首を擡げて僅計りなればよけれども我身に資本を入揚て四九二郎ぬしは那處彼處に筋惡き負債多くあり今更國へも歸り難くさして行べき處もあらねば未來で添を樂みに倶に死なんと一筋に思ひ詰たる無分別惚た男であらばこそ諸倶に死にもせめ原より好ぬ他し人と共に命を捨る氣は鴉の毛計りもなけれども元はと言ば我身ゆゑに煎じ詰たる月頃の情の風をうけられて否と言れぬ薄命止事を得じ約束して今宵必らず眞夜中ごろと花木橋より諸共に身を投んとて言かはしたる露の命の儚てろ日影待居の一座敷呼ばれて此へ來て見れば日頃戀しき思ひ忘れぬ情夫さんに逢ては專惜まるゝ命に掛替あるならば一つは死んで何日までも逢見んものをばか許りに又潸然と打泣しを啓十郎は押止め流の廓に住馴し其甲斐もなく如何ぞや正直過て最可笑しよしや其塲に臨むとも法をかゝば身を脫る、詮方は幾等もあるべし我等に任し給へ淋と忍びやかに慰めて偖意庵念藏を遐り近く招き寄件のよしを密語示して二見路を救ひ取

べき計事を問ひ試みるに意菴は頭を傾けて开は屈强の手術あり這樣〳〵に計りなば其客にも無理をかしでれ手際恙なかるべしと言に啓十郎悦て意菴が計事の趣きを二見路に心得させ俄に念藏を遣して釣索細引なんどを買取せて皆手傳ふてすべよく拵へ卒とて渡すを二見路之請取つ喜びて帯の間へ隱しけり斯て密談果しかハ二見路ハ八郎を繕ハん爲にのミ三味線を搔ならし小唄を謠て賑しく習し盞を獻酬すにも殊更に力づきたる其勢ひ初めに似ず猶も今宵の手都合を忍び〳〵に語ひけり○斯て座敷も果しかは啓十郎は二見路を返行して程もなく意菴念藏と諸共に頓て旅宿に赴きて浪花へ歸る用意を調へ其夕暮より立出て花水橋の方に至に猶も誤ちなからん爲に一艘の小船を雇ふて意菴を乘て夕暮より水花橋の下に隱れき啓十郎は念藏を倶して橋の畔りなる柳の蔭に伏隱れて二見路が彼四九二郎に伴れて身を投に來ぬるを暗に待たりける○去程に絹商人四九二郎は藝妓ゐ二が色香に迷て其身の破滅となりしかハゐ二と倶に死なばやと覺悟極めて其宵よりれ二を誘ひ出しつゝ花水橋へと行程に徃來賑ふ町々に彈三味線の門つけはまさかに阿妻八郎兵衛の道行も亦我々が爲かとも思へば味氣なき身の果の花水橋漸くたどり着しかば亡後までも離れじと堅き契りを下まへの褄と褄とを結びに結び合しつゝ二見路を援て橋の欄干へ其身も倶に打股がりて未來を契り抱き合て南無と許りに身を飜へして男女等しく水中に飛入とぞ見えたりし四九二郎は深みに落入て敢なく此所に命を落し二見路之釣索に身をかけ止て釣れてあり故有也二見路は意庵が計事に隨て忍びやかに用意したる釣索を帯の下に結て隱去持たるが橋の欄干へ上る折件の鈎を欄干へ密に搓とかけ置落て入んとせし時に兼て拵らへ置きたり下まへの苧を引拔ければ四九二郎が衣の褄と結び合せ去處より忽ちとすに離れしかば四九二郎のみ水に落入二見路は中に釣れて夏の夕暮に巣をかけ初る檐の蜘蛛に彷彿たり折から月は

雲隱れ去て朧々と闇かりければ無慙やな四九二郎は二見路が謀る巧策の手品ありとは知るよしもなく身一つ此に命を捨て底の水屑となりたるなりされば意庵が小船に乘て橋の下に隱れてありしも萬に一つ釣索の外れて二見路も水中へ落入ことのあるならば早く救ひ揚ん爲に船のみ借て自ら棹さし且熊手さへ用意して事の爲体を窺ひしに事こそまでに至らず去て二見路は中に釣れてあり其時啓十郎と念藏は吐嗟とばかり走りよりて兩個力を併せつゝ靜に繩を手繰々々辛くして二見路を橋の上にぞ引上ける事十二分の首尾なれども追手の掛る事もやあらんと思へば久しく橋に立も留らず頓て二見路を助け引て藤澤の方へ赴きて後より來ぬる意庵を待しに意庵は船を乘棄て早くも此所に集ひしかば四人等しく笑坪ゐ入て大吉利市とどさゞめきたる开が中に啓十郎之誇顔に頰を撫て我身去る頃伊勢の多氣にてハ苫四郎に捲込れて深く不覺をとりたれども流れ込だる金多ければ何の道少しも損はなし然るに我身に係るべき船館の一義無異に治りて浪花へ歸らんと思ふ折又麗しき妾を得たり聞に二見路は室の津にありし時年期之猶二三年ありければ初めの客が四五百兩の身の代を費して受出したりとか言ば开は僅少の代物ゐあらず浩る名花を携べて販らば又四五百兩の儲けあり諺ゐいふ轉んでもたゞは起ざる我高運奇々妙々にわらずやと言に意庵と念藏は等しく諂ひ祝ひけり兎角する程ゐ夜の曉しかば啓十郎は二見路を旅駕籠に打乘て意庵念藏諸ともに浪花をさしてぞ急ぎける○兩頭話說爰に又篠部黑五郎の丸四郎は去る頃美濃路にて啓十郎等と立別れて一個浪花へ歸りしが啓十郎の留守なれば取締の爲にとて本宅にのみ居叱りて人に嫌はるゝを物とも思はず日毎ゐ酒を貪り膳好みをして己が儘に擧動はどゐ年に似氣なき色を好みて啓十郎が妾なる卓野カ二菊蕊等が部屋を遊び所に去て此彼となく打廻りつゝ折に觸れては手を出去て猥がは去き事多かれども年之六十になる癩病ありかり

の穢な氣なるを忌嫌しざる者あやんや遮莫主人の親成ば寄ず障らず會譯て悩き者に思ひけり开が中に黒五郎は阿蓮を文具兵衛の娘成ける鍛金なりとは未だ知ず又四つ橋の綿乙は阿蓮が養父成由も初めかして辨へ知ず只武太郎が妻にて有し時々見れば身の飾りに綺羅を盡して艶容成ば早晩に心迷ひて熱鬧しくも打戯むるゝ事屡々なり然るに阿蓮は往る頃より啓十郎が宗の津より伊勢路をさして赴く折飛脚に言傳て送せし金二包を詐取て心元なく彼財布を見れば見覺ある に似たり抑も件の財布のきれは系入布にしてし裏は帷子の古たる麻の花の色なるを付たるが然も家の紋ありて抱澤瀉なりければ阿蓮は駭き不審りて獨密かに思ふやう此財布には見覺えあり表は母の手織せられし妾が尋常衣のきれに似たり是のみならず裏の麻も妾が養ひ親綿市ぬしの着古し給ひし帷子にて殘れる紋所に證據あり妾年二八許りの頃親の負債を償れん爲に數代六十四郎といふ翁の家に妾奉公に出しやられし折身の代の金二百兩は盜賊の爲に奪ひ取れ剩さへ母も養父も討れて世を去り給しと聞たるをりは悲しかりしが其身の代も二百兩又此金も二百兩故なからずやと思ふにぞ金の封じを解開きて一つに〳〵能見れば小判の裏に刻印ありて皆代の字を打たるハ是藪代の代の字にて彼盜人に奪れたる我身の代の金なる事今更に疑ふべからず怎や餘多の年を經て金も財布も元の儘にて再び我手に入ぬるは不測といふも餘りあり啓十郎ぬしは富たる人にて物に乏しき事なければ人を殺して此金を盜みするべき筈もなきに如何にして此金の主の手には入にけん問まく思へど旅の留守にて只今は詮なり那黒五郎親爺こそ年來親子の中絶て近頃一つになりたれど龍の道は蛇こそ知れ惡き事には逆しらなる本性なれば此金の盜人を知たるか先那親爺に水をむけて問落しなば親の仇を知る手掛りに成もやせんと暗に思ひ定めたり以有也件の金は向に黒五郎の九四郎が落魄て乞食になりし頃綿乙山樹を斬殺して盜み取て

走りし夜さり大和川なる丸木橋を踏外し水に陷入て盜みし金ハ財布を共に水中に失ひしが其財布は流れ〳〵て海にいり又川に入て孝女琴柱が手に入しは其折琴柱が叔父なりける大原武次郎武松が無實の罪を償れん爲に元の財布に入たる儘に船舘幕左衛門に送りしなり然るに幕左衛門ハ年久しく不義の寳を貪るをもて富て錢金に不足なければ件の金を久しく遣しず財布の儘納め置しに近頃其子苫四郎が軍用金の引負を補しせんとて財布の儘に啓十郎に預け遣はせしを啓十郎が横領して阿蓮に贈り遣はせしなり浩る因緣あるよしを神ならぬ身の誰も彼も知るべきよしハなけれども因果やうやく廻り來ぬることの口緒とぞなりにける○去程に鍛金の阿蓮は原より淫婦なりければ啓十郎が長久しく宿所にあらねば枕淋しき寢覺にや堪兼けん此本宅にて遣はるゝ笑次といふ小厮は其年の程十五六にて色白く優形なる心もおろかならざりければ阿蓮はかれを手なづけて湯あがり毎に襟を剃せ或は手水の湯をとらせ何くれとなく呼近けて狎がハしき事ありけると或日黒五郎が垣間見て最妬ましく思ひしかば其邊に人のなき折に酒肴を齎して獨阿蓮が部屋に赴き我等も日頃此へ來る毎に和女等の隙を費やしたる酬いに盃を進めんとおもふ僅少齎らしたりといふに阿蓮も腹の中に問まくほしき事あれば悦びをのべて其酒肴を開きてさかづきを廻らす程に黒五郎は又たはむれて阿蓮が帶を引留め我日頃胸を焦して口説よれども斯までに難面ければ是非もなし適ハぬ戀の報ひには向に和女が啓十郎と密通をしたるをり武太郎を蹴殺させたる其等の惡事いへば更なり男の留守をさひはひにして笑次を早晩手なずけて言ば阿蓮も打笑てされ言れば妾のみ惡者に似たれども彼折御身も金に轉ひて啓十郎ぬしに一味したれば罪は元より五分〳〵なり又笑次が事などは些とも此身におぼえなし开も兎もあれ角もあれ御身のこゝろに誠ありて何事も隱し給はずば此身を任する由もあらんおもふに御身も若かりし

往昔は惡事多かりけんと言ば黒五郎眼を見張りて否とよさしたることもなし我身零落さりし時綿市といふ盲法師に許多の金を借たるが其折深く酒に醉て件の金を落せし事ありさりとて惡き筋にはあらずと言を阿蓮は偖はとばかりに胸に悟れど色には出さず汝は宣まふな空言ならん其夜さり綿市とやらが宿所へ忍び入し者あり主人夫婦を斬殺して金二百兩盜み取しと世の風聞に聞たりしが我身の所爲で侍らずやと言れて黒五郎ギョットして初めはあらずと爭ひしが深く醉たる癖なれば漸やくに爭ひかねて彼綿市と山樹を殺して奪ひ取たる二百兩を大和川へ落たる其夜の事の体爲を這樣〳〵と口走りて我も往昔は時運目出度這樣〳〵の事によりて幾百兩の金を得たるを土中へ埋め置たりしに妻の遇馬か知ずして我旅商内の留守の内其所の土を發しかば發てや金を盜まれたり是より我家衰へて妻は世をさり子を貰て剩へ此身は難病にて人交りもならざりしに僅少なる金に代て幼稚とき人に取せし我子黒市の啓十郎ゐ圖らず廻り會しより斯老樂になりしなり此義は口の腐るとも得言まじき秘言なれども隔ぬ心の誠より隱で和女に知するのミ斯てそ今更否とは言さず此地へ寄ねと引寄る巨燵蒲團のうらなくも押轉さんとせし折からはしり來ぬる人音ゐをり惡がりと黒五郎は有が儘蒲團を打被ぎて空眠りして居たりける其時啓十郎が妾なる莇藻は丸蓮が部屋に來て密に阿蓮に告るやう最言難き事なれども我身が笑次と匿わる事を力野卓二が垣間見て與樣へ告申さんとて六ケしく云るゝを辰推止めて置たりき以後を愼み給へかしと言を阿蓮も聞あへず鈍や卓二力野等か何を證據にいふやらん打棄て置給へといふを力野と卓二等は立聞しつゝ堪兼て進み入つて阿蓮に向ひて詞たゝかひ姦しかりしを莇藻が漸く双方を推宥めつゝ預りて此場を無異に治めけり事の騷ぎに黒五郎は蒲團を藻ぬけて出て行を冷笑ぬ者なかりけり○斯て阿蓮は黒五郎を親の敵と知りしより腹の内ゐ思ふ樣親の仇とは

云ながら那親爺奴は啓十郎主の産の父親なるをもて我手づから打果しなば竟にはぬしに疎まれて我身の爲惡かるべし計事を運して人手を借て打果しなば怨を返して身に障りなく愈々ぬしに愛らるゝよすがに社なるべけれ術なからずやと胸に手を置ぞ傾ふ智惠袋を辛くも絞り出しつゝ計事を得たりしかば事の用意をせまく思ふに始め阿蓮が武太郎ゐ連添てありし時より飼習したる猫あり彼に魚の腸を二階より落せしか頓て密夫の媒介となりつゝ早く啓十郎と淺からぬ中となりしかば阿蓮は件の猫をのみ不愍の物に思ひつゝ尼ヶ崎より此浪花津へ迎ひ取れて來ぬる牡猫をば手づから携へて部屋に繋ぎて飼置しか又啓十郎の本妻呉服が年頃飼ぬる雌猫あり阿蓮が雄猫の來し頃より件の雌猫も朝夕に絶ず阿蓮が部屋に來て雄猫と共に居らぬ日は稀なり去程に鍛金の阿蓮は黒五郎を打果す計事を得たりしかば其夜巨燵の上に臥たる雄猫を引寄せ短刀にて胸元グサと刺殺して蒲團に包みて隱し置けり雌猫は是に駭き恐れて逃て再び來ずなりぬ這も其因果の此に始めて轉り來つべき口緒なり

（第四輯終）

金瓶梅第五輯

第一篇

偖も其後鍛金の阿蓮は黒五郎の九四郎を親の敵と聞知しあり爭で怨を返さんと思ふものから如何せん彼は主人啓十郎のさへも實親なれば我手づから討際は此身の爲ゐ宜しからず計事を運てて人手を借て討せんずと已に思案を定めてかば此年來最惜みて我部屋に飼置ける彼虎毛なる大猫を其夜暗に刺殺して死骸に小夜着を打かけて曉るを遲しと待たりける偖是までは第四輯の終に見れたる事ながら再び此に說出して其始末を具さにす斯て阿蓮は其翌朝いと慌てく聲をかげ

て鄰部屋なる荊藻を呼に荊藻乏早く起出去が何事ならんと駭きて走りて此に來にけるを阿蓮乏邊りへ招きよせて聲を密めて告るやう昨夜乏不測の事ありて危ふき命を拾いたり是見給へと云つゝも小夜着を刎退け掻やり開くを荊藻は何ぞと不審りて見れば無慙や此日頃阿蓮が愛する虎毛の猫ば血潮ふ塗れて死してあり是は如何にと許りに不審る荊藻を押止めて先聞給へ此猫は我身尼が時にありし時より年久しく飼ならせしふ已ふ物の障妨をなす化猫にやなりにけん昨夜丑滿頃なるべし彼黑五郎の九四郎親碌がいつの程にか忍び來て夜着をかゝげて入んとせ去に打駭きつゝ眠覺て枕邊なる行燈の幽けき火影に猾能見るふ其面かまちの怕去き日頃には彌増てふた目とは見べくもあらずよしや人まれ變化まれ何條此身を穢されんやと心を鬼にして用心の爲枕邊に引付置たる短刀を掻取つ引拔て其胸をひと刀柄も透れと刺貫き去急所の痛手に弱りけん一聲呀と叫びもあへず手足を悶掻て死でけり斯て燈火を掻立て其死骸を又能見るに黑五郎なりと思ひし乏我飼猫にてありけるなり此事を日頃中惡き力野卓二に知れなば言觸されて面目を失ふ事もありぬべし必らず沙汰な仕給びぞと許りならで心に掛るハ此猫と睦しく我部屋に來て明し暮せし彼斑猫も年を經たる大猫なれば化もやせんさらば又雌猫の爲に恨みを返さんと思ひぬる事しもあらんか兎にも角にも枕を高うは眠り難かり力ふ思ふ乏御身のみ爭で今宵は此ふ來て共に打臥給いねと實しやかに語らへば荊藻乏甘く欺むかれて妾とても力になるべき者ならねとも身一ッにて部屋に明さんは後めたかり然らば今宵短刀を携へで此に來で御身と共に一ッ夜着に眠らば後安かるべし心得侍りと暗めきで牒合しつ日頃より合口なれば疑はず朝のしまいを急がんとて其身を部屋へぞ退りける斯て阿蓮は人なき折に密に笑次を招き寄て此猫ハ昨夜人にや斬れけん血に塗れつゝ我部屋へ走り返りて息絶にき不愍なれども詮方なト若人に知せなば宜らぬ

評判せらるべし取捨て給ひねと頼めば笑次ハ心得て然らば密に石をつけて其邊の川へ推沈めん些とも氣遣ひ仕給ふなと答へて頓て猫の死骸を手早く包む風呂敷を提げて外方へ出にけり○去程に黑五郎の九四郎は此日も人目を忍ひ〳〵阿蓮を穴坐敷に引入て年にも耻ずつぶらなら目を細くして口説やう昨日ハ漸く漕付て本意を遂んとしたる折荊藻と力野卓二等に邪魔をせられて今にうまらず何してくれると只管ふ逸るを阿蓮は推止めて身の一大事さへ打明て知せ給ひし心實を何條他に思ふべき今宵八ッの鐘を合圖に妾が部屋へ忍びて來給へ鄰の部屋は力野と荊藻音してけどられ給ふなと云れて悦ぶ黑五郎然らば今宵乏否應言せずやよ約束な違へなと遂に暫し私語折から來かゝる人の足音に四邊を見返る黑五郎周章て果敢なく別れけり○斯て此日も暮しかばまだ宵ながら一個居荊藻は阿蓮がねての事又今更に氣味惡くと約束なれば彼が部屋にて倶に此夜を明さんと思へば短刀携へて忍びやかに來にければ阿蓮ハ喜び招きよせて兼て用意の酒肴を取出しつゝ主ぶりに献つ酬へつ酌かハす待遇大方ならざれば荊藻も喜び野山の物語せし程に盃の數も重なりて思はずも小夜更し頃荊藻は深く醉たりければ卒や臥床に入んとて阿蓮ハ盃を納め物かたづけて枕を並べて臥したるが荊藻は已に醉たれども心に油斷せざりけん携へたりける短刀を懷中に引付て臥とそが儘前後も知ず早く眠に着にけり此時阿蓮ハ些とも眠らず獨夜の更るを待程に丑滿近くなりしかば密に臥床を拔出て用意の短刀引提けつゝ先行燈の燈心を只一條に掻減して屏風の後に隱れて居り浩る處に黑五郎は阿蓮が部屋に忍び來て紙門を拔き内に入て立たる屏風を掻やり見るに内には燈火幽にて顔は定かに分ねども阿蓮は己に眠りて居り駭かさん乏流石にて夜着推開き添臥に身を打寄て掻醒せば荊藻ば吐嗟と駭き覺て見れば怪しや顔形容は黑五郎に似たれども眼の光り只ならねば偖は惡りし斑猫の變化にこそと一生懸命短刀閃